

船橋市新山東遺跡Ⅱ

— 前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書 2 —

平成19年 3 月

独立行政法人 都市再生機構
財団法人 千葉県教育振興財団

ふなばし しんやまひがし
船橋市新山東遺跡Ⅱ

— 前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書 2 —



序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第568集として、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社による船橋市前原団地建替事業に伴って実施した船橋市新山東遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代・縄文時代・古代・中世にいたる遺構や遺物が検出されており、この地域の原始・古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史を知るための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘調査から整理作業まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 岡野孝之

凡 例

- 1 本書は独立行政法人都市再生機構（旧都市基盤整備公団）による、船橋市前原団地建替事業に伴う埋蔵文化財調査の発掘調査報告書である。
- 2 本書に所収した遺跡は、以下の遺跡である。

新山東遺跡(3)	(遺跡コード 204-009(3))	船橋市前原西6-678-1ほか
新山東遺跡(6)	(遺跡コード 204-009(6))	船橋市前原西6-1-14
新山東遺跡(8)	(遺跡コード 204-009(8))	船橋市前原西6-678-2ほか

遺跡に付随する番号は、船橋市教育委員会の指導により、調査主体にかかわらず調査区ごとに括弧書き数字で連番登録することになっている。このため、同教育委員会との調整により、当財団が担当した調査は第3次、第6次、第8次調査という意味で、それぞれ新山東遺跡(3)、新山東遺跡(6)、新山東遺跡(8)とした。数字が連続していないのはこのためである。なお、いずれも隣接しているため、これらの3地点をまとめて新山東遺跡Ⅱとして編集した。
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者は、本文中（第1章）に記載した。
- 5 本書の執筆分担は以下の通りである。

上席研究員 鳴田浩司	第1章、第4章、第5章第3節
上席研究員 西野雅人	第3章第4節
上席研究員 沖松信隆	第5章第2節
研究員 城田義友	第2章、第3章第1節～第3節、第5章第1節

なお、編集は城田が行った。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構、船橋市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 出土した石器の石材については、有限会社考古石材研究所に鑑定を委託した。
- 8 本書で使用した地形図は以下の通りである。

第1図 船橋市発行 1/2,500地形図 35 平成6年12月
第6図 国土地理院発行 1/25,000地形図「習志野」N I-54-19-14-4 平成5年6月1日発行
- 9 周辺地形航空写真は京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。測量値は日本測地系によった。
- 11 本書中に掲載した遺構、遺物の縮尺については、挿図中のスケールに付した。
- 12 遺構番号については、数次にわたった調査の各段階で統一が取れていなかったため、整理作業の段階で、すべて遺構種別ごとの通し番号に振り替えた。
- 13 挿図に使用したスクリーントーンの用例は、特に示すものを除き次の通りである。



炉・焼土範囲



火床面



貝層

● 土器

△ 石器・剥片

○ 軽石

■ 石器・礫

14 表の凡例は以下の通りである。

遺構計測表

- ・計測値のうち、() 内の数値は、推定値である。
- ・第11・12・14表の主軸方向は座標北方向を0°とし、東西に振れる角度で示した。
- ・第11表の「火床」欄は、火床部の検出数を示す。
- ・第12表の「柱穴」欄は、主柱穴と考えられるピットを「検出数/想定される数」で示した。
- ・第12表の「内区」欄の寸法は、下図により計測した。それぞれ上段が①, ③, ⑤, 下段が②, ④, ⑥である。
- ・第12表の「型式」欄は、炉の型式を示す。Aは地床炉, Bは土器片囲炉である。

遺物観察表

- ・計測値のうち、() 内の数値は、欠損箇所等の遺存値である。

第16・17表

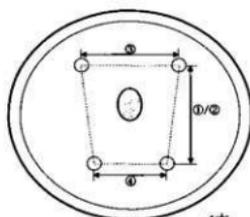
- ・「部位」欄の記号は、r (口縁部), m (胴部), b (底部), t (把手・突起) を示す。
- ・「焼成」欄の記号は、A (良好), B (普通), C (不良) を示す。
- ・「胎土・粒」欄の記号は、A (緻密), B (普通), C (粗い) を示す。
- ・「混入物」欄は、① (粗砂～砂粒), ② (細砂粒), ③ (石英粒), ④ (雲母粒), ⑤ (白色針状物質), ⑥ (褐色粒) で、記号は● (夥量～多量), ◎ (やや多量～普通), ○ (少量), △ (微量～僅量) を示す。

第10・18・19表

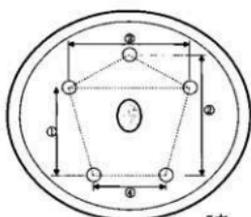
- ・「器種」欄の記号は、SS (削器), GR (彫器), PQ (楔形石器), AH (石鏃), AW (石錐), RF (二次調整の認められる剥片), UF (使用痕のある剥片), FI (剥片), CA (打製石斧), PA (磨製石斧), Co (石核), Po (磨石), H (斫石), SA (石皿), FL (浮子), Wh (砥石) を示す。
- ・「石材」欄の記号は、An (安山岩), AnV (ガラス質安山岩), AnH (多孔質安山岩), Ds (デイサイト), Ob (黒曜石), Sh (頁岩), ShB (黒色頁岩), ShH (硬質頁岩), ShQ (珪質頁岩: 碧玉), Sl (粘板岩), SIQ (珪質粘板岩), Ch (チャート), ChH (硬質頁岩), ChR (赤色チャート), Cc (瑪瑙), Ho (ホルンフェルス), TuF (細粒凝灰岩), TuG (緑色凝灰岩), Sa (砂岩), Rh (流紋岩), Qp (石英斑岩), Pe (カンラン岩), Pu (軽石) を示す。

遺構番号対応表

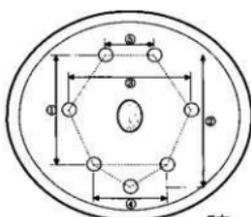
番号			番号			番号			番号			番号		
新	旧	年次	新	旧	年次	新	旧	年次	新	旧	年次	新	旧	年次
SI-001	ASI-001	12	SK-027	ASK-027	12	SK-072	BSK-002	12	SK-121	BSK-053	12	SK-169	(6)SK-001	16
SI-002	ASI-002	12	SK-028	ASK-028	12	SK-073	BSK-003	12	SK-123	BSK-063	12	SK-170	(6)SK-002	16
SI-003	ASI-003	12	SK-029	ASK-029	12	SK-075	BSK-005	12	SK-124	BSK-069	12	SK-171	(6)SK-003	16
SI-004	BSI-001	12	SK-030	ASK-030	12	SK-076	BSK-007	12	SK-125	BSK-060	12	SK-173	(8)SK-002	17
SI-005	BSI-002	12	SK-031	ASK-031	12	SK-077	BSK-008	12	SK-126	BSK-064	12	SK-174	(8)SK-003	17
SI-006	BSI-003	12	SK-032	ASK-032	12	SK-078	BSK-009	12	SK-127	BSK-065	12	SK-175	(8)SK-004	17
SI-008	CSI-001	12	SK-033	ASK-033	12	SK-079	BSK-010	12	SK-128	BSK-066	12	SK-176	(8)SK-005	17
SI-009	CSI-002	12	SK-034	ASK-034	12	SK-080	BSK-011	12	SK-129	BSK-067	12	SK-177	(8)SK-006	17
SI-010	CSI-003	12	SK-035	ASK-035	12	SK-081	BSK-012	12	SK-130	BSK-068	12	SD-001	DSD-001	12
SI-011	CSI-004	12	SK-036	ASK-036	12	SK-082	BSK-014	12	SK-131	BSK-069	12	SD-002	DSD-002	12
SI-012	CSI-005	12	SK-037	ASK-037	12	SK-083	BSK-015	12	SK-132	BSK-070	12	SB-001	BSB-001	12
SI-013	CSI-006	12	SK-038	ASK-038	12	SK-084	BSK-016	12	SK-133	BSK-071	12	SB-002	BSB-002	12
SI-014	CSI-007	12	SK-039	ASK-039	12	SK-085	BSK-017	12	SK-134	-	12	SB-002	-	12
SI-015	DSI-001	12	SK-040	ASK-040	12	SK-086	BSK-018	12	SK-135	CSF-001	12	SB-003	(6)SB-003	16
SI-016	DSI-002	12	SK-041	ASK-041	12	SK-087	BSK-019	12	SK-137	CSK-002	12	SB-004	(6)SB-004	16
SI-017	DSI-003	12	SK-042	ASK-042	12	SK-088	BSK-020	12	SK-138	CSK-005	12	SB-005	(6)SB-005	16
SI-018	DSI-004	12	SK-043	ASK-043	12	SK-089	BSK-021	12	SK-139	CSK-006	12	ASK-050	ASK-050	12
SI-019	(6)SI-002	16	SK-044	ASK-044	12	SK-090	BSK-022	12	SK-140	CSK-007	12	欠番	ASK-054	12
SI-020	(6)SI-003	16	SK-045	ASK-045	12	SK-091	BSK-023	12	SK-141	CSK-008	12	欠番	ASK-055	12
SK-001	ASK-001	12	SK-046	ASK-046	12	SK-092	BSK-024	12	SK-142	CSK-010	12	欠番	BSK-004	12
SK-002	ASK-002	12	SK-047	ASK-047	12	SK-093	BSK-025	12	SK-143	CSK-011	12	欠番	BSK-006	12
SK-003	ASK-003	12	SK-048	ASK-048	12	SK-094	BSK-026	12	SK-144	CSK-012	12	欠番	BSK-007	12
SK-004	ASK-004	12	SK-049	ASK-049	12	SK-095	BSK-027	12	SK-145	CSK-014	12	欠番	BSK-013	12
SK-005	ASK-005	12	SK-050	ASK-052	12	SK-096	BSK-028	12	SK-146	CSK-015	12	欠番	BSK-036	12
SK-006	ASK-006	12	SK-051	ASK-051	12	SK-097	BSK-029	12	SK-147	CSK-016	12	欠番	BSK-039	12
SK-007	ASK-007	12	SK-052	ASK-052	12	SK-098	BSK-030	12	SK-148	CSK-017	12	欠番	BSK-047	12
SK-008	ASK-008	12	SK-053	ASK-053	12	SK-099	BSK-031	12	SK-149	DSK-001	12	欠番	BSK-054	12
SK-009	ASK-009	12	SK-054	ASF-001	12	SK-100	BSK-032	12	SK-150	DSK-002	12	欠番	BSK-065	12
SK-010	ASK-010	12	SK-055	ASF-002	12	SK-101	BSK-033	12	SK-151	DSK-003	12	欠番	BSK-066	12
SK-011	ASK-011	12	SK-056	ASK-056	12	SK-102	BSK-034	12	SK-152	DSK-004	12	欠番	BSK-067	12
SK-012	ASK-012	12	SK-057	ASK-057	12	SK-103	BSK-035	12	SK-153	-	12	欠番	BSK-068	12
SK-013	ASK-013	12	SK-058	ASK-058	12	SK-105	BSK-037	12	SK-154	DSK-006	12	欠番	BSK-061	12
SK-014	ASK-014	12	SK-059	ASK-059	12	SK-106	BSK-038	12	SK-155	DSK-007	12	欠番	BSK-062	12
SK-015	ASK-015	12	SK-060	ASK-060	12	SK-108	BSK-040	12	SK-156	DSK-008	12	欠番	CSK-003	12
SK-016	ASK-016	12	SK-061	P1	13	SK-109	BSK-041	12	SK-157	DSK-009	12	欠番	CSK-001	12
SK-017	ASK-017	12	SK-062	P2	13	SK-110	BSK-042	12	SK-158	DSK-010	12	欠番	CSK-004	12
SK-018	ASK-018	12	SK-063	P3	13	SK-111	BSK-043	12	SK-159	DSK-011	12	欠番	CSK-009	12
SK-019	ASK-019	12	SK-064	P4	13	SK-112	BSK-044	12	SK-160	DSK-012	12	欠番	CSK-013	12
SK-020	ASK-020	12	SK-065	P5	13	SK-113	BSK-045	12	SK-161	DSK-013	12	欠番	DSK-005	12
SK-021	ASK-021	12	SK-066	P6	13	SK-114	BSK-046	12	SK-162	DSK-014	12	欠番	(6)SK-001	16
SK-022	ASK-022	12	SK-067	P7	13	SK-116	BSK-048	12	SK-163	DSK-015	12	欠番	(6)SB-001	16
SK-023	ASK-023	12	SK-068	P8	13	SK-117	BSK-049	12	SK-164	-	12	欠番	(6)SB-002	16
SK-024	ASK-024	12	SK-069	P9	13	SK-118	BSK-050	12	SK-165	-	12	欠番	(8)SK-001	17
SK-025	ASK-025	12	SK-070	P10	13	SK-119	BSK-051	12	SK-166	-	12	欠番	-	-
SK-026	ASK-026	12	SK-071	BSK-001	12	SK-120	BSK-052	12	SK-168	(6)SF-001	16	-	-	-



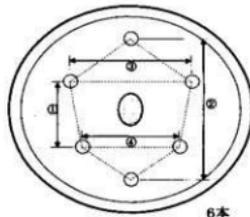
4本



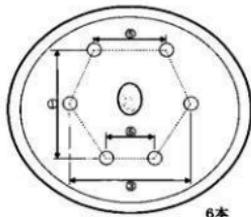
5本



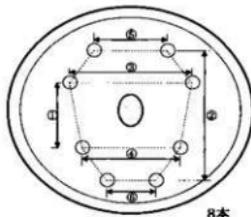
7本



6本



6本



8本

竪穴住居跡内区の計測位置

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1. 調査の経緯と経過	1
2. 調査の方法	1
第2節 地理的環境と歴史的環境	7
第2章 旧石器時代	10
第1節 石器集中地点	10
第2節 単独出土の石器	14
第3章 縄文時代	17
第1節 遺構外出土遺物	17
1. 土器	17
2. 土製品	36
3. 石器	37
4. 石製品	43
第2節 縄文時代早期の遺構	43
1. 炉穴	43
第3節 縄文時代中期の遺構	45
1. 竪穴住居跡	45
2. 小竪穴	94
3. 円形土坑	107
4. 楕円形土坑	126
5. 方形土坑	133
6. 大型土坑	133
7. 小型円形土坑	133
8. ビット	139
第4節 貝サンプルの分析結果	139
第4章 奈良・平安時代以降	150
第1節 奈良・平安時代	150
第2節 中世以降	155
第5章 まとめ	157
第1節 旧石器時代	157
第2節 縄文時代	157
第3節 奈良・平安時代以降	159
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図	新山東遺跡と周辺の地形	2	第35図	SI-001(3)	48
第2図	上層確認トレンチ配置図	3	第36図	SI-001(4)	49
第3図	上層遺構全体図(1)	4	第37図	SI-001(5)	50
第4図	上層遺構全体図(2)	5	第38図	SI-002	51
第5図	下層確認グリッド配置図	6	第39図	SI-003(1)	52
第6図	新山東遺跡と周辺の遺跡	8	第40図	SI-003(2)	53
第7図	第1地点出土石器分布	10	第41図	SI-003(3)	54
第8図	第1地点出土石器(1)	11	第42図	SI-004(1)	55
第9図	第1地点出土石器(2)	12	第43図	SI-004(2)	56
第10図	第2地点出土石器分布	13	第44図	SI-004(3)	57
第11図	第2地点出土石器	14	第45図	SI-004(4)	58
第12図	単独出土の石器(1)	15	第46図	SI-004(5)	59
第13図	単独出土の石器(2)	16	第47図	SI-005(1)	60
第14図	遺構外出土の縄文土器(1)	18	第48図	SI-005(2)	61
第15図	遺構外出土の縄文土器(2)	20	第49図	SI-006(1)	63
第16図	遺構外出土の縄文土器(3)	22	第50図	SI-006(2)	64
第17図	遺構外出土の縄文土器(4)	23	第51図	SI-006(3)	65
第18図	遺構外出土の縄文土器(5)	25	第52図	SI-006(4)	67
第19図	遺構外出土の縄文土器(6)	26	第53図	SI-006(5)	68
第20図	遺構外出土の縄文土器(7)	27	第54図	SI-006(6)	69
第21図	遺構外出土の縄文土器(8)	28	第55図	SI-006(7)	70
第22図	遺構外出土の縄文土器(9)	30	第56図	SI-006(8)	71
第23図	遺構外出土の縄文土器 ¹⁰⁾	31	第57図	SI-006(9)	72
第24図	遺構外出土の縄文土器 ¹¹⁾	34	第58図	SI-006 ¹⁰⁾	73
第25図	遺構外出土の縄文土器 ¹²⁾	35	第59図	SI-006 ¹¹⁾	74
第26図	遺構外出土の土製品(1)	37	第60図	SI-006 ¹²⁾	75
第27図	遺構外出土の土製品(2)	38	第61図	SI-008(1)	76
第28図	遺構外出土の石器(1)	39	第62図	SI-008(2)	77
第29図	遺構外出土の石器(2)	40	第63図	SI-009・SI-010	78
第30図	遺構外出土の石器(3)	41	第64図	SI-011(1)	79
第31図	遺構外出土の石製品	42	第65図	SI-011(2)	80
第32図	炉穴	44	第66図	SI-012(1)	82
第33図	SI-001(1)	46	第67図	SI-012(2)	83
第34図	SI-001(2)	47	第68図	SI-013	84

第69図	SI-014	85	第94図	円形土坑出土遺物(2)	122
第70図	SI-015	87	第95図	円形土坑出土遺物(3)	124
第71図	SI-016(1)	88	第96図	円形土坑出土遺物(4)	125
第72図	SI-016(2)	89	第97図	楕円形土坑(1)	127
第73図	SI-017	90	第98図	楕円形土坑(2)	129
第74図	SI-018(1)	91	第99図	楕円形土坑(3)	130
第75図	SI-018(2)	92	第100図	楕円形土坑出土遺物	131
第76図	SI-019	93	第101図	方形土坑	132
第77図	SI-020	94	第102図	大型土坑(1)	134
第78図	SK-006	95	第103図	大型土坑(2)	135
第79図	SK-008(1)	96	第104図	小型円形土坑	136
第80図	SK-008(2)	97	第105図	ピット	137
第81図	SK-015・SK-020	99	第106図	土坑等出土の石製品	138
第82図	SK-049	100	第107図	遺構別貝種組成	143
第83図	SK-057・SK-127・SK-130・SK-131	101	第108図	中野木台遺跡群遺構別貝種組成	146
第84図	SK-142	103	第109図	中野木台遺跡群時期別貝種組成	147
第85図	SK-143	104	第110図	中野木台遺跡群貝類計測値比較	148
第86図	SK-161・SK-162	106	第111図	溝状遺構(1)	151
第87図	SK-174	107	第112図	溝状遺構(2)	152
第88図	円形土坑(1)	108	第113図	溝状遺構出土遺物	153
第89図	円形土坑(2)	113	第114図	掘立柱建物跡	154
第90図	円形土坑(3)	116	第115図	中世以降の遺構と遺物	156
第91図	円形土坑(4)	117	第116図	新山東遺跡縄文時代遺構分布図	158
第92図	円形土坑(5)	120	第117図	SI-006出土軽石重量分布	159
第93図	円形土坑出土遺物(1)	121			

表 目 次

第1表	調査組織と業務内容	1	第8表	中野木台遺跡群遺構別貝種組成	146
第2表	新山東遺跡の調査歴	9	第9表	中野木台遺跡群時期別貝種組成	147
第3表	貝サンプル一覧	142	第10表	新山東遺跡出土の軽石	159
第4表	貝類種名一覧	142	第11表	遺物観察表①(旧石器)	161
第5表	貝類同定結果	143	第12表	遺構計測表①(炉穴等)	161
第6表	貝類計測値分布	144	第13表	遺構計測表②(竪穴住居)	161
第7表	マガキ付着痕	145	第14表	遺構計測表③(小竪穴・円形)	162

第15表	遺構計測表④(楕円形・方形・大型)	…163	第18表	遺物観察表③(縄文時代土製品)	……173
第16表	遺構計測表⑤(小型円形・ピット)	…163	第19表	遺物観察表④(縄文時代石器)	……173
第17表	遺物観察表②(縄文土器)	……164	第20表	遺物観察表⑤(縄文時代石製品)	……174

図 版 目 次

図版 1	遺跡周辺航空写真	図版30	遺構外出土の縄文土器(3)
図版 2	旧石器時代第 1 地点・第 2 地点	図版31	遺構外出土の縄文土器(4)
図版 3	旧石器時代石器(1)	図版32	遺構外出土の縄文土器(5)
図版 4	旧石器時代石器(2)	図版33	遺構外出土の縄文土器(6)
図版 5	旧石器時代石器(3)	図版34	遺構外出土の縄文土器(7)
図版 6	炉穴	図版35	遺構外出土の縄文土器(8)
図版 7	竪穴住居跡(1)	図版36	遺構外出土の縄文土器(9)
図版 8	竪穴住居跡(2)	図版37	遺構外出土の縄文土器(10)
図版 9	竪穴住居跡(3)	図版38	遺構外出土の縄文土器(11)
図版10	竪穴住居跡(4)	図版39	遺構外出土の縄文土器(12)
図版11	竪穴住居跡(5)	図版40	遺構外出土の縄文時代土製品(1)
図版12	竪穴住居跡(6)	図版41	遺構外出土の縄文時代土製品(2)、遺構出土の縄文土器(1): 炉穴, 竪穴住居跡(1)
図版13	竪穴住居跡(7)	図版42	遺構出土の縄文土器(2): 竪穴住居跡(2)
図版14	土坑群	図版43	遺構出土の縄文土器(3): 竪穴住居跡(3)
図版15	小竪穴(1)	図版44	遺構出土の縄文土器(4): 竪穴住居跡(4)
図版16	小竪穴(2), 円形土坑(1)	図版45	遺構出土の縄文土器(5): 竪穴住居跡(5)
図版17	円形土坑(2)	図版46	遺構出土の縄文土器(6): 竪穴住居跡(6)
図版18	円形土坑(3)	図版47	遺構出土の縄文土器(7): 竪穴住居跡(7)
図版19	円形土坑(4)	図版48	遺構出土の縄文土器(8): 竪穴住居跡(8)
図版20	円形土坑(5)	図版49	遺構出土の縄文土器(9): 竪穴住居跡(9)
図版21	円形土坑(6)	図版50	遺構出土の縄文土器(10): 竪穴住居跡(10)
図版22	楕円形土坑(1)	図版51	遺構出土の縄文土器(11): 竪穴住居跡(11)
図版23	楕円形土坑(2)	図版52	遺構出土の縄文土器(12): 竪穴住居跡(12)
図版24	楕円形土坑(3), 方形土坑(1)	図版53	遺構出土の縄文土器(13): 竪穴住居跡(13)
図版25	方形土坑(2), 大型土坑(1)	図版54	遺構出土の縄文土器(14): 竪穴住居跡(14)
図版26	大型土坑(2), 小型円形土坑(1)	図版55	遺構出土の縄文土器(15): 竪穴住居跡(15)
図版27	小型円形土坑(2), ピット	図版56	遺構出土の縄文土器(16): 竪穴住居跡(16)
図版28	遺構外出土の縄文土器(1)	図版57	遺構出土の縄文土器(17): 竪穴住居跡(17)
図版29	遺構外出土の縄文土器(2)		

- 図版58 遺構出土の縄文土器¹⁸：竪穴住居跡¹⁸
- 図版59 遺構出土の縄文土器¹⁹：竪穴住居跡¹⁹
- 図版60 遺構出土の縄文土器²⁰：竪穴住居跡²⁰
- 図版61 遺構出土の縄文土器²¹：竪穴住居跡²¹
- 図版62 遺構出土の縄文土器²²：竪穴住居跡²²
- 図版63 遺構出土の縄文土器²³：竪穴住居跡²³
- 図版64 遺構出土の縄文土器²⁴：竪穴住居跡²⁴
- 図版65 遺構出土の縄文土器²⁵：竪穴住居跡²⁵、小
竪穴¹
- 図版66 遺構出土の縄文土器²⁶：小竪穴²
- 図版67 遺構出土の縄文土器²⁷：小竪穴³
- 図版68 遺構出土の縄文土器²⁸：小竪穴⁴
- 図版69 遺構出土の縄文土器²⁹：小竪穴⁵、円形土
坑¹
- 図版70 遺構出土の縄文土器³⁰：円形土坑²
- 図版71 遺構出土の縄文土器³¹：円形土坑³
- 図版72 遺構出土の縄文土器³²：円形土坑⁴
- 図版73 遺構出土の縄文土器³³：円形土坑⁵
- 図版74 遺構出土の縄文土器³⁴：円形土坑⁶、楕円
形土坑¹
- 図版75 遺構出土の縄文土器³⁵：楕円形土坑²、方
形土坑、大型土坑¹
- 図版76 遺構出土の縄文土器³⁶：大型土坑²、小型
円形土坑、ピット、遺構出土の土製品¹
- 図版77 遺構出土の土製品²
- 図版78 縄文時代の石器¹
- 図版79 縄文時代の石器²
- 図版80 縄文時代の石器³
- 図版81 縄文時代の石製品¹
- 図版82 縄文時代の石製品²
- 図版83 縄文時代の石製品³
- 図版84 掘立柱建物¹
- 図版85 掘立柱建物²
- 図版86 溝状遺構
- 図版87 奈良・平安時代以降の遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1. 調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構（旧都市基盤整備公団）は、老朽化に伴う前原団地の建替事業に先立ち、地区内の埋蔵文化財の取り扱いについて関係諸機関と協議した結果、既存建築物の状況によっては遺跡が保存されている可能性が高く、また事業計画の変更が困難であることから記録保存の措置を講ずることとなった。調査機関として当財団が指名され、平成9年7月から発掘調査を実施することとなったが、平成9年度と平成10年度に調査が実施された部分（新山東遺跡第2次調査）については、すでに平成13年度に報告済みである。

事業は移転準備が整った区画から順次既存建築物の解体を行っていったため、調査も断続的にならざるをえなかった。現地での発掘調査は平成12・13・16・17年度に、整理作業は平成13・14・18年度に実施し、平成18年度中に報告書刊行、移管用整理を実施し、本事業の本遺跡にかかわる業務をすべて終了した。なお、本遺跡の北側の大仲台遺跡も、本事業に伴って当財団で調査を実施しているが、これについては別途報告する。発掘調査、整理作業に関する組織及び担当者等については第1表の通りである。

2. 調査の方法

調査に当たっては、事業の対象範囲全体を覆うように国家座標（第Ⅷ座標系）に基づく発掘調査区の設定を行った。その範囲の北西隅である $X=-33.100$ 、 $Y=17.000$ を起点とし、それぞれの軸を40m間隔で区切り、大グリッドとした。大グリッドは北から1, 2, 3…、西からA, B, C…という順序で呼称する。さらにその大グリッドを一辺4mの小グリッドに分割した。すなわち大グリッドは東西・南北それぞれ10分割で計100分割されるわけだが、その小グリッドは北西隅のものを00、そこから東に向かって01, 02, 03…、南に向かって10, 20, 30…と命名する。そして大グリッドと小グリッドを組み合わせ、F 07-22, G11-85というように地点を一意に把握できるようにして、それを最小の調査区画とした。攪乱中

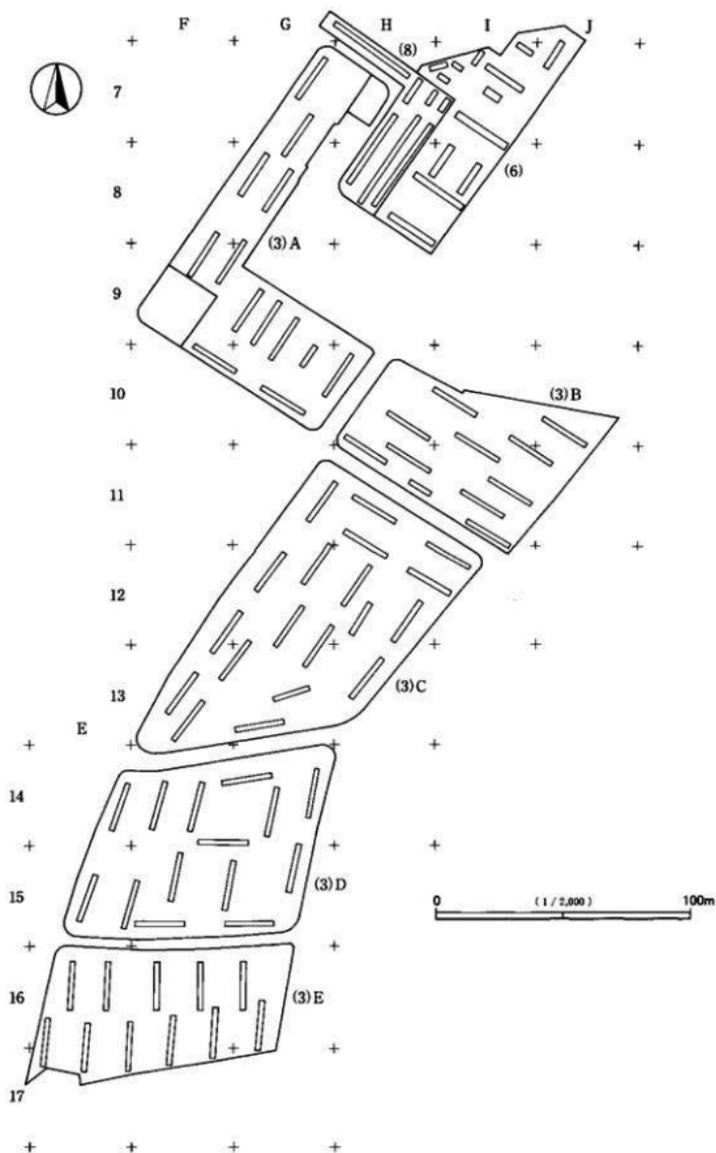
第1表 調査組織と業務内容

区	期間	担当者	面積(m ²)/業務内容			備考
			対象	確認調査	本調査	
平成12年度<発掘調査>	調査部長 沼澤 豊, 北部調査事務所長 石田廣美					
(3)	平成12年7月3日～平成12年8月31日	廣瀬和之	4,140	上層 414 / 4,140	3,070	その1
(3)	平成12年9月1日～平成13年3月29日	廣瀬和之, 川端保夫	26,430	上層 2,229 / 22,290 下層 1,134 / 26,430	14,790 75	その2
平成13年度<発掘調査・整理作業>	調査部長 佐久間 豊, 北部調査事務所長 石田廣美					
(3)	平成14年2月18日～平成14年3月29日	玉井ゆかり	510	上層 0 / 510 下層 20 / 510	510 0	
(3)	平成13年8月～12月	高橋博文, 玉井ゆかり		水洗注記～実測の一部		
平成14年度<整理作業>	調査部長 斎木 勝, 北部調査事務所長 古内 茂					
(3)	平成14年4月6日, 8月	沖松信隆		東測の一部～トレース		
平成16年度<発掘調査>	調査部長 矢戸三男, 北部調査事務所長 古内 茂					
(6)	平成16年5月12日～平成16年6月30日	榊原弘二, 城田義友	3,650	上層 710 / 3,650 下層 168 / 3,650	0 0	
平成17年度<発掘調査>	調査部長 矢戸三男, 北部調査事務所長 古内 茂					
(8)	平成17年6月1日～平成17年6月30日	雨宮龍太郎	1,365	上層 169 / 1,365 下層 95 / 1,365	0 0	
平成18年度<整理作業>	調査研究部長 矢戸三男, 北部調査事務所長 古内 茂					
(3)	平成18年4月～7月	嶋田浩司, 沖松信隆		水洗注記～報告書刊行, 移管用整理		
(6),(8)	平成18年4月～12月	城田義友		押印作成～報告書刊行, 移管用整理		

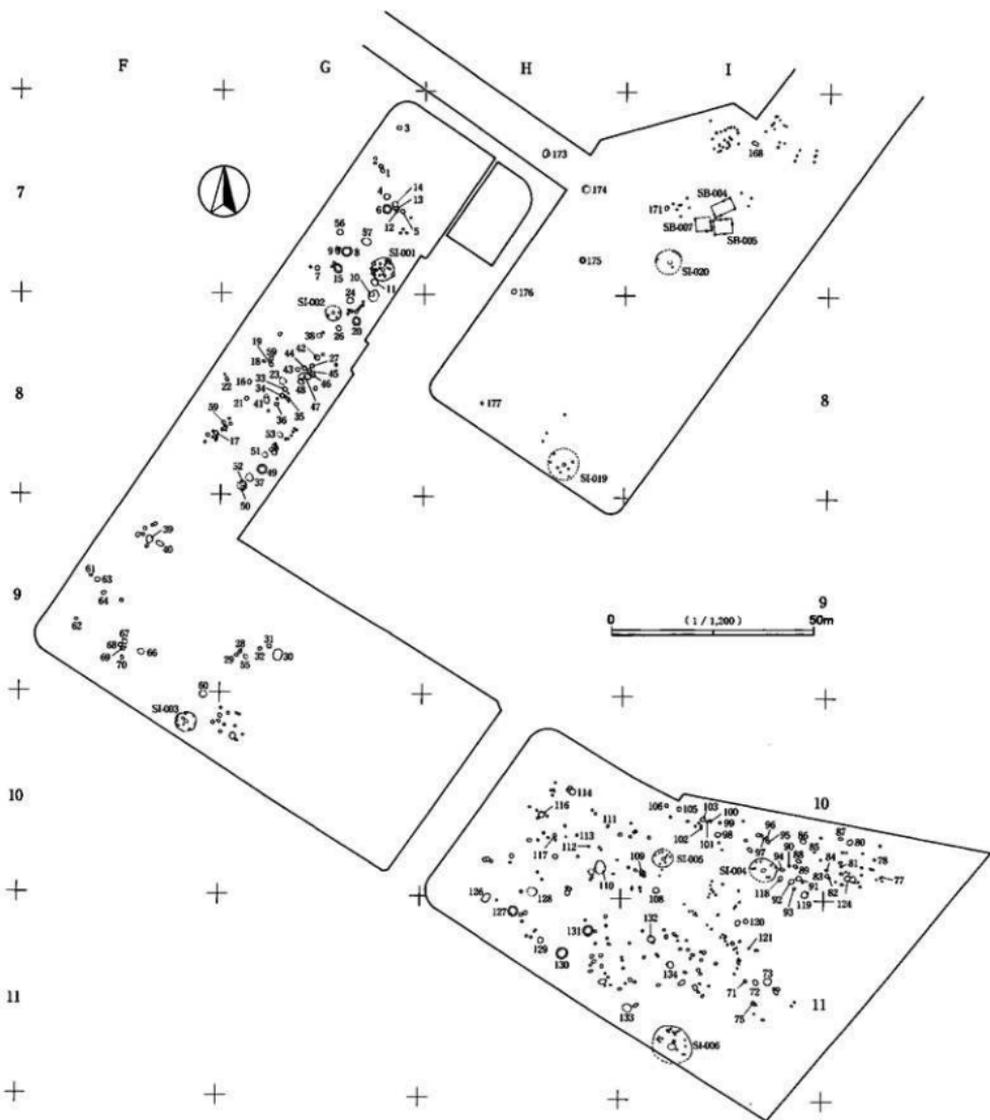


第1図 新山東遺跡と周辺の地形

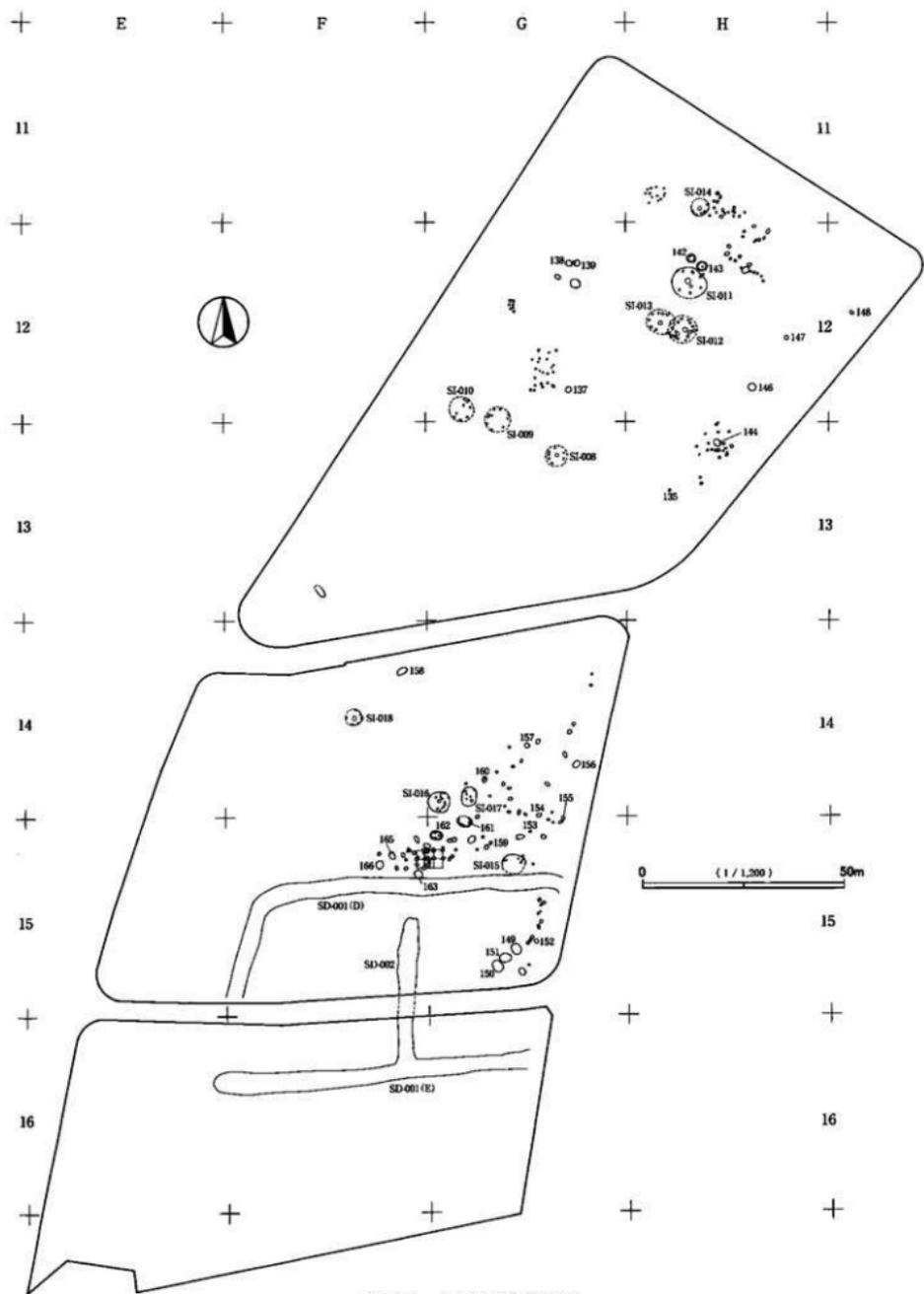
(1/5,000)



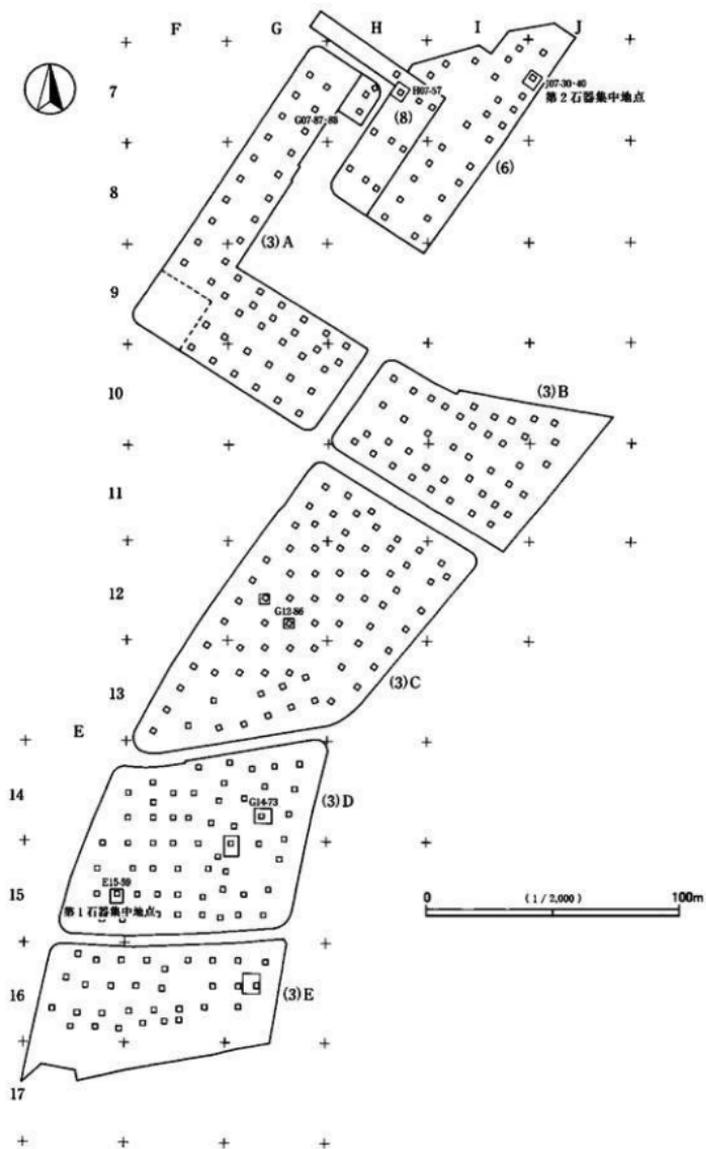
第2図 上層確認トレンチ配置図



第3图 上層遺構全体図(1)



第4図 上層遺構全体図(2)



第5図 下層確認グリッド配置図

や遺構に伴わない遺物、下層の調査ではこの小グリッドを基準に遺物を取り上げた。

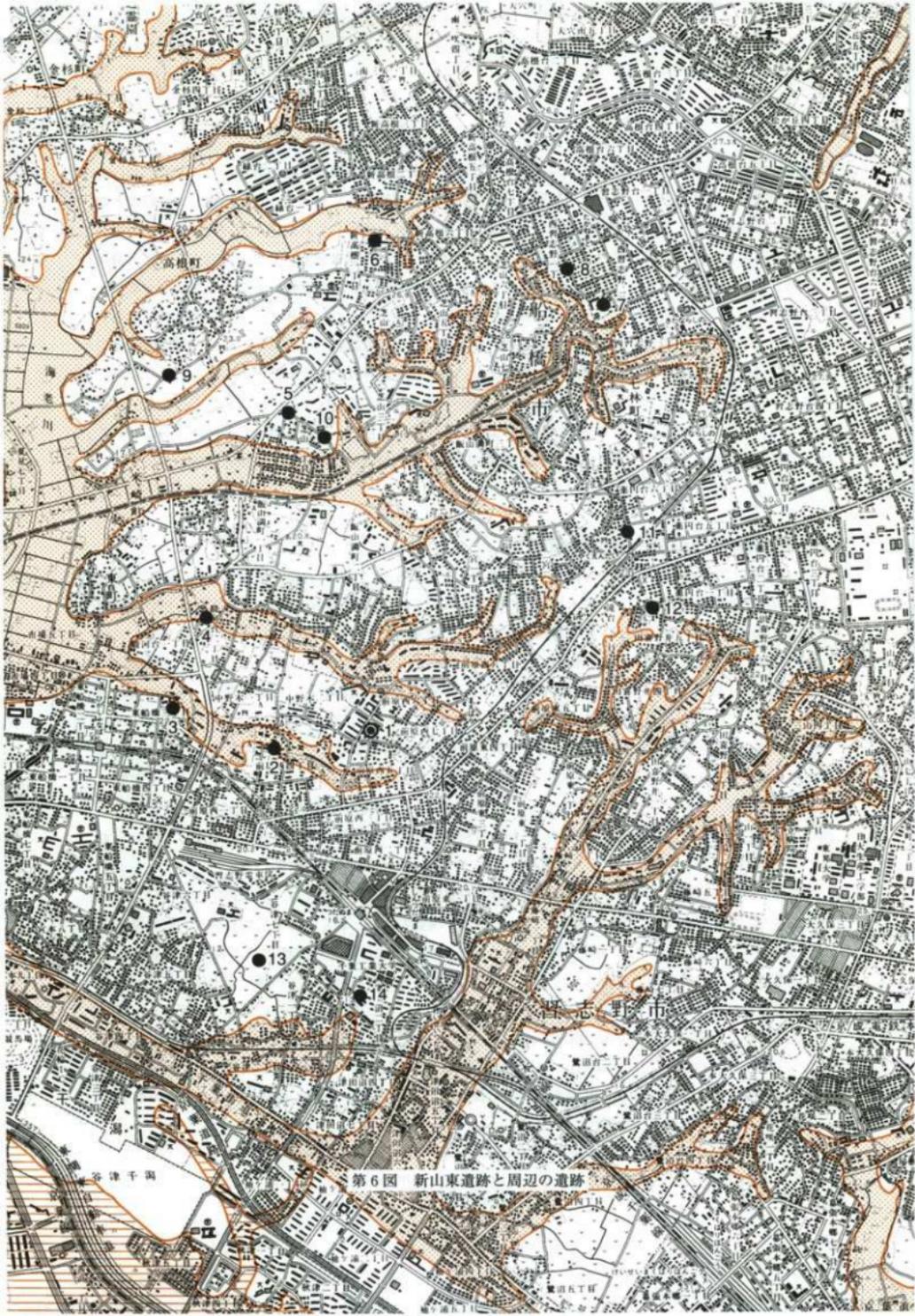
事業は前述の通り前原団地の建替に伴うものである。調査開始当初は建物の解体前であったため、それ以外の部分に幅2mのトレンチを、解体後はその部分にも同様のトレンチを、対象面積の10%程度となるように任意に設定し、遺構の有無や広がり、遺物の出土状況を観察した。遺構・遺物共に多く認められる部分を本調査範囲として設定し、省力化のためバックホウなどの重機を用いて表土を除去した後、遺構の検出、精査、遺物の取上げ、遺構の実測などを行い、その間に適宜状況を撮影した。成果は第3章以降で詳述するが、当初危惧されたように全面の完全削平には至っておらず、集落に伴う多くの遺構を検出することができたため、本調査面積も相当なものとなった。ただ、無論削平はされていたし、建物の基礎や埋設管などにより破壊されていた場所も少なくはないが、遺跡の特徴を大まかに把握することはできたのではないかと考えられる。下層については上層本調査の終了後、各調査区ごとに確認調査を行った。一辺2mのグリッドを、対象面積の4%程度となるように任意に設定した。遺物が出土したグリッドについては2m程度を拡張し、さらに周辺に遺物出土範囲が広がる様子が窺える場合には、周囲の遺物が出土していないグリッドまでを本調査範囲として拡張した。

第2節 地理的環境と歴史的環境

新山東遺跡は、中野木台遺跡群を構成する遺跡のひとつである。中野木台遺跡群は東京湾に注ぐ二級河川海老川の支流である前原川と中野木川により開析された、標高18m～20m前後の東西方向に長い舌状台地上に展開する。この地域は、一日の乗降客数34万人を超えるJR津田沼駅から半径1kmの徒歩圏内にあるため、都心のベッドタウンとして戦後のかなり早い時期から宅地化が進められてきた。新山東遺跡はこの遺跡群の最東端に位置し、これまでに数次にわたって発掘調査が実施され、旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代、中世の複合遺跡であることが確かめられている¹⁴⁻¹⁶。前回の報告地点では旧石器時代の石器集中地点3か所、縄文時代早期の炉穴や陥穴、中期の集落跡を調査したが、このうち中期の集落跡は加曾利EⅡ式～EⅣ式を主体とするもので、竪穴住居跡、小壜穴、土坑などが確認され、このうち複数の住居跡や土坑からはハマグリやオキアサリ、マガキを主とした遺構内貝層が検出された⁸。また船橋市が調査を実施した新山東遺跡⁽⁵⁾では縄文時代中期加曾利EⅢ式期の住居跡が検出され、そのうち1軒からオキアサリ、オキシジミ、マガキ、シオフキを中心とする住居内貝層が検出されている。⁹

本遺跡の西側に所在する中野木新山東遺跡や中野木台遺跡群としての調査では、平成18年10月現在、過去15回にわたる発掘調査で、早期（稲荷台式期）の炉穴や埋窠のほか、多くの地点で加曾利E式期の集落跡が検出されている^{2-7,10}。また大規模な貝塚こそないものの、竪穴住居等の遺構内に小規模な貝層が存在する例が多いという特徴が認められる。これらの成果から、おおむね台地の平坦部には中期の集落が散在し、縁辺部には早期の遺構が点在する傾向が読み取れるようになってきた。さらに目をひろげると、周囲の台地には多くの縄文時代の遺跡が存在する。佐倉道南（早期・前期・中期）、宮本台貝塚（後期）、東駿河台（中期）、飯山満東（早期～後期）、古和田台（前期・中期）などの各時期の集落遺跡、高根木戸、高根木戸北、唐沢台、上飯山満南、薬園台（中期・後期）、谷津、滝台（中期・後期）など中期を中心とする貝塚も知られ、調査例も多い¹²⁻¹³。

奈良・平安時代では本遺跡では溝跡のみが検出されたが、周囲でもこの時代の遺跡はほとんど知られておらず、習志野市津田沼二丁目遺跡などで集落跡の調査例が知られる程度である¹⁴。



第6図 新山東道跡と周辺の遺跡

第2表 新山東遺跡の調査歴

次	年度	地番	面積(m ²)	主な遺構	主な遺物
1	H6	中野木2-269他	874.99	<縄文>住居跡(6),土坑(35),ピット	<縄文>縄文土器(加曾利EIV主体),石器
2	H9-10	前原西	23,000	<旧石器>石器集中地点(3),<縄文>早期:炉穴(12),陥穴(9),中期:住居跡(16),土坑(53),竪穴遺構(9),ピット	<旧石器>石器(ナイフ形石器,石刀,尖頭器,剥片,石核),<縄文>縄文土器(中期),土製品(土器片鏢,土製円板),石器(石鏃,石斧,磨石,敲石,石皿),石製品(石棒,砥石)
3	H12-13	前原西6-678-1他	26,940	<旧石器>石器集中地点(1),<縄文>早期:炉穴(5),中期:住居跡(17),小型穴(14),土坑(124),ピット,<奈良-平安>溝状遺構(2),<中近世>掘立柱建物跡(2)	<旧石器>石器(削器,彫器,剥片,石核),<縄文>縄文土器(早期~後期),土製品(土器片鏢,土製円板),石器(石鏃,石鏃,石斧,磨石,敲石,石皿),石製品(埴子,砥石),<奈良-平安>土師器-須恵器,<中近世>国産陶磁器(瀬戸美濃系),銭貨
4	H14	前原6-656-9	1,061.62	なし	なし
5	H14	前原7-700-1他	566	<縄文>中期:住居跡(3)	<縄文>縄文土器(加曾利EIII),石器(石鏃,磨製石斧)
6	H16	前原西6-1-14	3,650	<旧石器>石器集中地点(1),<縄文>早期:炉穴(1),中期:住居跡(2),土坑(1),<中近世>掘立柱建物跡(3)	<旧石器>石器(剥片),<縄文>縄文土器(早期,中期),土製品(土器片鏢,土製円板)
7	H16	前原西5-653-1	1,830	なし	<縄文>縄文土器(中期)
8	H17	前原西6-678-2他	1,365	<縄文>中期:小型穴(1),土坑(3)	<縄文>縄文土器(中期)

中世以降は、本遺跡では数棟の掘立柱建物跡が検出されている。この地域は近世初頭に徳川家康の鷹狩のために造成された御成街道（江戸－船橋御殿－東金御殿）と成田山の参詣客が行き交う佐倉道の分岐から1kmという、交通の要衝に近い場所であった。また寛文年間の絵図面にすでに集落として記載されている前原新田集落以外は、ほとんどが「野」として記載されている¹⁰⁾ことから、遺構として確認することは難しく、本遺跡の周囲において中近世の遺跡が少ない理由のひとつといえるかもしれない。

参考文献

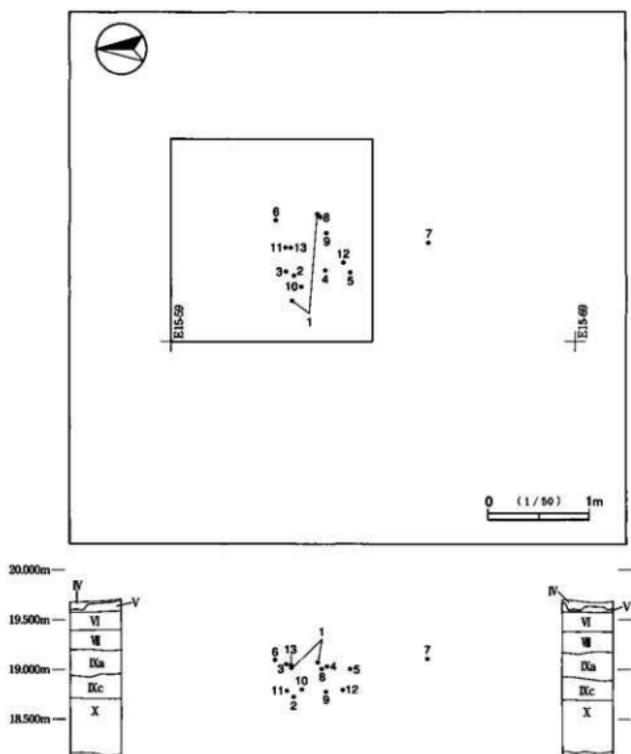
- 1) 千葉県教育庁 1996 「新山東遺跡(1)」平成6年度千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 千葉県教育庁
- 2) 中野木新山東遺跡調査団 1977 「中野木新山東遺跡」中野木新山東遺跡調査団
- 3) 船橋市教育委員会 1991 「平成2年度船橋市市内遺跡発掘調査報告書」船橋市教育委員会
- 4) 船橋市教育委員会 1996 「船橋市内遺跡発掘調査報告書 平成7年度」船橋市教育委員会
- 5) 船橋市教育委員会 1999 「船橋市内遺跡発掘調査報告書 平成10年度」船橋市教育委員会
- 6) 船橋市教育委員会 2000 「船橋市内遺跡発掘調査報告書 平成11年度」船橋市教育委員会
- 7) 船橋市教育委員会 2001 「船橋市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度」船橋市教育委員会
- 8) 船橋市文化財センター 2001 「船橋市新山東遺跡」船橋市文化財センター
- 9) 船橋市教育委員会 2004 「船橋市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度」船橋市教育委員会
- 10) 船橋市教育委員会 2005 「船橋市内遺跡発掘調査報告書 平成16年度」船橋市教育委員会
- 11) 船橋市教育委員会 2006 「平成12年度船橋市市費単独事業遺跡発掘調査報告書」船橋市教育委員会
- 12) 船橋市教育委員会 1975 「佐倉道南遺跡」船橋市教育委員会
- 13) 佐倉道南遺跡調査団 1977 「佐倉道南」佐倉道南遺跡調査団
- 14) 船橋市文化財センター 2001 「習志野市津田沼二丁目遺跡」船橋市文化財センター
- 15) 「小金牧周辺野絵図」1672(寛文12) 千葉県文書館蔵

第2章 旧石器時代

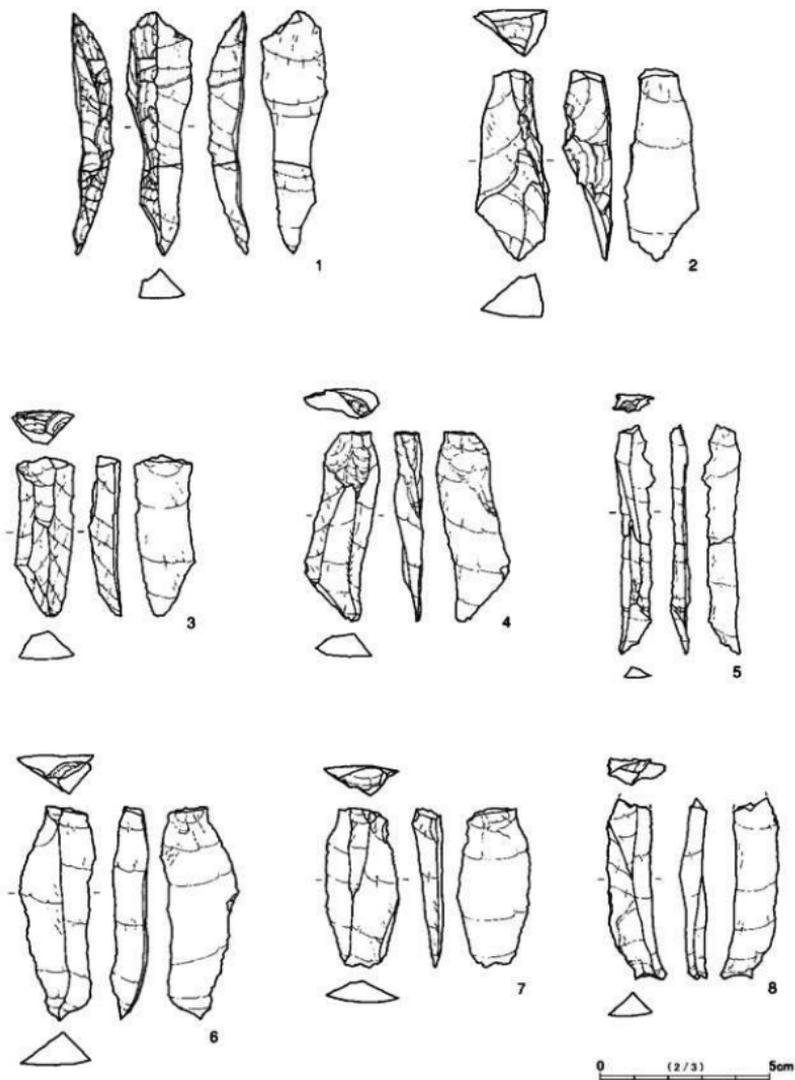
本遺跡は、前にも触れたとおり既存団地の再開発であるため、上層部堆積層は削平されており、最も顕著な部分で第IV層上面に達する場所もあった。だが、それは調査区全体からみれば一部であったため、ローム層の遺存状況は比較的良好といえた。ただ、建物の基礎と埋設管設置部での掘削は深い部分まで達していた。(6)調査区を除き、おおむね全域に確認グリッドを配置することができた。その結果、全体で6か所のグリッドから旧石器時代の遺物が検出された。その後、各グリッドを拡張した結果、2か所で石器群の広がりの確認でき、さらにE15-59グリッドを中心とした地点については本調査に移行し精査に努めた。またその他の4か所のグリッドについては拡張範囲から石器が検出されなかったため単独出土として取り扱い、調査を終了した。

第1節 石器集中地点

第1地点 (第7～9図, 図版2～4)



第7図 第1地点出土石器分布

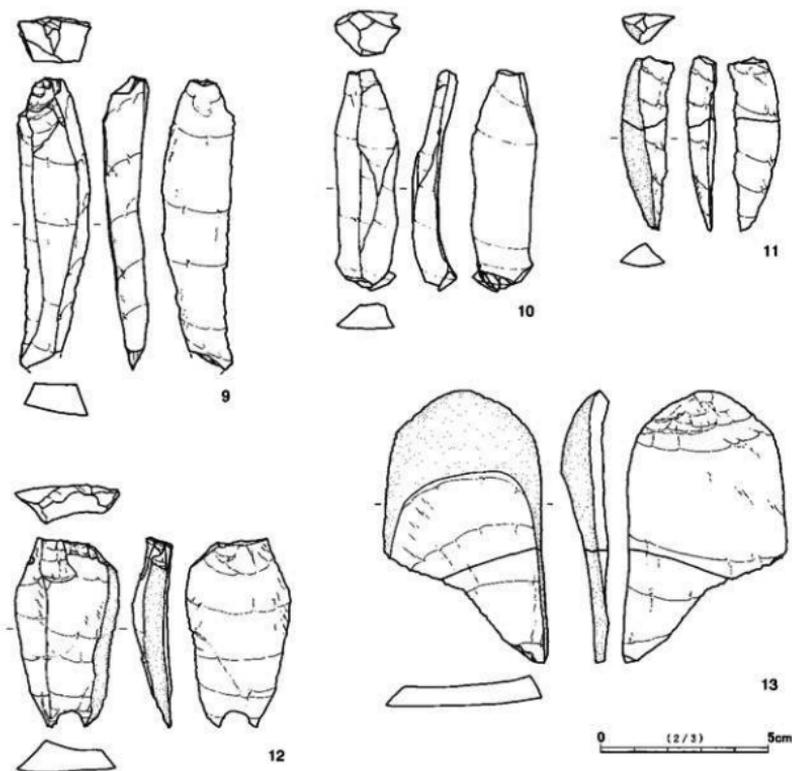


第8图 第1地点出土石器(1)

(3)D区の南西部にあたり、南に傾斜する緩斜面にかかる部分に位置する。E15グリッドの東端付近に位置し、設定したE15-59グリッドでⅨa層からⅨc層にかけて13点の石刃状剥片が出土した。この結果、第7図に示すようにグリッドを拡張し、さらに1点の追加をみたため、本調査に移行したが、結果的には本調査範囲からの出土は皆無であった。規模としては直径2m程度の範囲に収まる小規模なものであったことが確認された。出土した剥片は縦長で技術的には石刃技法に近いものと思われ、良好な剥片で占められている。位置を記録したものは14点であるが、整理作業の過程で2点が接合したため、13点すべての剥片を図示することとした。

層的にみると、大きくⅨa層を中心とする群(1・3~8・13)と、Ⅸc層を中心とする群(2・9~12)に分けられ、各群間には明らかな間層を認めることができたが、使用されている石材あるいは剥片の形状から接合こそしなかったものの文化層を二分することは適切ではないものと思われた。

1は断面が三角形を呈する縦長剥片で、唯一接合した資料である。左面に敲打による剥離面が多数観察されるため打面再生を目的として剥離されたものとなろう。打点部の削除が認められるためナイフ形石器としての可能性も否定できない。2も1と同様な剥片であり、左側面に大きな剥離痕が認められる。しか



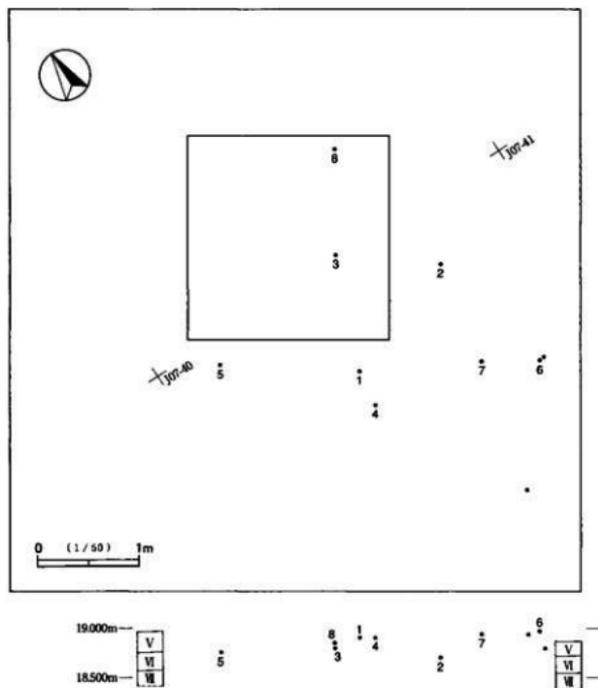
第9図 第1地点出土石器(2)

し、この剥離は本剥片が剥離される以前の剥離痕であり、製品とは認定できない。3～12はきれいな石刃状剥片で、3・4・6・7・9・10・12は、その形状から石器素材としては十分な大きさを保持している。ただ、使用痕や二次剥離といった使用を示すような痕跡を認めることはできない。13は幅広な剥片で、接合部は調査時の破損である。自然面を残し、下端の一部を欠損する。欠損上部では数回の微細な剥離が認められることから、石錐状の石器として使用されたものであろう。

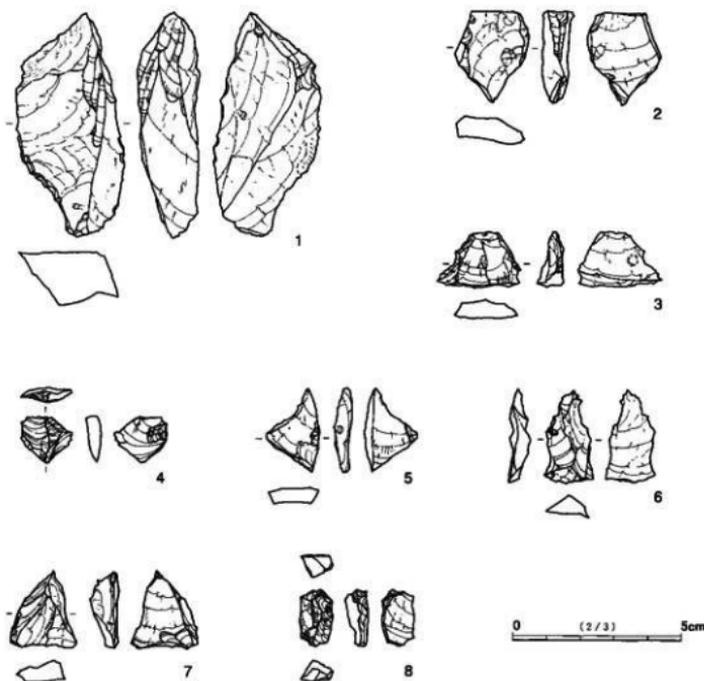
石材は、10がデイサイト（別称・トトロ石）であり、風化が著しい。他はすべてガラス質黒色安山岩である。

第2地点（第10・11図、図版2・4）

(6)区北端部、台地北端の斜面にかかる地点において検出された。J07-30・40グリッドにかけて試掘した結果、第1地点よりも上部の第V層中から剥片が2点出土した。このため本グリッドを拡張したところ試掘区南側からさらに数点の剥片が検出された。ただ、本地点は建物の基礎部分にあたり、攪乱が著しいため、堆積土の状態は良好とはいえなかった。また遺物の出土も散漫であったため本調査には移行せず、確認調査で終了した。規模としては東西3m、南北4m程度の範囲に収まる小規模なものである。出土数は10点と少なく、微細な2点を除く8点を図示した。



第10図 第2地点出土石器分布



第11図 第2地点出土石器

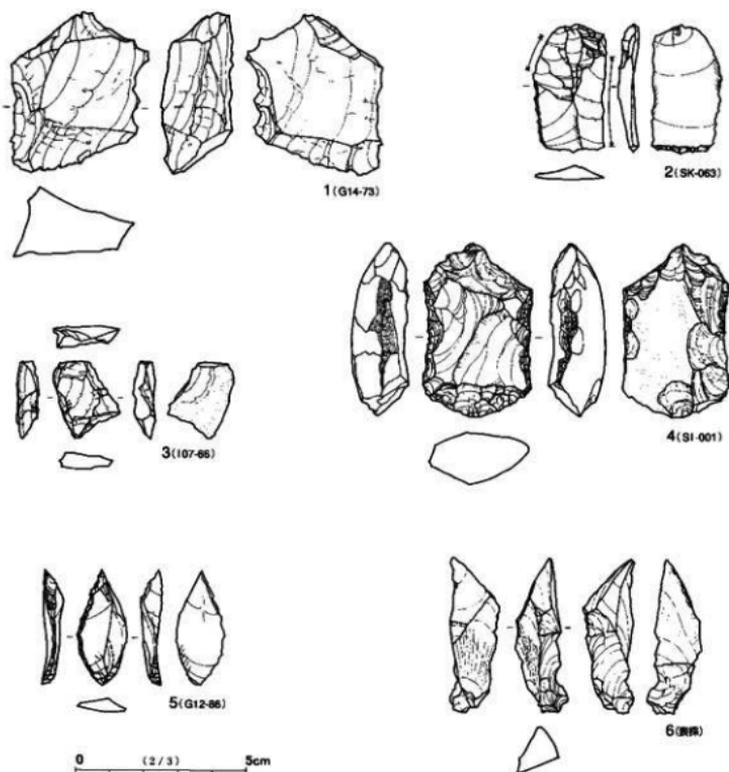
1は削器である。やや大型で厚みのある縦長剥片の左側縁下半部に調整剥離を施し、刃部としている。一方、右側縁でも若干の微細剥離が認められるところから、左右両側縁を使用していたものであろう。2～8は剥片であり、その形状から石器素材となり得るものは少ない。2は平坦な自然面を打面としており、5・7などは折断された剥片となろう。

石材は2・6がチャート製で、他は黒曜石である。黒曜石の石質についてみると、表面には不純物が多く認められ良質とは言えない。ただ4のみは良質で、一部に乳白色の帯状の縞が認められ不純物の含有は少ない。

第2節 単独出土の石器（第12・13図、図版5）

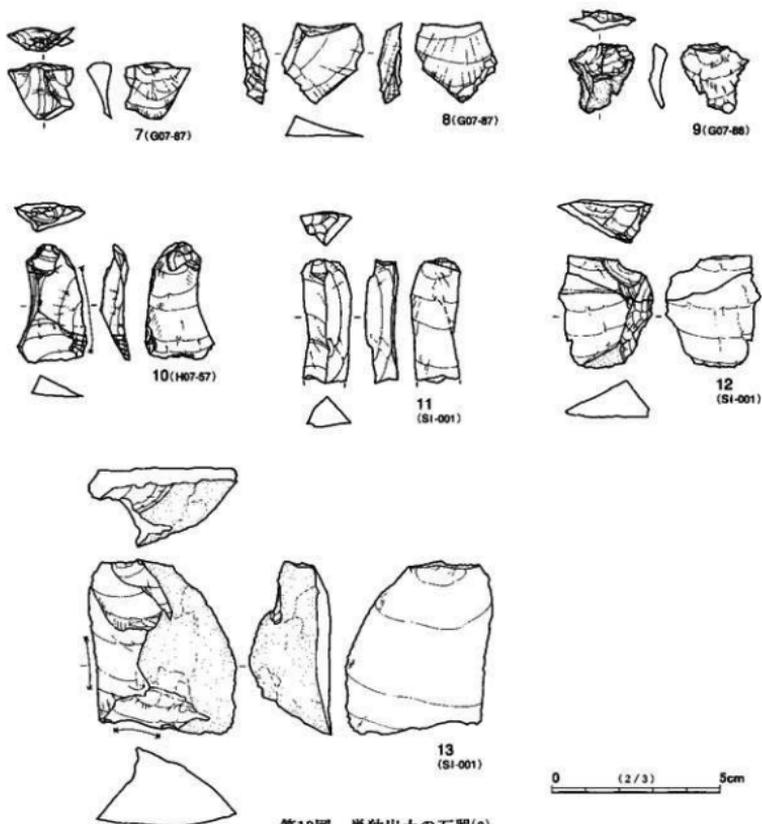
ここでは、旧石器時代に属すると思われる石器群を一括して図示することにした。これらの中には後代の遺構内から出土したのも、一括して取り扱った。

1はガラス質黒色安山岩製の石核か打面再生に伴う剥片となろう。G14-73グリッドの下層確認中に出土したが層位ははっきりしない。剥片剥離痕は多面にみられる。裏面上部の斜めからの剥離を意識的なものと見なせば彫器としての機能を有することとなろう。2は硬質頁岩製の削器で、縄文時代中期の円形石



第12図 単独出土の石器(1)

坑であるSK-063の覆土から出土した。薄手の縦長剥片を折断し、下部と左側縁に微細な調整剥離を施しに仕上げている。3は黒色ガラス質安山岩で、表面右下部の剥離から楔形石器とも考えられる。I07-66グリッドの下層確認中に出土したものであるが、層位ははっきりしない。4はチャート製で、縄文時代中期の竪穴住居跡(SI-001)の覆土中から出土したものである。自然面が多く残されており、石核の打面を形成するために剥離された大形剥片からさらに剥片剥離をした残核といえよう。両側縁及び下縁の加工から楔等の石器として使用された可能性がある。5は硬質頁岩製の小型ナイフ形石器で、典型的な形状を有する。G12-86グリッドの下層確認中に出土したものである。打面部は整形により削除され、左側縁の加工は全面に及ぶ。6は珪質頁岩製の剥片で、調査中に表面採集されたものであり石材・形状から旧石器時代の遺物と判断した。断面が三角形を呈する縦長剥片で、裏面右上側縁に微細な剥離が認められるが後世の痕跡とも考えられる。7・8はG07-87グリッド、9はG07-88グリッドの下層確認中に出土した剥片である。7は頁岩製、8・9はガラス質黒色安山岩製である。二次的な加工等の痕跡は認められず、形状も



第13図 単独出土の石器(2)

一定していない。なお、9の表面には自然面が残っている。10は黒曜石製の剥片で、H07-57グリッドの下層確認中にⅦ層から単独で出土したものである。断面が薄い三角形を呈する縦長剥片で、石器として利用していたことは間違いあるまい。石質は若干の不純物を含有するものの半透明で第2地点出土の黒曜石とは明確に原産地が異なるものと思われる。11は頁岩、12はガラス質黒色安山岩製の剥片で、11はSI-001の覆土から、12は奈良・平安時代に属する溝状遺構(SD-001)から出土したものである。11の下部は折断されており、12は石器素材としては十分な大きさを保持するが二次剥離等の加工は認められない。13は頁岩製の大型剥片で、奈良・平安時代の溝状遺構(SD-002)から出土した。石器素材としては十分な形状を有しているが明確な加工痕は認められない。表面には自然面を残す。左側縁には微細な刃こぼれ状の剥離が若干観察できるため、何らかの道具として使用されていた可能性もある。

第3章 縄文時代

第1節 遺構外出土遺物

1. 土器

本遺跡から出土した土器群については、遺構出土であっても明らかに混入と考えられるものはここで記述する。今回の調査区は建物の基礎や埋設管による攪乱が著しく、また、ソフトローム上面～ハードローム上面まで削平されているため、一般的な該期の遺跡と比較すると量は少ない。しかも出土した破片のほとんどが細片であることから、個体識別は不十分である。それでもある程度時期区分が可能なものを概観すると、中期後半の加曾利E式が大部分を占めている。遺構外出土遺物の詳細な分布状況については、前記のとおり遺跡の状況から集計していないが、選別段階での印象から、縄文時代中期の遺構密度が比較的高いG07・G08及びI10・I11グリッドにやや集中する傾向が見られる。事実記載を行うにあたり、これらの遺物を便宜的にⅢ群に分けたが、その区分内容は以下のとおりである。

第Ⅰ群 縄文時代早期～中期前半

出土点数が少ないため一括した。全体に散漫な出土状況である。早期後半の条痕文系土器及び中期初頭の五領ヶ台式などが見られる。

第Ⅱ群 縄文時代中期後半

本遺跡遺構外出土遺物の大半を占める。加曾利EⅡ式～EⅣ式を含むが、ほとんどはEⅢ式～EⅣ式で、曾利系や大木式の影響を受けたものも認められる。多くは小破片であり、細分型式分類が困難であるため、文様の構成要素や施文技法などから分類を行い、それに従って記述する方法をとった。なお、その分類はおおむね四柳(1995)⁸⁾に準拠している。

A類：いわゆるキャリパー形土器である。ここに分類したのは明らかに口縁部文様帯と胴部文様帯が分離できるものだけであるため、口縁部～胴部上位にかけての破片が大部分である。胴部破片についてはB類との区別がつかないため、B類に分類されたものが多くあると予想される。

B類：主に沈線で文様を描出するものであるが、口縁直下の無文部を作出する沈線はここから除外した。胴部懸垂文をもつ破片の中には、A類の胴部文様帯となるべきものが含まれる。

C類：主に隆帯で文様を描出するものであるが、口縁直下の無文部を作出する隆帯はここから除外した。

D類：縄文のみが施されるものであるが、いずれも細片ばかりであったため、掲載しない。レイアウトの都合上、底部破片については後述するH類に分類した。

E類：条線のみが施されるものであるが、これを地文として沈線もしくは隆帯で意匠が描出されるものについてはそれぞれB類、C類に区分している。

F類：無文のもの、調整痕のみが残るものであるが、図示しうものがないため掲載しない。

G類：底部を一括したが、胴部の文様構成が判明しているものは、それぞれの区分に分類したため、ここに掲載したのは本来はF類に区分される無文のものと本来はD類に区分されるものである。

H類：深鉢・浅鉢以外の器種、及び把手及び突起類を一括したが、深鉢・浅鉢以外の器種については図示しうものはないため、ここでは突起・把手類のみ掲載している。

⁸⁾ 四柳 隆ほか 1995 『佐倉市池向遺跡』(朝千葉県文化財センター)

第Ⅲ群 縄文時代後期以降

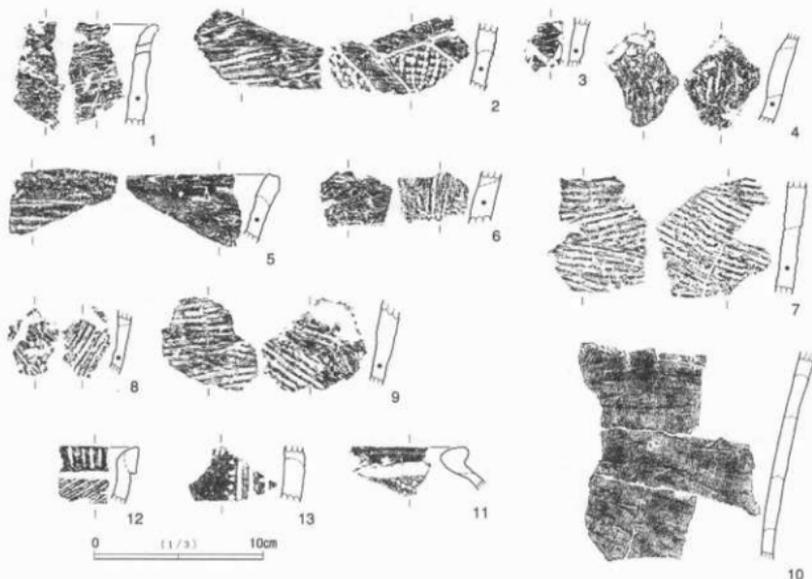
称名寺式、驅之内式、加曾利B式を含む。絶対量が少なく、図示したものがほとんどすべてである。それぞれ既存の型式別に記述する。

第Ⅰ群土器（第14図、図版28）

本群の土器は、図示したものがほぼすべてで、他は図示にたえない細片が数点存在するのみである。

1～9は早期の条痕文系土器である。1は口縁部で、口唇部直下に細い棒状工具による穿孔がみられる。内外面共に条痕はやや不明瞭で、胎土にはやや多くの繊維が含まれる。2・3は口唇部を欠く口縁部で、内面には横方向の条痕を施し、外面には弱い横方向の条痕を残したまま、沈線で描いた菱形区画の交点に竹管による刺突を加えるもので、2は区画内に貝殻腹縁を用いた押引文を充填する。胎土中の繊維はやや少ない。4は内外面共に粗い縦方向の条痕を施すもので、胎土中の繊維はやや多い。5は内面に横方向の粗い条痕を施し、外面の条痕はナゲ消される。胎土中の繊維は少ない。6～9は内外面共に条痕を施す胴部である。6は外面が縦方向、内面が横方向で、外面は粗く、内面はやや細かい。胎土中の繊維は多い。7・9は同一個体と考えられる。条痕は内外面共に横～斜方向で、共にやや粗い。胎土中の繊維はやや少ない。8は内外面共に縦～斜方向で、共にやや粗い。胎土中の繊維は多い。2・3は外面の文様から鶴ヶ島台式と考えられるが、他は細別時期を推定するのは難しい。

10～13は前期～中期初頭の土器である。10は胴部下半で、外面はケズリ状の調整が施され、上部に貝殻



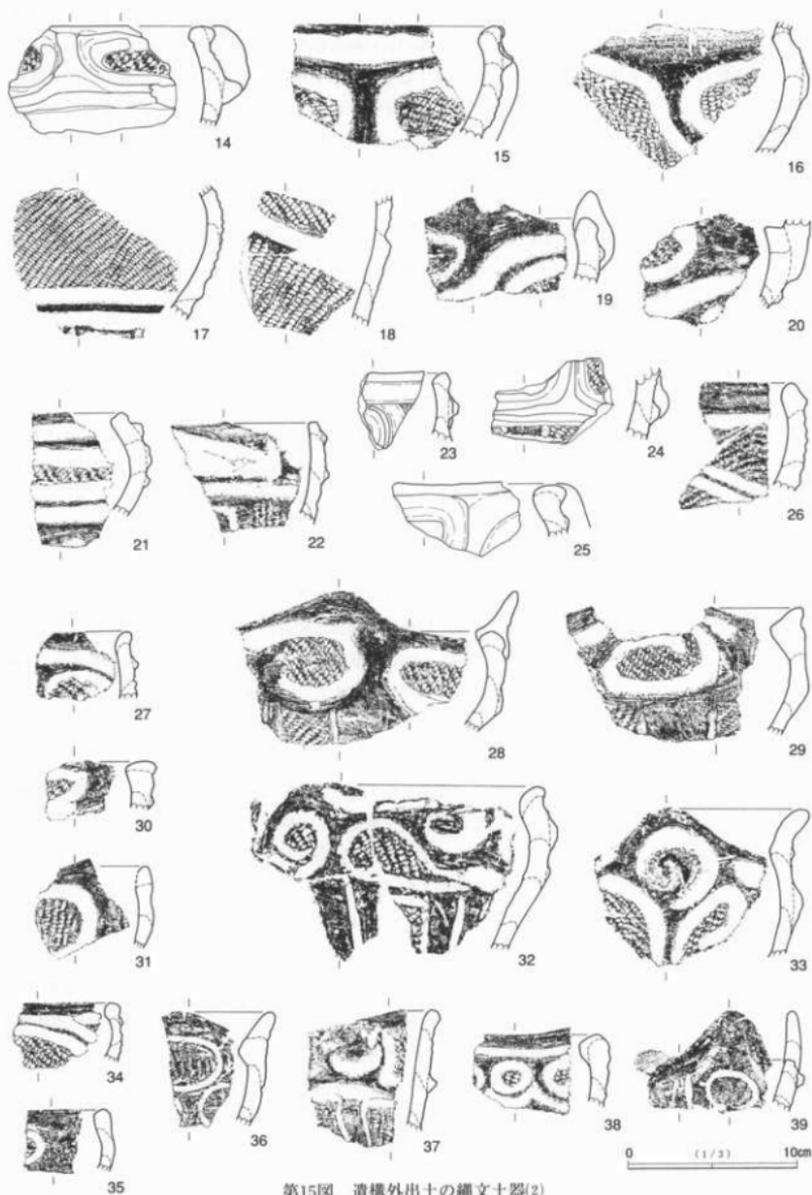
第14図 遺構外出土の縄文土器(1)

腹縁文が見られる。11は平縁で、粘土紐の貼付けもしくは折返しにより口唇部を肥厚させ、外面には縄文が施される。12は平縁で、外側への折返しにより幅の広い縁部を形成する。縁部外面には半截竹管の押捺による縦の条線文を施す。胴部は寸胴状を呈するものと考えられ、外面には縄文を施す。内面は横方向の条痕で調整されている。13は棒状工具による交互刺突文が見られる。10は浮島式、11は諸磯式併行、12は下小野式、13は五領ヶ台Ⅱ式であろう。なお、11については第Ⅱ群の可能性もある。

第Ⅱ群土器（第15図～23図，図版28～37）

A類（第15図14～39，図版28・29）

14は平縁で、口縁部文様帯に隆帯による楕円状区画を配し縄文を充填する。文様帯間にやや幅広の無文帯をもつ。15は平縁で、口縁部文様帯は隆帯による楕円状区画を配し縄文を充填する。16は口縁部が「く」字状に強く屈曲するタイプと考えられる。口縁部文様帯は縄文を地文とし、隆帯により入組み状の意匠が配される。17は楕円状区画を配し、縄文を充填する。胴部文様帯の地文は不明だが、沈線による懸垂文を施す。18の口縁部文様帯は隆帯による楕円状区画を配し、横施文の縄文を充填する。胴部文様帯は縦施文の縄文を地文とし、沈線による懸垂文を施す。胴部の縄文は口縁部文様帯を区画する隆帯にまで及んでおり、文様帯の境界は不明瞭となっている。19は波状縁で口縁部文様帯は隆帯により入組み状の意匠を配し、縄文を充填する。20は平縁で、口縁部文様帯は縄文を地文とし、隆帯による楕円状区画を配する。21は平縁で、口縁部文様帯は縄文を地文とし、隆帯により狭い楕円状区画を配する。22は波状縁で、口縁部文様帯は隆帯により入組み状の意匠を配する。胴部文様帯は縄文を地文とし、上端が連結する可能性のある沈線により懸垂文を施す。23は平縁で、口縁部文様帯は縄文を地文とし、隆帯により渦巻状もしくは円形の意匠を配する。24は縄文を地文とする。口縁部文様帯は隆帯により楕円状区画を配し、胴部文様帯は沈線による懸垂文を施す。25は平縁で無文帯を欠く。口縁部文様帯は隆帯により、区画文等を配するものと考えられ、地文は縄文と考えられるが不明瞭である。26は波状縁と考えられ、幅の狭い無文帯をもつ。口縁部文様帯は縄文を地文とし、隆帯により入組み状の意匠を配する。27はナゾリにより無文部を描出するが不明瞭である。口縁部文様帯は隆帯により楕円状区画を配し、縄文を充填する。28・29は同一個体である。口縁部文様帯には、隆帯による渦巻状意匠と楕円状区画を配し、それぞれに縄文を充填する。渦巻状意匠は緩く、楕円に近い形状である。胴部文様帯は縄文を地文とし、沈線による懸垂文を施し、沈線間は磨り消される。30はおそらく平縁で、口縁部文様帯は縄文を地文とし、隆帯により楕円状区画を配する。31は波状縁で無文帯を欠く。口縁部文様帯には沈線による楕円状区画を配し、縄文を充填する。薄手のつくりである。32は波状縁で、口縁部文様帯には隆帯による渦巻状意匠と区画文が入り組み、縄文を充填する。ただ渦巻状区画には右巻きと左巻きとがあり、遺存部分では右巻きの意匠内には縄文を充填しない。33は波状縁で、ナゾリにより無文部を描出するが不明瞭である。波頂部直下には単沈線（幅広の凹線）による渦巻状意匠、それ以外の口縁部文様帯は楕円状区画と渦巻状区画で構成され、区画内には縄文を充填する。34は平縁で、ナゾリにより無文部を描出するが不明瞭である。口縁部文様帯には隆帯による楕円状区画を配し、縄文を充填する。35～39は波状縁である。35は無文帯は画されなすが比較的明瞭である。口縁部文様帯には沈線による楕円状区画を配し、縄文を充填する。36は波頂部の破片で無文帯は不明瞭である。口縁部文様帯は沈線による楕円状区画で、このほかに波頂部直下にも沈線による楕円状区画があり、いずれにも縄文を充填する。37は無文帯を欠く。口縁部文様帯は縄文を地文とし、隆帯による渦巻状意匠と長方形区画が組み合わされ、長方形区画以外の地文を磨り消す。胴部文様帯は縄文を地文とし、沈線による懸

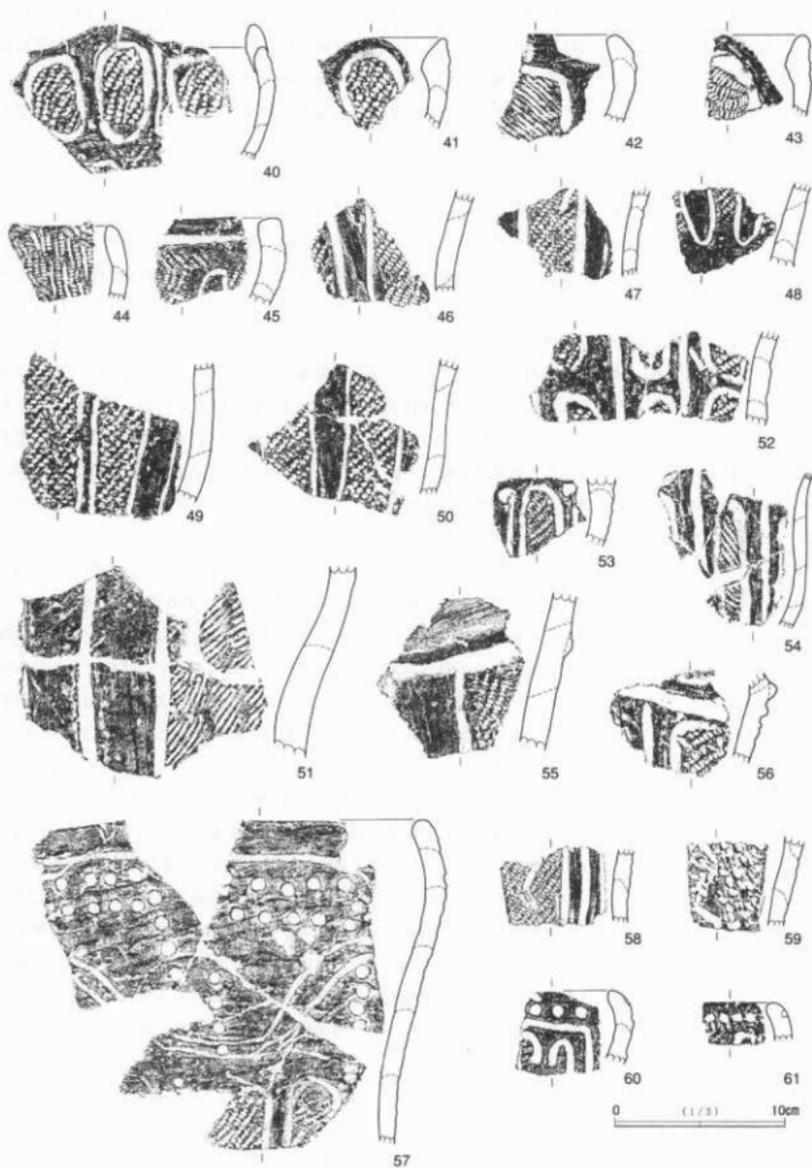


第15図 遺構外出土の縄文土器(2)

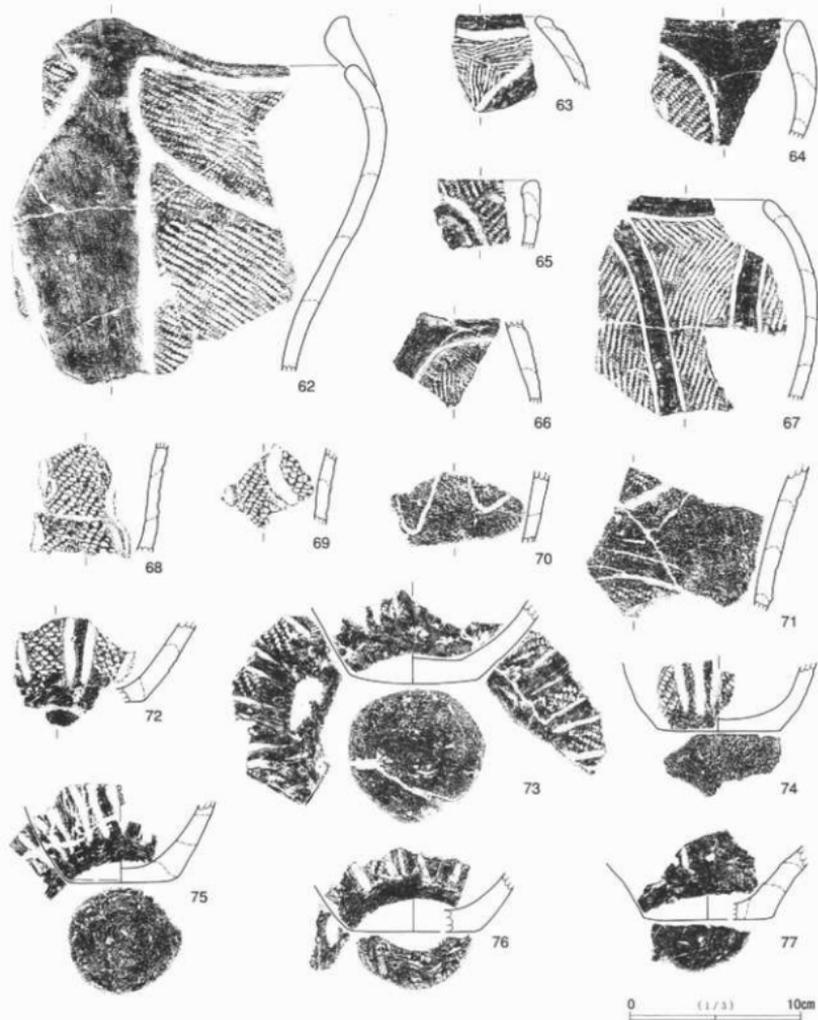
垂文を施すが、この沈線は上端が口縁部文様帯区画の隆帯に沿って横方向に延びており、縦形状の区画となる可能性がある。懸垂文内は地文を磨り消す。38は沈線で画された無文帯をもつ。口縁部文様帯は沈線による円形区画と楕円状区画が交互に配され、内部には縄文を充填する。胴部文様帯は不明である。39は無文帯は不明瞭で、波頂部直下には沈線による楕円状区画を配する。波頂部から口縁部に沿って隆帯が伸び、隆帯下から沈線による懸垂文が施されている。地文はなく、区画内にも充填されない。

B類 (第16・17図40~77, 図版30・31)

施文技法から大きく3種に分けられるが、掲載したもので、40~47・49・50・52・53・55~57・60~65・68・69・71~74・76が1種、66・67が2種、48・51・54・58・59・70・75が3種である。集計していないが、図示しなかったものの中でも1種が最多で、2種は少なかった。40・41は波状縁で同一個体と考えられる。やや縦長の楕円状区画を充填するものであるが、波頂部の区画はやや長い。区画内は縄文を充填する。42は平縁で、楕円状の区画を並べ、縄文を充填する。43は波状縁で楕円状区画を配し、細い棒状工具の刺突を充填する。44は平縁である。地文は縄文で横位連繫弧線文を配する。45は平縁で、地文は縄文だが、最上部が横施文、以下は縦施文である。横位連繫弧線文により区画される。46~56は胴部で、無文の52を除きいずれも縄文を地文とする。46・47は懸垂文を施す。48は底部に近い部位である。49は懸垂文を施し、区画内の地文を磨り消す。懸垂文の幅は一定しない。50は区画外の地文を磨り消す。51は懸垂文が施され、区画外の地文を磨り消し、単沈線を追加する。52は縄文を充填し、区画間に単沈線を追加する。53は縦長の楕円状区画で、区画外の地文を磨り消す。区画間には上端が蕨手状の単沈線を追加する。54は対向U字状文で、区画外の地文を磨り消し、単沈線を追加する。55は縦長の方形区画を配し、区画外の地文を磨り消すが、上部は隆帯により区画された無文帯があり、A類の胴部である可能性が極めて高い。56は懸垂文を施し、さらに縦長の方形区画を施すもので、方形区画以外の地文を磨り消す。上部には隆帯による渦巻状文と考えられる意匠が施されており、A類の可能性が高い。57は平縁で、沈線により幅の狭い無文帯を描出す。口縁部下端に2条の粗い波状文を描いた後、同一の棒状工具による円形刺突を2列横に並べ、さらに縦にも2列並べて懸垂文状の意匠を施す。胴部は縦楕円状の区画を配し、縄文を充填する。58は縄文が地文で懸垂文を施し、地文を磨り消す。懸垂文内には同様の単沈線を追加し、地文部分には浅い単沈線による波状文を施すもので、A類の胴部の可能性がある。59は地文には複雑な縄文を用いている。60は平縁で、無文帯に棒状工具による円形刺突文を施す。長方形区画内に上端部が対向する蕨手状の縦沈線を充填するもので、地文はなく、単一の工具のみで文様を描く。61は平縁で、口唇部直下には棒状工具による円形刺突文を施し、それ以下に横位連繫弧線文を描くもので、区画外の地文を磨り消す。62は波状縁で、無文帯は不明瞭である。地文は縄文で、口縁部には沈線により横D字状の区画が、胴部には懸垂文が施されており、区画外の縄文を磨り消す。地文の縄文は方向はほぼ同一だが口縁部と胴部は別々に施文されており、A類に分類すべきものである。63は平縁で、沈線により画された無文帯をもつ。地文は縄文で、横位連繫弧線文が描かれ、区画内の地文を磨り消す。64は平縁で無文帯を欠く。縦楕円状区画で、区画内に縄文を充填する。65は平縁で、縄文の地文が胴部とは別に口唇部にも施されるため、無文帯を欠く。横位連繫弧線文が描かれるが、地文の磨消は行われない。66は鉢もしくは壺である。横位連繫弧線文で、縄文を充填する。67は平縁で、沈線により画された幅の広い無文帯をもつ。地文は縄文で、胴部はおおむね縦施文であるが、口縁部のみ横施文である。全体に二重の沈線により横位連繫弧線文が描かれており、沈線間の地文を磨り消す。薄手で比較的丁寧なつくりであり、壺もしくは鉢の可能性が高い。68・69は同



第16図 遺構外出土の縄文土器(3)

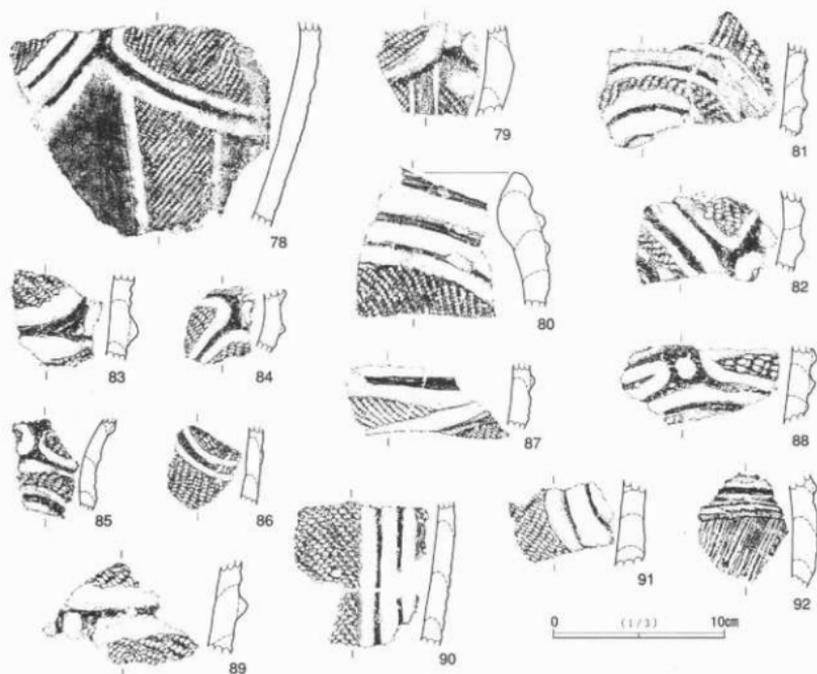


第17図 遺構外出土の縄文土器(4)

一個体の可能性がある。縄文を地文とし、波状の単沈線による懸垂文が描かれる。70は底部に近い胴部で、対向U字状文が描かれ、縄文が充填される。強く二次的に被熱しており、炉体などとして使用されていた可能性がある。71は対向U字状文を施すもので、区画内には粗い縄文が充填される。72～77は底部で、地文は72～74・76が縄文、75は細かい条線、77は不明である。いずれも懸垂文を描くもので、72～76については区画内の地文を磨り消すが、75は不明瞭である。底面は丁寧にヘラナデにより調整され、外周部の73がやや顕著に磨耗しているが、他はほとんど磨耗しない。

C類（第18～21図78～116、図版32～34）

施工技法から大きく3種に分けられるが、掲載したもので、78～90・96～98・100・102・103・109～114が1種、91・93～95・99・101・106・108が2種、92・104・105・107・115・116が3種となる。集計していないが、図示し得なかったものの中でも1種が圧倒的に多く、他は少なかった。78～91は縄文を地文とする。78は蒲鉾状、79は沈線による懸垂文が認められることからA類となる可能性が極めて高い。80は波状線で、ナソリにより無文部を描出す。81・82は主文様として、2条の隆帯による渦巻状意匠を配するものであるが、82は短い隆帯で構成される副文様の一部が認められる。83・96は渦巻状意匠の下部であろうか。84・85は渦巻状意匠を配するものであるが、85は薄手で比較的小型の器形となろう。87は渦巻状意匠の上部と考えられる。88は対向する同心円弧の接点に刺突状の円形のくぼみが見られる。89は上部と下部の地文の施工方向が異なること、横方向の隆帯から垂下する2条の隆帯が認められることから、A類の可能性はある。90は懸垂文を施すもので、これもA類となる可能性がある。91は渦巻状意匠を施すものである。92は条線を地文とし、楕円状区画を配するもので、A類となる可能性がある。93～99は口縁部で、不明な96を除いて、いずれも縄文を地文とする。このうち93～96が平線、97～99が波状線である。93・94は同一個体と考えられ、口縁部は山形の隆帯により幅の狭い無文部を描出す。93はこの隆帯から垂下する2条の隆帯によって懸垂文が施され、懸垂文の区画外には渦巻状意匠が描かれる。地文の磨消は行われぬ。95は隆線により幅広の無文部を描出し、この隆線から延びるやや間隔をあけた2条の隆帯により渦巻状意匠を描き、隆帯間の地文を磨り消す。96は隆線により幅の広い無文部を描出し、この隆線から延びる1条の隆線による渦巻状意匠が描かれる。97は無文部を描出す隆線は不明瞭で、渦巻状意匠を描くものと考えられる。98は隆帯により狭い無文部を描出すもので、小さな渦巻状意匠を配するが、これはA類となる可能性がある。99は隆帯により幅広の無文部を描出すもので、渦巻状意匠を描くものと考えられるが、この隆帯は不明瞭で、意匠外の地文を磨り消す。100～104は縄文を地文とし、100～102は主文様として渦巻状意匠を配するものである。いずれも隆帯は2条で、隆帯間の地文を磨り消す。103は上部に縦楕円状区画、下部に主文様となる渦巻状意匠を配するものと考えられ、地文を磨り消さない。また上端は丁寧に研磨され、再生されている。104は楕円状区画を配するものと考えられるが、全体の意匠は不明である。区画外は地文を磨り消す。105・106は対向U字状の区画を配する。105は縄文が充填され、106は縄文を地文としており、区画外の地文を磨り消す。107は縄文を地文とし、懸垂文を施すもので、懸垂文内の地文を磨り消す。108は平線で、地文が口唇部に及ぶため無文部を欠く。109は縄文を地文とし、主文様として渦巻状意匠を配する。その外側には副文様が充填されるが、意匠は不明である。110は波状線で、隆帯により無文部を描出す。111～113は縄文を地文とする。主文様の意匠は不明だが、112の右端の様子から渦巻状意匠であろうか。114は懸垂文を施すもので、懸垂文間の地文を磨り消す。底部は小さく、底面はヘラナデにより丁寧に調整されており、外周部は顕著に磨耗する。なお、110～114はG07-78・88

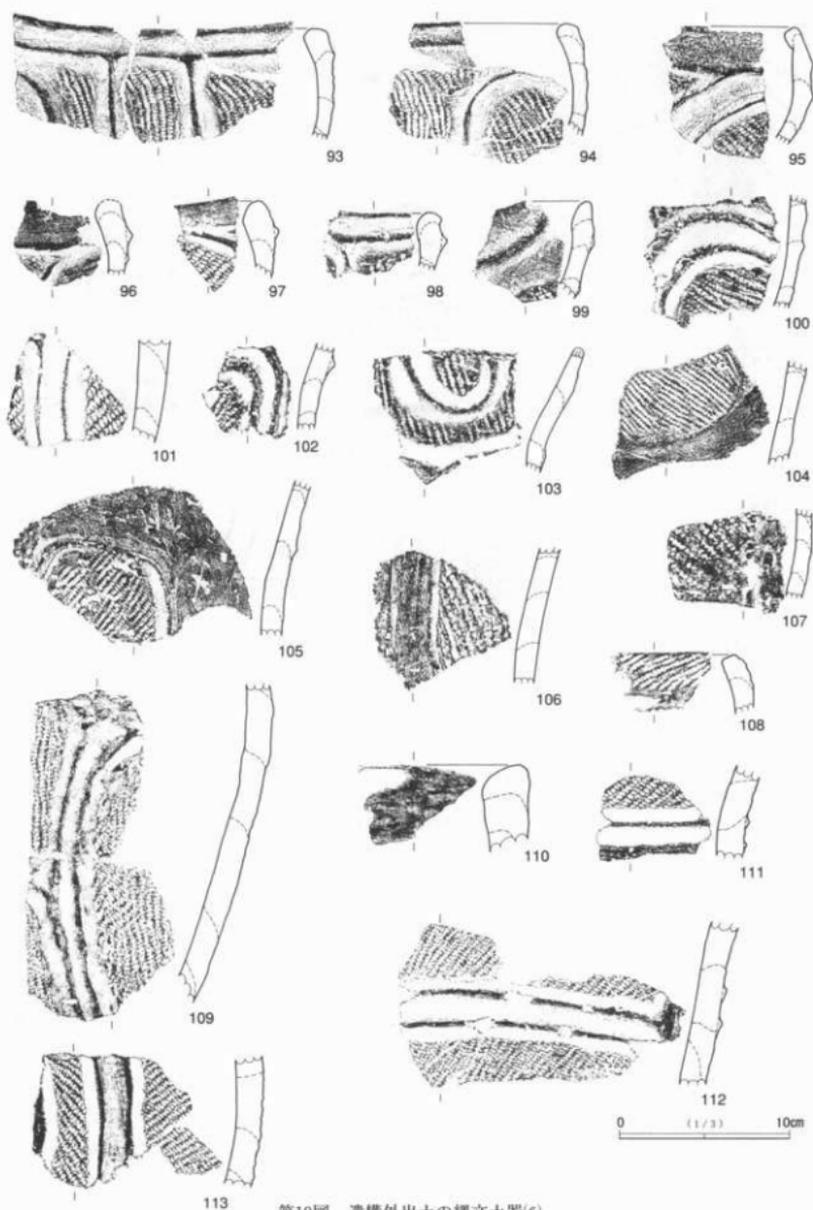


第18図 遺構外出土の縄文土器(5)

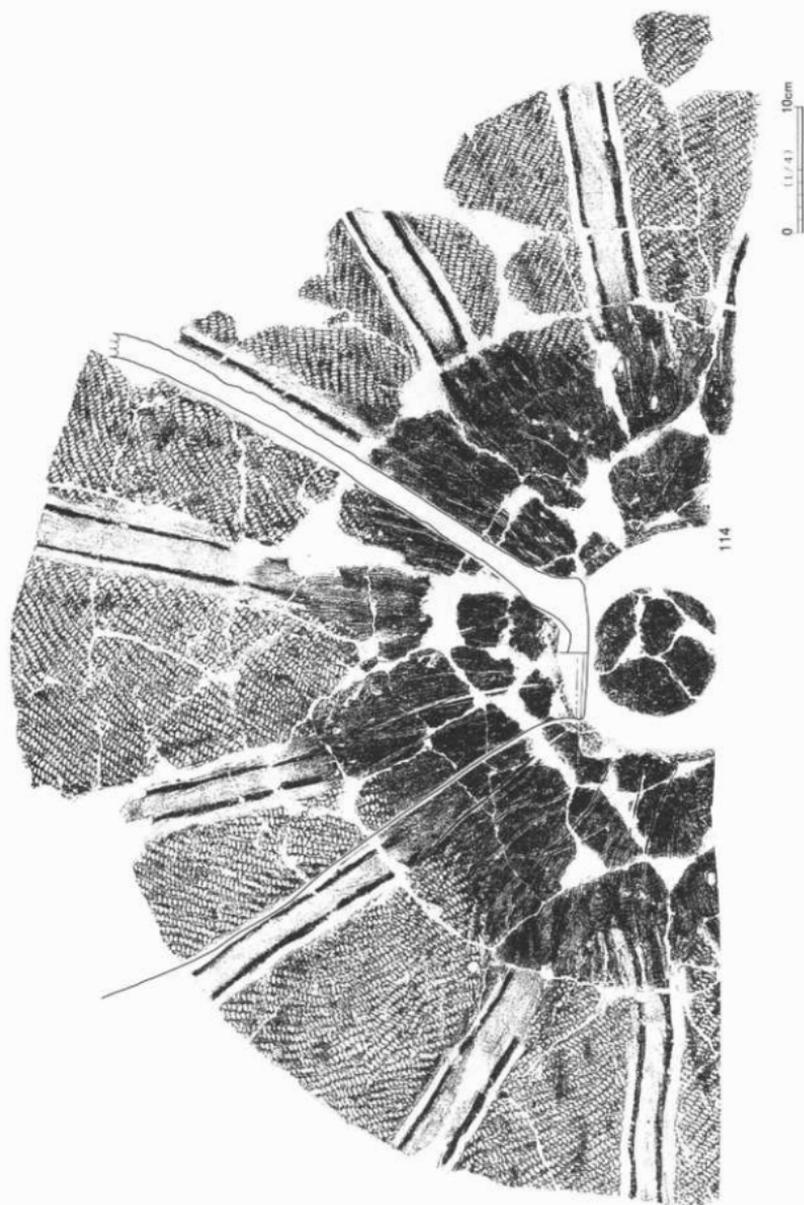
グリッドの遺構検出面からかなりまとまった状態で出土している。特に114については、接合できなかった破片が多数存在しており、本来はその周辺に何らかの遺構が存在した可能性が高い。いずれにしても胎土や施文原体、出土状況などからみて同一個体であろう。115・116は縄文を地文とし、懸垂文を施すもので、底面はヘラナデにより丁寧に調整され、外周部は若干磨耗している。116は地文は明瞭だが、115はやや不明瞭である。

D類 (第22図117~141, 図版35・36)

胴部の破片を中心に量は非常に多いが、本来はA類やB類、C類などに分類されるべき破片も含まれる可能性が高いため、ここでは口縁部についてのみ図示した。またそのような個体についてはその都度本文中に示すことにする。117・118・128・129は隆線により無文部を描出するものである。117は平縁で無文帯は広く、縄文は隆線上に及んでおり、隆線直下には丸みの強いピークが二つ並ぶ低い突起がつく。118・128・129は波状縁で、無文帯は狭い。118の区画隆線は波頂部から垂下し、左右に分かれる。119~124・126・127は沈線により無文部を描出するものである。119・120は平縁で無文帯は狭く、沈線はナゾリ状で太い。121は波状縁で無文帯は狭く、沈線はやや細い。122は平縁で無文帯は非常に幅広い。沈線はやや浅い。123・127は平縁で無文帯はやや幅が広い。沈線はやや浅く幅広である。124は波状縁で、無文帯はや



第19図 遺構外出土の縄文土器(6)



第20図 遺構外出土の縄文土器(7)



0 (1/3) 10cm

第21図 遺構外出土の縄文土器(8)

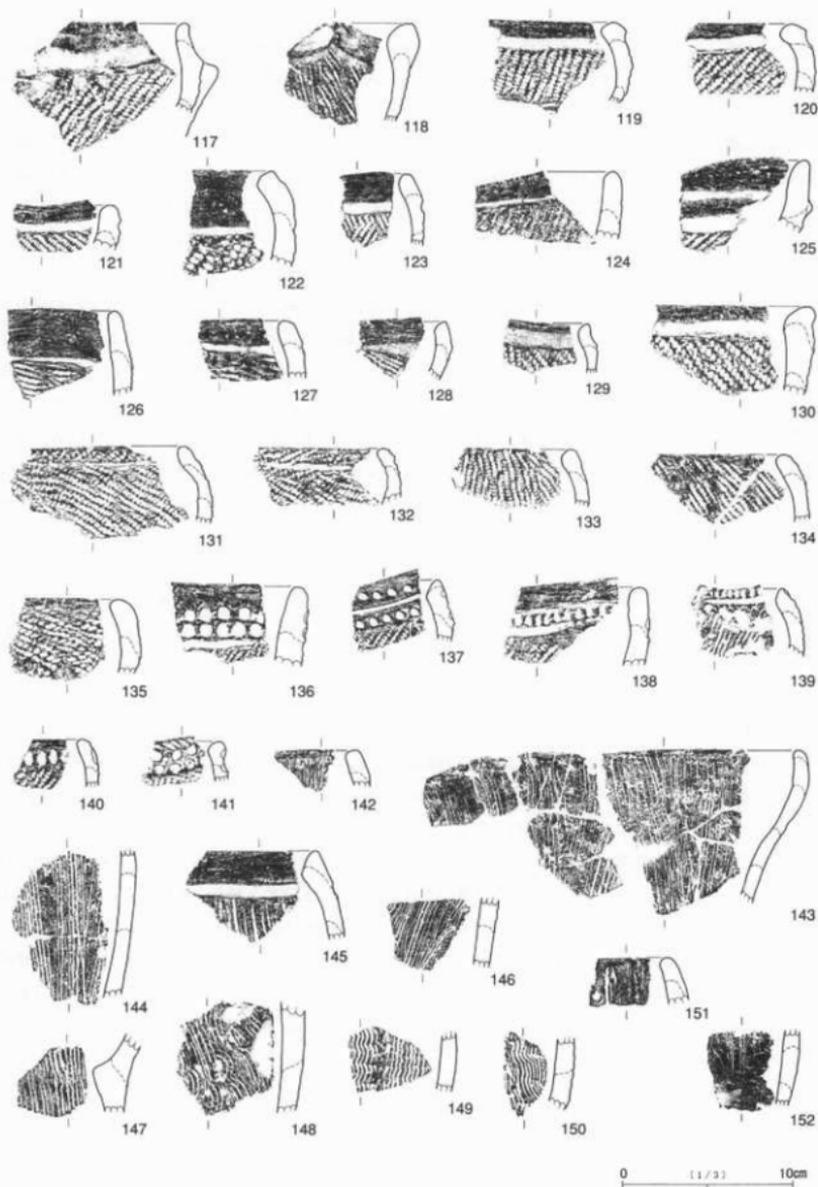
や狭い。沈線は細く浅い。126は波状緑で、無文帯の幅はやや広い。沈線は細い。125は隆線により無文帯を描出するもので、隆帯はやや幅の広い蒲鉾状であり、A類の可能性がある。130は平緑で、ナゾリにより無文帯を描出するが不明瞭である。131・132は平緑で、縄文原体や胎土から見て同一個体である。口縁部直下に沈線による区画が認められるが、地文は口唇部に及んでおり、無文帯を欠く。ただ縄文は、胴部が縦施文、口縁部が横施文であり、文様の切りあい関係からみた施文順序は口縁部縄文→沈線→胴部縄文である。133は平緑で、口唇部まで一様に縄文が施される。ただ、左端に沈線による蕨手状の意匠が断片的に残っており、本来はB類に区分すべき個体なのかもしれない。134・135は平緑で、全面に一様に縄文が施される。136～141は口縁部に刺突列を並べるものである。136は平緑もしくは非常に緩やかな波状緑である。地文をもつ胴部と口唇部はやや細い沈線により画され、沈線の直上には棒状工具によるやや大きな円形刺突を2列並べる。137は波状緑である。口唇部は隆線により画され、棒状工具による円形刺突文を2列並べるが、上下でリンクしていない。またこの刺突列間には沈線が1条加えられる。138は波状緑で、胴部と口唇部は上下を浅い沈線により削りだされた隆帯により区画される。隆帯上には半截竹管による半月状の刺突列がめぐる。139は平緑で、胴部と口唇部はやや細い沈線により画される。口唇部には棒状工具による楕円状刺突がめぐるが、幅が狭く、余白はない。140は平緑で、口唇部には半截竹管による刺突列がめぐる。141は波状緑で、口唇部直下には非常に幅広く深い沈線がめぐるが、この沈線内には棒状工具によるやや大きな刺突列が2列並べられる。

E類（第22図142～152、図版36・37）

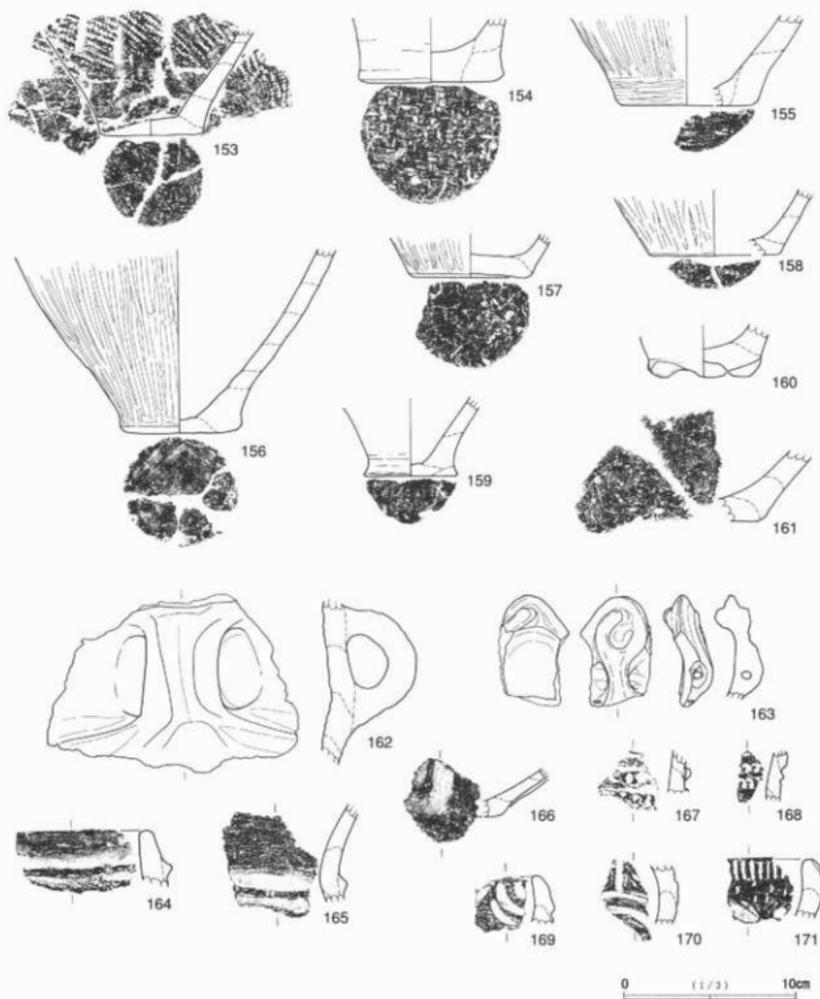
量は少ない。142～144は全面に縦方向の条線を施すもので、142・143は平緑の口縁、144は胴部である。142・143は比較的細密で5条程度、144はやや粗く7条が単位となっている。142は口縁がやや内湾し、143はほぼ直立する。なお143については図示してない破片が5点ほど出土している。原体ははっきりしないが、櫛状工具であろうか。145は平緑で、細くやや粗い1本描の縦方向の条線を施すが、口縁部には幅のやや広い沈線により画された無文帯をもつ。146は斜方向の条線が施されるもので、2条単位である。原体は半截竹管であろうか。147はほぼ直立する口縁部の外側に、外反する波頂部がつく波状緑と考えられる。条線はやや粗く、7条単位である。148はやや厚手の胴部で、基本的には縦方向の条線が施されるものだが、一部蕨手状、半円状となるものもある。いずれも原体は5条単位の櫛状工具である。また、内面は丁寧な縦ミガキにより調整される。149・150は比較的細密な条線が縦方向に施されるものであるが、直線ではなく、細かい波状となっており、一部押し引き状となる部分も認められる。原体は7条単位の櫛状工具と考えられ、胎土などから見て同一個体の可能性がある。内面は148と同様に、丁寧な縦ミガキにより調整されている。151は平緑で、縦方向の弱い隆帯上に1本描の条線が施されるものである。全体の構成ははっきりしないが、その左側には棒状工具による円形の刺突が見られることから、本来はE類に分類すべきものではないが、便宜的に図示した。152は上半に1本描の条線が施される。

G類（第23図153～161、図版37）

全体の破片の量と比較して少ないわけではないが、ほとんどが図示に堪えない小片であった。前述のとおり個体識別は行っていないが、実際には相当な個体数になるものと考えられる。153は胴部下位以上に縄文を施すもので、本来はD類に区分すべきものである。胴部はやや強く開き、底面は平坦で、丁寧なヘラナデにより調整されており、外周部が若干磨耗している。154は厚手で、大型の個体であろう。胴部ははっきりしないが、比較的急角度で立ち上がるものと考えられる。底面は平坦で、平織りの網代痕が残る。



第22図 遺構外出土の縄文土器(9)



第23図 遺構外出土の縄文土器⑩

底面外周部は比較的顕著に磨耗している。155はやや厚手で、中型の個体と考えられる。胴部はやや強く開き、外面は細かい縦ミガキにより調整されるが、底部付近は横ミガキとなる。底面はおおむね平坦で、やや粗いヘラナデにより調整される。底面外周部はほとんど磨耗しないが、側縁が顕著に磨耗している。156は厚手だが、中型の個体と考えられる。胴部はやや強く開き、外面は細かい縦ミガキにより調整される。底面はやや丸みを帯びるがおおむね平坦で、丁寧なヘラナデにより調整される。外周部はごく僅かに磨耗する。157は薄手の割に底部が大きく、内面の調整が粗いことから鉢となる可能性がある。体部はやや強く開き、外面は粗い縦ミガキにより調整される。底面はやや上底状で、粗いヘラナデにより調整される。外周部は磨耗しない。158は底面外周部が厚く、中央付近が薄い。胴部はやや急角度で立ち上がり、外面は粗い縦ミガキにより調整される。底面はおおむね平坦で、粗いヘラナデにより調整される。外周部は僅かに磨耗する。159は小型の個体と考えられる。胴部は比較的急角度で立ち上がり、細かい縦ミガキで調整されるが、底部側面はヨコナデとなる。底面はごく僅かに上底状で、細かいミガキにより調整される。外周部はほとんど磨耗しないが、側縁がやや磨耗して潰れている。160はやや厚手だが、中型の個体と考えられる。全体的に強く二次的に被熱しているためはつきりしないが、胴部外面には一部縄文が施されていた可能性がある。底面外周部に粘土紐を貼り付けることにより、やや幅が広く低い「脚台」を形成するが、対向方向に4か所が決られており、緩やかな波状となっている。「脚台」の端面は顕著に磨耗する。なお、内面は比較的丁寧に調整されており、深鉢以外の特殊な器種となる可能性がある。161は胴部外面に細密な条線が施されており、本来はE類に分類されるべきものである。底面はヘラナデにより調整されており、おおむね平坦である。外周部は僅かに磨耗する。比較的厚手のつくりだが、胴部はかなり強く開き、内面が比較的丁寧に調整されていることから、鉢もしくは浅鉢となる可能性がある。

H類（第23図162・163、図版36）

僅少で、図示し得なかったものは1点を数えるのみである。162は比較的大型の胴部につく橋状把手である。やや幅広く、外面には縦方向の微隆起線が3条走る。把手の上下の取付部からは四方に延びる微隆起と、左右それぞれの上下の突起を繋ぐ半円状の微隆起が認められるが、二次的に被熱し剥落も顕著であるため、地文の有無は不明である。163は突起である。波状線の波頂部の外面に薄く延ばした粘土紐を渦巻状に貼り付け、その下端から小さな環状突起を延ばす。胴部の文様構成は不明だが、地文は縄文である。その他（第23図164～171、図版36・37）

僅少で、図示したものがほとんどすべてである。164は大木10式の影響を受けている可能性があると考えられる。口縁部はおおむね直立するが、僅かに内向する平縁である。外面に隆帯により画された無文帯をもち、以下には粗い縄文を施す。165～171は曾利式の影響を受けている可能性があるものである。165は強く開く口縁の下端に山形の隆帯を施すことにより、幅の広い無文帯を形成する。地文は不明である。166は小型の浅鉢で、体部は強く開く。外面には2条の隆帯が縦に施され、底面外周部は顕著に磨耗する。また、体部外面は全面が赤彩される。167・168は比較的小型の機種と考えられる。167は幅がやや狭い蒲葺状の隆帯の上に熟糸を挿入するもので、隆帯間には幅の狭い沈線が施され、168は横方向の浅い沈線内に半截竹管による刺突を並べるものである。169・170は胎土から見て同一個体と考えられる。169はやや内湾する口縁で、平縁であろう。浅い沈線による重連弧文を施すもので、170は重連弧文から沈線を垂下させ、地文に縄文を施す。171はやや内湾する口縁で、口唇部に薄いヘラ状工具によるやや長いキザミを施す。口縁部には浅い沈線により文様を描くが、全体の様子は不明である。

第Ⅲ群土器（第24・25図，図版37～39）

称名寺式（第24図172～199，図版37・38）

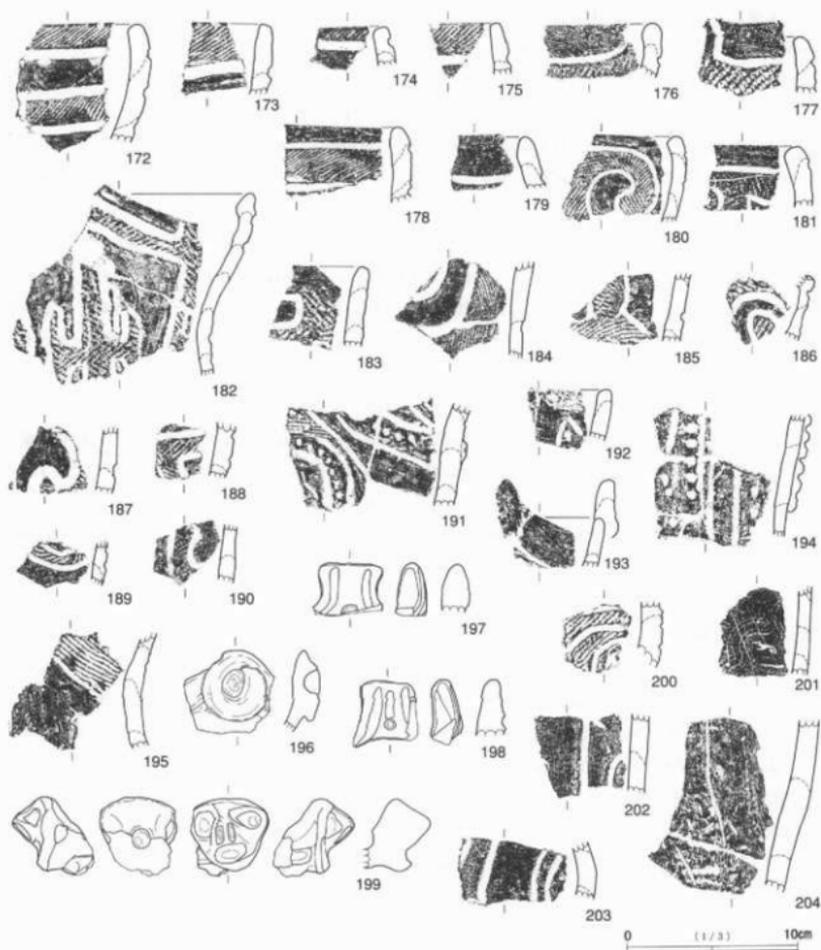
一般に大きく1式と2式に分けられているが，本遺跡で出土したものの多くは1式である。172～189は1式である。172～183は口縁部で，ほとんどは平縁だが，182のみ波状縁である。172～175はいずれも細密な縄文を地文とし，横方向の文様を描出するもので，口縁端部まで縄文を施す。176・177はやや粗い縄文を地文とし，口唇部から延びる沈線により文様を描くものである。なお177については破片の左端が若干隆起しており，突起がついていた可能性がある。178・179は細密な縄文を地文とし，横方向の沈線により文様を描出するものである。180はやや細い沈線により巻波状の意匠を描き，細密な縄文を充填する。内面はやや粗いヘラナデ，外面は丁寧なミガキにより調整される。181は細い沈線によりの意匠を描出するもので，細密な縄文を充填する。182は深い沈線により描かれた横位の区画文とそこから垂下する懸垂文状の意匠，及びそれと交差するH字状の意匠を組み合わすもので，H字状の意匠は波頂部から垂下する懸垂文にのみ描かれるものと考えられる。意匠内には縄文を充填する。184～190は胴部である。184はJ字状もしくは渦巻状の意匠に，細密な縄文を充填する。185は巻波状の意匠に縄文を充填するものである。186は口縁端部を欠くが，上端に棒状工具による刺突列が並ぶ。意匠は渦巻状と考えられ，やや粗い縄文を充填する。187・188は胴部下半で，J字状の意匠にやや細かい縄文を充填するものである。189・190は渦巻状の意匠であろうか。191～195は2式である。191は縄文を充填するが，意匠内の全面におよばない。隆帯上には棒状工具による刺突を施す。192～194は胎土と原体から同一個体である。波状口縁で，波頂部には隆帯により渦巻状の意匠を描きく。全体の文様構成ははっきりしないが，主に口縁に並行する横方向の意匠と，懸垂文状の縦方向の意匠が組み合わされているもので，波頂部から隆帯を貼付け，隆帯上部に棒状工具により刺突を施す。また意匠内にも刺突列を施す。胎土には粗い砂粒や雲母・長石などの粒子を多く含み，本遺跡では他に例がない。195は意匠の中に縄文を充填するもので，意匠の全容ははっきりしない。おおむね1式と考えられるが，本遺跡の出土土器とは胎土が異なっている。196～199は把手である。196は波状縁の波頂部外面に薄くのばした粘土紐を渦巻状に貼り付けたもので，波頂部から口縁に沿って隆帯による無文帯が見られる。197・198は胎土から同一個体と考えられるが，形状はやや異なっている。199は顔面付把手である。

堀之内式（第24図200～204，図版38）

すべて1式である。200は縄文を地文とし，沈線で多重の楕円状意匠を描くものである。地文の磨消等は行われぬ。201～204は沈線のみで文様を描くものである。201は7条単位の沈線で波状文を描き，その後斜方の平行線文を施す。粗製土器であろう。202・203は太い単沈線で円弧状の文様を描くものであるが，全体の意匠は不明である。204は底部に近い胴部の破片で，太い単沈線により文様を描くものである。202～204は称名寺式系譜の土器の可能性はある。

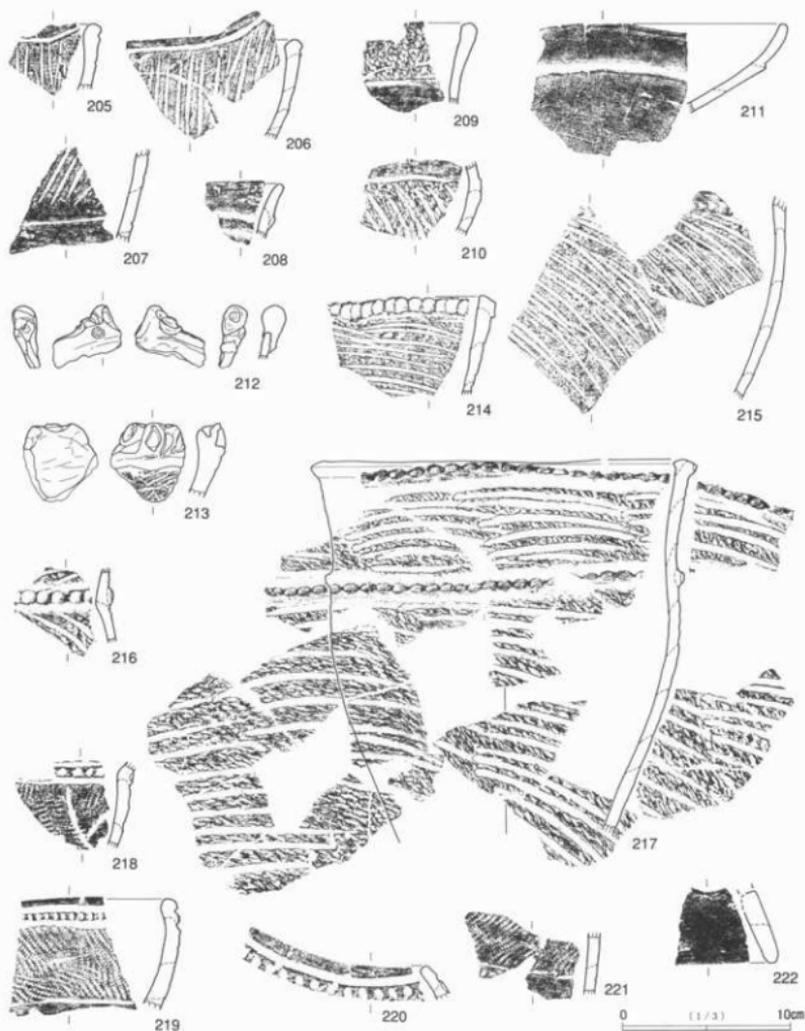
加曾利B式（第25図205～222，図版38・39）

後期の土器では最も量が多い。すべてB1式～B2式である。205～207は沈線のみで文様を描くもので，同一個体の可能性が高い。口唇部はやや肥厚し，波状縁である。単沈線で斜方向の平行線文を描く。208は外反する口縁で，口縁部直下には，断面が低い三角形を呈する隆帯を斜方向に施す。209・210は縄文と条線を組み合わせたもので，同一個体と考えられる。口唇部が肥厚する平縁で，口縁部は縄文のみ，胴部は縄文を地文とし，その上に単沈線による斜方向の条線を施す。211は平縁の浅鉢で，口唇部はやや肥厚



第24図 遺構外出土の縄文土器(1)

する。全面無文である。口縁部外面と内面全面が丁寧なミガキにより調整される。212は波状縁で、波頂部に小さな耳状の突起がつく。213は波状縁で、波頂部両側面と外面に細い環状の粘土紐を貼り付けた突起がつき、外面には上部を沈線で区画された縄文帯がめぐる。214～217は縄文と条線を組み合わせたものである。214は口唇部が肥厚する。口唇部外面にはやや密に指頭押捺が施され、指紋が残る。やや細い単沈線により横方向の条線が施される。内面は横ミガキにより調整される。215は胴部中で、縄文はやや



第25図 遺構外出土の縄文土器⑫

粗く、条線は太い単沈線で横ないし斜方向に施される。216は頸部で、外面に断面が蒲鉾状を呈する太い隆帯を貼り付け、外面にやや粗い指頭押捺を施す。地文は粗く、条線はやや太い単沈線で、口縁部は右上がり、胴部は右下がりに施される。217はSI-001・SK-010およびグリッドから出土した破片が接合したものである。口縁部は突帯状に肥厚し、外面にやや密な指頭押捺を施す。また頸部にはやや高い隆帯がめぐり、同様の指頭押捺が施される。口縁部、胴部共に縄文はやや粗く、条線は太い単沈線で、横方向に短く描かれる。内面は横ミガキにより丁寧に調整される。218・219は沈線と縄文を組み合わせたものである。218は頸部に上下を沈線で区画された棒状工具による楕円形の刺突帯がめぐり、胴部はやや細かい縄文を地文とし、やや太い沈線により文様を描くが、全容は不明である。219平縁である。口縁部直下には上下を沈線で区画された棒状工具による楕円形の刺突帯がめぐり、その下には下端を沈線で区画された縄文帯がめぐる。無文帯はミガキにより丁寧に調整される。220は強く内湾する口縁で、平縁である。口縁部には上部を沈線で区画された縄文帯がめぐるが、上部の区画沈線の直下には棒状工具による楕円形の刺突帯がめぐる。222は無文で、中位にやや大きな円形の透孔が穿たれるものである。異型台付土器等の脚部の可能性がある。内外面に共に丁寧なミガキにより調整される。

2. 土製品 (第26・27図, 図版40・41)

土器片鏝 (第26図1~22, 図版40)

すべて加曾利E式土器の破片を利用したもので、口縁部の18を除き、いずれも胴部と思われる。冒頭のⅡ群の分類基準にあてはめるならば、1・6・7・19・20がD類、2・3・9は懸垂文を施すC類、4・5・12・14・16はC類、8・17はB類、10・11・13・15・22は懸垂文を描くB類、18は横位連繫弧線文を描くB類、21はE類である。外周の調整は粗削のみでほとんど研磨されないもの(1・2・7・8・10・11・13・15・20~22)、研磨されるもの(3・5・6・9・12・14・16~19)、磨耗が顕著ではっきりしないもの(4)がある。また紐ズレの痕跡が認められるもの(6~8・11・12・14・15・18~21)もある。

土製円板 (第27図1~23, 図版40・41)

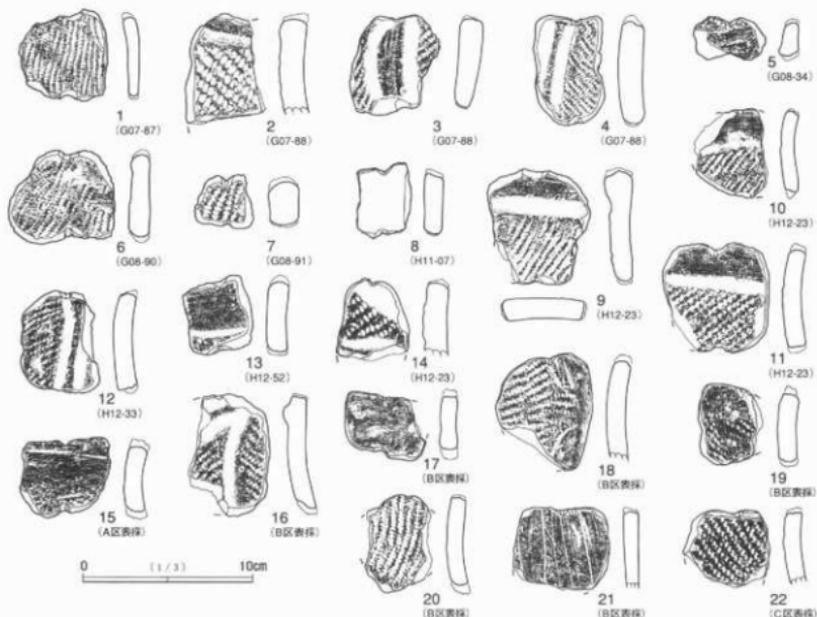
厳密には土器片製円盤と捉えるべきものである。11・13・17が底部破片であるほかは、胴部の破片を使用していると思われる。加曾利E式土器の土器片を利用したものについて、冒頭のⅡ群の分類基準にあてはめるならば、1・7・15・20・22がD類、3・23がC類、4・8・19は縄文が地文で懸垂文を施すC類、10・18は縄文を地文とするB類、14・16は縄文が地文で懸垂文を描くB類、5は縄文を地文とするB類で棒状工具による円形の刺突帯が並ぶもの、12はE類である。

9は堀之内式で条線のみを施すもの、2・6・21は縄文を地文とする加曾利B式で、2・6が単沈線による粗い条痕を施すもの、21が細い沈線で文様を描くものである。また5・7・14・16・17・20など、土器片鏝の素材もしくは未製品、あるいは断片と考えられるものも含む。外縁の調整は、粗削のみであり研磨されないもの(1・5~9・11~14・16・20・21・23)と、研磨されるもの(2~4・10・15・17~19・22)とがある。

3. 石器 (第28~30図, 図版78~80)

石鏝 (第28図1~6, 図版78)

1は平基に近い形状の凹基無茎鏝で、瑪瑙製である。全体的に調整は粗く、先端部を欠いていることから未製品で、製作途上で放棄されたのであろうか。2はチャート製の凹基無茎鏝で、脚部は短い。調整はやや細かいが外周に限られ、表裏に一次剥離面を残す。3は黒曜石製の凹基無茎鏝で、周辺の調整がやや

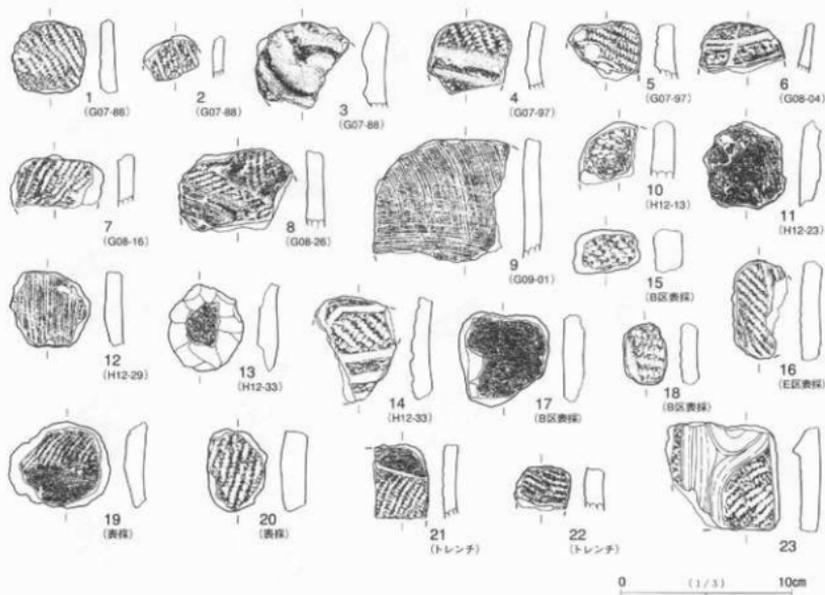


第26図 遺構外出土の土製品(1)

粗く、先端部と両脚部先端を欠くことから、未製品と考えられる。4はガラス質安山岩製の凹基無茎鎌で、脚部はやや長い。表裏共に調整は細かく、一次剥離面の残る部分は認められない。先端部を欠く。5は珪質頁岩製の凹基無茎鎌で、脚部は長い。表裏共に調整は細かく、一次剥離面が残る部分は認められない。先端部と右脚部端を欠く。6は珪質頁岩製の凹基無茎鎌で、脚部は長い。表裏共に調整は非常に細かく、一次剥離面の残る部分は認められない。先端部を欠く。

石斧 (第28図7～10, 図版79)

いずれも打製石斧である。7は安山岩製で比較的整った分銅形である。素材は扁平な礫と考えられ、表裏は原礫面を残すのが比較的丁寧に研磨される。挾部は粗削の後、片側のみ丁寧に研磨されるが、着柄痕の可能性もある。基部と刃部は基本的に片面からの剥離で、刃部が表面、基部が裏面から剥離される。刃部の先端には狭い端面が形成されており、横方向の擦痕が認められるが、使用痕か否かは不明である。8は珪質粘板岩製で、基部と刃部の一部を欠いており、本来は分銅形を呈するものと考えられる。表裏共に中央付近に一次剥離面を残し、挾部、刃部共にやや細かく剥離されているが、研磨されない。着柄痕、使用痕などと考えられる磨耗の痕跡は認められない。9はホルンフェルス製で、比較的整った台形を呈するが、かなり小型である。調整は外周部に限られており、表裏共に一次剥離面を残す。着柄痕、使用痕などは認められない。10は粘板岩製で、基部と刃部を欠くが、断面は楕円形で棒状の石斧と考えられる。



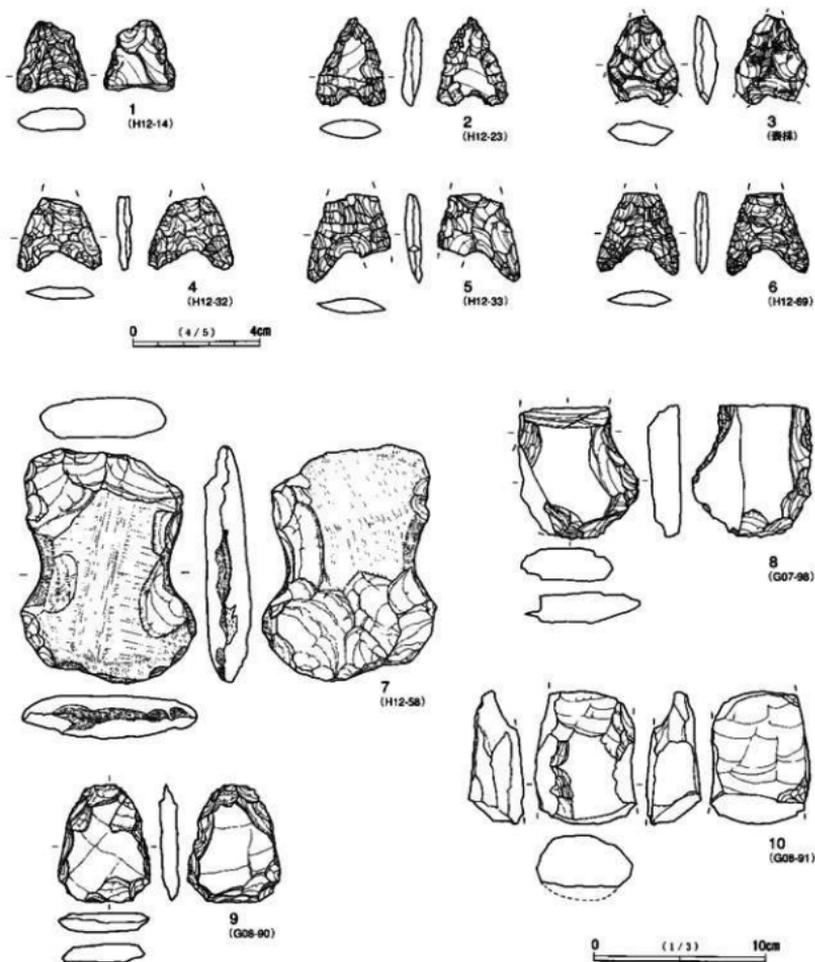
第27図 遺構外出土の土製品(2)

剥片 (第29図11~25, 図版78)

11~18は二次加工の痕跡が認められる剥片である。11は瑪璃製, 12~15が黒曜石製, 16・18がチャート製, 17はホルンフェルス製である。11は大型の横長剥片の片縁に片面から細かい剥離を試みている。石錐の未製品であろうか。12は微小な横長剥片の下縁に細かい剥離を試みている。13はやや小さな貝殻状剥片の下縁から側縁にかけて片面から細かい剥離を施す。削器の可能性はある。14は縦長剥片の全周から剥離を試みており, 石錐等の未製品の可能性がある。15は貝殻状剥片の下縁から側縁にかけての一部に微小な剥離を施す。16は柱状の縦長剥片の側縁に細かい調整が施されるもので, 石錐などとして使用された可能性がある。17は縦長剥片の側縁にやや大きな剥離を施しているが, 用途は不明である。18は三角形を呈する剥片の上側縁に片面から細かい剥離を施している。19~25は剥片である。19・21・24が黒曜石製, 20・23がチャート製, 22が細粒凝灰岩製, 25が瑪璃製である。

磨石 (第30図26~30, 図版79・80)

26は砂岩製で, 楕状の自然礫を使用している。左右両側縁と下端部に光沢と擦痕が認められるが, やや不明瞭である。27は流紋岩製で, 楕状の自然礫をそのまま使用しているものと考えられる。両側縁と端部に顕著な光沢と擦痕が認められる。また, 表面が大きく剥離しているが, その端部付近には磨耗が認められることから, 剥離は使用に伴う可能性がある。28は石英斑岩製で円板状の薄い自然礫をそのまま使用している。端部から右側縁に擦痕跡が認められる。29は小判形のやや扁平な自然礫をそのまま使用している。

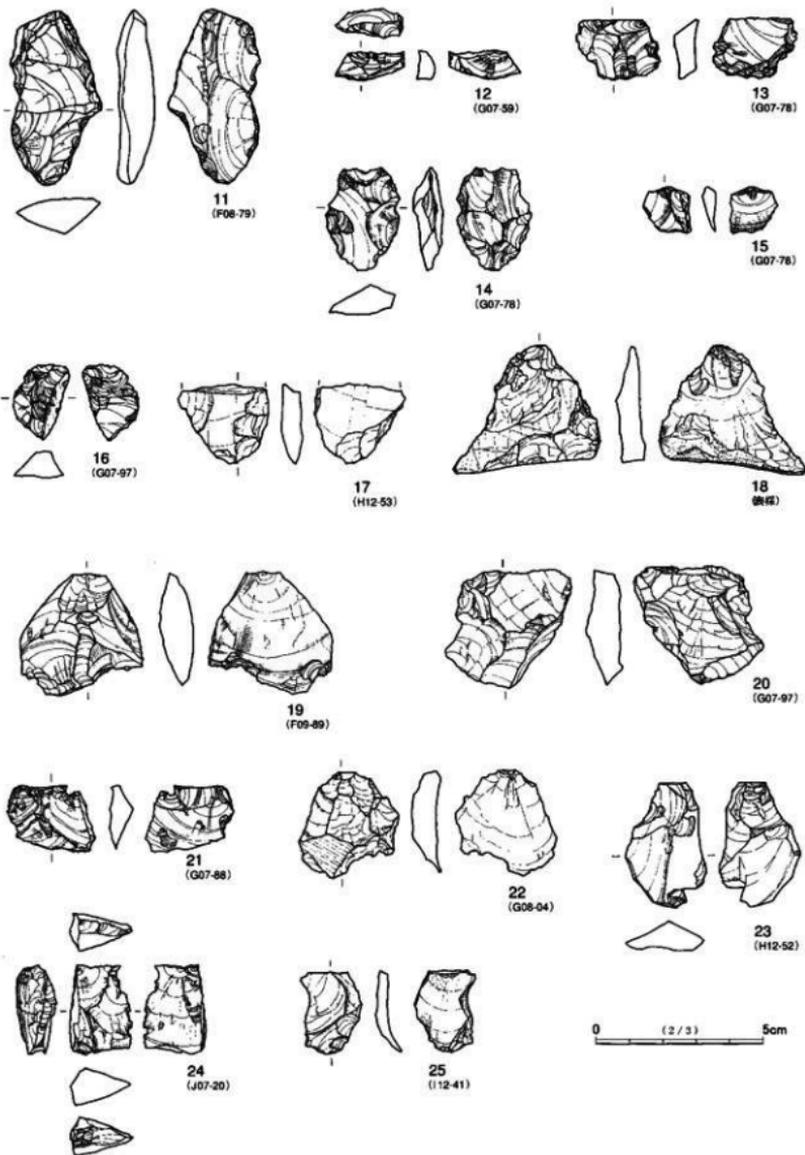


第28図 遺構外出土の石器(1)

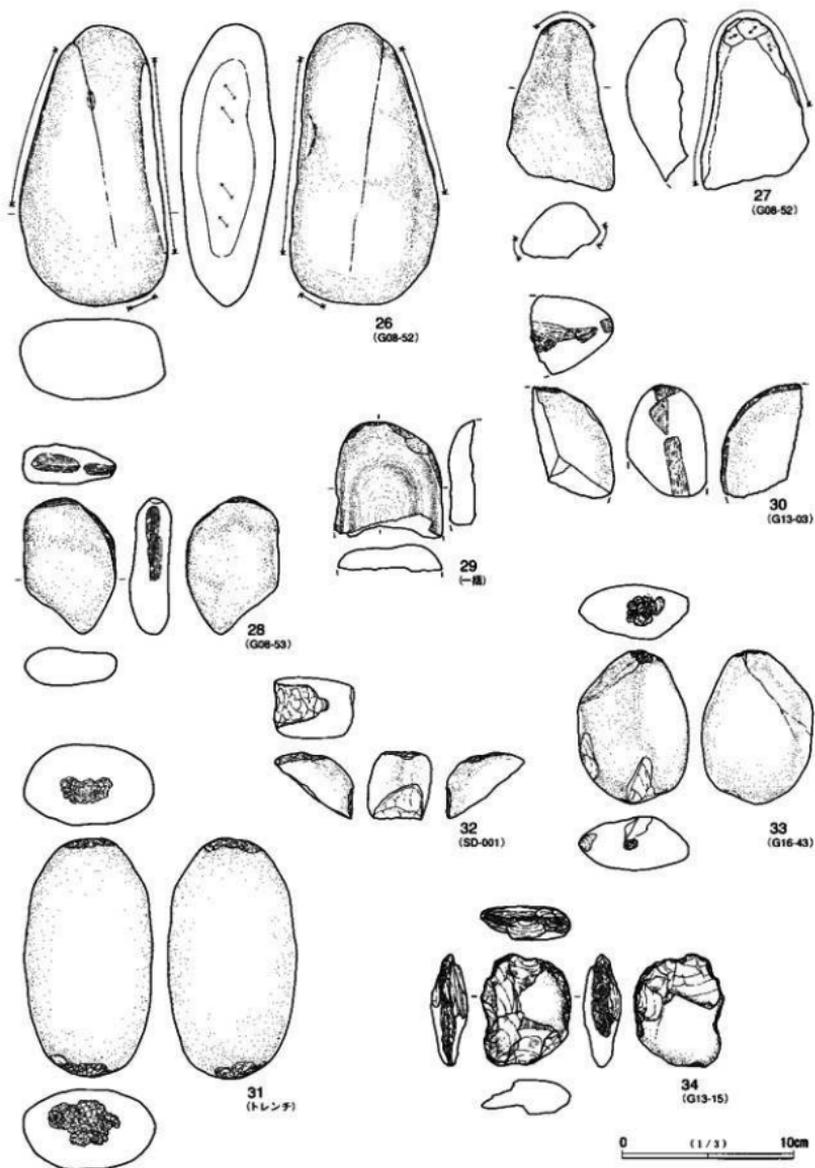
端部から両側面にやや不明瞭ながら擦痕が認められる。裏面は全面が剥離しているが、使用に伴う可能性がある。30は石英斑岩製で、円礫をそのまま使用したものである。端部から側縁にかけて比較的明瞭な擦痕が認められる。左側から下側の大部分を欠くが、使用に伴うものか否か不明である。

敲石 (第30図31~34, 図版80)

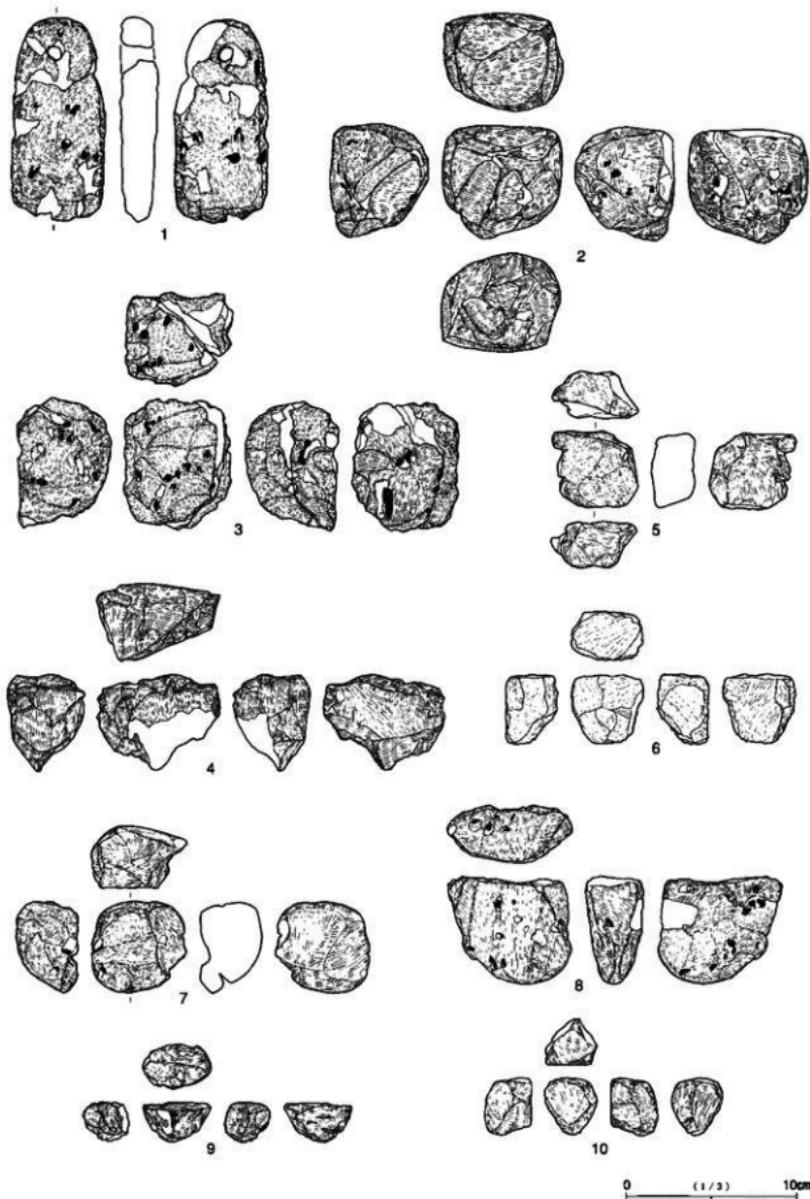
31は石英斑岩製で、外形断面共に楕円形の自然礫をそのまま使用している。上下両端に明瞭なツブレが



第29図 遺構外出土の石器(2)



第30図 遺構外出土の石器(3)



第31図 遺構外出土の石製品

認められる。32はおそらく楕円形の自然礫をそのまま使用しているものと考えられる。端部と側縁に比較的顕著なツブレと剥離が認められる。下側の大部分を欠く。33は砂岩製で、扁平でやや不整な楕円形の礫をそのまま使用している。上端部にはツブレ、下端部には剥離が認められるが、他に左側縁の一部も剥離している。34は頁岩製で、やや扁平な自然礫をそのまま使用している。上端、左側縁、下端が著しく剥離しており、石器製作の際に使用された可能性がある。

4. 石製品 (第31図, 図版83)

すべて軽石製品である。1は浮子で、やや扁平な撥形を呈する。全面が研磨されており、上部に棒状工具などによる穿孔が施される。2～10は砥石である。8がやや扁平であるほかはおおむね立体的な形状で、いずれも全面が使用されており、明瞭な面を形成するものが多い。2～4・7・8は中型～大型、5・6は中型、9・10は小型である。いずれも2の下面、3の右側面、4の下面、8の裏面など、それぞれの面の一部に棒状の物体を擦ったような、カール状の面が形成されている。

第2節 縄文時代早期の遺構

早期の遺構は炉穴のみである。調査区北半部を中心とするほぼ全域に点在しており、散漫な状態で検出されている。ただ、総数6基のうち、4基については調査以前の削平により火床部のみが残存しているもので、竪穴住居跡などの炉の可能性もあるが、出土遺物が皆無であることと、周囲に柱穴と考えられるピットが存在していないため、便宜的にここに掲載した。他の2基についても出土遺物は僅少であり、詳細な時期を推定するのは難しい。

1. 炉穴

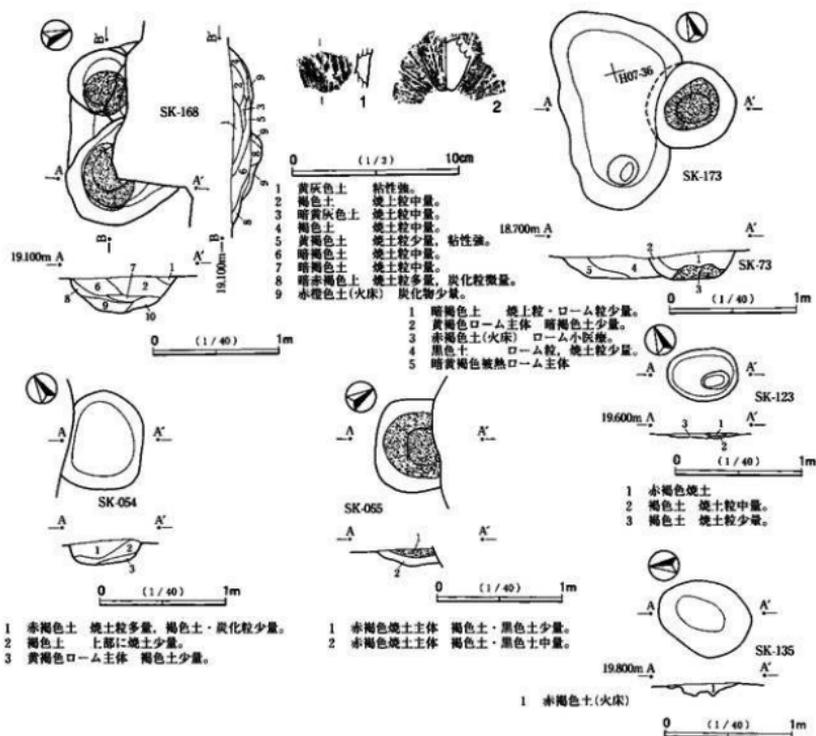
SK-168 (第32図, 図版6・41)

遺構 (6)区北部、I07グリッド北寄りに位置する。周囲には近接する時期の遺構はなく、重複する遺構もない。長軸長は上端部1.7m、下端部1.2mで、北側1/2程度を建物の基礎により破壊されているため、幅は不明である。平面形状は楕円形で、確認面からの深さは0.29m、断面形態は船底状である。長軸方向はN-71°-Wで、そのほぼ両端に2か所の燃焼部をもつ。覆土は上層から下層までかなり多くの焼土を含んでおり、特に下層において著しい。おおむね黄褐色ないし暗褐色土を中心とし、下層においては炭化粒を少量含む層が認められる。なお、堆積状況から南側燃焼部の廃絶後、ある程度埋没した段階で北側の燃焼部が使用されたことが窺える。

遺物 図示したものがすべてである。いずれも条痕文系土器であるが、詳細な時期は不明である。1は胴部中位で、内面には斜方向、外面には縦方向の粗い条痕が施される。2は底部で、尖底である。外面には縦方向の粗い条痕が施される。いずれも焼成はやや甘く、胎土に比較的多くの繊維を含む。

SK-173 (第32図, 図版6)

遺構 (8)調査区中央部、H07グリッドやや北寄りに位置する。周辺には近接する時期の遺構はなく、重複する遺構もない。遺構の規模は上端部1.7m×1.45m、下端部1.24m×0.75mである。本体部分は隅丸三角形の土坑だが、南東側に一部張り出す部分が認められ、確認面からの深さは0.21m、長軸方向はN-12.5°-Eである。燃焼部は張り出し部分に1か所のほか、本体部分の西壁に被熱したロームが認められることからこの周辺にも存在したものと考えられるが、範囲としては検出できなかった。覆土は黒色土・暗褐色土が主体である。焼土粒は本体部分の覆土には少なく、張り出し部分には非常に多い。堆積状況から本



第32図 炉 穴

体部分の廃絶後、ある程度埋没した段階で張り出し部が使用されたことが窺える。

遺物 出土しなかった。

SK-054 (第32図, 図版6)

遺構 (3)A区中央部、G08グリッド北西部に位置する。周囲には、SK-018、019などの小形円形土坑が存在するが、重複する遺構はない。全体の削平が著しく、燃焼部のみが遺存していた。遺構の規模は不明だが、燃焼部の規模は、長さが上端0.79m、下端が0.58m×0.48mで、西側の一部が建物基礎により破壊されているため、上端幅は不明である。遺構の形状や主軸方向は不明だが、燃焼部はN-35.5°-Eで、平面形状が隅丸方形を呈し、断面形態は浅い皿状である。覆土は暗褐色土を主体とし、特に上層部に多量の焼土と少量の炭化物を含むが、下層では少なく底面の被熱の度合いも弱い。中層の上部に焼土が集積する部分があり、若干埋没した状態で使用されていた可能性がある。

遺物 出土しなかった。

SK-055 (第32図, 図版6)

遺構 (3)A区南部，G09グリッド南西部に位置する。周囲には，SK-024，028，031，032などの楕円形土坑が存在するが，重複する遺構はない。全体の削平が著しく，燃焼部のみが遺存していた。遺構の規模は不明，北東部が建物の基礎により破壊されているため燃焼部の長さも不明だが，幅は上端が0.74m，下端が0.52mである。遺構の形状や軸方向は不明だが，燃焼部は平面形状が隅丸方形を呈し，断面形態は浅い皿状である。覆土は焼土を主体とする赤褐色土で，しまりは弱く，粘性はほとんどない。いずれも黒色土ないし褐色土を混入するが，下層にやや多い。底面はほとんど被熱していないことから，若干埋没した状態で使用されていた可能性が考えられる。

遺物 出土しなかった。

SK-123 (第32図，図版6)

遺構 (3)B区東部，I11グリッド北部に位置する。周囲にはいくつかの小ピットが存在するが，重複する遺構はない。全体の削平が著しく，燃焼部のみが遺存していた。遺構の規模，形状などは不明だが，燃焼部の規模は上端が0.56m×0.41m，下端が0.49m×0.32m，長軸方向がN-61°-Wで，平面形状は楕円形を呈し，断面形態は非常に浅い皿状である。覆土は焼土を主体とする赤褐色土で，しまりは弱く粘性はほとんどない。ただ，その直下に薄いながらも焼土を含む褐色土が認められ，底面はほとんど被熱していないことから，若干埋没した状態で使用されていた可能性が考えられる。

遺物 出土しなかった。

SK-135 (第32図，図版6)

遺構 (3)C区南東部，H13グリッド北西部に位置する。周辺には近接する時期の遺構はなく，重複する遺構もない。全体の削平が著しく，燃焼部のみが遺存していた。遺構の規模や形状は不明だが，燃焼部の規模は上端が0.74m×0.58m，下端が0.4m×0.23m，長軸方向はN-33°-Eで，平面形状は楕円形を呈し，断面形態は底面の荒れた皿状である。覆土はほとんど焼土のみからなる赤褐色土で，しまりは弱く粘性はない。底面はやや強く被熱している。

遺物 出土しなかった。

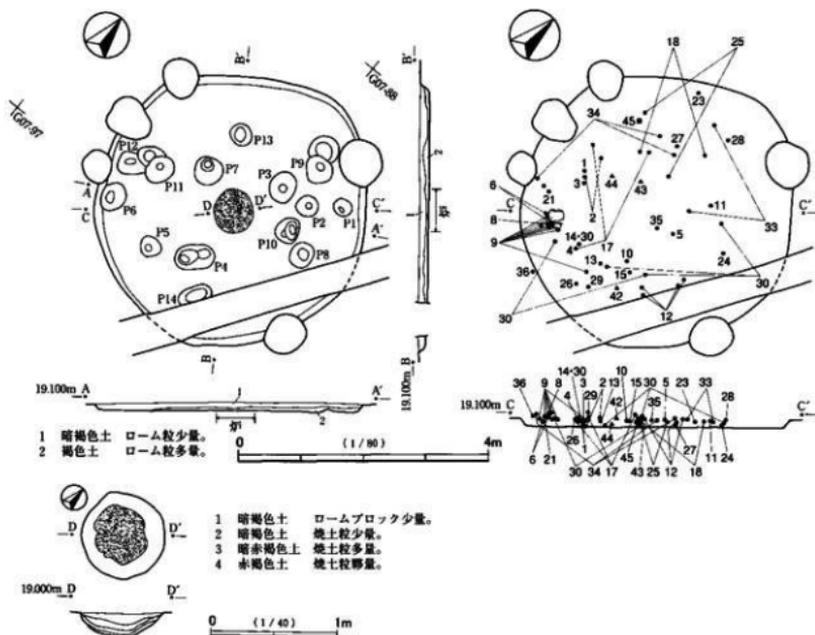
第3節 縄文時代中期の遺構

今回の調査範囲では主体となる時期の遺構である。(3)E区を除く全域から見つかっているが，全体的に北半部の密度がやや高い。ただ，全体的に建物の基礎などによる攪乱が激しく，以前の造成の際の削平も顕著であるため，状況の良好な遺構は少なく，すでに遺存していない遺構も多いものと考えられる。竪穴住居跡，小竪穴，土坑が検出された。

1. 竪穴住居跡

SI-001 (第33～37図，図版7，41～44・77～79)

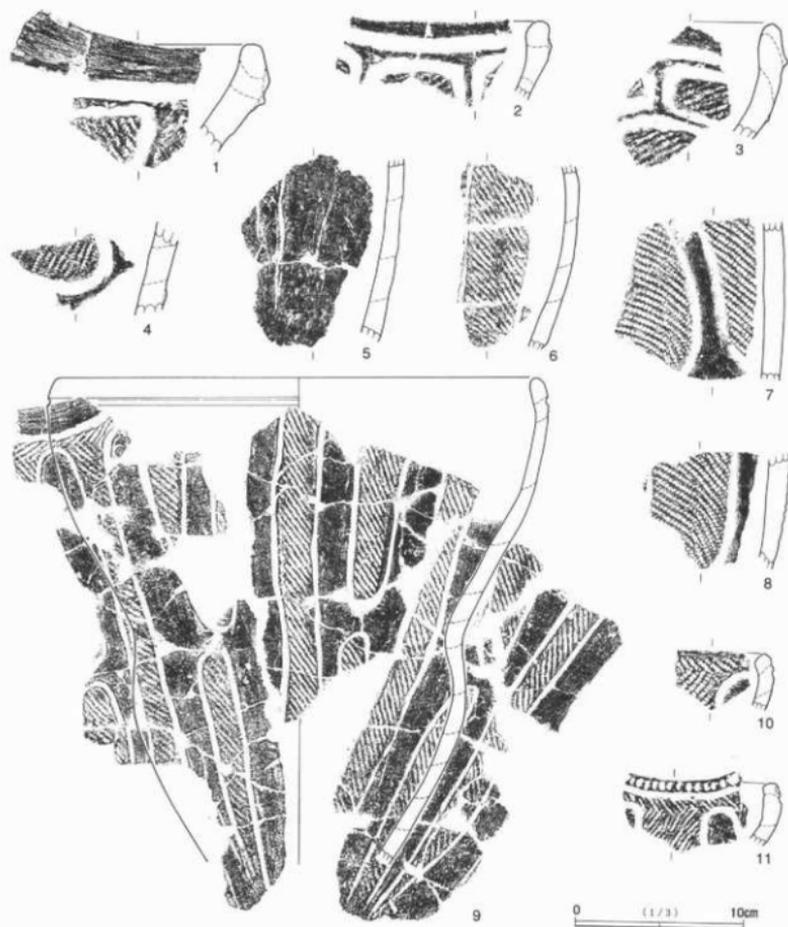
遺構 (3)A区北部，G07グリッド南東部付近に位置する。周囲にはSK-010，011などの円形土坑やSI-002が存在し，いくつかの小ピットと重複するが，そのいずれよりも古く，遺構の南東側の一部が建物の埋設管により破壊されている。遺構の規模は3.98m×4.08mで，平面形状はおおむね円形である。壁面は現状ではやや斜めに立ち上がっているが，深さが0.16m程度しかないため，はっきりしない。床面に硬化面は認められない。内部には多数のピットが認められるが，主柱穴はP13，P9，P16，P4，P11の計5基で，他のピットについては本遺構に伴うものか否か不明である。内区はP13を頂点とするやや横長な五角



第33図 SI-001(i)

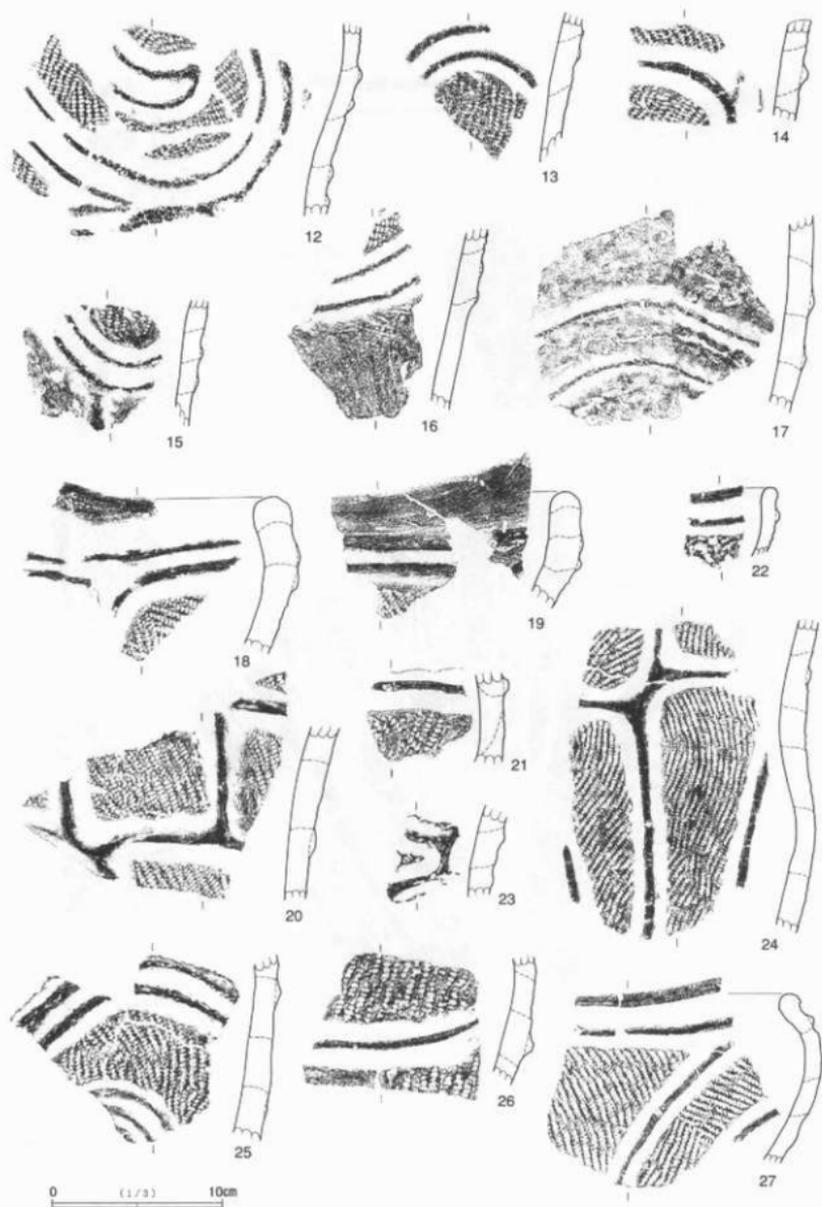
形配置で、規模は1.92m×1.9m～2.57m、主軸方向はN-38°-Wである。覆土は上層が暗褐色土、下層が褐色土で、いずれもローム粒を含む。自然堆積と考えられるが、浅いためはっきりしない。炉は遺構のほぼ中央に検出された。0.72m×0.66mの楕円形を呈する地床炉で、深さは0.18m、底面は非常によく焼けている。その他の付帯施設は検出されなかった。

遺物 縄文土器を中心に、石器、土製品が出土した。量は比較的多いが、床面から若干浮いた状態で出土している。1～36は縄文土器で、29が小形の壺である以外はすべて深鉢である。1～4はA類で、隆帯による区画文を配する。1・3は波状縁、2は平縁である。5～11はB類である。5・6は懸垂文、7・8は弧線文もしくは対向U字状文、9は平縁で沈線による対向U字状文と懸垂文が交互に施される。10・11は口縁部で、懸垂文もしくは横位連繋弧線文が施され、10は口縁端部まで縄文が施され、11は口縁部に棒状工具による刺突が施される。12～29はC類である。12～16は縄文を充填した渦巻文を配し、胎土から見て同一個体である。17は地文はない。18・19は波状縁で、縄文を充填した隆帯による意匠を配するもの、20・21は隆帯による意匠の内部に縄文を充填するもので、胎土からみて同一個体となる可能性が高い。22は平縁で、薄手であることから、比較的小形の個体であろう。23～26は渦巻状等の意匠内に縄文を充填するものであるが、26は懸垂文状の無文帯がありA類となる可能性がある。27は平縁で地文は縄文である。28は多重円状の弧文で、縄文を充填する。29は小形の壺で、渦巻き状の意匠を描くものと考えられる。30～32はD類である。30・31は平縁である。32は波状縁で、沈線の直下に棒状工具による刺突が1列めぐる。薄

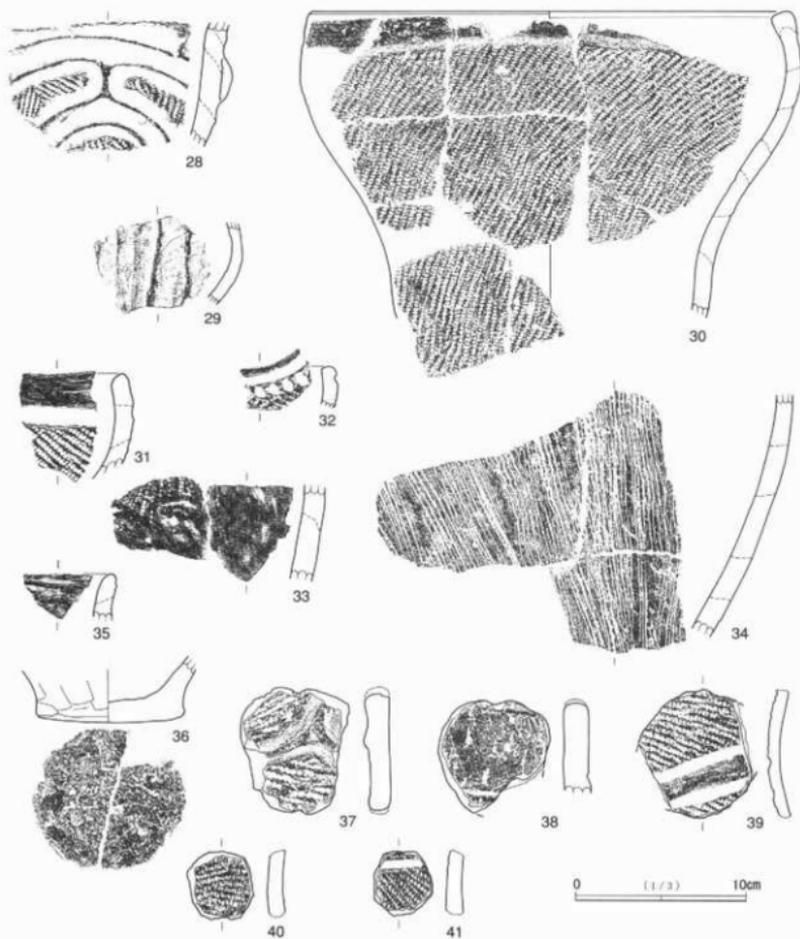


第34図 SI-001(2)

手であり、小形の個体であろう。33の破片下半は無文である。34はE類で、縦方向に7条単位の条線が施されるが、一部が波状となる。35は平縁、36の底面は比較的丁寧にナデられており、外周部は若干磨耗する。いずれも遺存部に文様は認められない。37~41は加曾利E式の破片を再利用した土製品である。37・38は土器片錘で、いずれも両端に鋭い切欠きを施すが、38は下半部を欠損する。39~41は土製円板で、周囲を粗割りしたのち軽く研磨する。42~45は石器である。42・43はいずれもチャート製の剥片である。42

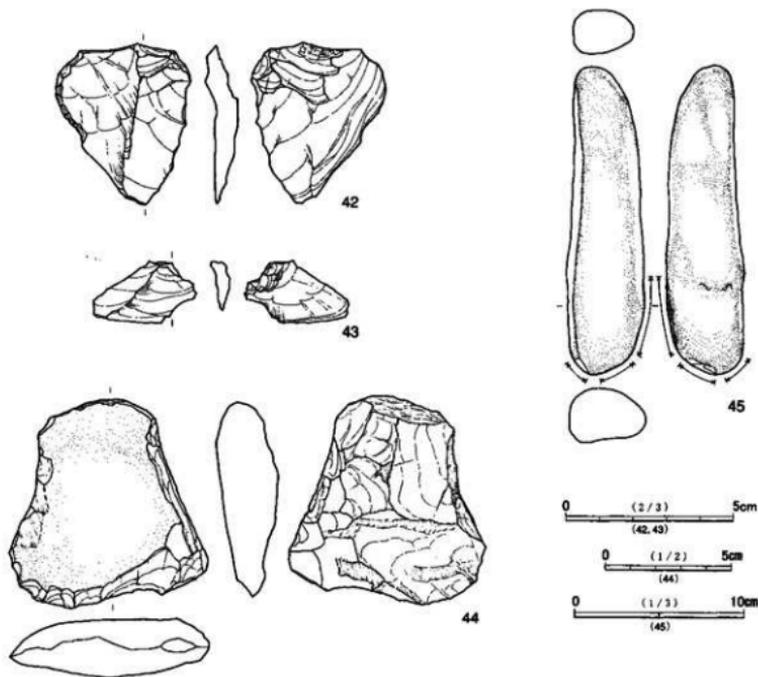


第35图 SI-001(3)



第36図 SI-001(4)

は左側縁上部に二次加工による細かい剥離が認められ、43は全体が被熱している。44は砂岩製の打製石斧で、撥形を呈する。原礫を粗削した大型剥片を調整しており、片面にのみ大きく自然面が残る。刃部は若干磨耗しており、使用に伴う剥離も認められるが、着柄痕はない。45は頁岩製の磨石で、棒状の自然礫の端面と下半部の側面を使用している。

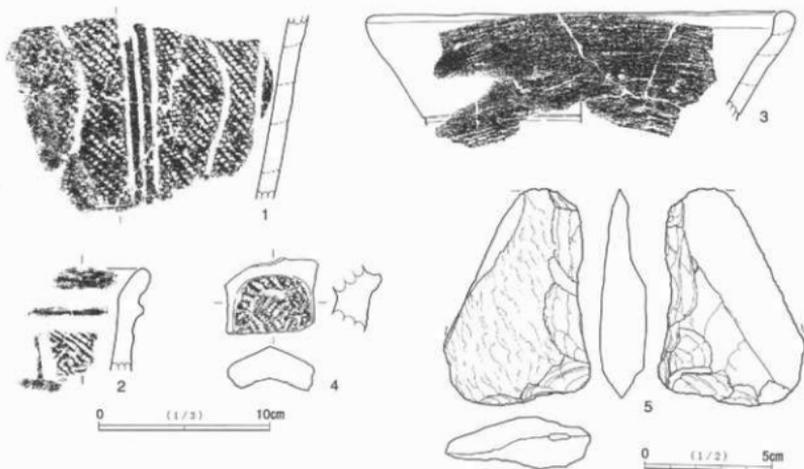
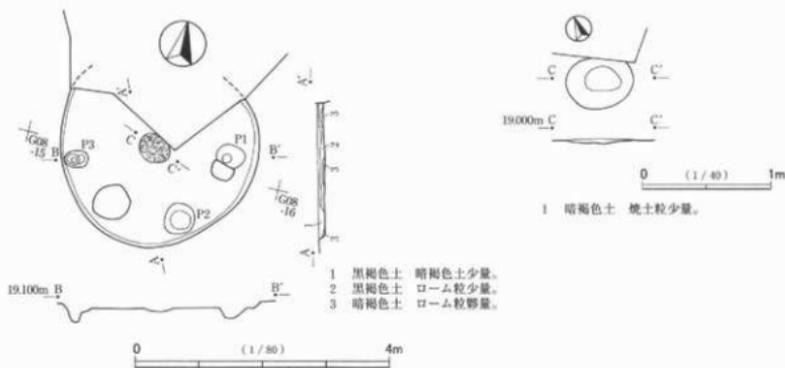


第37図 SI-001(5)

S I - 002 (第38図, 図版7, 44・79)

遺構 (3)A区北部, G08グリッド中央部北側に位置し, 周囲にはSK-024, 026などの円形土坑, SK-020などの小竪穴のほか, 竪穴住居であるSI-001が存在する。重複する遺構はないが, 北側の1/4が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は径3.2mで, 平面形状はおおむね円形である。壁面はやや斜めに立ち上がるが, 深さが0.08m程度しかないためはっきりしない。床面に硬化面は認められない。内部に認められるピットはP1, P2, P3で, 何れも支柱穴と考えられる。横長方形配置で, 北西隅の1か所を攪乱により欠く。主軸方向はN-18°-Eである。覆土は上層が黒褐色土, 下層は暗褐色土で, いずれもローム粒を含むが, 下層では非常に多い。自然堆積と考えられるが, 覆土が非常に薄いため断定できない。炉は遺構のほぼ中央で検出された。長さ0.53m, 攪乱により一部が破壊されているため幅は不明だが, 楕円形を呈する地床炉である。深さは0.04mと浅いが, 底面は比較的良好に焼けている。その他の付帯施設は検出されなかった。

遺物 縄文土器が中心であるが, 遺構の遺存状況が悪いため量は少なく, ほとんどは細片である。他に石器が1点出土している。1~4は縄文土器で, 1・2・4は深鉢, 3は壺もしくは無文で幅広の口縁部・頸部が外反する個体と考えられる。1は縄文を地文とするB類で, 3本単位の懸垂文間に蛇行沈線を描く。



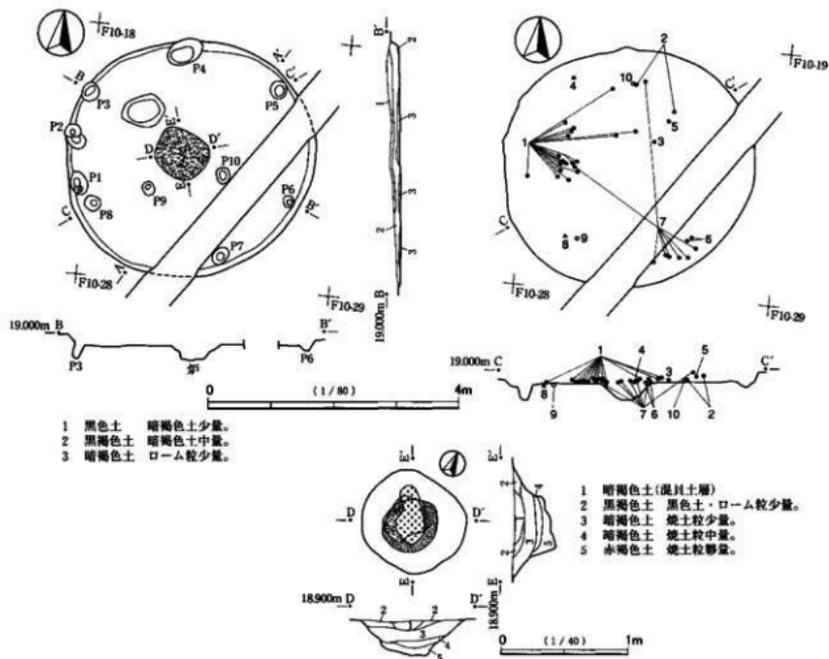
第38図 SI-002

2はA類の波状線と考えられ、隆帯による方形区画に縄文を充填する。3は無文で、やや強く直線的に開き、口縁端部のみがわずかに内湾する。横方向のミガキで調整され、下端には沈線が1条めぐる。4は橋状把手の上部で、縄文を充填する。5はホルンフェルス製の打製石斧である。大型の剥片を使用したもので、片面にのみ自然面が遺存する。撥形と考えられ、上部が節理面から欠損しているが、使用に伴うものか不明である。

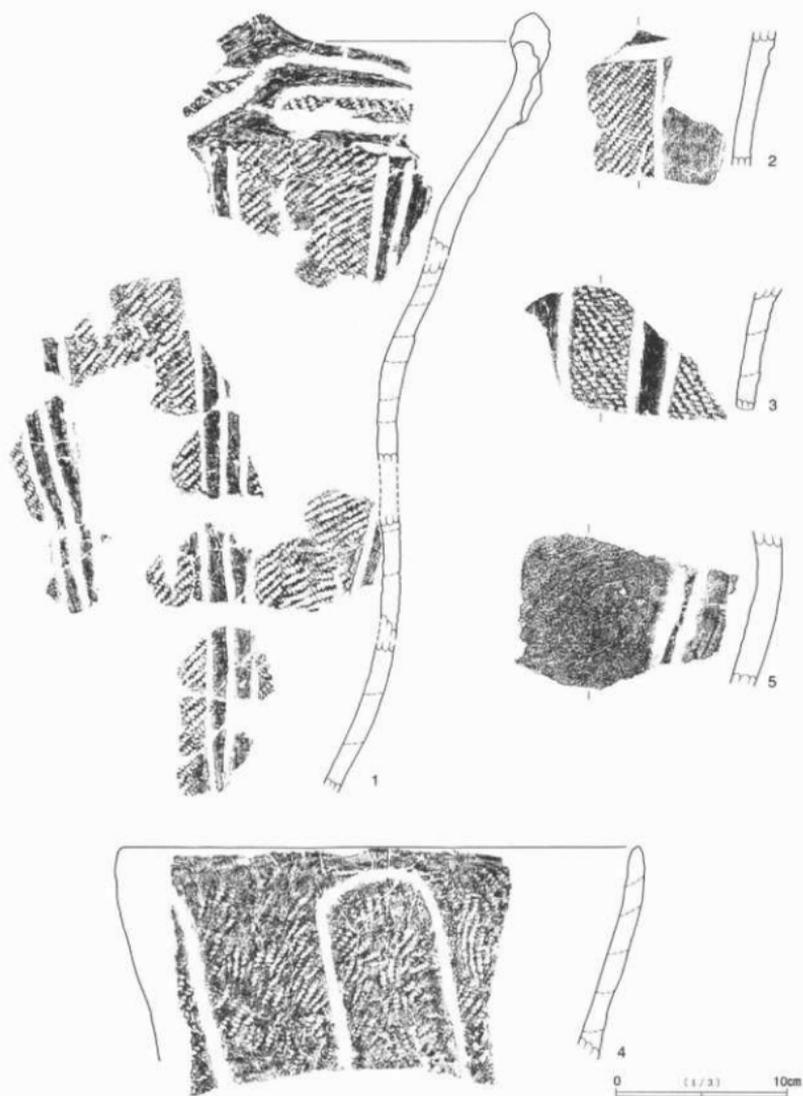
SI-003 (第39-41図, 図版7, 45・46・79・81)

遺構 (3)A区南部, F10グリッド北東部に位置する。周囲には円形土坑であるSK-060のほか, いくつかの小ピットが存在する。重複する遺構はないが, 南東側の一部が埋設管により破壊されている。遺構の規模は3.56m×3.78mで, 平面形状はほぼ円形だが東西方向にやや長い。壁面はやや斜めに立ち上がるが, 深さが0.2m程度であるためはっきりしない。床面には硬化面は認められない。内部にいくつか小ピットが認められるが, 調査段階では他のピットについても本遺構との新旧関係は把握されておらず, 検出状況からみて, 本遺構と無関係とはいえない。主柱穴はP3, P5, P6, P8の4本で, 整った横長方形配置である。規模は1.98m×3.01m~3.16mで, 主軸方向はN-5.0°-Wである。覆土は上層が黒色土ないし黒褐色土, 下層が暗褐色土で, 下層には若干のローム粒が混入する。おおむね自然堆積と考えられるが, 覆土が浅いためはっきりしない。炉はほぼ中央から検出された。一辺0.84mの隅丸方形に近い形状の地床炉で, 深さは0.34mあり, 底面は非常によく焼けている。また, 炉の覆土上層, 遺構の床面と同じ高さには, 混土貝層が検出されており, これについては第4節で後述する。

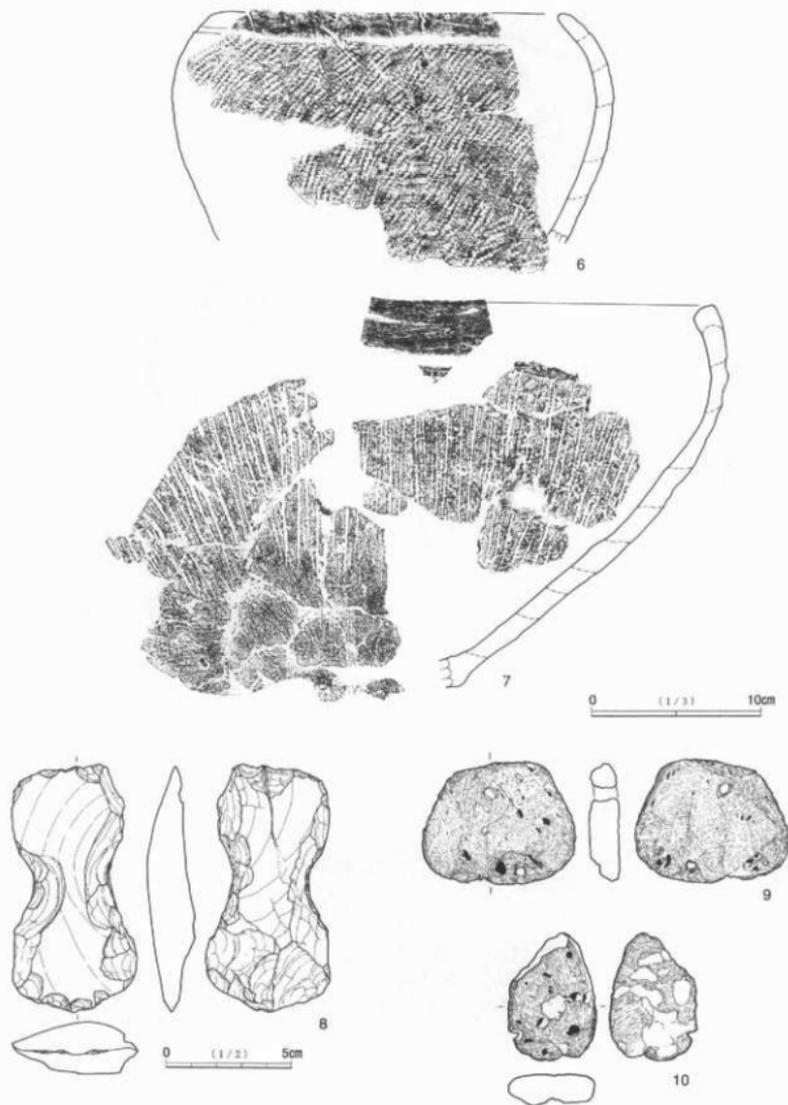
遺物 小破片が多い。縄文土器のほかは, 石器が1点, 軽石製品が2点出土している。1~7は縄文土器で, 1~6が深鉢, 7が鉢もしくは碗ともいうべきである。1・2はA類である。1は口縁部文様帯に縄



第39図 SI-003(1)



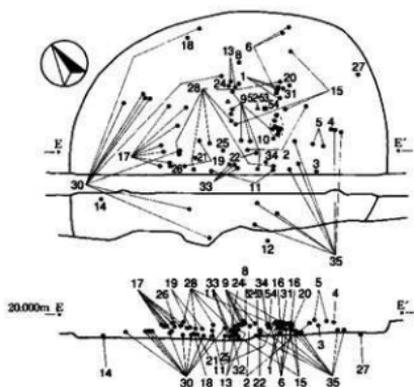
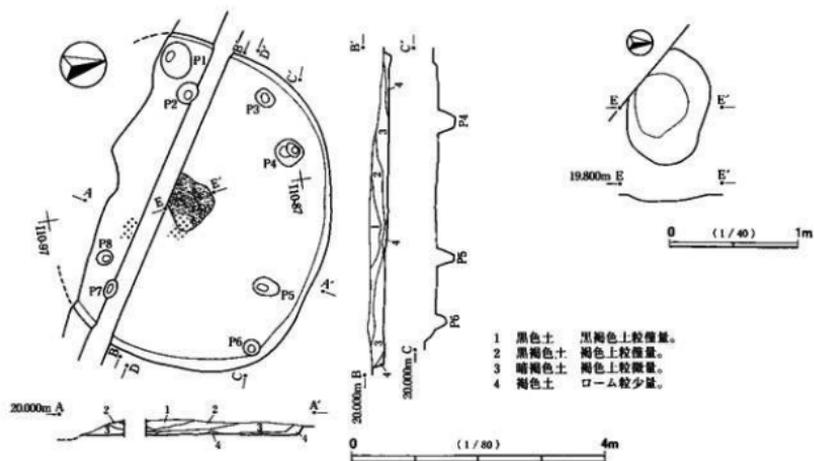
第40图 SI-003(2)



第41图 SI-003(3)

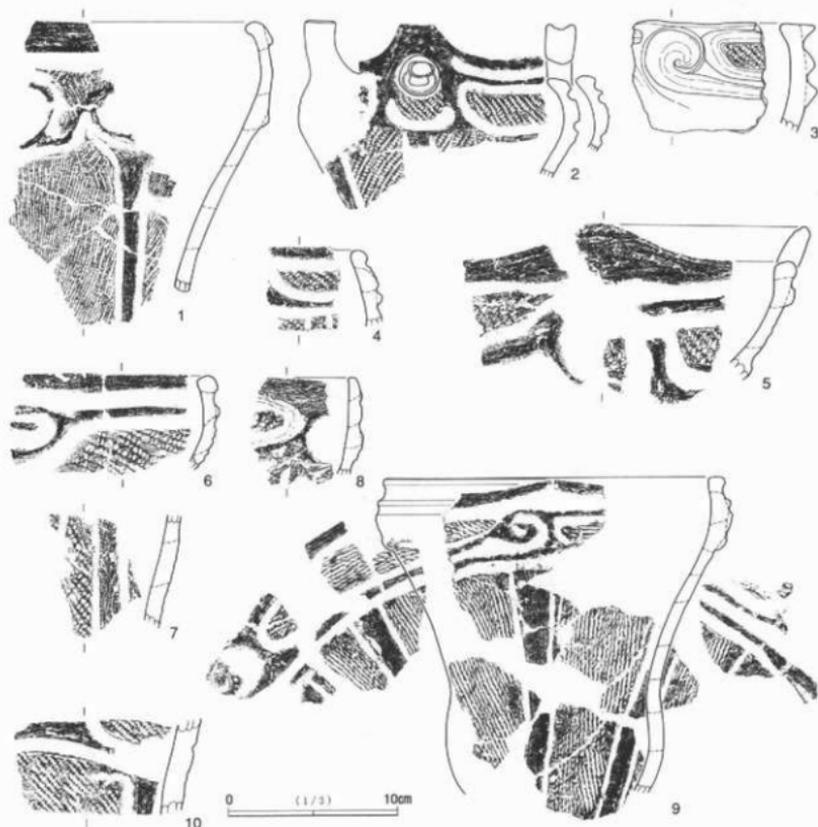
文を充填した隆帯による楕円区画やS字状の隆帯が施される。胴部文様帯は縄文が地文で、3条の沈線による懸垂文を施す。2は縄文が地文で、胴部に沈線による懸垂文を施す。3・4は縄文を地文とするB類である。4は懸垂文を描くものである。5はC類で、意匠は不明である。6は平縁のD類で、口縁部は強く内湾する。7は平縁のE類で、条線が施される。8は石器で、分銅形を呈するホルンフェルス製の打製石斧である。大型の剥片を素材としているが、自然面は遺存しない。刃部は若干磨耗しているが、着柄痕は認められない。9・10は軽石製品で、浮子と考えられるが、砥石の可能性もある。9は扁平な台形を呈し、上部中央には両面穿孔が1か所認められる。10は扁平な楕円状で、上部は欠損している。

SI-004 (第42~46図, 図版8, 47~50・76~78・80)



第42図 SI-004(1)

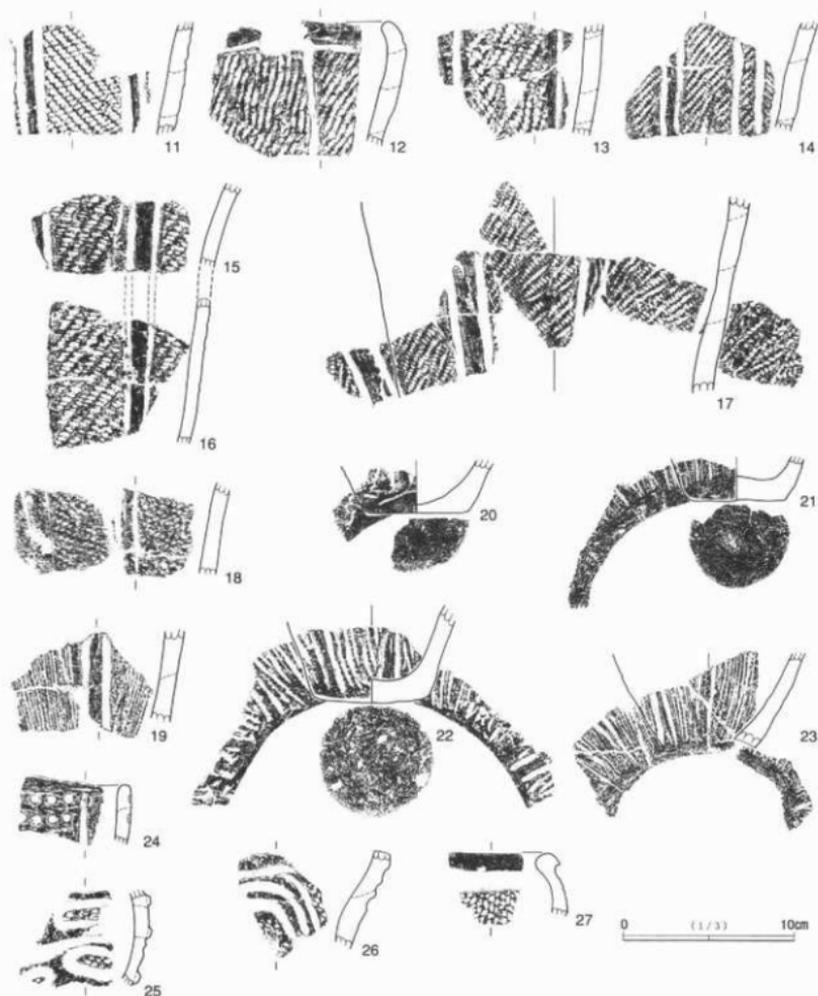
遺構 (3)B区東寄り、I 10グリッド南東部に位置する。周囲には円形土坑であるSK-091, 092, 119などがある。重複する遺構はないが、南側の1/3が建物の基礎と埋設管により破壊されている。遺構の規模は長軸5.36mで、平面形状は東西に長い楕円形である。深さは最大で0.3m、壁面は現状ではやや斜めに立ち上がる。床面には硬化面は認められない。内部には複数のピットが認められるが、支柱穴はP 2, P 4, P 5, P 7の4本と考えられる。他のものについては新旧関係については不明である。P 2を頂点とする五角形配置と考えられ、南西隅はおそらく攪乱内に存在していたのであろう。規模は3.05m×2.4m～約3.2mで、主軸方向はN-80.5°-Wである。覆土は上層が黒色土、中層が黒褐色土ないし暗褐色土、下層は褐色土で、下層にはローム粒が混入する。レンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積と考えられる。炉は内区の中央から検出された、0.92m×0.66mの楕円形を呈する地床炉である。深さは0.05mで、底面はよく焼けている。このほか炉の近辺の床面上から小規模な貝層が検出されているが、その内容につ



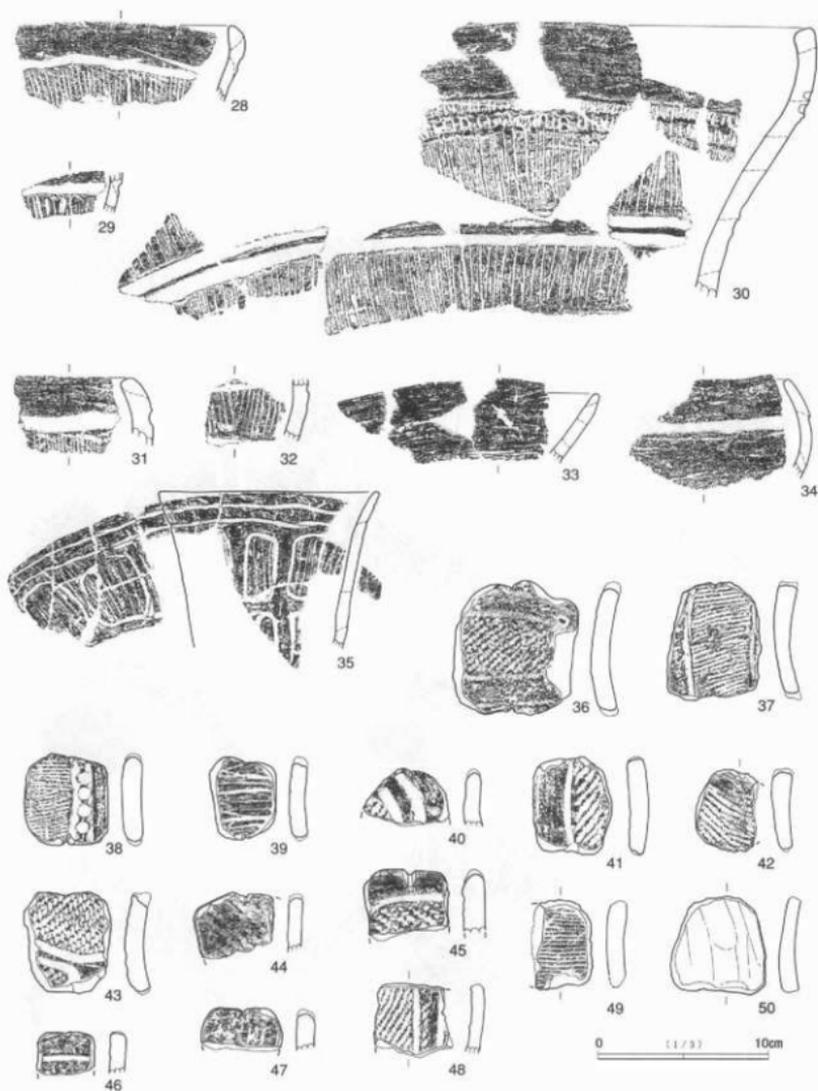
第43図 SI-004(2)

いては後述する（第4節）。

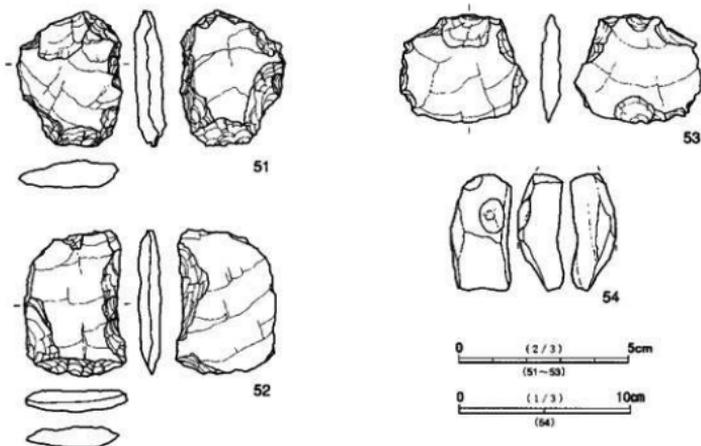
遺物 遺構の遺存状況の割に量は多い。ほとんどが縄文土器であるが土器片を再利用した土製品が多く、石器も若干出土している。多くが覆土中からの出土である。1～35は縄文土器で、いずれも深鉢である。1～10はA類であろう。1は平縁で、口縁部文様帯は横S状の隆帯による意匠を配し、縄文を充填する。胴部文様帯は縄文の地文に沈線による懸垂文を施し磨り消す。懸垂文の上部は口縁部文様までおよぶ。2



第44図 SI-004(3)



第45图 SI-004(4)



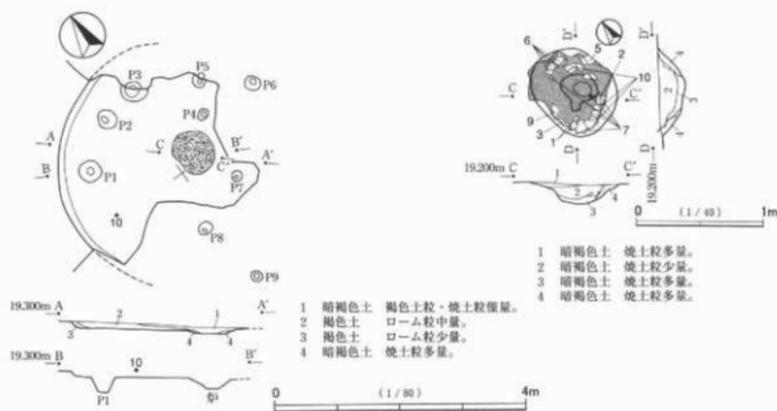
第46図 SI-004(5)

は小ぶりの深鉢で、波状線の波頂部に把手がつき、4単位と考えられる。縄文を地文とする。把手は正面から穿孔され、沈線でU字形の意匠を施す。把手部の直下にはU字形の短沈線が施され、区画外の地文を磨り消す。胴部文様帯は沈線による懸垂文を配し、磨り消す。3・4は平緑で、口縁部文様帯は隆帯により主文様を描き、3は主文様の間に渦巻状意匠を配する。3・4いずれも内部には縄文を充填する。胴部文様帯は4が縄文を地文として沈線により懸垂文を施すが、沈線間には磨り消される。5は波状緑で、口縁部文様帯は隆帯による主文様を配し、その内部に縄文を充填する。主文様間には渦巻状意匠を配するものと考えられる。6は平緑で、口縁部文様帯は隆帯による主文様が配され、内部に縄文を充填する。主文様間には渦巻状意匠を配するものと考えられる。7は6の胴部破片で、縄文の地文に沈線による懸垂文を施し、懸垂文内の地文を磨り消す。8は平緑で、口縁部文様帯は隆帯による楕円状の主文様を配するものと考えられ、内部には縄文を充填する。主文様間には太い沈線状のナゾリによる渦巻状文を施す。9は平緑のやや小ぶりの深鉢で、縄文を地文とする。口縁部文様帯は隆帯による主文様を配し、その間に隆帯による渦巻文を施す。胴部文様帯は沈線による懸垂文が施され、懸垂文内は地文を磨り消す。文様帯間に無文帯はないが、強いナゾリによる沈線状の区画がめぐる。10は縄文を地文とする。口縁部文様帯の意匠は不明だが、沈線による意匠外の地文を磨り消す。胴部文様帯は沈線により上端が獸手状となる懸垂文を施し、懸垂文内の地文を磨り消す。11~24はB類である。12は平緑で、地文は縄文で、縦方向の沈線により懸垂文を施すものと考えられるが、磨り消しは行われない。11・13~18は縄文を地文とし、沈線により懸垂文を施すもので、14を除いて懸垂文の内部の地文を磨り消す。なお、15・16は胎土から見て同一個体の可能性が高い。19・23は縦方向の細かい条線を地文とし、沈線による懸垂文を施すもので、懸垂文内の地文を磨り消す。20~22は底部である。いずれも底面はヘラナデにより丁寧に整形され、胴部下端部は若干磨削している。胴部には沈線による懸垂文が施されるが、地文のはっきりしない20を除き、いずれも地文は縦方向の条線である。24は平緑の口縁端部に2列以上の棒状工具による刺突をめぐらせ、沈線による懸垂文が

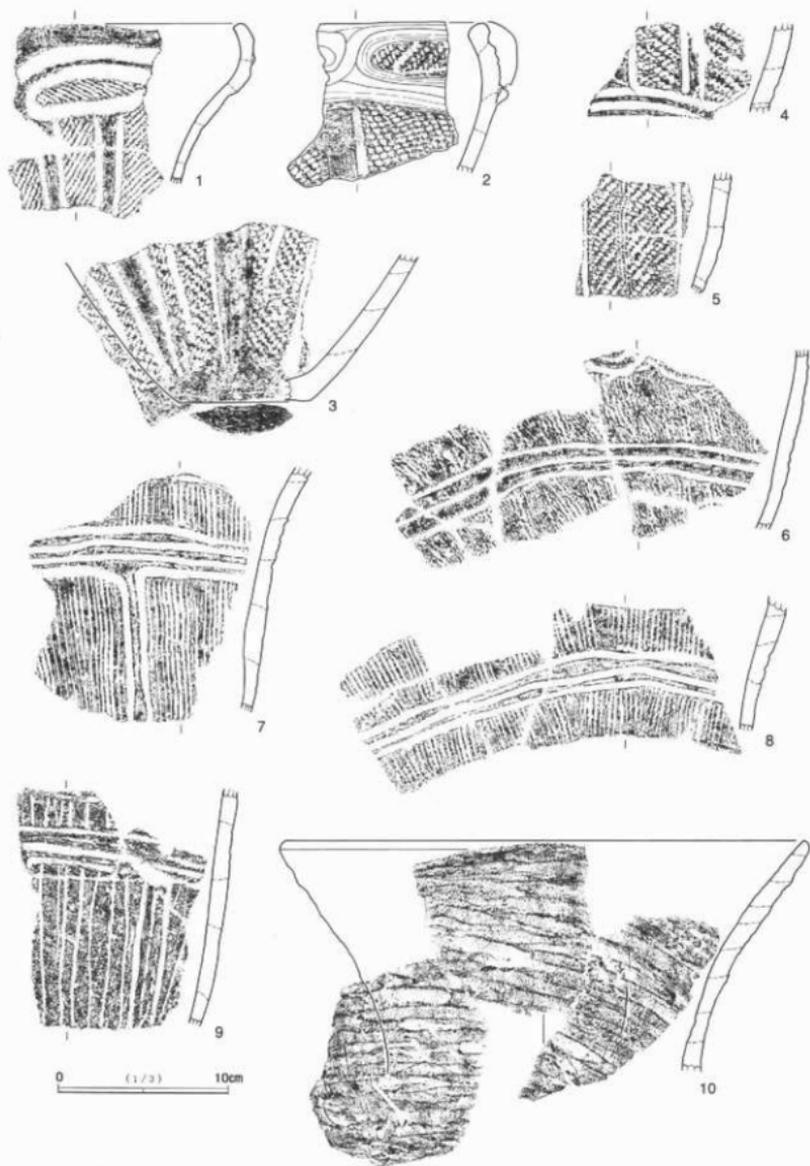
認められる。25・26はC類である。25は上下2段に隆帯による小楕円状区画を並べ、その間を波状の沈線を施し、区画内には縄文を充填する。26は縄文を地文とし、3条の隆帯により渦巻状もしくは円弧状の意匠を描くもので、地文の磨消は行われぬ。27は平縁で、口縁端部に深いナヅリがめぐり、胴部に縄文を施す。28～32はE類である。28・29・31は平縁でやや幅広い無文帯をもつ。このうち、28・29は胎土から見て同一個体の可能性が高い。30は平縁で、口縁下に櫛状工具による刺突を施した二重の沈線が施される。地文として縦方向の条線が充填される。32は胎土から見て30と同一個体であろう。33・34は無文の口縁である。いずれも平縁だが、33は強く開き、34は内湾する。いずれも口縁部下に沈線がめぐり、35は平縁の小形の深鉢で、口縁部に2条の沈線がめぐり、その下に沈線による方形区画が2段並び、縦方向の細かい条線が充填される。36～50は加曾利E式土器の破片を再利用した土製品で、36～47が土器片鏟、48～50が土製円板である。土器片鏟はおおむね切欠きは鋭く明瞭で、特に37・41・43を除き、外周の磨耗もしくは整形が顕著であるが、表面の紐ズレの痕跡は36・38を除き、非常に不明瞭である。土製円板は外周の整形が顕著である。48については上下を欠いた土器片鏟の可能性もある。51～54は石器である。51～53はホルンフェルス製の剥片である。51の右側縁、52の左側縁下端と右側縁及び下縁、53の左右側縁は二次的に剥離されている。なお、石材はSI-002もしくはSI-003出土の打製石斧に似ているが、接合しなかった。54は多孔質安山岩製の石皿の破片である。小破片であるため全容ははっきりしないが、上面のみが使用され、側面には蜂巣状の小穴が穿たれる。

SI-005 (第47・48図, 図版8, 50・51)

遺構 (3)B区中央付近, I10グリッド南西部に位置する。周囲にはいくつかの近接する時期の土坑が存在する。重複する遺構はないが、東・南・西側の大部分が建物の基礎により破壊されており、遺存状況は悪い。規模は不明だが、長軸4.0m程度で、平面形状は楕円形と考えられる。壁面は現状ではかなり緩やかに立ち上がっているが、覆土が深い場所でも0.12m程度と浅いため、はっきりしない。床面には硬化面は検出されなかった。内部にはいくつかの小ピットが認められるが、P1, P3, P6, P8が主柱穴で、



第47図 SI-005(1)



第48图 SI-005(2)

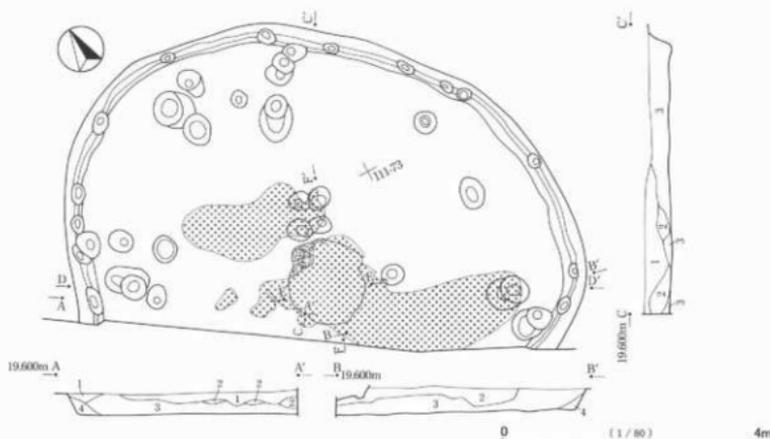
他のものについては本遺構に伴うか否か不明である。P 8を頂点とする逆五角形の配置と考えられ、規模は2.23m×1.96m～約3.46mで、主軸方向は、N-32°-Eである。覆土は上層が暗褐色土、下層は褐色土を主体とし、上層には焼土粒が少量、下層にはローム粒が混入する。覆土が薄いため、堆積状況にははっきりしないが、自然堆積の可能性が高い。炉はほぼ中央付近に検出された。0.72m×0.58mのやや不整な楕円形を呈する土器片閉炉である。深さは0.18mで、底面は非常によく焼けている。その他の付帯施設は検出されなかった。

遺物 遺存状況が悪いため覆土からの出土遺物は少ないが、炉からまとまって出土している。図示し得たのはすべて縄文土器の深鉢である。1・2は縄文を地文とするA類で、いずれも平縁である。1・2は口縁部文様帯は隆帯による楕円状区画を配するが、2は主文様間に渦巻状意匠を施す。胴部文様帯は沈線による懸垂文で、間隔が1は狭く、2は広い。いずれも懸垂文内の地文を磨り消す。3～9はB類で、地文は3～6が縄文、7～9は条線である。3・5は懸垂文を施し、地文を磨り消す。4は区画外の地文を磨り消す。6は3条の横沈線を施す。7・8は同一個体で、地文の条線は6条以上を単位とする。2条もしくは3条の横沈線が施される。9は地文の条線は1本描で粗いが、7と同様の文様構成となる。10はSI-004と遺構間接合した個体で、口縁はラッパ状に開き、横～斜方向の強いナデを装飾的に施す特異な土器である。

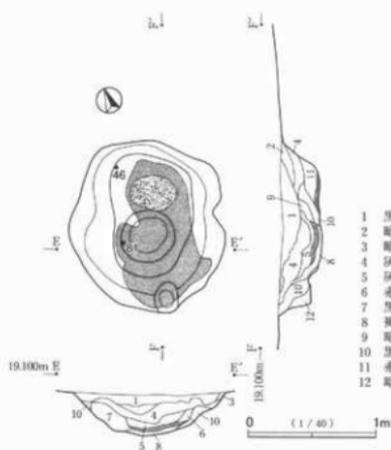
SI-006 (第49～60図、図版8・51～57・77～82)

遺構 (3)B区南部、I11グリッド南西部に位置し、周囲にはいくつかのピットが存在する。重複する遺構や攪乱はないが、南西側の1/3程度が調査区域外にかかっている。遺構の規模は推定8.0m×6.88mの卵形に近い不整楕円形を呈する。壁面は斜めに立ち上がる。多数のピットが認められるが、主柱穴はP 4、P 9、P 12、P 15の計4基で、他のものについても検出状況からみて何らかの形で本遺構と関係するものと考えられる。P 9を頂点とする六角形もしくは五角形の配置と推定され、規模は4.5m×5.12m前後で、主軸方向はN-35.5°-Eである。覆土は上層が黒褐色土、中層～下層は暗褐色土ないし褐色土で、典型的なレンズ状堆積を呈する。おおむね自然堆積の様相を示しているが、上層と中層の間に混土貝層がやや厚く認められる。貝層の内容については第4節で後述する。炉は遺構のほぼ中央に検出された。1.38m×1.24mのやや不整な楕円形を呈する地床炉で、深さは0.36mである。底面は非常によく焼けているが、やや北側に火床面と考えられるよく焼けた箇所が認められ、覆土の堆積状況からみても1回～2回のつくり替えが行われている可能性が高い。また覆土には焼土粒のほか、灰や炭化物が多く含まれている。そのほか、壁際には幅0.2m～0.3m、深さ0.1m程度の壁周溝が遺存部分の全周にわたって検出され、壁周溝内にはやや不規則な間隔ながら、壁柱穴が検出されている。床面の硬化部分は検出されなかった。

遺物 遺構の一部が調査区域外にかかっているとはいえ、本遺跡の堅穴住居跡としては覆土が比較的厚く攪乱もないため非常に量は多い。ほとんどは土器だが石器も認められ、特に軽石製品を多量出土することが特筆される。平面的には散漫な出土状況であるが、軽石が貝層の周辺に集中する傾向が強く、ほとんどが覆土中層からの出土である。貝の投棄と前後して一括で遺棄された可能性がある。1～84は縄文土器である。1～24はA類で、地文は多くが縄文であるが、9・23・24は不明である。1は床面直上から横位で出土した個体である。口縁は平縁で、口縁部文様帯は、隆帯による渦巻状意匠と、その間の楕円状区画をもってひとつの単位となっている。胴部文様帯との間はナヅリにより画され、無文帯を欠く。胴部文様帯には沈線による懸垂文が10単位程度施されるが、口縁部文様の単位とは運動しない。懸垂文内の地文を磨



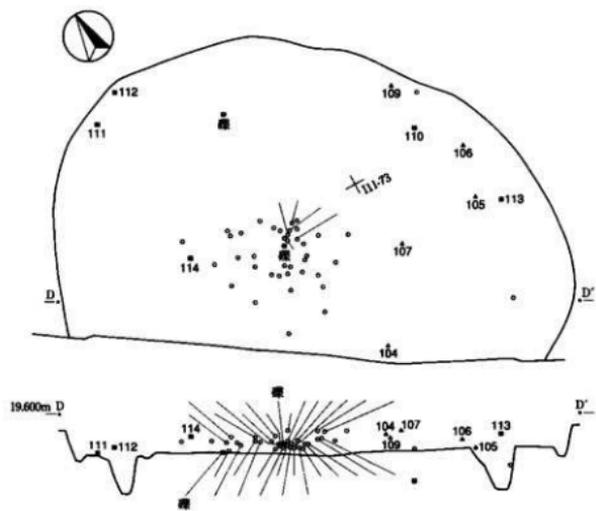
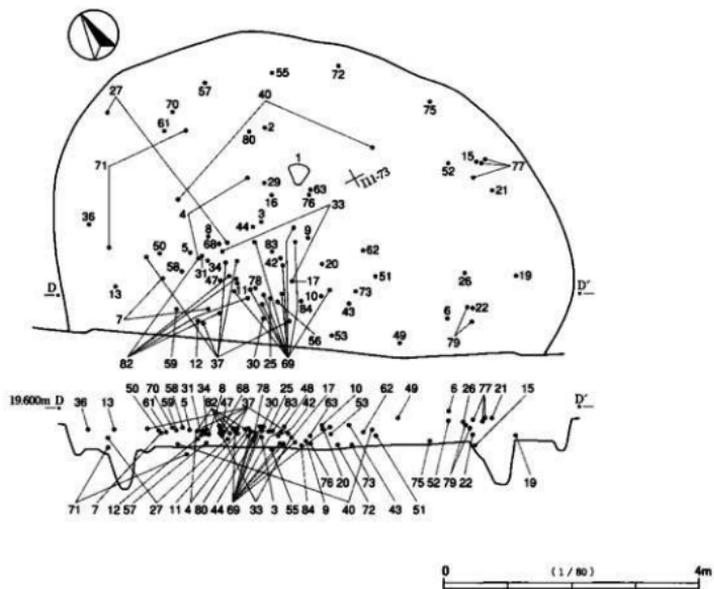
- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土(混土貝層)
- 3 暗褐色土 ローム粒少量
- 4 褐色土 ローム粒微量



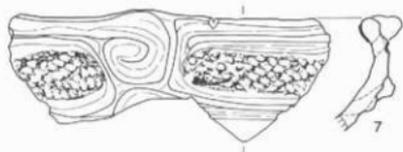
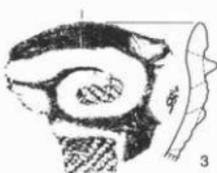
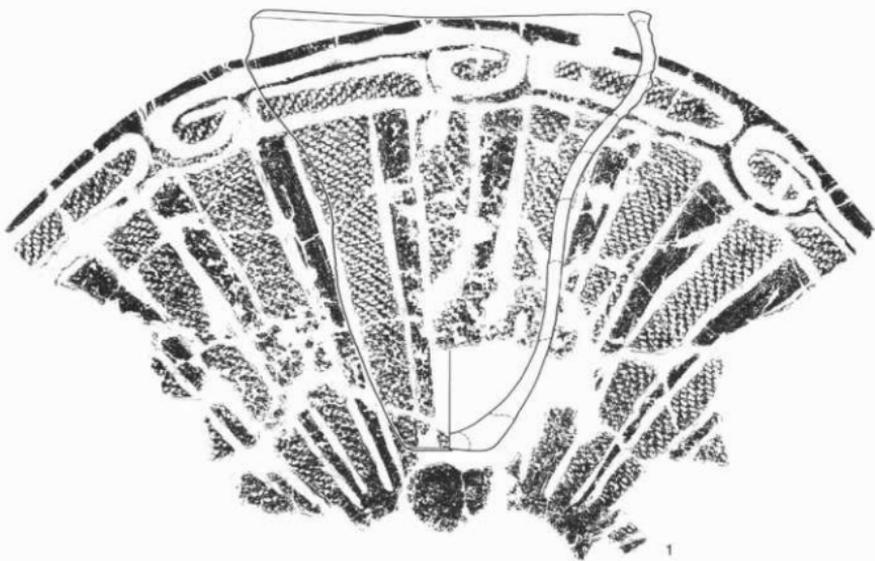
- 1 黒褐色土 下部に灰層が散在。
- 2 暗灰褐色土 灰・焼土粒少量。
- 3 暗褐色土 ローム粒少量、焼土粒微量。
- 4 灰褐色土(灰層) 下部に焼土粒少量。
- 5 灰赤色土(灰層) 焼土粒多量。
- 6 赤褐色土 焼土層、灰多量。
- 7 黒褐色土 焼土粒中量、灰少量。
- 8 暗灰色土(灰層)
- 9 暗赤灰色土(灰層) 焼土粒多量。
- 10 黒褐色土 焼土粒微量。
- 11 赤灰色土(灰層) 焼土粒少量。
- 12 暗褐色被熱ローム しまりなし。

第49図 SI-006(1)

り消す。底面は平坦でヘラナデにより丁寧に調整され、胴部下端は若干磨耗している。2・3・8が波状緑、7は平緑で、無文帯は3・8で顕著であるほかは不明瞭である。7・8については胴部文様帯は遺存しておらず、文様帯間の無文帯が明瞭である。5・6は懸垂文を施す胴部文様帯で、地文を磨り消す。口縁部文様帯は遺存しないが、文様帯間の無文帯を欠くようである。9は口縁部文様帯の隆帯による渦巻状意匠の破片である。10は平緑で、口縁部文様帯は隆帯による意匠と考えられる。11・12は波状緑で、口縁部文様帯は隆帯による渦巻状意匠である。13は平緑で、口縁部文様帯に沈線による楕円状区画を配するもので、区画外の地文を磨り消す。14~24は口縁部に隆帯による区画を施すものであるが、14~22・24が情



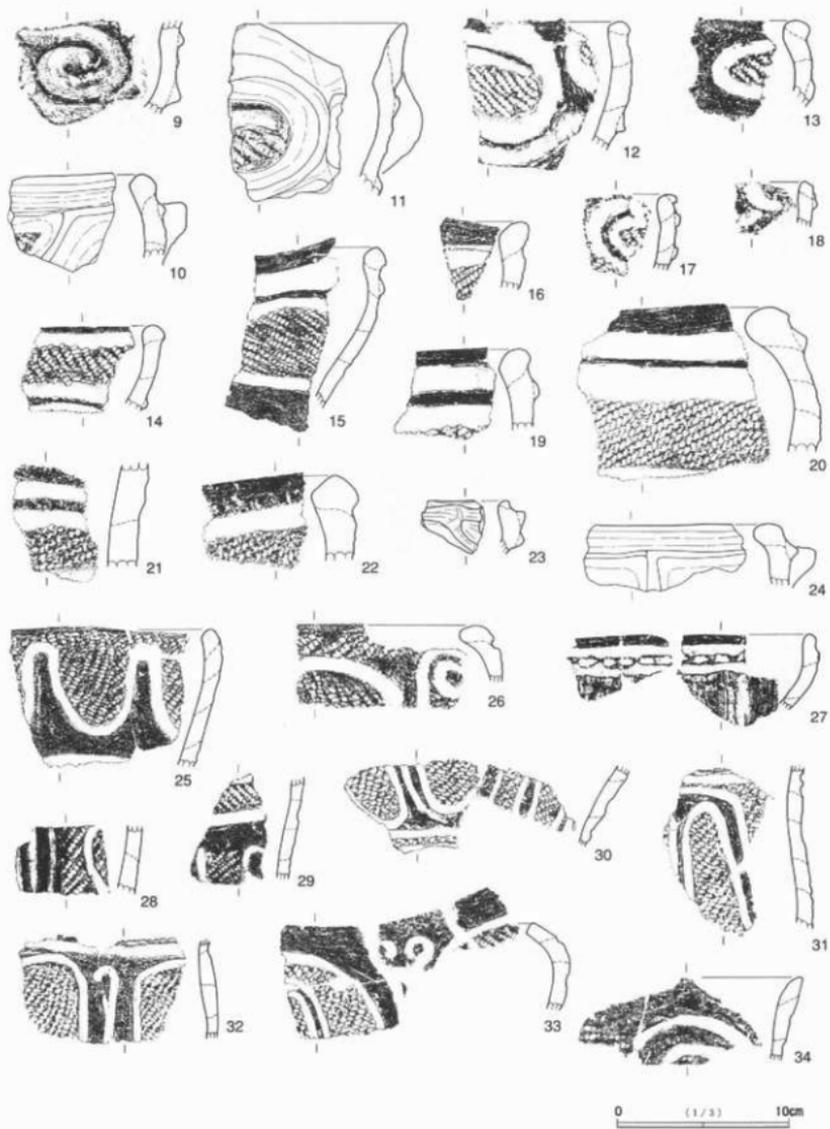
第50图 SI-006(2)



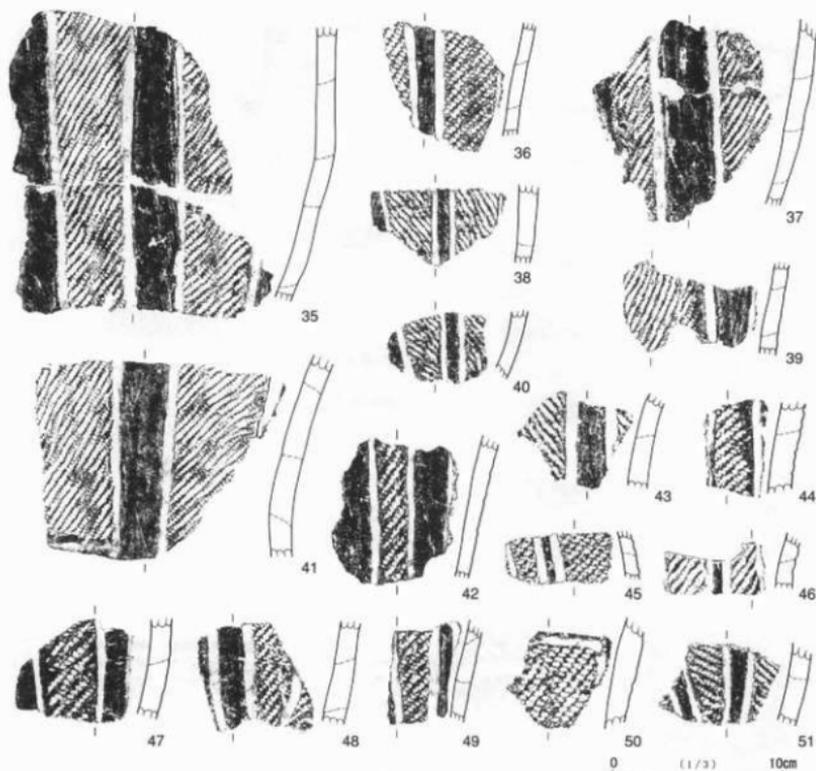
0 (1/3) 10cm

第51图 SI-006(3)

円状で、15・16が波状線であるほかはいずれも平線である。25～59はB類で、27が条線を地文とするほかは縄文を地文とするが、59は不明である。25は平線で、横位連繫弧線文を施し、区画外の地文を磨り消す。また、口縁部下端に横位の沈線が施され、上下の文様帯を区画しているものと考えられる。26は平線で、縦長の楕円状区画を配し、区画間には上部が厥手状となる縦方向の単沈線を加える。区画内の地文は磨り消されない。27は平線で、口唇部直下に2条の横沈線が施され、間に同一工具による刺突を施す。以下には懸垂文が施され、区画内の地文を磨り消す。28は懸垂文で、区画内の地文を磨り消し、1条以上の単沈線が追加されるが、区画外にも波状沈線が施される。29は上半部が横沈線による区画、下半部は端部が厥手状となる縦沈線による懸垂文を施し、文様帯間は磨消による無文帯となっており、A類の可能性もある。30～33は縦長の楕円状区画を基本とする。30は懸垂文と横位連繫弧線文がそれぞれ2個ずつの単位となっており、区画外の地文を磨り消す。楕円区画間には縦単沈線が追加されるが、懸垂文間には追加されない。また下部には横沈線が2条以上施され、上下の文様帯を区画しているものと考えられる。31は大きな方形区画内に2個以上の縦方向の楕円状区画が配されるもので、方形区画内の地文は楕円状区画内を除き、磨り消される。これも上部に横沈線が施されており、上下の文様帯を区画する。上部については遺存しないが、横位連繫弧線文と考えられる。32は縦楕円状区画間には端部が厥手状となる縦沈線を加え、区画外の地文を磨り消す。薄手で丁寧なミガキにより調整されていることから、深鉢以外の器種の可能性が高い。33は地文を磨り消す。また区画間の上部には両端が厥手状の半弧状沈線を描く。34は無文帯が明瞭な波状線で、楕円状区画を配するが、全体の構成は不明である。35～49・51～54は懸垂文を施す胴部で、A類の可能性もある。いずれも区画外の地文を磨り消し、53は区画外に縦単沈線を加える。また52は上部が研磨され、53は内外面共に二次的に被熱している。35と37、38と40は同一個体と考えられる。50は方形区画が配され、区画外の地文を磨り消す、全体の構成は不明である。55・56は平線で、横方向の区画を配するものである。55は区画内に半截竹管による刺突を2列並べ、胴部には波状沈線を描くものと思われるが、強く二次的に被熱しており磨耗が著しいため不明である。56は区画内に棒状工具による刺突列を施す。57・58は口縁部が僅かに開いて直立するものである。57は平線で地文はなく、口縁部に太い棒状工具による刺突を並べ、直下を横沈線で区画している。58は波状線で、縄文を地文とし、口縁部には無文帯をもつ。直下には棒状工具による刺突を2列並べ、方形区画を配し、区画外の地文を磨り消す。59は楕円状区画内に棒状工具による刺突を2列並べるもので、地文はない。60～67はC類で、65・66以外は縄文を地文とする。60～62・64は渦巻状意匠を配するもの、63は縦方形区画を配するものである。65・66は平線で、口縁部に平行区画を配し、内部に棒状工具による刺突を並べるもので、胎土から見て同一個体の可能性が高い。67は懸垂文を施す。68～82はE類である。68～78は口唇部が遺存するものはすべて平線で、68を除いて強く内湾する。幅広い無文帯が沈線により画されるものである。地文はいずれも5条～7条単位で細密に施されているが、74のみやや粗く、3条単位である。なお、70と71は胎土から見て同一個体の可能性が高く、75はSK-073覆土出土破片と遺構間接合した。79はやや粗い条線を地文としており、単位は1～2条である。上端部は研磨されており、疑口縁と思われる。80は平線で、沈線による横位連繫弧線文が配され、区画外の地文を磨り消す。81は突起をもつ波状線で、炉から出土した。破片下端から細く粗い条線が施される。82は平線で緩やかに内湾する。口縁部には3本の沈線による波状区画が配され、区画内には棒状工具による刺突が並ぶ。条線は5条単位である。83は開きながら直線的に立ち上がる無文の口縁である。84は底面がヘラナアにより丁寧に調整され、胴部下端は僅かに磨耗する。85～99は加曾利E式土器の破片を再利用

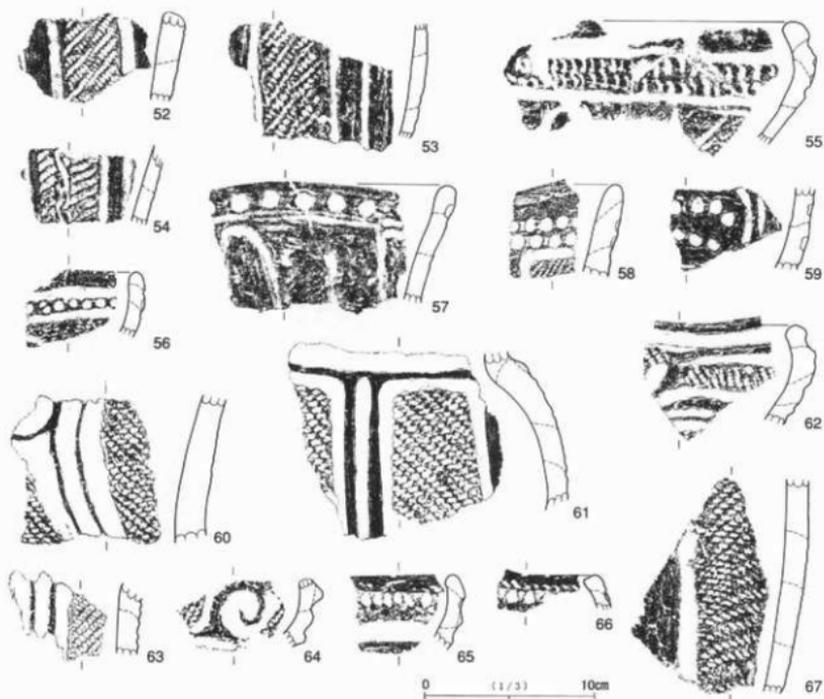


第52圖 SI-006(4)



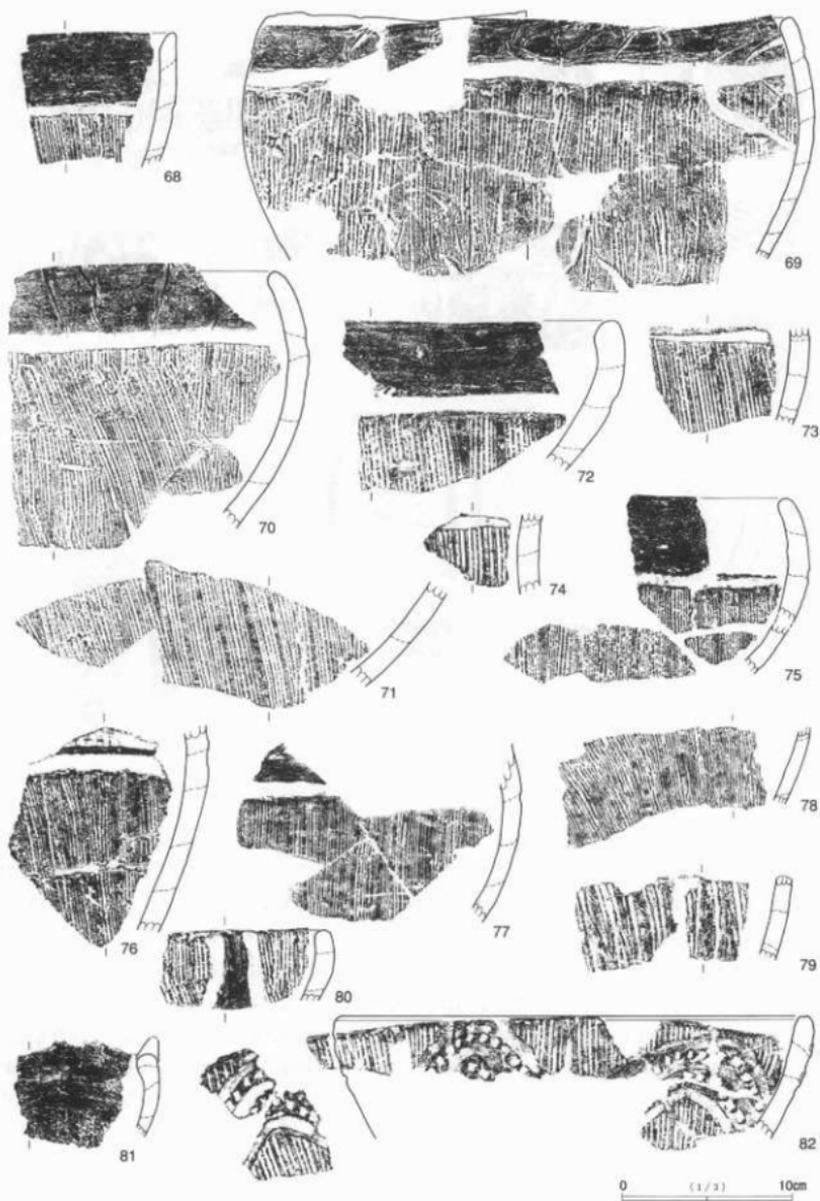
第53図 SI-006(5)

した土製品である。85～94は土器片鏟で、周囲の研磨は顕著で両端の切欠きもはっきりしているものが多いが、90・91などやや不明瞭なものもある。95～99は土製円板であるが、土器片鏟とは異なり、周囲があまり研磨されていないものが多い。100は棒のようなものに粘土塊を押し付け、そのままほとんど整形せずに焼成したもので、性格は不明である。101～113は石器である。101は赤色チャート製の凹基無茎石鏟で、先端部を欠く。102・103は黒曜石製、104・105はチャート製、106は珪質頁岩、107は頁岩製の剥片で、102の右側縁には細かい剥離が認められる。108はカンラン岩製の磨製石斧で、基部を欠くためはっきりしないが、玉斧となる可能性がある。刃部中央には1か所欠損が認められるが、使用時のものか不明である。109・111は石英斑岩の円礫を使用した磨石で、いずれも端部に磨痕があるが、109は上面の中央付近にツブレが認められる。110は緑色凝灰岩製の磨石で、端部には磨痕のほか敲打によるツブレも認められる。端部以外の全面も研磨されており、磨製石器製作の際の砥石などとして使用されたのであろうか。112は流文岩製の敲石で、上部に顕著なツブレが認められる。113は砂岩製の石皿で、全体の形状は隅丸長方形

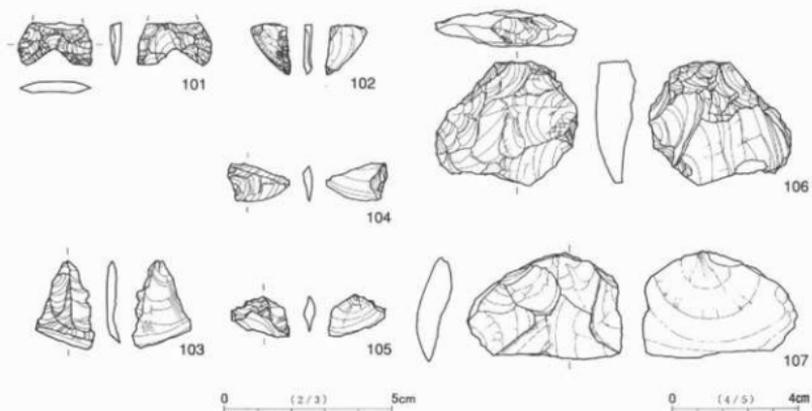
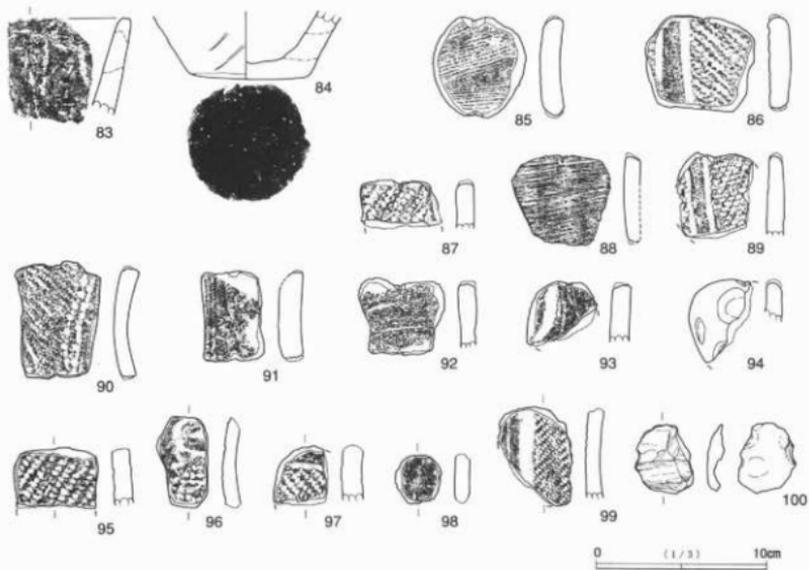


第54図 SI-006(6)

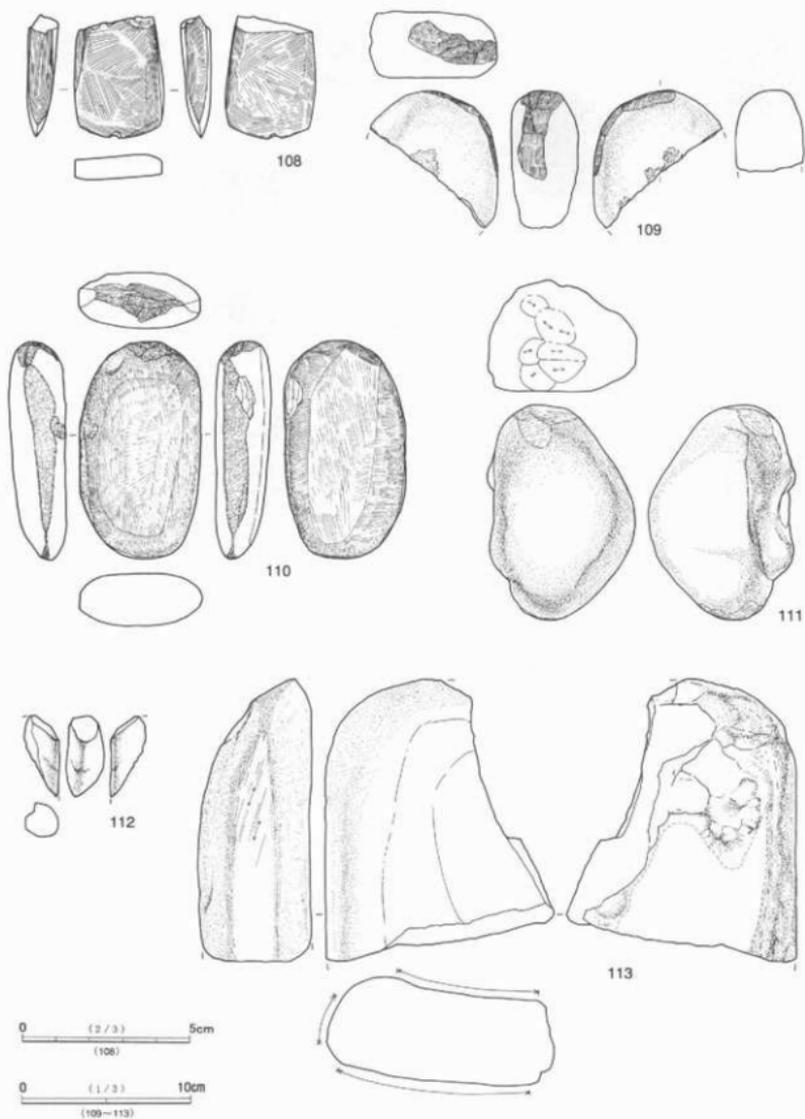
もしくは楕円状を呈するものと考えられる。使用面は上面のみで中央部がややくぼむが、裏面は使用されていない。側面の一部に擦痕があるが、整形時のものであろう。114～162は軽石製品である。114～116は浮子であろう。いずれも扁平な形状で、表裏及び側面全周が研磨される。114は卵形、115は左側の1/2程度を欠くが小判形に近い楕円形、116は上部に端面をもつ楕円形である。また116は両側面上位にややくぼんだ部分が認められるが、ここに紐をかけたのであろうか。117～162は砥石である。117は扁平な形状で、表裏及び側面全周が研磨される。特に表面は平坦でありながら複数方向からの研磨の痕跡が認められることから、この面が主たる使用面であろう。118～120は大型で厚みのある角錐状である。いずれも全面が使用されており、118の左側面、119の右下側縁などには棒状の物体を研磨したようなカール状の面が形成される。121～123は中型で厚みのある角錐状を呈し、いずれも比較的整った形状である。124～162は小型で多様な形状のものが混在する。



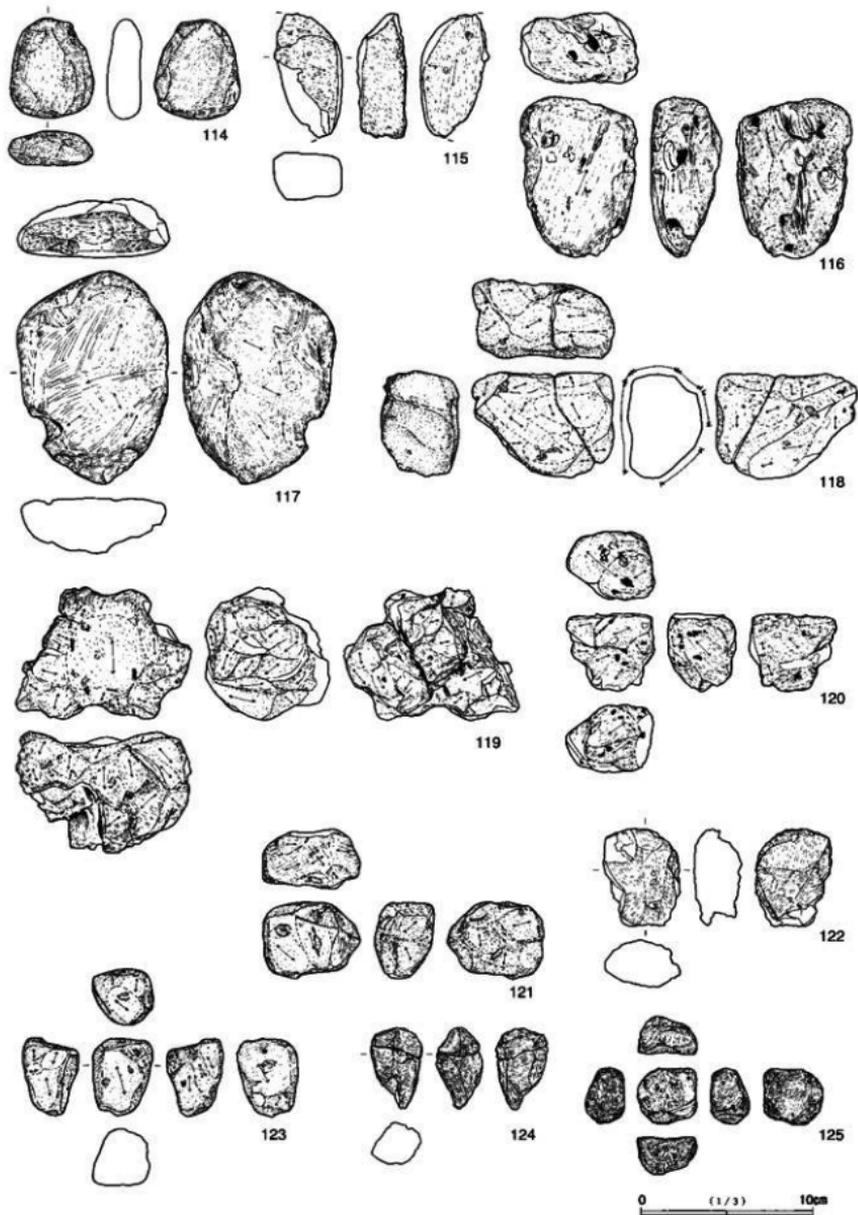
第55图 SI-006(7)



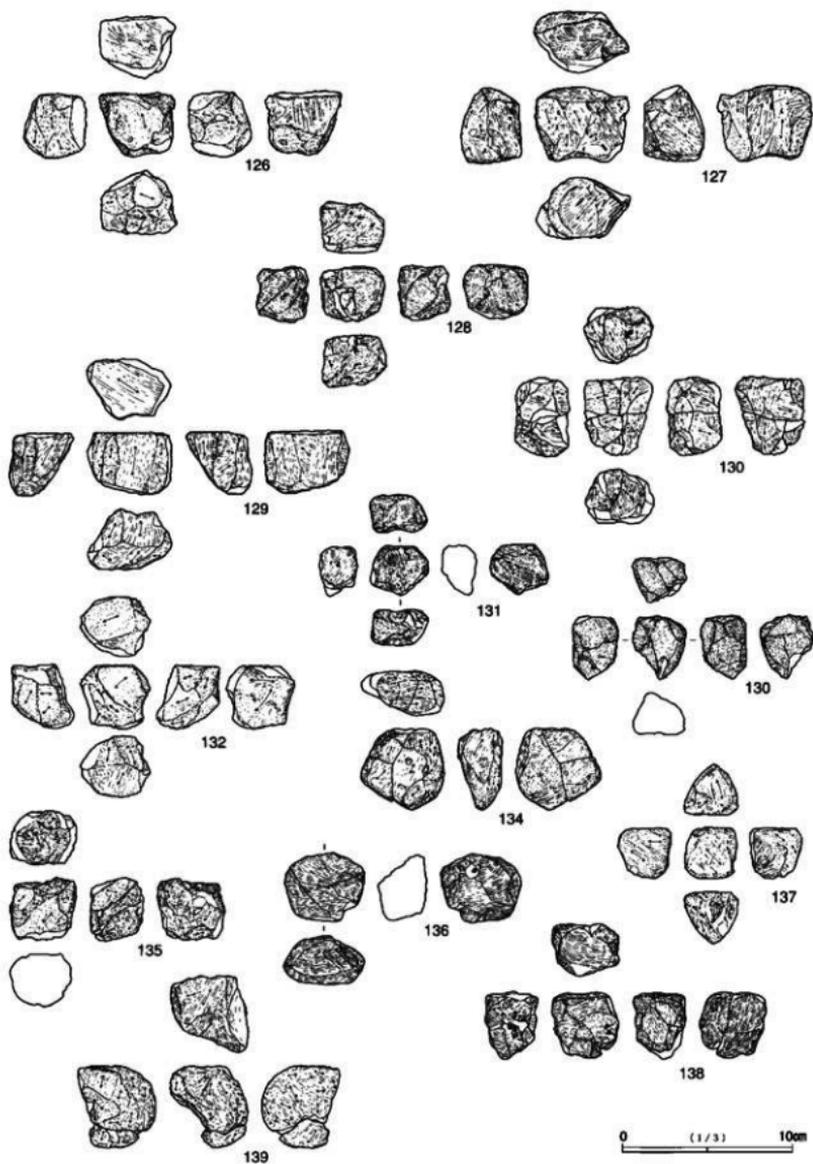
第56图 SI-006(8)



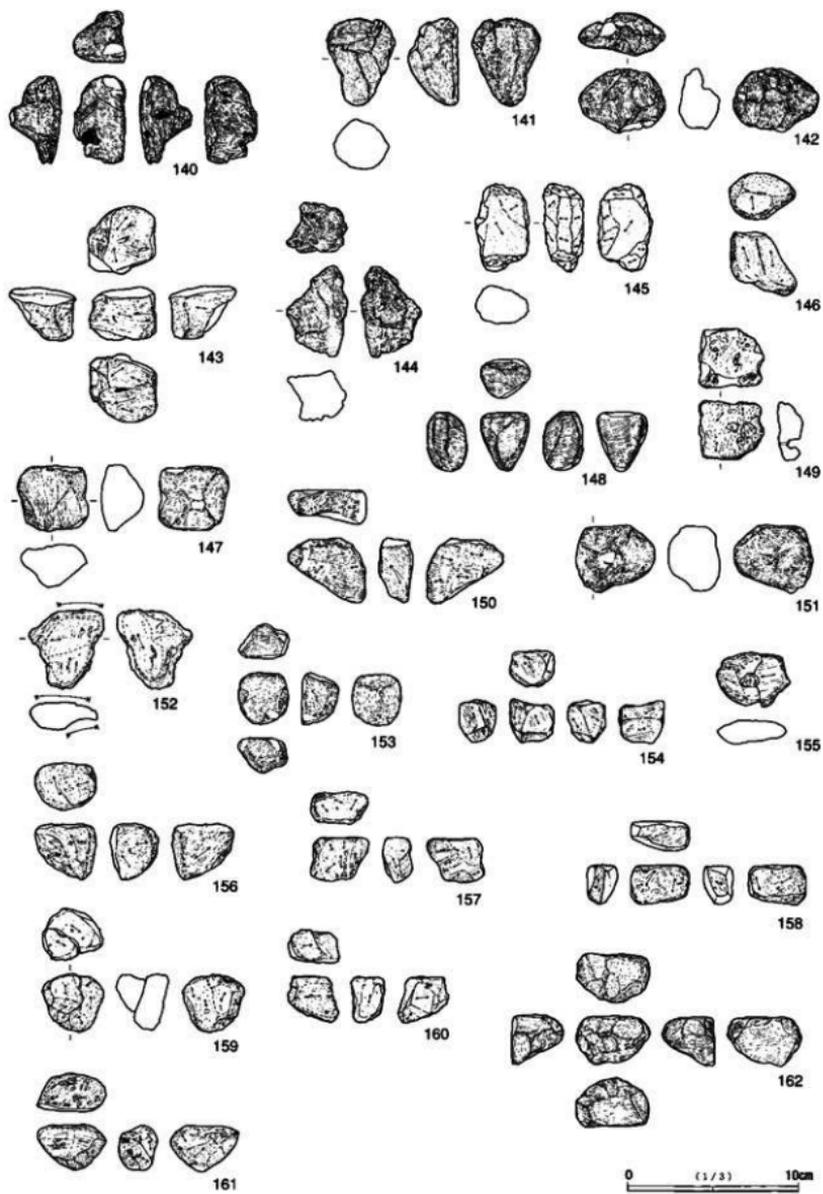
第57图 SI-006(9)



第58図 SI-006(10)



第59圖 SI-006(1)



第60图 SI-00602

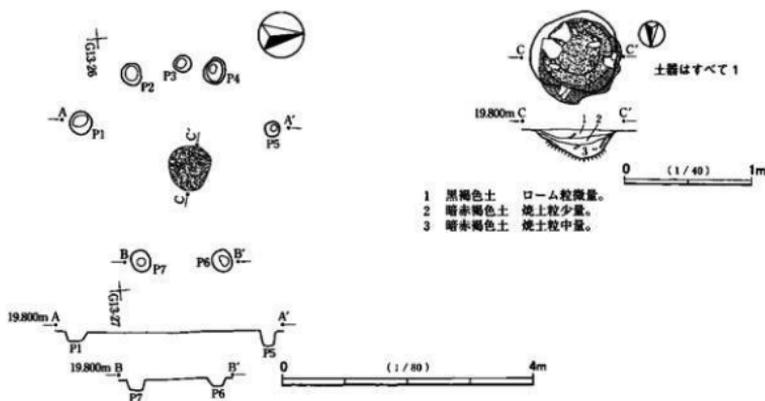
SI-008 (第61・62図, 図版9・58・79・80)

遺構 (3)C区中央やや南寄り, G13グリッド北部に位置する。このあたりは特に削平が著しい場所であり, 遺構はまばらであるが, SI-009や円形土坑であるSK-137が存在する。重複する遺構はない。覆土が完全に削平されており, 遺構の規模, 平面形状, 壁面の状態などは不明である。いくつかのピットが存在しているが, このうちP1・P2・P4・P5・P6・P7の6本が主柱穴と考えられる。ただし, 周囲にピット群などが認められないことから, P3も本遺構に伴うものと考えて差し支えないだろう。比較的整った六角形配置と考えられ, 規模は3.17m×3.08mで, 主軸方向はN-85°-Wである。炉はほぼ中央に検出された。0.68m×0.64mの蚕豆形に近い形状の楕円形を呈する地床炉であるが, 火床面に大形の土器片がまともに出て土したことから, 本来は土器片囲炉であった可能性が高い。深さは0.24mでやや深く, 底面は非常によく焼けている。

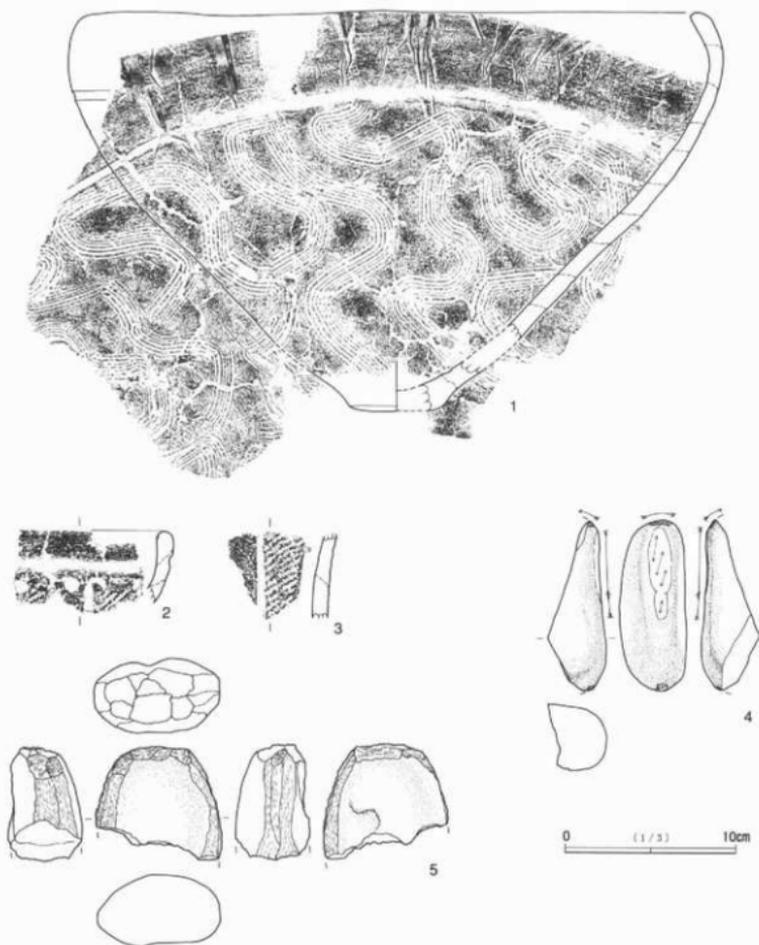
遺物 すべて炉からの出土である。1～3は縄文土器である。1は平縁の浅鉢で, 口縁部には下端を沈線で画された幅広の無文帯をもち, 体部には8条単位の櫛描による縦方向の波状文を施すものでE類であろう。2・3は深鉢で, いずれも縄文を地文とするB類である。2は平縁で, 口縁部文様帯には上端が箆手状となる幅広の沈線により縦区画を施し, 上部に棒状工具による円形刺突を横に並べる。3は沈線により懸垂文を施すもので, 懸垂文内の地文を磨り消す。4・5は石器である。4は砂岩製の磨石で, 厚みのある楕円形の自然礫をそのまま使用し, 上下両端と右側縁に光沢と擦痕が認められるが, 左側の大部分を欠損する。5は多孔質安山岩製の蔽石で, やや扁平な楕円形の自然礫を使用し, 左右両側面には擦痕, 上端部にはツブレが認められるが, 下半部を欠く。

SI-009 (第63図, 図版9)

遺構 (3)C区南部, G12グリッド及びG13グリッドの境付近に位置する。このあたりは特に削平が著しい場所で遺構はまばらだが, 周囲にはSI-010, 008が存在する。重複する遺構はない。覆土が完全に削平されており, 遺構の規模, 平面形状, 壁面の状態などは不明である。いくつかのピットが存在しているが, この



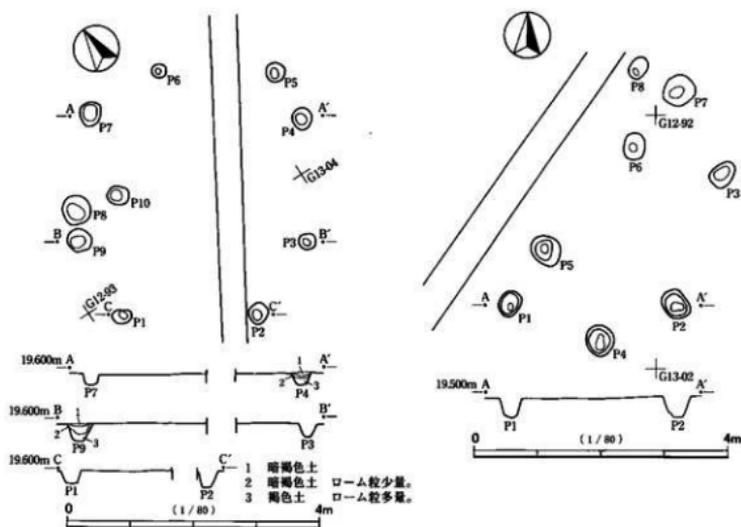
第61図 SI-008(1)



第62図 SI-008(2)

うちP1～P7・P9の8本が支柱穴と考えられ、他の2基については本遺構に伴うものか否か不明である。P7・P4・P3・P9による横長方形配置を基本とし、その上下にP6・P5、P1・P2が付帯する八角形の配置となる可能性がある。規模は3.9m×3.34m～3.56mであるが、長方形配置であった場合の奥行は2.0mとなる。主軸方向はいずれの場合でもN-33°-Eである。炉は検出されなかった。

遺物 図示しうる遺物は出土しなかった。



第63図 SI-009・SI-010

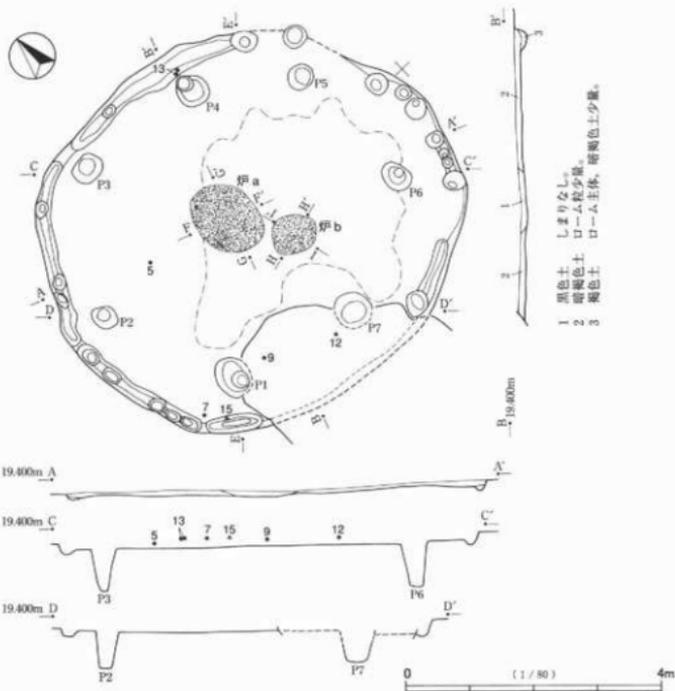
SI-010 (第63図, 図版9)

遺構 (3)C区南部, G12グリッド南西隅付近に位置する。このあたりは特に削平が著しい場所で遺構はまばらであるが, 周囲にはSI-009が存在する。重複する遺構はない。覆土が完全に削平されており, 遺構の規模, 平面形状, 壁面の状態などは不明である。いくつかのピットが存在しているが, P1~P4・P8の5本が主柱穴と考えられる。他のものについては本遺構に伴うものか否かははっきりしない。内区はP8・P4軸を主軸とした六角形配置あるいはP4を除き, P8を頂点とする五角形配置と考えられ, いずれにしても左奥側のピットは建物の埋設管により破壊されているものと考えられる。規模は六角形配置であった場合, 4.3m×2.64m~3.84mであるが, 五角形配置であった場合は奥行が3.76mとなる。主軸方向はいずれの場合でもほぼ座標北である。炉は検出されなかった。

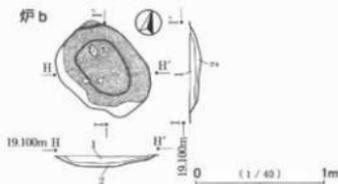
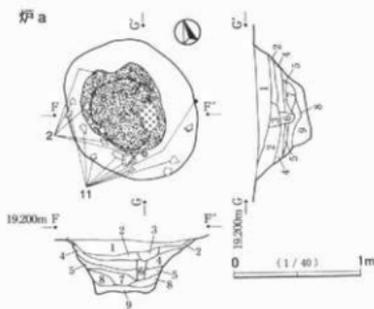
遺物 図示しうる遺物は出土しなかった。

SI-011 (第64・65図, 図版10・59・77・79)

遺構 (3)C区北部, H12グリッド北西寄りに位置する。このあたりは特に削平が著しい場所であるが, 周囲にはSI-012やSI-013, 小竪穴であるSK-142, 143が存在する。重複する遺構はないが, 南西側の一部が擾乱により破壊されている。遺構の規模は直径6.48m程度で, 平面形状はやや不整な円形である。壁面は現状ではほぼ垂直に立ち上がっているが, 削平が顕著で覆土の厚さが0.08m程度しかないため, はっきりしない。内部には多数のピットが認められるが, P1~P7の7本が主柱穴で, P2を頂点とする七角形配置と考えられる。規模は5.08m×4.1m~4.46mで, 主軸方向はN-83°-Wである。覆土は中央付近に黒色土, その周囲に暗褐色土が堆積する。非常に薄いため堆積状況は不明であるが, おおむね自然堆積と考えてよさそう。炉はほぼ中央に2基検出された。炉aは1.16m×1.02mの楕円形を呈する地床炉であ



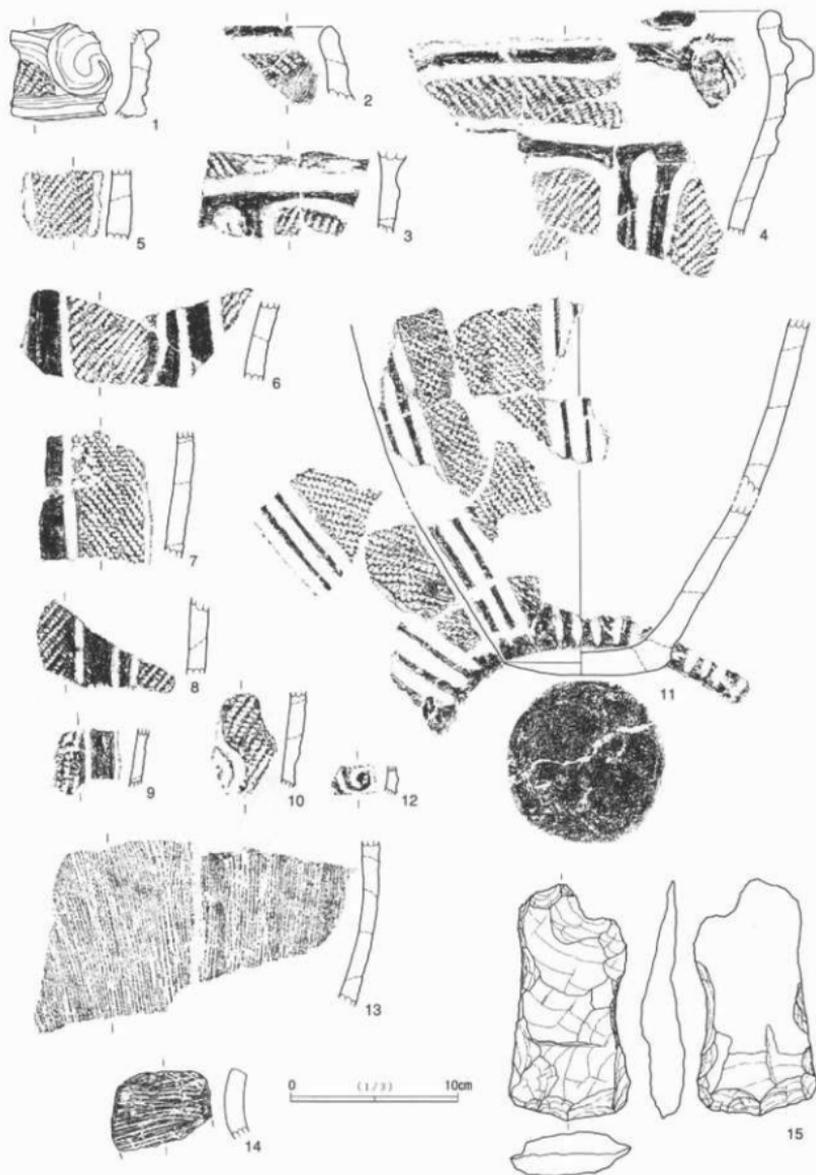
- 1 黒褐色土 暗褐色土少量、焼土粒少量、ローム粒少量。
- 2 黒色土 暗褐色土少量、焼土粒少量。
- 3 黒色土(混貝土層) 暗褐色土少量、焼土粒少量。



- 1 暗褐色土 焼土粒少量。
- 2 赤褐色焼土 被熱ロームブロック少量。

- 1 黒褐色土 暗褐色土多量、焼土粒少量。
- 2 黒色土 暗褐色土少量、焼土粒中量。
- 3 黒色土(混貝土層) 暗褐色土少量、焼土粒少量。
- 4 赤黒色土 焼土粒多量。
- 5 赤黒色土 焼土粒少量。
- 6 灰褐色土(灰層) 焼土粒微量。
- 7 暗黄褐色土(被熱ローム) しまりなし。
- 8 赤褐色焼土 粘性なし、被熱ローム粒少量。
- 9 黒色土(炭化物層) 黒色土少量、しまりなし。

第64図 SI-011(1)



第65图 SI-011(2)

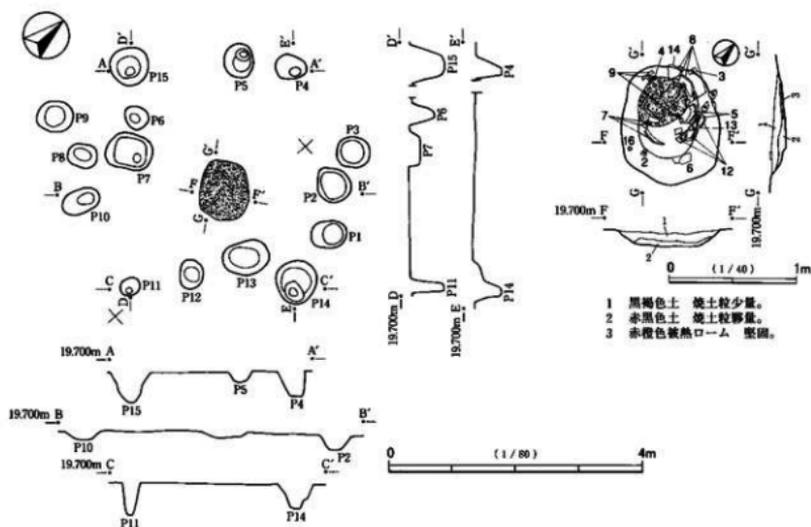
るが、火床面にやや大きな土器片が多く見出されており、土器片囲炉であった可能性がある。深さは0.42mと深く、底面は非常によく焼けている。なおこの炉の覆土上層には貝層が確認されているが、すべて砕片であった。炉bは炉aのすぐ南側に位置し、0.76m×0.58mの隅丸長方形を呈する地床炉である。火床面から若干の土器片が認められるが、全体的に量が少なく、土器片囲炉であったかは不明である。深さは0.08mで、底面はよく焼けている。このほか炉の南側のやや広い範囲の床面には硬化面が検出されており、遺構の壁際のほぼ全周に、幅0.2m～0.3m、深さ0.1m程度の壁周溝が巡り、壁面沿いに壁柱穴と考えられる小ピットが多数存在する。

遺物 覆土が薄いため量は少ないが、炉aからややまとまった量の土器が出土している。多くは縄文土器で、土製品と石器が各1点出土している。1～13は縄文土器で、1は炉b、2・6・8・11は炉a、他は覆土下層～床面から出土した。1～4はA類である。1は平緑で、口縁部文様帯は隆帯による渦巻状意匠と方形区画を配し、区画内に縄文を充填する。2は平緑で、口縁部文様帯は隆帯による方形区画を配し、縄文を充填する。3・4は胎土から同一個体と考えられる。口縁は平緑で、口縁部文様帯は隆帯による渦巻状意匠と方形区画を配し、縄文を充填する。胴部文様帯は縄文を地文とし、上部の方形区画の隆帯下から懸垂文を施す。5～10は縄文を地文とするB類である。5・7～9は懸垂文を施すもので、6・7では懸垂文内の縄文を磨り消し、8は懸垂文内に単沈線を追加する。6は区画外の地文を磨り消す。また区画外には単沈線を追加する。10～12は縄文を地文とするC類である。10・12は渦巻状意匠を描くもの、11は懸垂文を施すものである。このうち11の底面は平滑で、ヘラナアにより丁寧に調整されるが、やや丸みを帯びており安定しない。外周部は僅かに磨耗する。13はE類である。条線は細密で、5条単位である。14は土製円板で、E類の破片を使用している。外周は比較的丁寧に粗割されるが、あまり研磨されない。15はホルンフェルス製の打製石斧で、分銅形を呈する。比較的扁平な大型剥片を素材としており、第1次剥離面は遺存しない。外周部の調整はおおまかで、扱いは浅い。全体的に風化が著しく、刃部には使用痕は認められない。右側縁には着柄に伴う擦痕跡があり、鈍い光沢を持つ。基部裏面の1/2程度が節理面から欠損する。

SI-012 (第66・67図、図版10・60・61・77・82)

遺構 (3)C区中央やや北寄り、H12グリッド中央西側に位置する。このあたりは特に削平が著しい場所であるが、周囲にはSI-011が存在する。隣接するSI-013と重複したものと考えられるが、新旧関係は不明である。検出した時点ですでに床面下まで削平されていたため、遺構の規模や平面形状、壁面の状態は不明である。周囲に多数のピットが検出されたが、このうちP15・P4・P2・P14・P11・P10の6本が主柱穴であり、その他のものについては本遺構に伴うか否か不明である。六角形配置で、3.48m×3.92mで、主軸方向はN-48.5°-Wである。炉は中央付近に検出された。0.94m×0.77mの隅丸方形に近い楕円形を呈する土器片囲炉である。深さは0.13mで、底面は比較的良好に焼けている。

遺物 ピット中から若干の土器片が出土したが、いずれも小片で図示しうるようなものはない。図示したのは炉から一括で出土したもので、この他に土製円板が1点出土した。1～14は縄文土器である。1～4はA類と考えられる。1・2は平緑で、口縁部文様帯には隆帯による楕円状区画を配し、区画内に縄文を充填する。3は口縁部文様帯に隆帯による渦巻状意匠と方形区画を組み合わせたもので、区画内には縄文を充填する。4は波状緑で、口縁部文様帯に隆帯による区画を施し、区画内に縄文を充填する。5～12は縄文を地文とするB類である。5・6・9～11は懸垂文を施すもので、5・6・11は区画内の地文を磨り

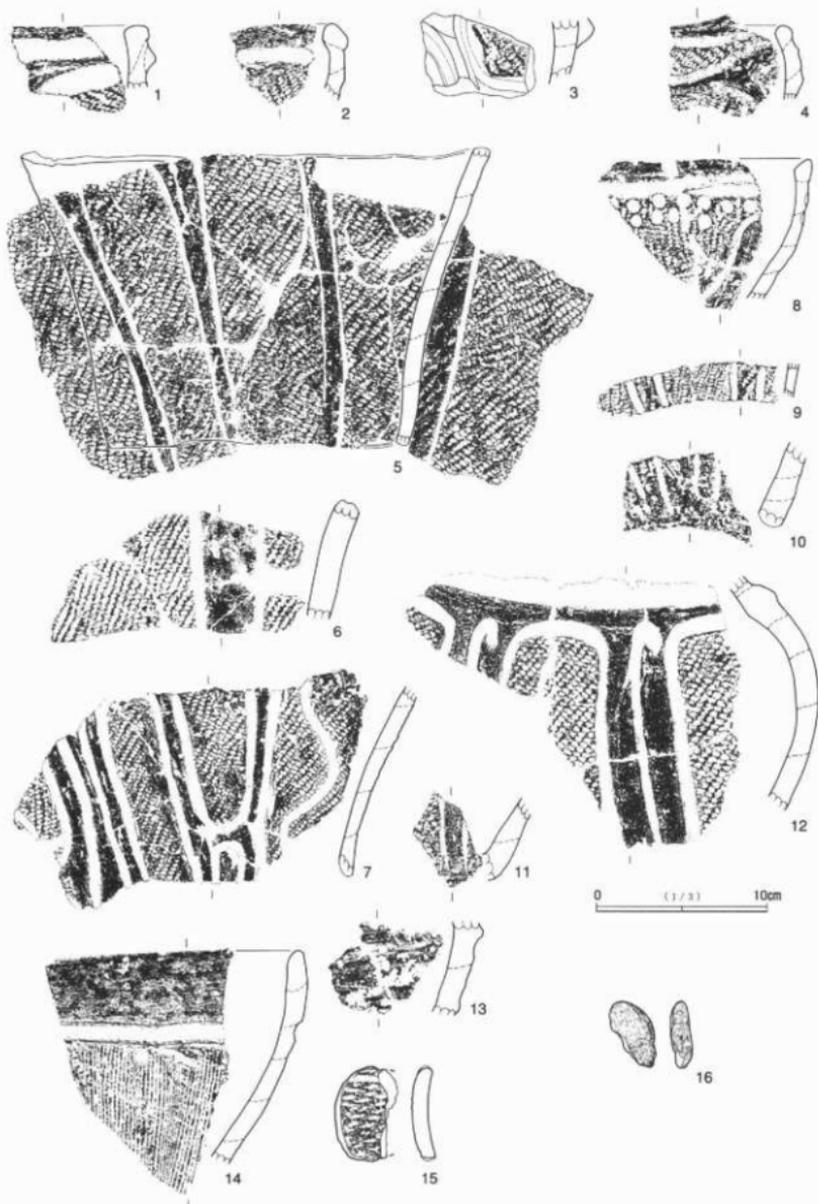


第66図 SI-012(1)

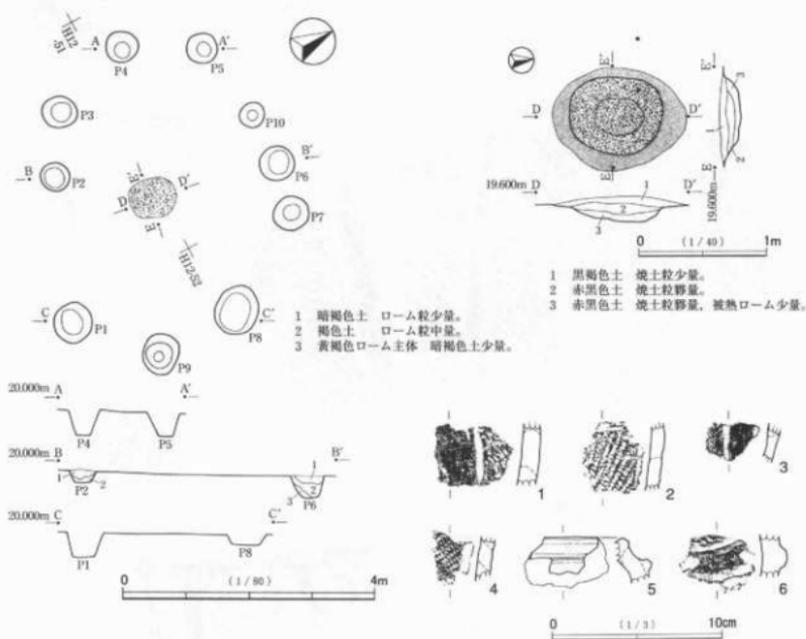
消すが、9・10は磨り消されない。また、5は全体的に非常に強く二次的に被熱しており、5は上端と下端、6は上端のみ、10は下端のみがそれぞれ研磨されている。7は対向U字状文と懸垂文を施すもので、区画外と懸垂文内の地文を磨り消す。これも二次的に被熱しており、下端が研磨されている。8は平縁で、口縁下のナゾリの直下には棒状工具によるやや大きな円形刺突が2列並び、その下には単沈線による波状文が施される。これも二次的に強く被熱している。12は縦長方形区画を配するもので、区画外の地文を磨り消し、区画間には上端が箆手状となる単沈線が追加される。13はC類だが、構成ははっきりしない。14はE類で、条線は8条単位である。15は土製円板と考えられる。縄文を地文とし、浅く細い沈線による懸垂文を施すものと考えられる。側縁は比較的丁寧に研磨されている。16は軽石製の砥石で、小型であるが全面が使用されている。

SI-013 (第68図, 図版10・61)

遺構 (3)C区中央やや北寄り, H12グリッド西側に位置する。このあたりは特に削平が著しい場所であるが、周囲にはSI-011が存在する。隣接するSI-012と重複するものと考えられるが、新旧関係は不明である。検出した時点ですでに床面下まで削平されていたため、遺構の規模や平面形状、壁面の状態は不明である。付近には多数のビットが検出され、このうちP4・P5・P10・P8・P1・P3の6本が主柱穴だが、P9についてもその可能性がある。その他のものについては本遺構に伴うか否か不明である。六角形配置もしくはP9を加えた七角形配置と考えられ、4.32m×2.06m~2.96mであるが、七角形配置とした場合は奥行が4.9mとなり、P3・P10・P8・P1の逆台形を呈する方形配置と考えることもできるが、この場合は奥行が3.26mとなる。主軸方向はN-62°-Wである。炉は中央付近に検出された。1.06



第67图 SI-012(2)



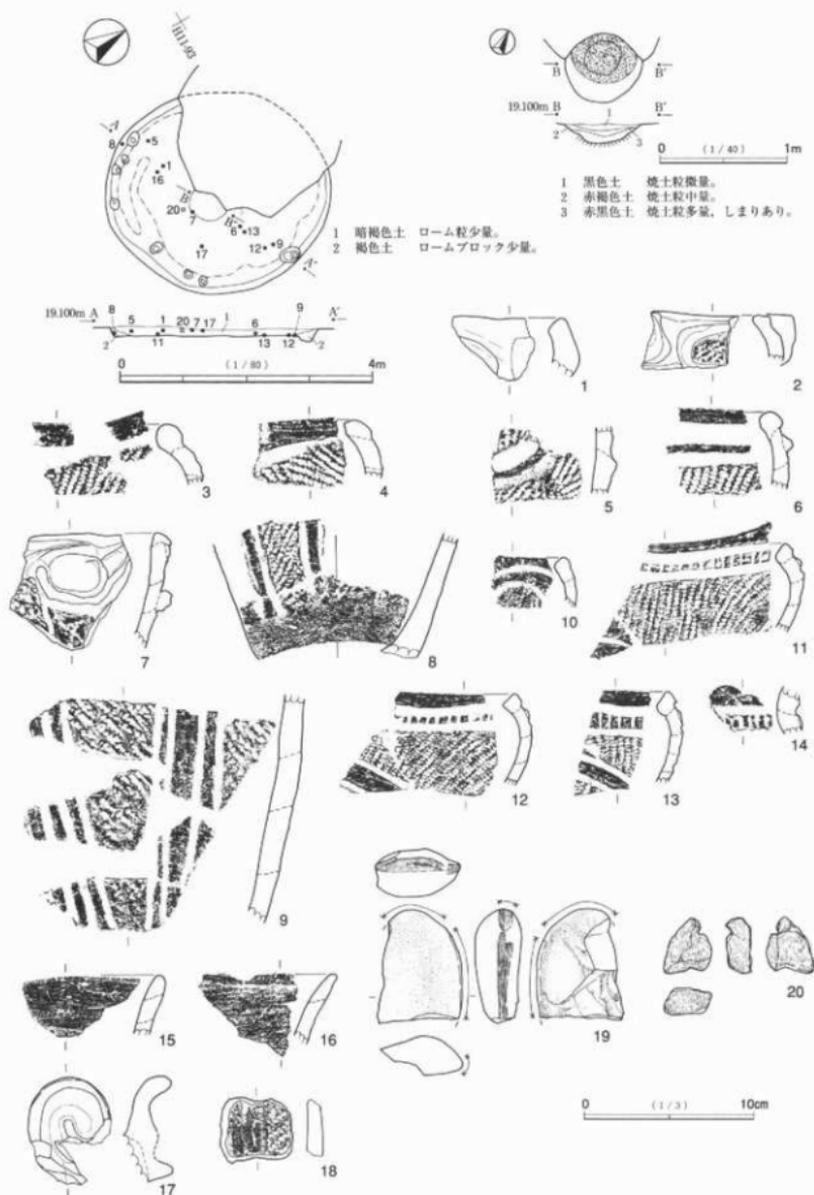
第68図 SI-013

m×0.82mの楕円形を呈する地床炉である。深さは0.13mで、底面は比較的良好に焼けている。

遺物 すべて縄文土器で、いずれも細片である。量は少なく、図示したものではすべてである。1・3は炉及びその周辺から、他はビット覆土中から出土した。1～4はB類で、縄文を地文とする。やや浅い沈線により懸垂文を施す胴部であるが、1・3は懸垂文内の地文を磨り消す。5・6はC類である。5は平縁の口縁部で、文様構成は不明であり、A類となる可能性もある。6は幅広の蒲鉾状の隆帯により楕円形区画などを施しており、区画内には縄文が充填される。これもA類となる可能性がある。

SI-014 (第69図、図版11・62・77・79・82)

遺構 (3)C区北部、H11グリッド南端付近に位置する。このあたりは特に削平が著しい場所であるが、周囲には複数のビットが認められるほか、SK-142、143などの小堅穴が存在する。重複する遺構はないが、北西部の1/4程度を攪乱により破壊されている。遺構の規模は長軸3.4mで、平面形状は比較的整った楕円形である。壁面は現状ではやや斜めに立ち上がっている。深さは最大で0.15m程度である。内部に支柱穴はないが、壁際に小ビットが複数認められる。このうちP1・P3・P5・P7を組むと比較的整った六角形で、規模は幅が2.98m、主軸方向はN-41.5°-Wである。覆土は暗褐色土を主体とし、周縁にロームブロックを含んだ褐色土が堆積する。全体的に削平されており、浅いためにはっきりしないが、おおむね自然堆積と考えられる。炉は遺構のほぼ中央に検出された。規模は不明だが、楕円形を呈するものと考え



第69図 SI-014

られる地床炉である。深さは0.15mで、底面は比較的良好に焼けている。他には床面のほぼ全面からは硬化面が検出されたが、壁周溝は認められない。

遺物 遺構の遺存状況が芳しくないため、量は少なく、図示したものが大部分である。ほとんどが縄文土器だが、石器と軽石製品が出土した。ほとんどが覆土中からの出土である。1～7はA類である。1は波状縁で、隆帯により渦巻状意匠を描くものと考えられる。2は平縁で、隆帯により楕円状区画を配するもので、縄文を充填する。3は波状縁、4は平縁で、共にナゾリ状の浅い沈線が口縁下に施され、口縁部文様帯に楕円状区画を配するものである。区画内には縄文を充填する。5は口縁部文様帯に隆帯により楕円状区画を配するもので、縄文を充填する。胴部文様帯の地文は縄文である。6は平縁で、口縁部文様帯には隆帯による楕円状区画を配し、縄文を充填する。7は平縁で、口縁部文様帯は隆帯による楕円状区画を配する。隆帯は粘土紐状で、隆帯側面のナゾリは弱い。胴部文様帯は縄文を地文とし、沈線により懸垂文を施す。区画内の地文を磨り消す。8～14はB類で、10を除き、いずれも縄文を地文とする。8・9は懸垂文を施すもので、地文を磨り消し、9は懸垂文内に単沈線を2条追加する。10は平縁で渦巻状意匠を描くものである。11～13は同一個体で、14も同様であろう。口縁は波状縁で、端面にキザミを施した隆帯が口縁下に施される。横穴連繫弧線文を描き、沈線間の地文を磨り消す。14は頸部で、端面にキザミを施した隆帯を貼り付ける。15・16は無文で平縁である。17は突起で、隆帯により渦巻状意匠を描く。18は土製円板である。縄文を地文としB類で、外縁部は比較的丁寧に粗割されるが、ほとんど研磨されない。両端を欠くため、土器片鏝となる可能性もある。19は磨石である。楕円形の自然礫をそのまま利用し、上端部から右側縁に擦痕がある。また裏面には左側縁方向からの剥離が認められることから、敲石として使用された可能性もある。下部の一部を欠く。20は軽石製の砥石で、全体が研磨されていて明瞭な面が形成されている。

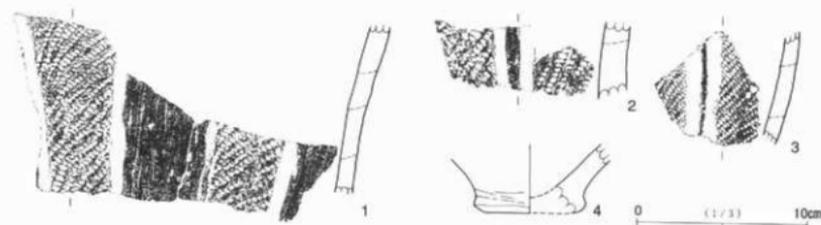
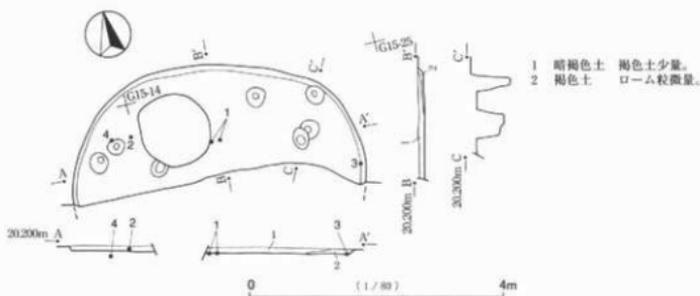
SI-015 (第70図, 図版11・63)

遺構 (3)D区中央東側、G15グリッド中央北寄りに位置する。周囲には多数のピットが散在する。重複する遺構はないが、南側の1/2以上が建物の基礎により破壊され、北西側の一部が攪乱されている。遺構の規模は幅が4.45mで、平面形状は小判型に近い楕円形と推定される。壁面は現状ではやや斜めに立ち上がるが、深さが0.09m程度であるためはつきりしない。内部にはピットが7基確認されているが、このうちP2・P4・P7が主柱穴と考えられ、他のものについては本遺構に伴うものか否か不明である。規模は幅が3.0mで、形状は不明であるが、主軸方位はN-9.5°-Eと考えられる。覆土は褐色土を含む暗褐色土が中心で、東側にローム粒を僅かに含む褐色土が堆積する。遺存状況が悪いためはつきりしないが、おおむね自然堆積と考えられる。炉は検出されなかった。

遺物 遺存状況が芳しくないため、量は少ない。すべて縄文土器で、図示したもののほかは細片を数点数えるのみである。1・2はB類で、いずれも縄文を地文とし、懸垂文を施す。懸垂文内の地文を磨り消すが、懸垂文の幅は1が広く、2は狭い。3はC類で、渦巻状区画を施すものと考えられ、外面の一部に炭化物が付着する。4はやや厚手で底部が突出し、胴部はやや強く開く。底面外周部は顕著に磨耗する。

SI-016 (第71・72図, 図版11・63・77・80・82)

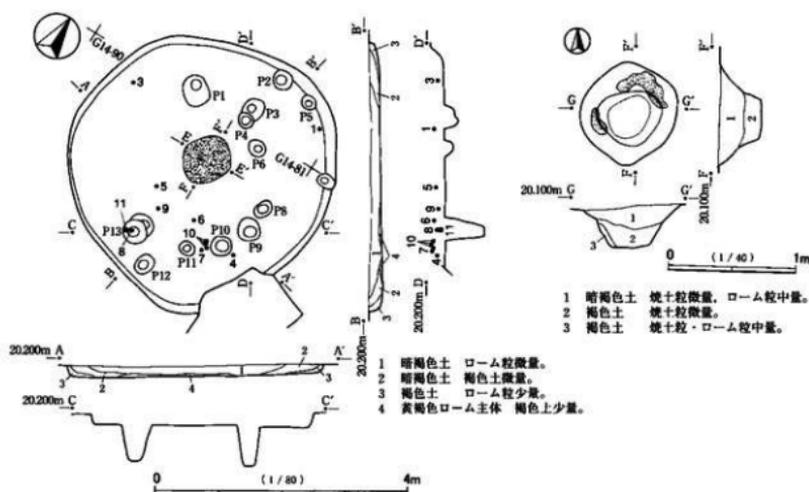
遺構 (3)D区中央やや東寄り、G14グリッド南東隅付近に位置する。周囲にはSI-017が隣接し、小竪穴であるSK-161、162が存在する。重複する遺構はないが、南東側の一部が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は4.04m×4.26mで、平面形状は僅かに横長だが、ほぼ円形である。壁面は現状ではや



第70図 SI-015

や斜めに立ち上がるが、覆土が0.24m程度と浅いためはっきりしない。内部には多くのピットが検出されたが、このうちP1・P3, P9, P13が主柱穴と考えられる。ただ、他のものについても周囲にピットがほとんど認められないことや、検出状況から見て、本遺構に伴う可能性がある。P1を頂点とした五角形配置と考えられるが、これを除いた方形配置の可能性もある。ただ、西側の柱穴については検出されておらず、現場段階での所見もないため不明である。規模は2.35m×1.84m程度で、方形区画とした場合は奥行が2.0mとなる。いずれの場合も、主軸方位はN-31.5°-Wである。覆土は中央に褐色土ないしローム粒を僅かに含む暗褐色土、周縁にローム粒を含む褐色土が堆積する。やや薄いためはっきりしないが、様相から見ておおむね自然堆積と考えられる。また、外周には僅かに褐色土を含むロームを主体とする層が堆積しており、壁面の崩落土と考えられる。炉はほぼ中央に検出された。0.75m×0.71mで、隅丸方形を呈する地床炉である。深さは0.34mでやや深く、覆土は褐色土系で、焼土粒はそれほど多くない。底面はあまり被熱していないが、北～西側の壁面下部がよく焼けている。

遺物 遺存状況は本遺跡における竪穴住居としては良好だが、遺物の量は少ない。縄文土器がほとんどで、図示したもののほかに、細片を少量数えるのみである。また、土器以外には土製品と礫石器、軽石が出土した。1～10は縄文土器である。1・2はB類である。1は縦楕円形に近い方形区画を配し、縄文を充填する。2は縄文を地文とし、懸垂文を施すもので、懸垂文内の地文を磨り消す。3～7はC類である。3は縄文を地文とし、上位に横方向の隆帯を貼り付けて上下を区画し、そこから垂下する1条の隆帯により渦巻状意匠を描くものと考えられる。4は波状線で、楕円状区画もしくは渦巻状意匠を配するもので、区

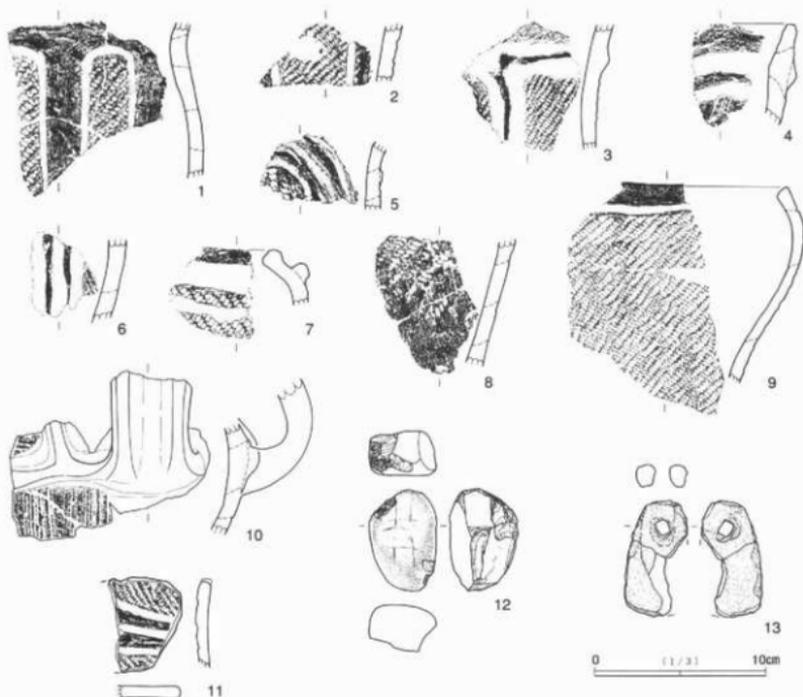


第71図 SI-016(1)

画内には5条単位の縦条線が充填される。5は口縁部を欠き、楕円状区画を配するもので、縄文を充填する。なお、5・6はA類となる可能性がある。6は縄文を地文とし、懸垂文を施すものである。7は平縁で、強く内湾する。楕円状区画もしくは渦巻状意匠を配するものと考えられる。区画内には縄文を充填するが、その施文は隆帯の端面に及ぶ。8・9はD類である。8は底部付近の胴部で、外面の上半部のみ縄文が施される。9は平縁で、沈線により幅の広い無文部を突出する。口縁は強く内湾する。10はE類で、胴部上位に幅広で大形の橋状把手がつく。把手の外面は縦方向のナゾリが施され、低い隆帯状となっている。把手とほぼ同位の胴部には隆帯による方形区画が配され、横方向の条線が充填される。胴部は縦方向のやや細密な条線で、5本単位である。11は土器片鏟である。縄文を地文とし、懸垂文を施すB類の破片を横位に使用し、上部部にやや浅く鈍い切込みを施す。外縁は比較的丁寧に粗割されるが、ほとんど研磨されない。左1/3程度を欠く。12は珪質頁岩製の敲石で、卵形の円礫をそのまま使用している。上部部と下部部にツブレが認められ、表面は大きく節理面で剥離しているが、これは使用に伴うものか否か判断としない。また裏面の側縁付近にやや大きな剥離が認められるが、これは敲打によるものと考えられる。13は軽石製品で、浮子である。右下部を欠くが本来は撥形もしくは釣鐘形を呈していたものと考えられる。扁平な形状で、全面が研磨され、上部中央付近にはやや大きな穿孔がある。

S I - 017 (第73図, 図版12・64)

遺構 (3)D区中央やや東寄り, G14グリッド南端部西側に位置する。周囲には多数のピットが散在するほか, SI-016が隣接し, SK-161, 162などの小窪穴が存在する。重複する遺構はなく, 攪乱もない。遺構の規模は3.56m×2.64m, 平面形状は比較的整った隅丸長方形である。壁面は現状ではやや斜めに立ち上がっている。主軸方位はN-5°-Eである。内部にはいくつかのピットが認められるが, 主柱穴として組



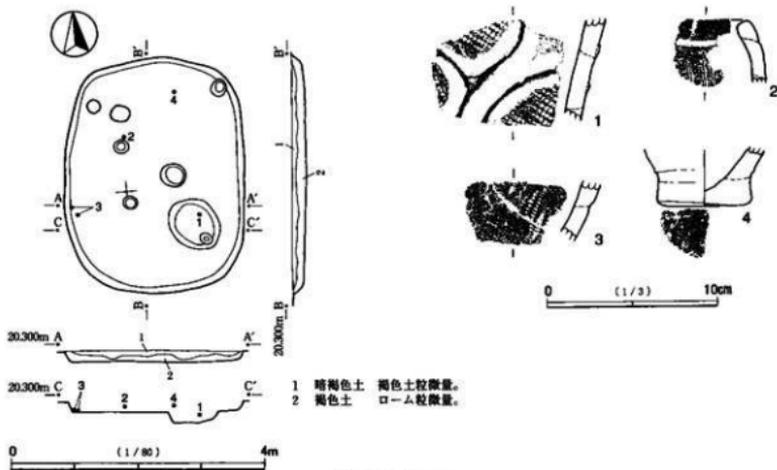
第72図 SI-016(2)

めそうものではなく、本遺構に伴うか否か不明である。覆土は上層に暗褐色土、下層にローム粒を僅かに含む褐色土が堆積する。おおむね自然堆積と考えてよいだろう。炉は検出されなかった。なお、本遺構は堅穴状遺構に分類すべきものであるだろうが、ここでは堅穴住居の項に含めて扱った。

遺物 量は少ない。すべて縄文土器で、図示したものがほぼすべてである。1はC類で、縄文を地文とし渦巻状の意匠を描く。2は平縁でやや内湾する。縦方向の条線を全面に施す。条線は1本単位で細く、間隔はやや広い。3・4はD類で、胎土から見て同一個体と考えられる。底面はヘラナデにより調整されており、外周部は磨耗してない。3は内面に炭化物が付着する。

SI-018 (第74・75図, 図版12・64・78)

遺構 (3)D区北部, F14グリッドの中央やや東寄りに位置する。この周辺は特に削平が著しい場所であり、遺構はまばらである。重複する遺構はないが、北西側の1/2程度が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は2.92m×3.0mで、平面形状は比較的整った円形である。深さは最大0.14m程度で、壁面は現状ではやや斜めに立ち上がる。内部の壁際に6基のピットが認められる。このうちP1~P3・P5・P6の5基が支柱穴と考えられる。整った六角形配置で、北西隅のものは建物による攪乱で破壊されたの



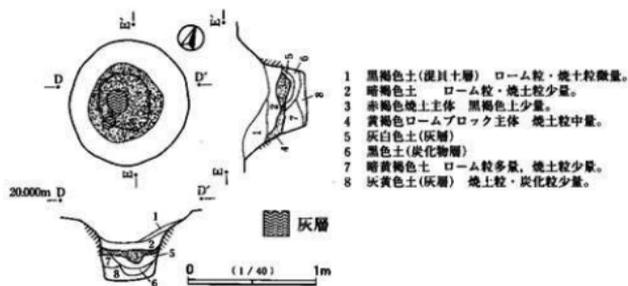
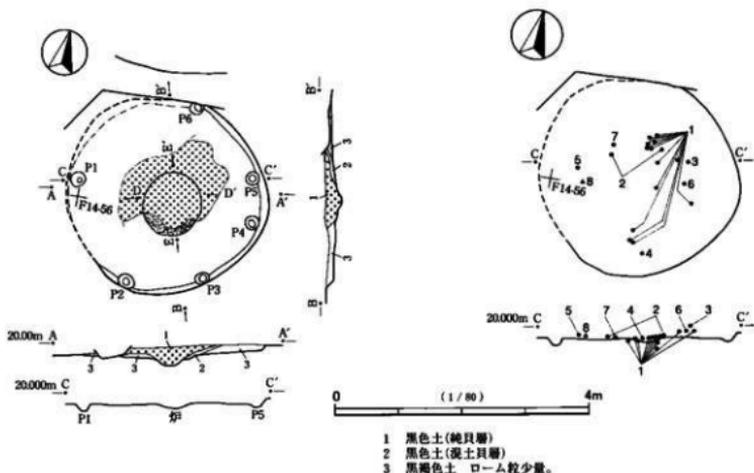
第73図 SI-017

であろう。規模は一辺2.7mで、主軸方位はN-10.5°-Wである。覆土は黒色土および黒褐色土を主体とする。全体的に薄く、特に西半部についてはほぼ床面まで削平されているため、詳細ははっきりしない。なお、遺構の中央付近にレンズ状に堆積した純貝層（1層）と混土貝層（2層）が検出されたが、その内容については第4節で詳述する。床面のほぼ全面に硬化面が認められた。炉はほぼ中央から検出された。1.0m×0.93mの整った円形を呈する地床炉である。深さは0.52mと非常に深い。覆土は上層が暗褐色土及び焼土を中心とする赤褐色土、下層が黒色土とロームを多く含む暗黄褐色土で、中層に厚さ10cm～15cmの焼土層が挟在する。底面および下位の壁面はほとんど被熱していないが、焼土層の直上となる中位以上の壁面が非常によく焼けている。

遺物 遺存状況が芳しくないため、量は少なく、図示したものがほぼすべてである。大部分が縄文土器で、剥片が1点出土している。1～7は縄文土器である。1～4はB類で、いずれも縄文が地文で、懸垂文を施す。懸垂文内の地文を磨り消すもので、1は懸垂文内に単沈線を追加し、全体的に強く被熱しており、非常にもろい。5・6はC類である。5は縄文を地文とし、渦巻状意匠を描く。6は小型の鉢で、体部がやや低く強く張るタイプで、口縁部は低く、やや強く外反する。体部はやや厚手で、多重の楕円形意匠を描く。意匠の両端にあたる隆帯は細い棒状の工具により穿孔されており、細い紐を通して吊り下げた可能性がある。7は平縁で、外面には全面に縄文が施される。8は瑪瑙製の二次加工された剥片で、右上部側縁および左下部側縁に表面から細かい剥離を並べる。削器などとして使用されたのであろうか。

SI-019 (第76図, 図版12・64・65・77)

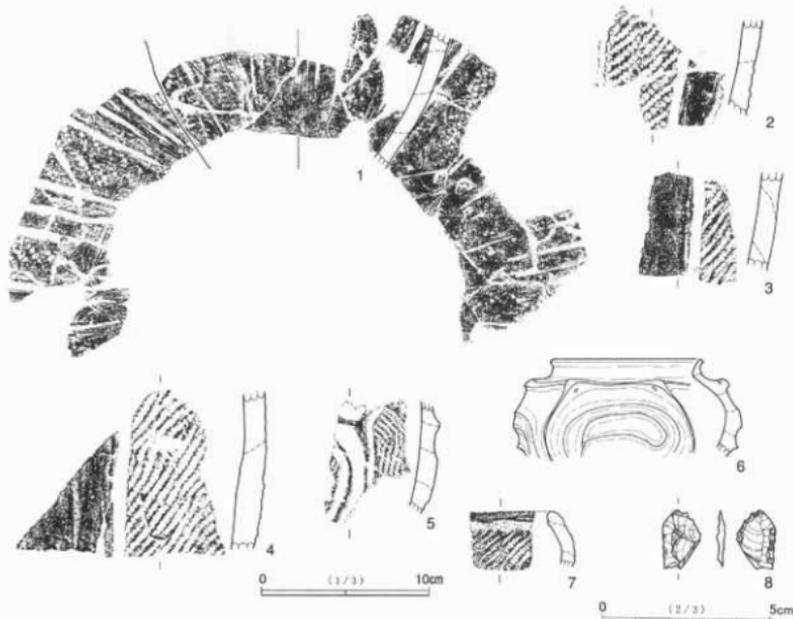
遺構 (6)区南端部, H08グリッド南端部東寄りに位置する。この周辺は特に削平が著しい場所であり、近接する時期の遺構はない。重複する遺構はないが、建物の基礎による攪乱が激しく、遺構内部が縦横に破壊されており、さらに南西部の一部が調査区域外にかかっている。表土を除去した段階ですでに床面付近



第74図 SI-018(1)

であったため、遺構の規模や形状は不明である。周囲にはピットが7基確認されたが、このうちのP4・P2・P5・P6が主柱穴と考えられる。その他のものについても周囲に遺構が存在しないこと、覆土が主柱穴のものに近似していることなどから、本遺構に伴うものである可能性が高い。六角形配置と考えられるが、南西側の1基が調査区域外にあり、北東側の1基は攪乱により破壊されている。規模は4.76m×4.46mで、主軸方位はN-2.5°-Wである。覆土はほとんどが削平されているため、堆積状況は不明である。中央付近の床面には硬化面が検出されたが、範囲は狭く、周囲については削平されているため遺存していない。また、この付近には凝土貝層が見出されたが、この内容については第4節で後述する。炉はほぼ中央付近に検出された。北側が攪乱により破壊されているため規模は不明だが、楕円形を呈する地床炉と考えられる。深さは0.24mで、底面は非常によく焼けている。

遺物量は少ない。ほとんどが縄文土器であるが、図示したものがすべてである。その他、土製品が1点

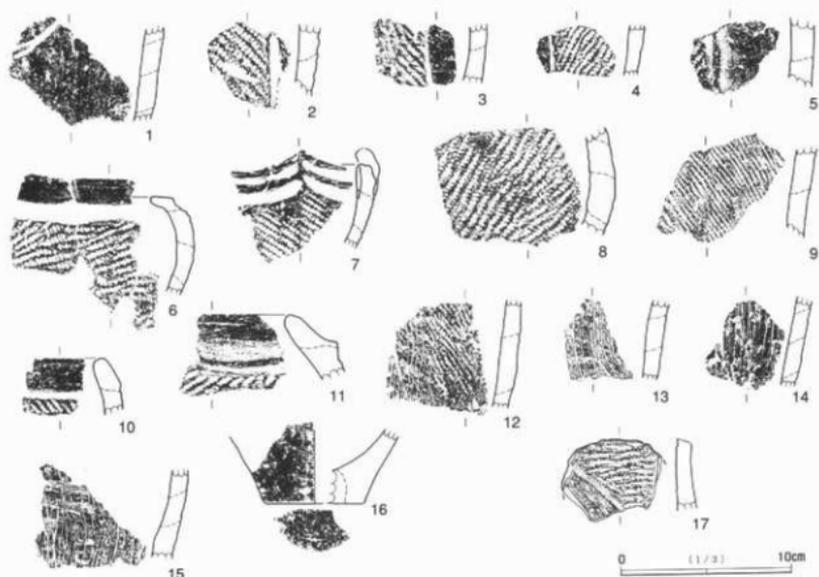
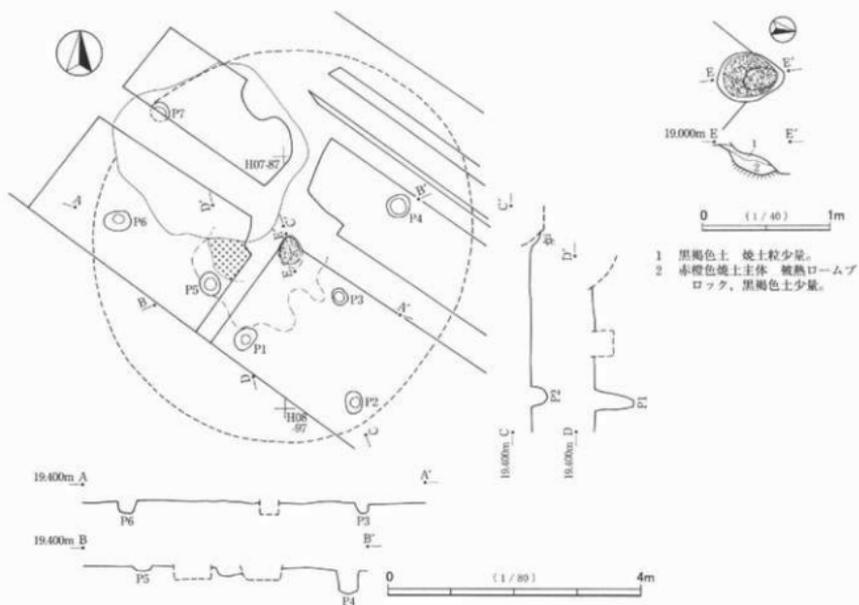


第75図 SI-018(2)

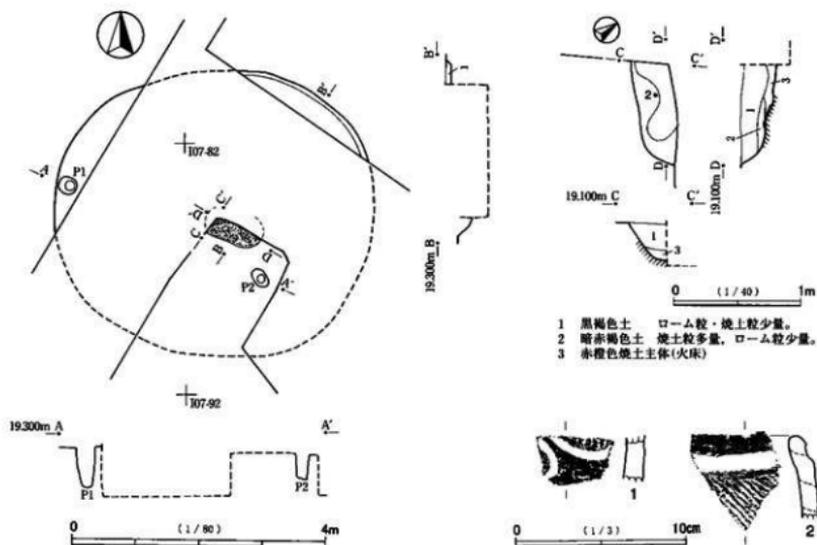
出土している。1～16は縄文土器である。1～4はB類である。1は地文が無文で、斜め方向に細く浅い沈線が施されるが、意匠は不明である。2～4はいずれも縄文が地文で、懸垂文を施し、内部の地文を磨り消す。5は縄文を地文とするC類で、懸垂文を施し、内部の地文を磨り消す。6～11はD類である。6は平縁であるが、口縁端部は内側に突出する。7は波状縁で波頂部は尖る。波頂部から左右に延びる2条の浅い沈線により画され、沈線間は隆帯状となる。8・9は胴部で、8はやや粗い縄文が施され、9は細かい縄文が施される。10・11は平縁で、11の隆帯は緩やかに波曲しており、楕円状区画となる可能性がある。12～15はE類である。いずれも縦方向に施文され、12・13・15は胎土から同一個体と考えられる。条線は4条単位である。このうち12は条線と縄文を併用するものだが、縄文施文後に条線を施している。14は3条単位の条線を重ねて施文している。16はやや厚手で、底面は平坦で、ヘラナダにより調整される。外周部は磨耗しない。17は土製円板で、縄文を地文とし懸垂文を施すC類の破片を使用する。外縁部は比較的丁寧に粗割されるが、研磨は粗い。

SI-020 (第77図, 図版13・65)

遺構 (6)区中央部, I 07グリッド南西隅付近に位置する。この周辺は特に削平が著しい場所であり、遺構はまばらである。重複する遺構はないが、建物の基礎による攪乱が激しく、遺構内部が縦横に破壊されている。遺構の規模は不明である。形状は北側に一部残った壁面と北西側の様子から楕円形と考えられる。



第76図 SI-019



第77図 SI-020

壁面は現状では斜めに立ち上がっているが、一部のみの検出であるため不明である。内部にピットが1基認められる。覆土は暗褐色土を主体とするが、ごく一部のみの検出であり、堆積状況などは不明である。炉は推定される遺構の範囲のほぼ中央付近に検出された。大きさは不明だが楕円形を呈する地床炉で、底面は非常によく焼けている。

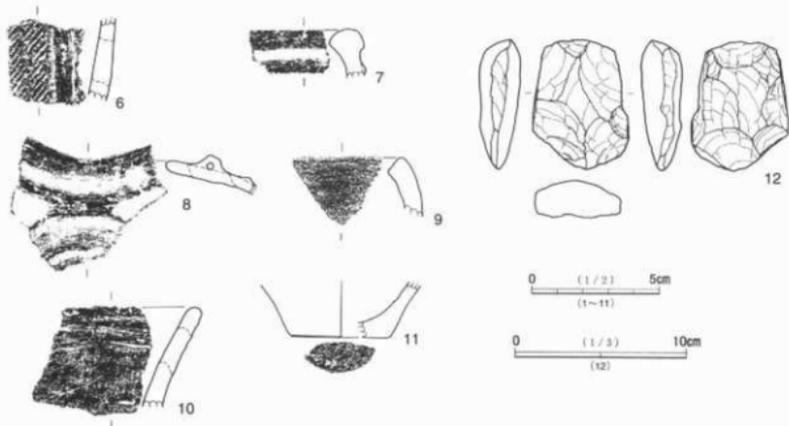
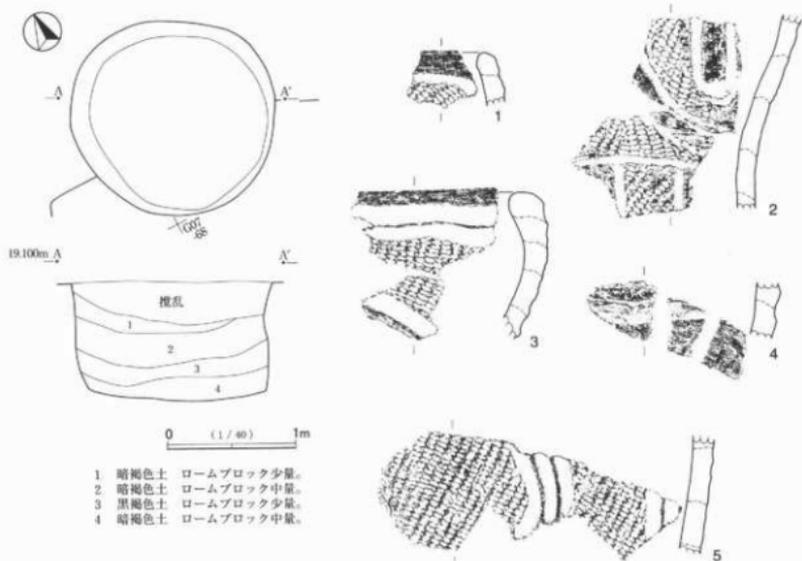
遺物 遺存状況が非常に悪いため、ほとんど出土しなかった。図示したものがすべてで、いずれも炉から出土した縄文土器である。1はB類である。区画内には縄文を充填するが、意匠の全容は不明である。2はD類である。

2. 小壁穴

SK-006 (第78図, 図版15・65・66・79)

遺構 (3)A区北部, G07グリッド中央東寄りに位置する。周囲には円形土坑であるSK-004, 005, 014が存在する。重複する遺構はないが、南西側上層の一部が建物の基礎により破壊されている。規模は検出面が1.62m×1.58m, 底面が1.43m×1.34mで、平面形状は楕円状の円形である。深さは最大0.95mで、壁面は垂直に立ち上がっている。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められない。覆土は上部が攪乱されているが、中位以下についての遺存状況は良好である。上層が暗褐色土, 中層が黒褐色土, 下層が暗褐色土で、いずれもロームブロックを含んでいる。覆土の状況からみて、人為的な埋戻しの可能性がある。

遺物 破片が大多数を占めるが、量的には比較的多い。ほとんどが縄文土器である。このほか打製石斧が1点出土した。いずれも覆土上層ないし中層からの出土である。1~11は縄文土器である。1はA類で、平縁である。無文帯は幅広く、口縁部文様帯に浅い沈線による楕円状区画を配し、区画内に縄文を充填す



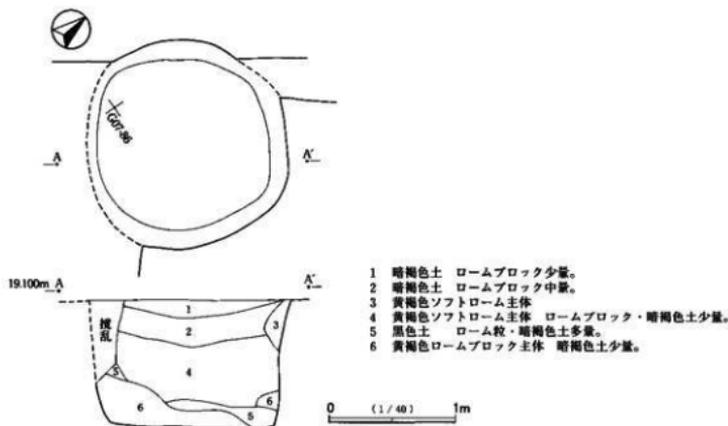
第78図 SK-006

る。2はB類で、縄文を地文とする。胴部上位に縦長の楕円状区画と長方形区画を配し、下位には懸垂文を施す。文様帯間は横方向の単沈線により区画される。上位の楕円状区画外と方形区画内の地文を磨り消す。3～8はC類である。3は平緑で、縄文を地文とし、渦巻状意匠を配するものと考えられるが、全容は不明である。4は地文はなく、意匠は不明である。5は縄文を地文とし、渦巻状意匠を描くものと考えられる。6は縄文を地文とし、懸垂文を施すものである。7は平緑で、A類となる可能性がある。8は平緑で、壺あるいは鉢と考えられる。口縁部は非常に強く内向し、隆帯により幅広の無文部を描出する。体部には同心円状もしくは渦巻状の意匠を描き、口縁下端の隆帯と接する部分には、横方向から細い棒状工具により穿孔する。全面的に地文はないが、外面には赤彩の痕跡が残る。9・10は壺もしくは鉢と考えられ、無文である。9はやや強く内湾し、やや厚手である。10はやや強く外反し、薄手で、口縁端部は丸みを帯びる。11はやや薄手である。底面は平坦で、ヘラナデにより丁寧に調整されている。外周部はほとんど磨耗しない。12は砂岩製の打製石斧である。概形は撥形と考えられるが、刃部の調整が粗いことから、磨製石斧の未製品の可能性もある。

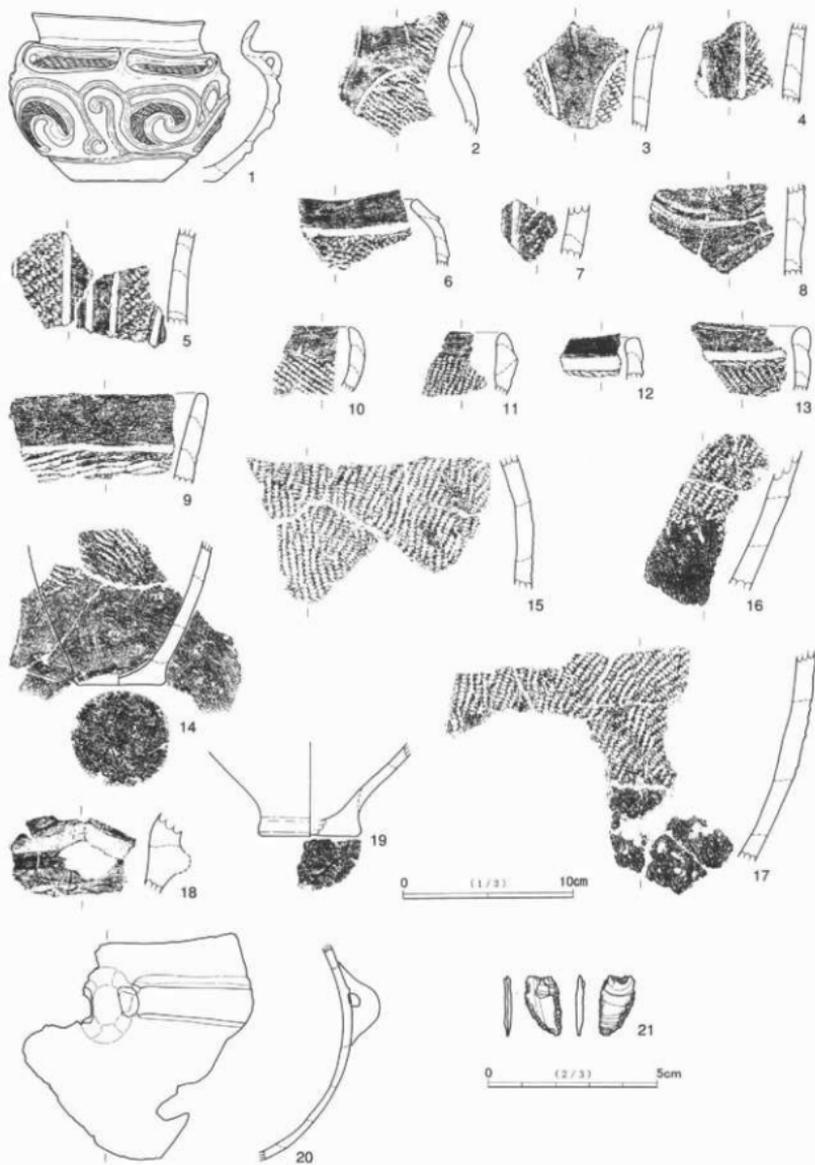
SK-008 (第79・80図, 図版15・66・67・78)

遺構 (3)A区北部, G07グリッド中央南寄りに位置する。周囲にはSI-001, 小堅穴であるSK-015, 057や円形土坑であるSK-056など多くの遺構が存在する。重複する遺構はないが、南側の一部が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が1.66m×1.35m, 底面が1.5mで、平面形状は隅丸方形状の円形である。深さは最大1.05mで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められない。覆土は上層が暗褐色土, 中層が黄褐色ソフトローム主体層, 下層が黒色土ないし黄褐色ソフトローム主体層で、いずれもロームブロックを含んでいる。人為的な埋戻しの可能性が高い。

遺物 量は多いが、ほとんどが上層から出土している。大部分が縄文土器であるが、剥片が1点出土した。1～20は縄文土器である。1は小形の鉢で、半分程度遺存する。口縁は平緑でやや低く、弱く外反する。体部は強く張るが、背は低く、全体的に上下につぶれたような器形である。肩部には小さな橋状突起を6



第79図 SK-008(1)



第80图 SK-008:2

か所貼り付け、その間に深い沈線による楕円状区画を配する。体部には沈線により主文様として渦巻状意匠を描き、その間を蕨手状の意匠で繋ぐ構成をとる。肩部の楕円状区画内と体部の渦巻状区画内には縄文を充填する。文様部分を除き全面がミガキにより調整される丁寧なつくりである。底面は平坦で、ヘラナデにより調整され、外周部は磨耗しない。2～5はB類で、いずれも縄文を地文とする。2は縦長の楕円状区画もしくは対向U字状文を施すもので、区画外の地文を磨り消す。3は対向U字状文を施すもので、区画外の地文を磨り消す。4・5は懸垂文を施すもので、懸垂文内の地文を磨り消すが、5は懸垂文内に単沈線を追加する。6～8はC類で、6・7は縄文を地文とする。6は平緑で強く内湾する。7は懸垂文、8は渦巻状意匠を描くものである。9～17はD類である。9は平緑である。無文帯は幅広く、沈線により画される。10は平緑で強く内湾する。11は平緑ではほぼ直立する。12・13は平緑で、いずれもほぼ直立する。14は薄手の底部で、胴部は急角度で立ち上がる。地文は外面の中心以上にはのみ施される。底面はおおむね平坦で、ヘラナデにより調整され、胴部下端部はごく僅かに磨耗する。15～17は同一個体と考えられる。16・17は上半部にはのみ地文が施される。18は波状緑で、突起あるいは把手がつくものと考えられるが、剥落しているため不明である。19は無文の底部で、胴部はやや強く開く。底面はおおむね平坦で、ヘラナデにより調整され、胴部下端部は僅かに磨耗する。20は薄手の鉢で、体部は球状である。中心には簀状に隆帯が貼り付けられ、環状突起がつく。地文は無文である。21は黒曜石製の二次加工の認められる剥片で、両側縁を細かく調整している。

SK-015 (第81図, 図版15・78)

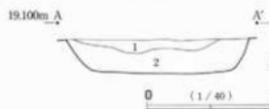
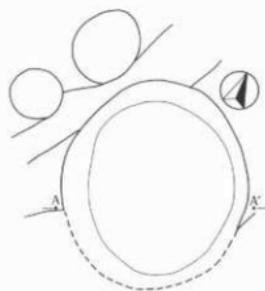
遺構 (3)A区北部, G07グリッド中央南端付近に位置する。周囲にはSI-001, 小竪穴であるSK-008が存在する。重複する遺構はないが、西側の一部と南側が建物の基礎などにより破壊されている。遺構の規模は検出面が幅1.48m, 底面が1.37m×1.15mで、平面形状は楕円形である。深さは0.27mで、壁面はやや斜めに立ち上がっているが、浅いためはっきりしない。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められない。覆土は上層が暗褐色土, 下層が褐色ソフトローム主体層であるが、堆積状況は不明である。

遺物 僅少である。土器はすべて細片で、図示しうるものはない。1は黒曜石製の石鏃で、凹基無茎だが、一見すると平基にみえる。全体的に調整が粗く、形状も安定していない。

SK-020 (第81図, 図版15・67)

遺構 (3)A区北部, G08グリッド中央北端に位置する。周囲にはSI-002, 円形土坑であるSK-024, 026が存在する。重複する遺構はないが、建物の基礎により中央付近が破壊されている。遺構の規模は検出面が1.65m×1.59m, 底面が1.38m×1.08mで、平面形状は楕円形に近い。周辺の削平が顕著であり、深さは0.12m程度で、壁面は斜めに立ち上がっている。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められない。覆土は上層が暗褐色土, 下層が褐色土で、浅いため堆積状況は不明である。

遺物 攪乱が著しいため量は僅少で、図示したものがすべてで、いずれも縄文土器である。1は縄文を地文とし、隆帯を施すものであるが、意匠は不明である。2は縄文を地文とし、隆帯には棒状工具による刺突が施される。

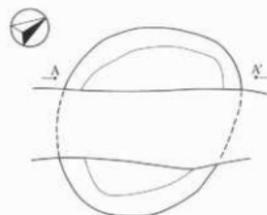


SK-015

- 1 暗褐色土 ローム粒少量。
2 褐色ソフトローム主体 暗褐色土少量。



0 (4/5) 4cm



SK-020

- 1 暗褐色土 ローム粒微量。
2 褐色土 ローム粒・暗褐色土多量。



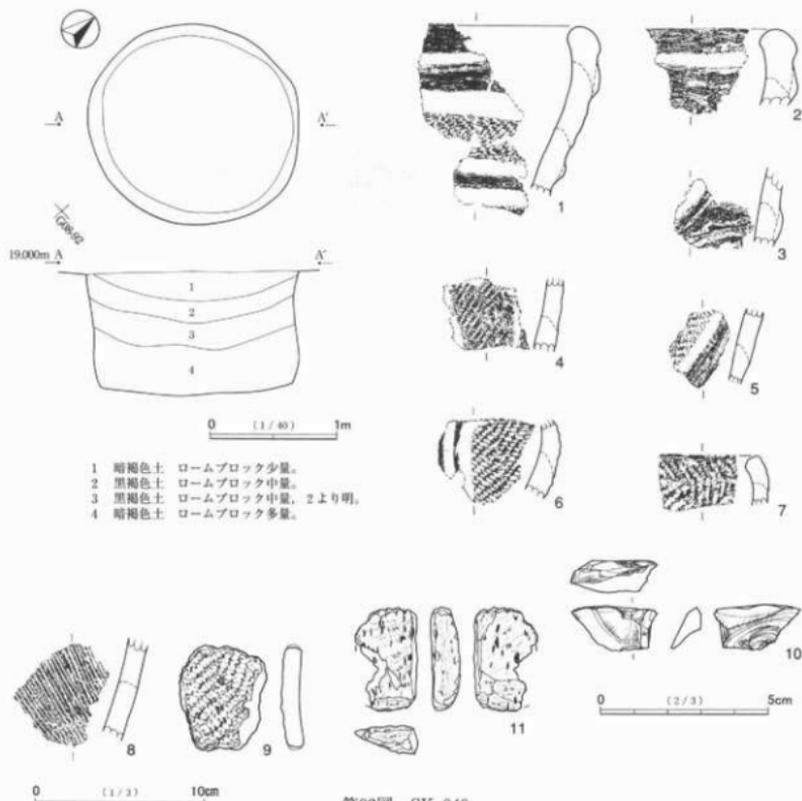
0 (1/3) 10cm

第81図 SK-015・SK-020

SK-049 (第82図, 図版15・67・78)

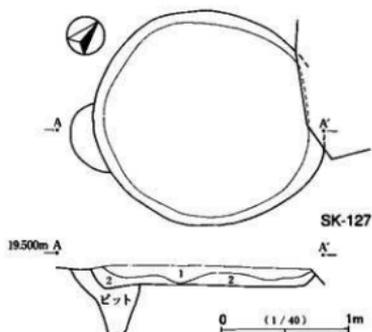
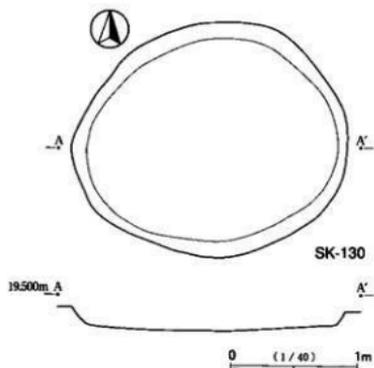
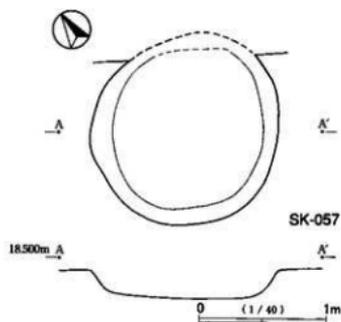
遺構 (3)A区中央部北寄り, G08グリッド南西端付近に位置する。周囲には円形土坑であるSK-037, 051, 052のほか, いくつかのピットが存在するが, 重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が1.68m×1.52m, 底面が1.58m×1.4mで, 平面形状は僅かに楕円状となる円形である。深さは1.01mで, 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦で, 軟弱ではないが硬化面は認められない。覆土は上層が暗褐色土, 中層が黒褐色土, 下層が暗褐色土で, いずれもロームブロックを含むが, 下層が最も多く, 中層がそれに次ぐ。人為的な埋戻しの可能性がある。

遺物 破片がほとんどだが, 量は少ない。土器以外には土製品, 剥片, 軽石製品が出土している。いずれも覆土上層~中層からの出土である。1~8は縄文土器である。1~3はC類で, 同一個体となる可能性が高い。口縁は平縁で, 口縁部文様帯には隆帯により楕円状もしくは長方形の区画を配し, 縄文を充填する。文様構成ははっきりしないが, A類となる可能性がある。4~6はB類で, いずれも縄文を地文とする。4は懸垂文を施し, 懸垂文内の地文を磨り消す。5は渦巻状文匠を描くものである。6は渦巻状

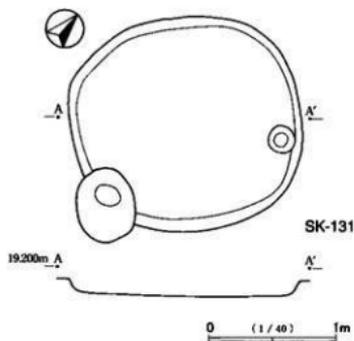


第82図 SK-049

108-77



- 1 暗褐色土 褐色土粒微量。
2 褐色土 褐色土粒少量。



第83図 SK-057・SK-127・SK-130・SK-131

もしくは楕円状意匠を描き、区画外の地文を磨り消す。7はD類で、平縁であるが、口縁部と胴部の地文は別方向で施文される。8はE類で、やや幅広く密な条線を斜方向に施す。9は土器片錘である。素材はやや薄手で全面に縄文を施文する。切欠部は鈍く浅い。外縁部は比較的丁寧に粗割されるが、ほとんど磨耗されな。10は黒曜石製の剥片で、二次加工の痕跡などは認められない。

SK-057 (第83図, 図版15・68)

遺構 (3)A区北部, G07グリッド南東部に位置する。周囲にはSI-001, 小竪穴であるSK-006, 008, 円形土坑であるSK-056が存在する。重複する遺構はないが、北西側の一部が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が幅1.46m, 底面が1.36m×1.2mで、平面形状は僅かに楕円状の円形である。深さは0.23mと浅く、壁面は現状ではやや斜めに立ち上がるが、はっきりしない。底面はおおむね平坦で、軟弱ではないが硬化面は認められない。

遺物 量は僅少で、図示したものがすべてである。いずれも覆土中から出土している。1は平縁で、全面に縄文を施すが、口縁部と胴部で施文方向が異なる。2は厚手で全面に縄文が施される。

SK-127 (第83図, 図版15)

遺構 (3)B区西部, H11グリッド中央部北端付近に位置する。周囲にはいくつかのピットが存在し、そのうちの1基と重複するが、本遺構のほうが新しく、北東部の一部が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が幅1.72m, 底面が幅1.55mで、平面形状は整った楕円形である。深さは0.25mと浅く、壁面は現状ではやや斜めに立ち上がる。底面は平坦で、硬化面は認められない。覆土は上層が暗褐色土、下層は褐色土である。自然堆積と考えられる。付帯施設は検出されなかった。

遺物 出土しなかった。

SK-130 (第83図, 図版15)

遺構 (3)B区西部, H11グリッド北東部に位置する。周囲にはいくつかのピットのほか、小竪穴であるSK-131, 円形土坑であるSK-129が存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が2.18m×1.91m, 底面が1.99m×1.64mで、平面形状はやや不整な楕円形である。深さは0.38mと浅く、壁面は現状では斜めに立ち上がっているが、はっきりしない。底面はおおむね平坦で、軟弱ではないが硬化面は認められない。

遺物 出土しなかった。

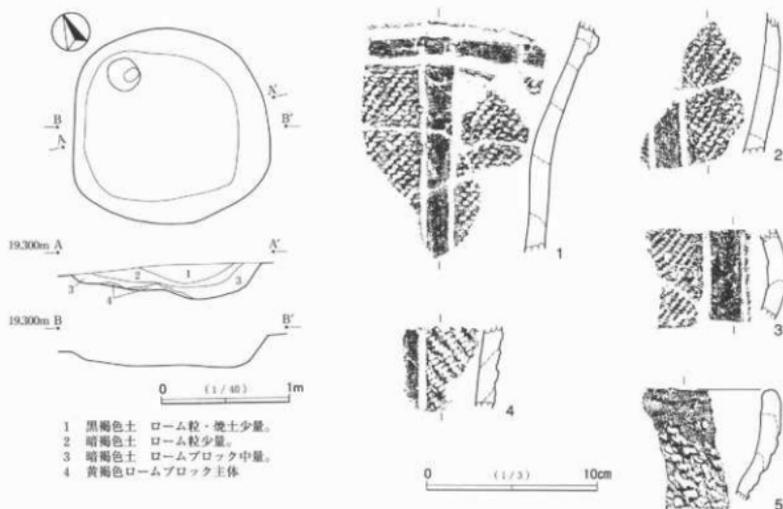
SK-131 (第83図)

遺構 (3)B区西部, H11グリッド北東端付近に位置する。周囲にはいくつかのピットのほか、小竪穴であるSK-130, 円形土坑であるSK-129が存在する。ピットと重複するが、新旧関係についての確認はできなかった。遺構の規模は検出面が1.82m×1.7m, 底面が1.69m×1.5mで、平面形状はほぼ円形である。深さは0.21mと浅く、壁面は現状ではやや斜めに立ち上がっている。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められない。覆土は調査時に記載がなく、不明である。また、北東側の壁際に小ピットが検出されたが、本遺構に伴うものか否か不明である。

遺物 出土しなかった。

SK-142 (第84図, 図版16・68)

遺構 (3)C区北部, H12グリッド北西部に位置する。周囲にはSI-011, 小竪穴であるSK-143が存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が1.56m×1.54m, 底面が1.2m×1.18mで、平面形状は



第84図 SK-142

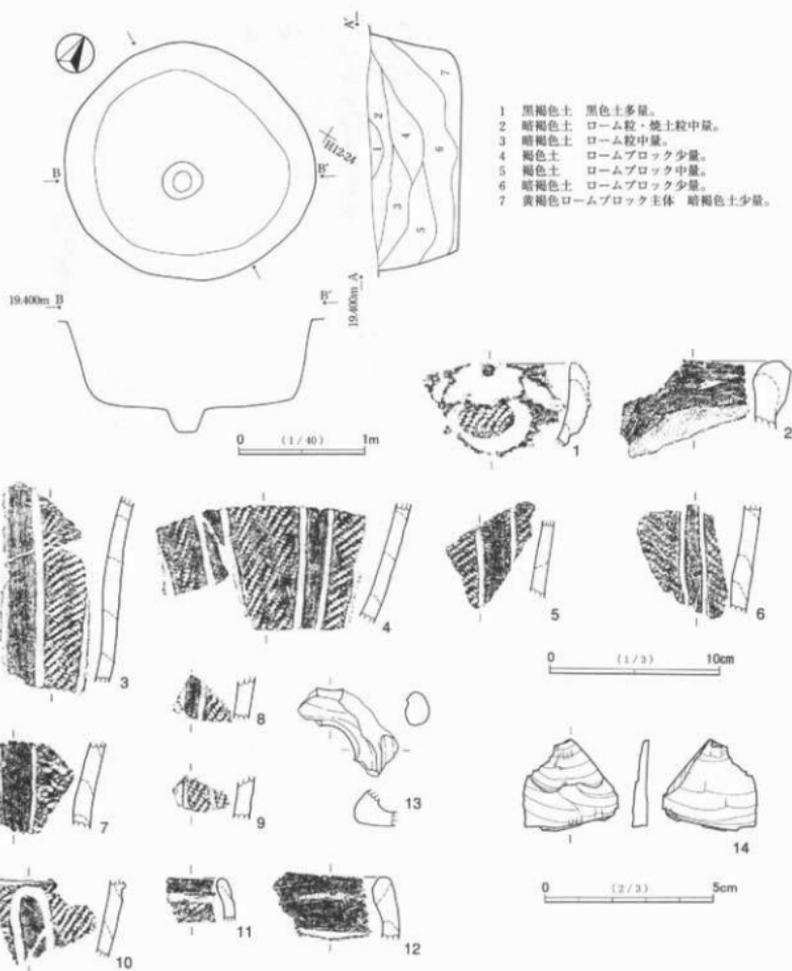
やや不整な隅丸方形である。深さは0.29mと浅く、壁面は現状では斜めに立ち上がっている。底面は南側がやや低くなっており、平坦ではなく、硬化面は認められなかった。底面の北側コーナー付近に小ピットが検出されているが、本遺構に伴うか否かは判然としない。覆土は上層が黒褐色土、中層が暗褐色土、下層が黄褐色ロームブロック主体層で、いずれもローム粒を含むが、上層のみ焼土粒が混入する。自然堆積の可能性が高い。

遺物 図示したものがすべてである。いずれも縄文土器である。1・2は同一個体と考えられる。縄文を地文とするA類で、胴部文様帯には沈線により懸垂文を施し、懸垂文内の地文を磨り消す。口縁部文様帯の意匠は不明だが、隆帯による区画を配する。3・4はB類である。いずれも縄文を地文とし、懸垂文を施すが、懸垂文内の地文を磨り消す。5は平緑で、口縁端部は肥厚し、やや内湾して受け口状となる。粗い縄文を地文とする。

SK-143 (第85図, 図版16・68・78)

遺構 (3)C区北部、H12グリッド北西部に位置する。周囲にはいくつかのピットが存在するほか、小竪穴であるSK-142が存在し、SI-011と隣接するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が1.98m×1.87m、底面が1.54m×1.46mで、平面形状はおおむね円形である。深さは0.73mで、壁面は現状ではほぼ垂直に立ち上がっている。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められない。この他、底面のほぼ中央付近に小ピットが検出されており、本遺構に伴うものと考えられる。覆土は上層が黒褐色土、中層が褐色土ないし暗褐色土、下層が黄褐色ロームブロック主体層である。上層には焼土をやや多く含み、中層～下層にはロームブロックを少なからず含んでいる。人為的な埋戻しの可能性がある。

遺物 量は比較的多いが、ほとんどが覆土上層～中層からの出土である。1～13は縄文土器である。1・



第85図 SK-143

2はA類である。1は波状縁で、波頂部外面には突起あるいは把手が存在したものと考えられるが、剥離しているため不明である。口縁部文様帯は沈線により楕円状区画を配し、縄文を充填する。2は平縁で、口縁部文様帯に隆帯による区画を配するが、形状は不明である。3～10はB類で、いずれも縄文を地文とする。3～8は懸垂文を施し、内部の地文を磨り消す。懸垂文は3・7が幅広く、他は狭い。10は平縁で、地文は口唇部に達する。胴部に対向U字状文を施し、区画外の地文を磨り消す。11・12はD類で、いずれ

も平縁である。11は無文帯がナゾリ状の沈線で画される。12は無文帯が広く、沈縁で画される。13は把手で、隆帯を配した素環状と考えられる。14はチャート製の剥片で、二次調整の痕跡等は認められないが、やや強く被熱している。剥離面も被熱しており、剥片となって後に火を受けたものと考えられる。

SK-161 (第86図, 図版16)

遺構 (3)D区東寄り, G15グリッド北西隅付近に位置する。周囲にはいくつかのピットのほかSI-016, 017, 小堅穴であるSK-162などが存在する。重複する遺構はないが、北側が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が長さ2.83m, 底面が長さ2.59mで、平面形状は東西に長い楕円形である。深さは0.22mで、壁面は現状では斜めに立ち上がる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められない。この他、南側の壁際にピットが、中央西側と東壁付近に小ピットが検出されている。覆土は上層が暗褐色土、下層が褐色土である。浅いためははっきりしないが、自然堆積の様相を示している。また、覆土の状況は近接するSK-162と酷似する。

遺物 出土しなかった。

SK-162 (第86図, 図版16)

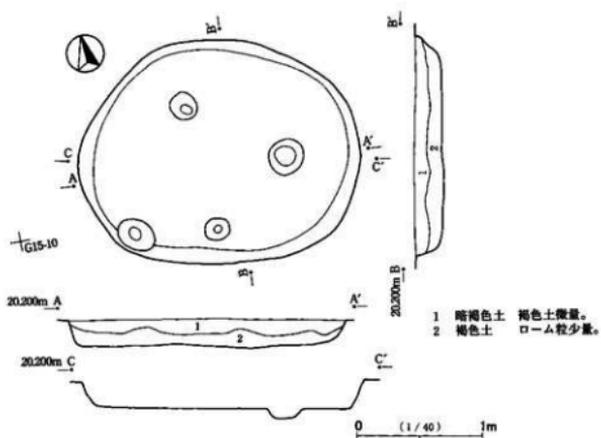
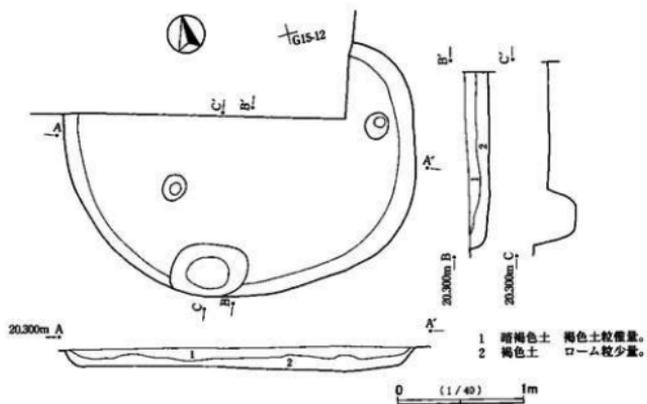
遺構 (3)D区東寄り, G15グリッド北西隅付近に位置する。周囲にはSI-016, 017, 小堅穴であるSK-161が存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が $2.28\text{m} \times 1.82\text{m}$, 底面が $2.06\text{m} \times 1.64\text{m}$ で、平面形状は北西-南東に長い楕円形である。この周囲は削平が著しい場所であり、深さは0.23mと浅い。壁面は現状ではやや斜めに立ち上がるが、本来は垂直に近かったものと考えられる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められない。内部にいくつかの小ピットが検出されている。おそらく本遺構に伴うものとなろう。覆土は上層が暗褐色土、下層が褐色土で、自然堆積の様相を示している。また、覆土の状況は近接するSK-161と酷似する。

遺物 出土しなかった。

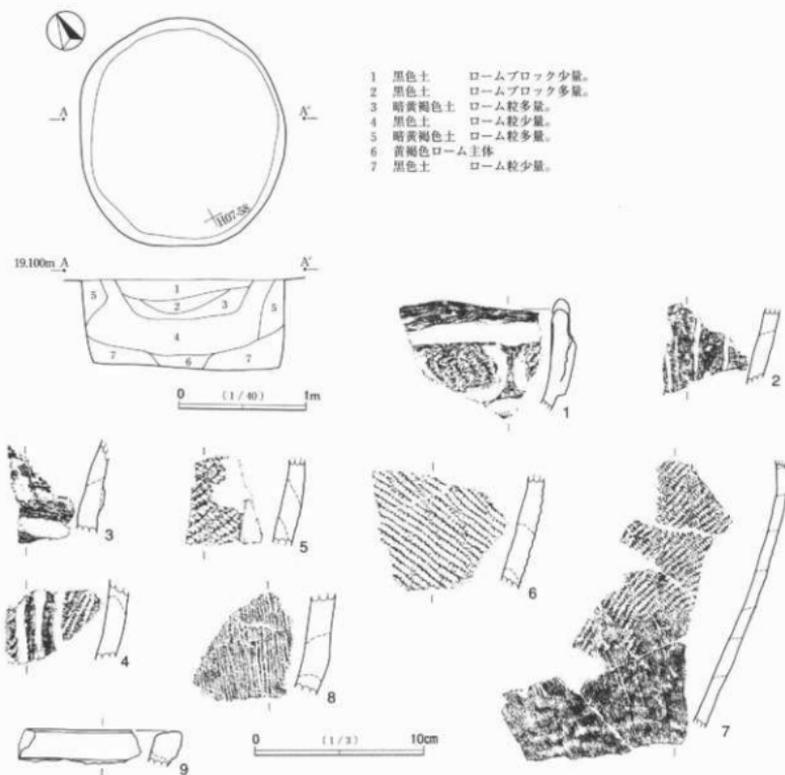
SK-174 (第87図, 図版16・69)

遺構 (8)区中央部, H07グリッド中央東寄りに位置する。周囲の遺構はまばらで、近接する時期の遺構はなく、重複する遺構もない。遺構の規模は検出面が $1.82\text{m} \times 1.66\text{m}$, 底面が $1.62\text{m} \times 1.48\text{m}$ で、平面形状は比較的整った円形である。この周囲は削平が著しい場所であるが、深さは0.73mあり、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。底面はおおむね平坦で、硬化面は検出されていない。覆土は上層~中層が黒色土、下層が暗黄褐色土ないし黒色土で、いずれの層もローム粒を少なからず含み、特に中層と下層にはロームブロックを多く含んでおり、人為による埋戻しと考えられる。

遺物 量はそれほど多くなく、図示したものがほぼすべてである。いずれも縄文土器で、覆土上層~中層から出土した。1はA類で波状縁で、口縁部文様帯には隆帯による楕円状区画を配し、縄文を充填する。胴部文様帯は不明だが、文様帯間には無文帯が存在するものと考えられる。2は縄文を地文とするB類である。懸垂文を施し、内部の地文を磨り消す。3~5はC類で縄文を地文とする。3は意匠は不明だが、横方向の隆帯により上下を区画する。4は2条の隆帯により渦巻状意匠を配するものと考えられる。5は懸垂文であろうか。6・7はD類で、7は胴部中位以上のみ施文される。8はE類で、条線は3条単位である。9は平縁で口唇部は肥厚し、明瞭な端面を形成する。全面が無文だが、外面に赤彩の痕跡が残る。



第86図 SK-161・SK-162



第87図 SK-174

3. 円形土坑

SK-010 (第88・93図, 図版16・69)

遺構 (3)A区北部, G08グリッド中央北端付近に位置する。周囲にはピットのほか, SI-001, 002, 小竪穴であるSK-020, 円形土坑であるSK-011, 024が存在する。重複する遺構はないが, 上層部分が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が径1.14m, 底面が径0.94mで, 平面形状は比較的整った円形である。深さは0.5mで, 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦で, 硬化面は認められない。覆土は上層が暗褐色土, 中層が暗褐色土を含む混土貝層, 下層が暗褐色土で, 上層と下層にはローム粒が混入し, 人為による埋戻しの可能性が高い。混土貝層は中央部分に限られ, 外周部分に暗褐色土が入るが, この部分には貝は混入しない。内容については後述する(第4節)。

遺物 量は少ない。図示し得なかったが称名寺式の小破片が多く, 他に加曾利E式の細片を混入する。

1・2は無文で厚手の底部で, 胴部はやや急角度で立ち上がる。1については不明だが, 2の底面はヘラ



SK-010

19.000m A

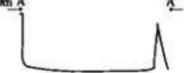


- | | |
|----------------|----------------|
| 1 暗褐色土 ローム粒少量。 | 5 暗褐色土 ローム粒中量。 |
| 2 暗褐色土(混土貝層) | 6 暗褐色土 ローム粒微量。 |
| 3 暗褐色土(混土貝層) | 7 黄褐色土ハードローム主体 |
| 4 暗褐色土(混土貝層) | |



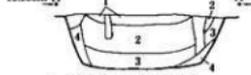
SK-014

19.000m A



SK-023

19.100m A



- | |
|---------------|
| 1 暗褐色土 黒色土少量。 |
| 2 褐色土 ローム粒少量。 |
| 3 褐色土 ローム粒少量。 |
| 4 黄褐色ローム主体 |

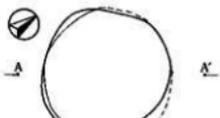


SK-024

19.100m A



- | |
|------------------------|
| 1 暗褐色土 |
| 2 暗褐色土 ロームブロック少量。 |
| 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック中量。 |
| 4 黄褐色ハードローム主体 |



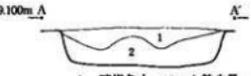
SK-056

18.500m A

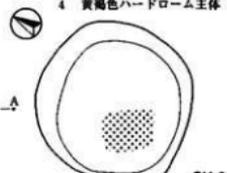


SK-060

19.100m A

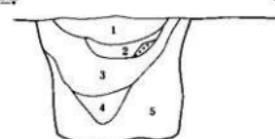


- | |
|--------------------|
| 1 暗褐色土 ローム粒少量。 |
| 2 黄褐色ローム主体 暗褐色土少量。 |

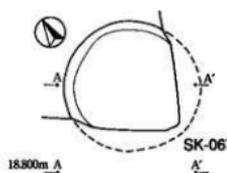


SK-063

18.800m A

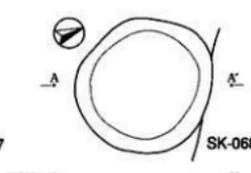


- | |
|----------------|
| 1 暗褐色土 |
| 2 黒色土 貝ブロック含む。 |
| 3 暗褐色土 ローム粒多量。 |
| 4 黒褐色土 ローム粒少量。 |
| 5 褐色土 ローム粒少量。 |



SK-067

18.800m A

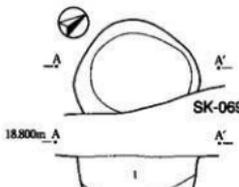


SK-068

18.800m A

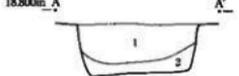


- | |
|-------------------|
| 1 暗褐色土 ロームブロック多量。 |
| 2 黒褐色土 ロームブロック中量。 |
| 3 褐色土 ロームブロック多量。 |

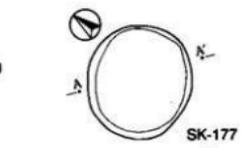


SK-069

18.800m A

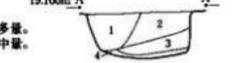


- | |
|-------------------|
| 1 褐色土 ロームブロック多量。 |
| 2 黒褐色土 ロームブロック中量。 |



SK-177

19.100m A



- | |
|-----------------|
| 1 黄褐色ローム主体 |
| 2 暗黄褐色土 ローム粒多量。 |
| 3 暗褐色土 ローム粒少量。 |
| 4 黄褐色ローム粒主体 |

0 (1/40) 1m

第88図 円形土坑(1)

ナデにより調整される。いずれも胴部下端は若干磨耗している。

SK-014 (第88・93図, 図版69)

遺構 (3)A区北部, G07グリッド東寄りに位置する。周囲には小堅穴であるSK-006, 円形土坑であるSK-004, 005が存在する。方形土坑であるSK-013と重複しているが, 調査時の所見がなく, 新旧関係は不明である。また, 北側の1/2以上が建物の基礎により破壊されている。規模は不明だが, 検出面・底面共に径1.0m程度で, 平面形状は整った円形と考えられる。深さは最大0.46mで, 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で, 硬化面は認められない。

遺物 すべて縄文土器で, 量は僅少である。図示したものはいずれも縄文を地文とし, 懸垂文を施すものであるが, 3は隆帯, 4は沈線による。また, 4は懸垂文内の地文を磨り消す。

SK-023 (第88・93図, 図版16・69)

遺構 (3)A区中央付近, G08グリッド西寄りに位置する。周囲には, 円形土坑であるSK-033, 043が存在する。重複する遺構はないが, 南西側の1/2程度が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が幅1.24m, 底面が幅0.9mで, 平面形状は不整な円形である。深さは0.41mで, 壁面はやや斜めに立ち上がる。底面はおおむね平坦で, 硬化面は認められない。覆土は上層が暗褐色土, 中層が褐色土, 下層が褐色土で, ローム粒を含むが下層で顕著である。自然堆積と考えられる。

遺物 すべて縄文土器で, 量は僅少である。図示したものはいずれもB類で, 縄文を地文とする。5は波状緑で, 波頂部はやや丸みを帯びる。口縁部には方形区画が配され, 内部の地文を磨り消す。6は対向U字状文を施すものと考えられ, 区画外の地文を磨り消す。

SK-024 (第88図, 図版17)

遺構 (3)A区北部, G08グリッド北端付近に位置する。周囲には複数のピットのほか, SI-001, 002, 小堅穴であるSK-020, 円形土坑であるSK-010, 011などが存在するが, 重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が $1.08\text{m} \times 0.8\text{m}$, 底面が $0.98\text{m} \times 0.88\text{m}$ で, 平面形状は比較的整った楕円状の円形である。深さは最大0.5mで, 壁面はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦で, 硬化面は認められない。覆土は上層～中層が暗褐色土, 下層が黄褐色ハードローム主体層であるが, 中層にはロームブロックを少なからず含んでいる。人為による埋戻しの可能性がある。

遺物 出土しなかった。

SK-056 (第88・93図, 図版17・70)

遺構 (3)A区北部, G07グリッド南寄りに位置する。周囲には小堅穴であるSK-008, 057が存在するが重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が $1.06\text{m} \times 1.0\text{m}$, 底面が $1.04\text{m} \times 1.03\text{m}$ で, 平面形状は比較的整った円形である。深さは最大0.48mで, 壁面は垂直に立ち上がるが, 僅かにオーバーハングしており, 袋状に近い形状であった可能性がある。底面は平坦で, わずかに硬化している。

遺物 すべて縄文土器だが, 量は比較的多い。図示したものを以外はいずれも細片である。7はA類で, 波状緑であろうか。口縁部文様帯は隆帯による渦巻状意匠で, 縄文を充填する。8は縄文を地文とするB類で, 懸垂文を施し, 内部の地文を磨り消す。9はD類である。10は端状把手で, 全面に縄文を施す。11は波状緑の深鉢で, 小形である。波頂部に螺旋状の突起がつく。口縁は縄文を地文とし, 隆帯により文様を描出するが, 意匠は不明である。

SK-060 (第88図, 図版17)

遺構 (3)A区南部, F10グリッド北東端付近に位置する。このあたりは特に削平が著しい場所であり、遺構はまばらであるが、周囲にはSF-003が存在する。重複する遺構はないが、北東側の1/3が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が1.28m×1.12m、底面が長さ1.12mで、平面形状はやや楕円状の整った円形である。深さは最大0.32mで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、硬化面は認められない。覆土は上層が暗褐色土、下層が黄褐色ローム主体層である。自然堆積と考えられる。

遺物 図示しうる遺物は出土しなかった。

SK-063 (第88・93図, 図版17・70・77・78)

遺構 (3)A区南部, F09グリッド中央西寄りに位置する。周囲にはピットと円形土坑であるSK-064が存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が1.24m×1.23m、底面は1.06m×0.95mで、平面形状は隅丸形状の円形である。深さは最大で1.0m、壁面は下部はほぼ垂直で、上部がやや斜めに立ち上がる。底面は平坦で、硬化面は認められなかった。覆土は上層が暗褐色土ないし黒色土、中層が暗褐色土ないし黒褐色土、下層が褐色土で、中層～下層にはロームブロックを含む。2層の下端には0.4m×0.3m、厚さ0.08m程度の混土貝層が認められるが、内容については後述する(第4節)。

遺物 比較的多いが、図示したものはすべて上層及び混土貝層から出土したものである。ほとんどが縄文土器だが、土製品と剥片が出土している。12～27は縄文土器である。12はA類で、隆帯により楕円状区画を配し、縄文を充填する。13～19はB類である。13～15は縄文を地文とし、懸垂文を施すもので、内部の地文を磨り消す。16・17は平緑で、いずれも口縁部には横位連繋縦線を配するが、16は区画内に粗い縄文を充填する。17は縄文を地文とし、沈線間の地文を磨り消す。18・19は縄文を地文とし、18は渦巻状意匠、19は山形意匠を描くもので、沈線間の地文を磨り消す。20～23はC類で、いずれも縄文を地文とする。20は懸垂文を施すもの、21・22は渦巻状あるいは楕円状の意匠を配するもので、22はA類となる可能性がある。24はD類で平緑である。25は無文の口縁部で平緑である。26・27は底部で、やや厚手である。胴部はやや急角度で立ち上がり、27の底面は平坦で、ヘラナダにより調整される。いずれも胴部下端部は若干磨耗する。28は土器片鏝で、D類の破片を縦位に使用する。切込みは浅いが鋭く、紐ズレの痕跡が残る。外縁部は比較的丁寧に粗割されるが、ほとんど研磨されない。左右両側縁の一部を欠く。29・30はチャート製の剥片で、30は裏面の下縁をやや細かく二次調整している。

SK-067 (第88・94図, 図版17・71)

遺構 (3)A区南部, F09グリッド中央南寄りに位置する。周囲には円形土坑であるSK-068、069が隣接する。重複する遺構はないが、南半部の一部が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は底面が径0.9mで、平面形状は整った円形と考えられる。深さは最大で0.54m、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められなかった。

遺物 図示したものがすべてで、いずれも縄文土器である。31はA類で、口縁部文様帯に隆帯による楕円状区画と横D字状区画を交互に配し、内部に縄文を充填する。胴部文様帯は縄文が地文で、沈線により懸垂文を施し、内部の地文を磨り消す。32～36はC類で、33～36は縄文を地文とする。32・33は意匠は不明である。34～36は幅広い懸垂文を施すもので、内部の地文を磨り消す。37・38は平緑である。

SK-068 (第88・94図, 図版17・71・78)

遺構 (3)A区南部, F09グリッド中央南寄りに位置する。周囲には円形土坑であるSK-067、069が隣接

する。重複する遺構はないが、北側の一部が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が1.09m×1.01m、底面が0.88m×0.81mで、平面形状は比較的整った円形である。深さは最大0.47m、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められない。覆土は上層が暗褐色土、中層が黒褐色土、下層が褐色土で、いずれもロームブロックを多く含む。人為的な埋戻しであろう。

遺物 比較的多いが、ほとんどは細片で、図示し得たのは一部である。いずれも覆土上層からまともに出て出土した。縄文土器が大部分だが、剥片が1点出土している。39～45は縄文土器である。39～41はC類である。39は縦楕円状の区画を配し、区画外に縄文を施す。40・41は縄文を地文とし、懸垂文を施すもので、内部の地文を磨り消す。42～45はD類である。42・45は波状線、44は平線である。46はチャート製の剥片である。

SK-069 (第88・94・106図、図版17・71・77・82)

遺構 (3)A区南部、F09グリッド中央南寄りに位置する。周囲には円形土坑であるSK-067、068が隣接する。重複する遺構はないが、東側の1/3程度が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が径1.0m、底面が径0.8mで、平面形状は比較的整った円形である。深さは最大で0.43m、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められなかった。覆土は上層～中層が褐色土、下層が黒褐色土で、ロームブロックをやや多く含む。人為的な埋戻しと考えられる。

遺物 比較的多いが、ほとんどは細片で、図示しえたのは一部である。いずれも覆土上層からまともに出て出土した。縄文土器のほか、土製円板が見られる。47～56は縄文土器である。47はA類で、2条の隆帯により区画を配し、縄文を充填するもので、意匠は不明である。48～50はB類で、いずれも縄文を地文とする。48は懸垂文を施し、懸垂文内の地文を磨り消す。49は対向U字状の意匠を描くが、磨消ではなく、地文に沿っているが、範囲が若干ずれているようである。50は懸垂文を施すが、地文は磨り消されない。51は縄文を地文とするC類で、懸垂文を施し、内部の地文を磨り消す。52～55はD類である。52～54はおそらく平線である。55は副部である。56はE類としたが、沈線による懸垂文が認められるため、本来はB類に区分すべきであろう。57～59は土製円板である。いずれも外縁部は比較的丁寧に研磨され、丸みが強い。素材は57・58がD類、59はE類である。

SK-177 (第88・94図、図版18・71)

遺構 (8)区南部、H08グリッド中央西寄りに位置する。この周辺は特に削平が顕著な場所であり、近接する時期の遺構はなく、重複する遺構もない。遺構の規模は検出面が0.92m×0.83m、底面が0.82m×0.71mで、平面形状はやや楕円状の円形である。深さは最大0.38m、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められなかった。覆土は上層が暗褐色土、中層が暗褐色土、下層が黄褐色ローム主体層で、全体的にロームブロックの比率が高い。人為による埋戻しと考えられる。

遺物 図示したものがすべてである。いずれも縄文土器で、縄文を地文とし、懸垂文を施すが、60は沈線、61は隆帯による。なお60は懸垂文内の地文を磨り消し、懸垂文内に単沈線が追加される。

SK-124 (第89図)

遺構 (9)B区北東部、J10グリッド南西端付近に位置する。周囲にはピットが多く存在する。円形土坑であるSK-125と重複しており、土層観察では本遺構のほうが古い。遺構の規模は検出面が径1.04m、底面が径0.86mで、平面形状はやや楕円状の円形である。深さは最大で0.56mで、壁面はやや斜めに立ち上がる。底面は平坦で、硬化面は認められなかった。また、遺構の南側を中心に焼土ブロックが検出されている。

るが、検出面で確認されており、埋没後に形成されたものであることは間違いない。周囲のピットを含めた竪穴住居の炉跡となる可能性もあるが、調査段階での所見がないため、不明である。覆土は上層が暗褐色土ないし褐色土、中層～下層が褐色土で、上層には多量の焼土を含み、中層～下層にはローム粒が混入する。人為による埋戻しの可能性がある。また覆土、堆積状況共にSK-125と酷似する。

遺物 出土しなかった。

SK-125 (第89図)

遺構 (3)B区北東部、J10グリッド南西端付近に位置する。周囲にはピットが多く存在する。円形土坑であるSK-124と重複しており、土層観察では本遺構のほうが新しい。遺構の規模は検出面が径1.22m、底面が1.05m×0.94mで、平面形状はやや楕円状の円形である。深さは最大で0.9mで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、硬化面は認められなかった。また、遺構の北東側を中心とする広い範囲に焼土ブロックが検出されている。検出面で確認されているところから、埋没後に形成されたものであることは間違いない。周囲で検出されているピットを含めて考えた場合、竪穴住居の炉跡となる可能性も否定できない。覆土は上層が暗褐色土ないし褐色土、中層～下層が褐色土で、上層には多量の焼土を含み、中層～下層にはローム粒が混入する。人為による埋戻しの可能性がある。また覆土、堆積状況共にSK-124と酷似する。

遺物 出土しなかった。

SK-132 (第89図、図版18)

遺構 (3)B区中央付近、I11グリッド北西部に位置する。周囲には多くのピットや土坑が存在する。ピットのひとつと重複するが、調査時に記載がなく、新旧関係は不明である。遺構の規模は検出面が1.28m×1.22m、底面が0.89m×0.92mで、平面形状は整った円形である。深さは最大で0.36mと浅く、壁面は現状ではやや斜めに立ち上がる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められなかった。

遺物 出土しなかった。

SK-138 (第89図、図版18)

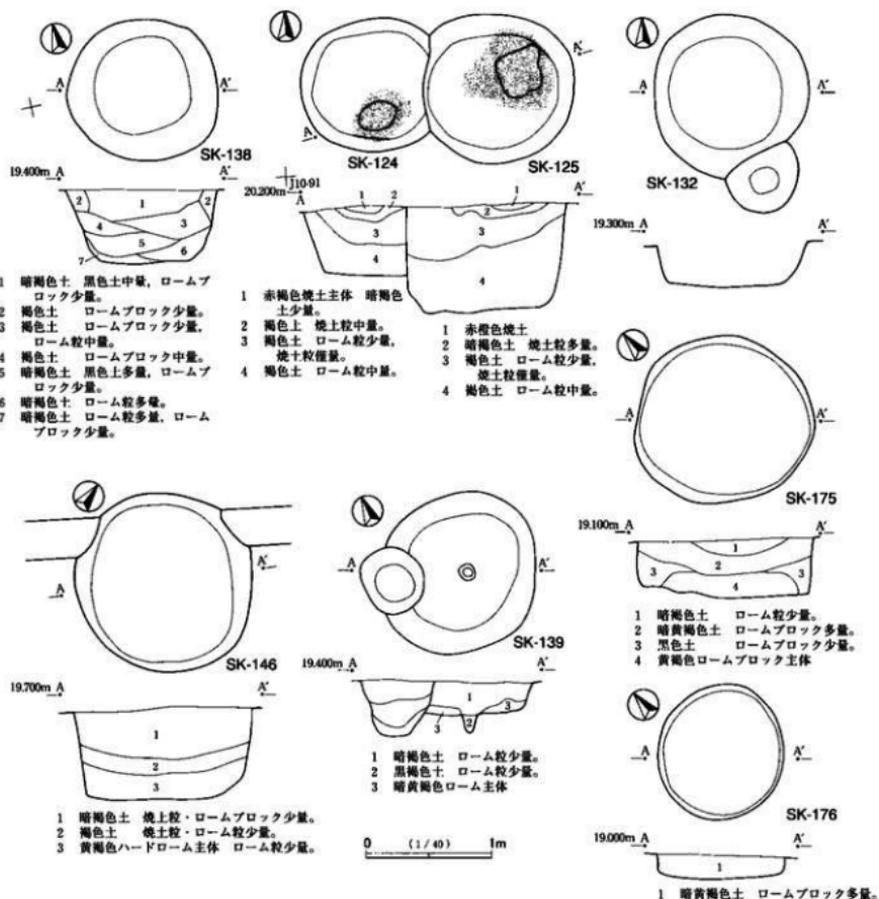
遺構 (3)C区北部、G12グリッド北東部に位置する。この周囲は削平が顕著な場所で、円形土坑であるSK-139が隣接するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が1.2m×1.14m、底面が0.77m×0.74mで、平面形状は不整形である。深さは最大で0.58m、壁面は斜めに立ち上がる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められない。覆土は上層が暗褐色土ないし黒色土、中層が褐色土、下層が暗褐色土で、いずれもロームブロックを少なからず含むが、中層～下層に多い。人為による埋戻しと考えられる。

遺物 出土しなかった。

SK-139 (第89・94図、図版18・72)

遺構 (3)C区北部、G12グリッド北東部に位置する。この周囲は削平が顕著な場所であるが、円形土坑であるSK-138が隣接する。ピットと重複するが、土層観察では本遺構のほうが古い。遺構の規模は検出面が1.36m×1.26m、底面が1.0m×0.87mで、平面形状はやや不整形である。深さは最大で0.27mと浅く、壁面は斜めに立ち上がる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められなかったが、遺構の中央付近に小ピットが認められる。覆土は上層～中層が暗褐色土、下層が暗褐色ローム主体層で、中央の小ピットは黒褐色土である。覆土の状況からみて、自然堆積の可能性がある。

遺物 量は少なくないが、細片が多い。すべて縄文土器で、縄文を地文とする。62～64はB類である。62



第89図 円形土坑(2)

は対向U字状文を配し、区画外の地文を磨り消す。63・64は同一個体で、懸垂文を施すが、地文は磨り消されない。65～67はC類で渦巻状意匠を配するが、66は隆帯の下端に沈線による懸垂文状の断片が見られることから、A類の可能性が高い。68～70はD類である。68は平縁、69は波状縁である。70は幅広の無文帯を沈線で画する。

SK-146 (第89図, 図版18)

遺構 (3)C区東部, H12グリッド中央部南寄りに位置する。周囲は削平が顕著な場所であり、近接する時期の遺構はない。重複する遺構もないが、北西の一部が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は

検出面が1.47m×1.29m、底面が1.41m×1.11mで、平面形状はやや楕円状の円形である。深さは最大0.72mで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められなかった。覆土は上層が暗褐色土、中層が褐色土、下層が黄褐色ローム主体層で、上層～中層には焼土粒を含む。また上層にロームブロックを少量含んでおり、人為による埋戻しの可能性がある。

遺物 出土しなかった。

SK-175 (第89・95図、図版18・72)

遺構 (8)区中央部、H07グリッド南東端付近に位置する。周囲は削平が顕著な場所であり、近接する時期の遺構は近隣にはないが、やや離れた場所にSI-020、円形土坑であるSK-176が存在する。遺構の規模は検出面が1.43m×1.31m、底面が1.33m×1.2mで、平面形状は整った円形である。深さは最大0.45mで、壁面は垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められなかった。覆土は上層が暗褐色土、中層が暗黄褐色土、下層が黒色土ないし黄褐色土ローム主体層で、中層以下にはロームブロックを含んでおり、人為による埋戻しの可能性がある。

遺物 図示したものがすべてである。いずれも縄文土器で、74を除き、縄文を地文とする。71・72はB類で、いずれも懸垂文を施すが、地文は磨り消されない。73～75はC類である。73は懸垂文を施すが、地文は磨り消されない。74は渦巻状意匠を配するもので、区画内に縄文を充填する。74は波状縁で、意匠ははっきりしないが、渦巻状であろうか。

SK-176 (第89・95図、図版18・72)

遺構 (8)区中央部、H07グリッド南東端付近に位置する。周囲は削平が顕著な場所であり、近接する時期の遺構は近隣にはないが、やや離れた場所に円形土坑であるSK-175が存在する。遺構の規模は検出面が1.09m×0.98m、底面が0.99m×0.91mで、平面形状は整った円形である。深さは最大0.18mと浅く、壁面は現状では垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦で、硬化面は認められなかった。覆土は暗黄褐色土の単層であり、堆積状況は不明である。

遺物 僅少である。図示したものがすべてで、縄文を地文とするB類である。76・77は懸垂文を施し、内部の地文を磨り消す。78は対向U字状文と懸垂文を交互に配するもので、区画外の地文を磨り消す。

SK-011 (第90・95図、図版19・72)

遺構 (3)A区北部、G07グリッド南東端付近に位置する。周囲にはSI-001、円形土坑であるSK-010、024が存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が1.37m×1.26m、底面が0.85m×0.79mで、平面形状は整った円形である。深さは最大0.22mで、壁面は現状では斜めに立ち上がる。底面は丸みを帯びた浅い皿状で、硬化面は認められない。覆土は上層が黒色土、下層が黒色土ないし暗黄褐色ローム主体層で、自然堆積と考えられる。

遺物 覆土中から縄文土器が出土したが、量は僅少で、図示したものがすべてである。79・80は縄文を地文とするC類である。79は波状縁で、口縁から延びる2条の隆帯により、渦巻状意匠もしくは同心円状の区画を施すものと考えられる。80は懸垂文を施すが、縄文の施文は隆帯上に及ぶ。81はE類で、条線は比較的細密である。

SK-039 (第90図、図版19)

遺構 (3)A区南部、F09グリッド北東寄りに位置する。周囲にはいくつかのピットが存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が1.4m×1.26m、底面が0.97m×0.81mで、平面形状は比較的整っ

た楕円状の円形である。深さは最大で0.26mと浅く、壁面は現状では斜めに立ち上がる。底面には比較的顕著な凹凸が認められる。

遺物 出土しなかった。

SK-073 (第90図, 図版19)

遺構 (3)B区東部, I11グリッド中央部東寄りに位置する。周囲にはいくつかのピットや土坑が存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が1.46m×1.28m、底面が1.2m×1.0mで、平面形状は隅丸形状の不整形の円形である。壁面は現状では斜めに立ち上がるが、深さが最大0.1mと非常に浅いためはっきりしない。底面はやや丸みを帯びた皿状である。

遺物 出土しなかった。

SK-116 (第90図, 図版19)

遺構 (3)B区北西部, H10グリッド中央付近に位置する。周囲にはいくつかのピットが存在し、このうちの1基と重複しているが、調査時の記載がないため、新旧関係は不明である。遺構の規模は検出面が1.19m×1.08m、底面が1.05m×0.82mで、平面形状はやや楕円状の円形である。深さは0.08mと非常に浅く、壁面の状態ははっきりしない。底面はおおむね平坦で、中央南寄りに小ピットが認められるが、本遺構に伴うか否かははっきりしない。

遺物 出土しなかった。

SK-119 (第90図)

遺構 (3)B区北東部, I10グリッド南東端付近に位置する。周囲にはいくつかのピットのほか、円形土坑であるSK-091, 092, やや離れた位置にSI-004が存在する。このうちのピット1基と重複するが、調査時の記載がないため、新旧関係は不明である。また、西側の一部が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が径1.33m、底面が1.21m×0.93mで、平面形状はやや楕円状の円形である。深さは0.63mで、壁面は急角度で立ち上がる。底面は平坦で、軟弱ではないが硬化面は認められなかった。覆土は上層が暗褐色土、下層が褐色土で、下層にはロームブロックを含む。自然堆積と考えられる。

遺物 若干の縄文土器が出土したが、細片のみであり、図示しうるものはない。

SK-144 (第90図, 図版19)

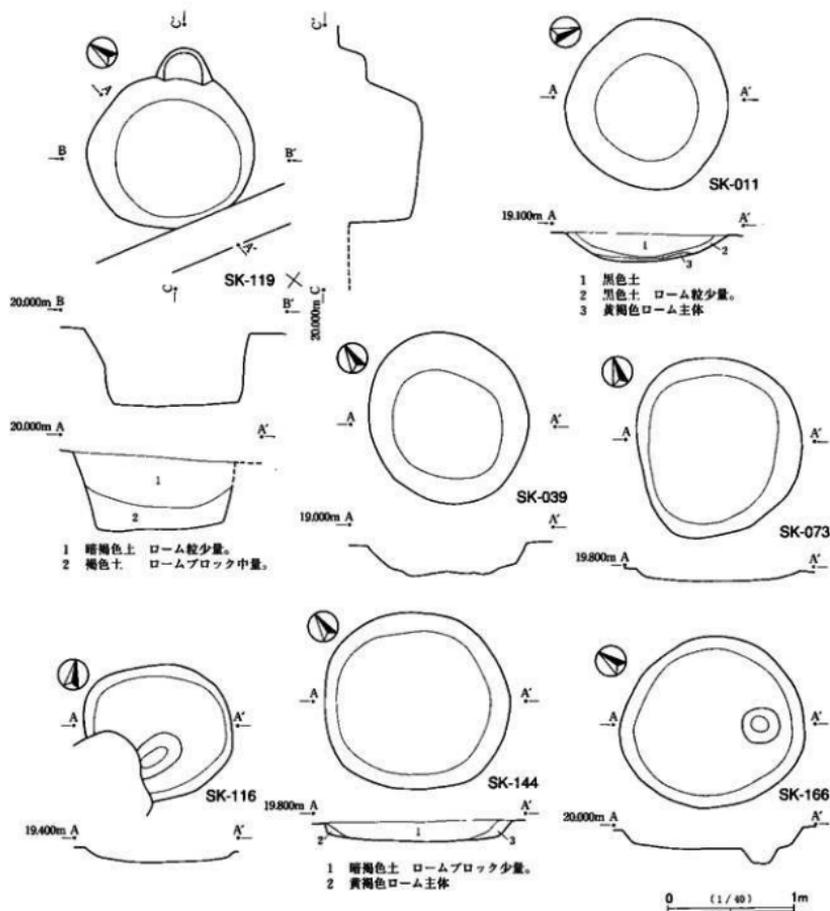
遺構 (3)C区南東部, H13グリッド北端付近に位置する。周囲にはいくつかのピットが存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が1.48m×1.41m、底面が1.23m×1.14mで、平面形状は比較的整った円形である。深さは最大で0.24mと浅く、壁面は現状では斜めに立ち上がる。底面はおおむね平坦だが、ごく僅かに丸みを帯びた皿状である。覆土は中央付近に暗褐色土、外周部に黄褐色ローム主体層が認められ、おおむね単層で把握できる。堆積状況ははっきりしないが、自然堆積であろう。

遺物 出土しなかった。

SK-166 (第90図)

遺構 (3)D区中央部, F15グリッド北東寄りに位置する。周囲にはいくつかのピットが存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は、検出面が1.46m×1.36m、底面が1.27m×1.16mで、平面形状はやや楕円状の整った円形である。深さは最大で0.16mと浅く、壁面は現状では斜めに立ち上がるが、はっきりしない。底面はおおむね平坦で、南東部に小ピットが認められる。

遺物 出土しなかった。

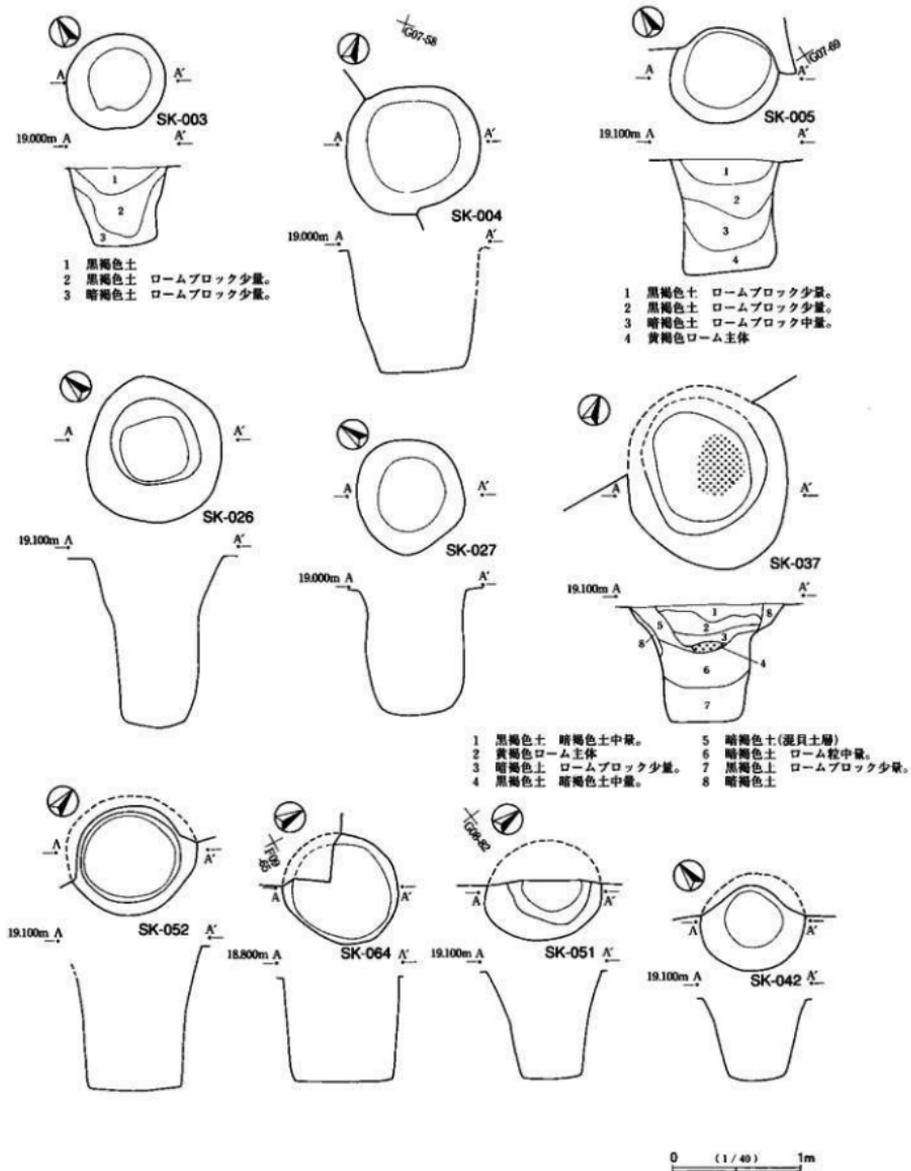


第90図 円形土坑(3)

SK-003 (第91図, 図版19)

遺構 (3)A区北端部, G07グリッド北東端付近に位置する。周囲に近接する時期の遺構はなく, 重複する遺構もない。遺構の規模は, 検出面が $0.78\text{m} \times 0.75\text{m}$, 底面が $0.53\text{m} \times 0.47\text{m}$ で, 平面形状は比較的整った円形である。深さは最大 0.63m で, 壁面は急角度で立ち上がる。底面はおおむね平坦だが, 僅かに西方向へ傾斜している。覆土は上層~中層が黒褐色土, 下層が暗褐色土で, 中層~下層にはロームブロックを含む。おおむね自然堆積と考えられる。

遺物 出土しなかった。



第91図 円形土坑(4)

SK-004 (第91・95図, 図版19・73)

遺構 (3)A区北部, G07グリッド東端付近に位置する。周囲には小竪穴であるSK-006, 円形土坑であるSK-002, 005, 014が存在する。重複する遺構はないが, 北東側が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が $1.13\text{m} \times 0.97\text{m}$, 底面が $0.75\text{m} \times 0.72\text{m}$ で, 平面形状は整った円形である。深さは0.98mで, 壁面は急角度で立ち上がる。底面は平坦である。

遺物 量は少なく, 図示したものがすべてである。いずれも縄文を地文とし, 覆土中から出土した。82~84はB類である。82は渦巻状区画を描くもので, 沈線間の地文を磨り消す。83は山形もしくは三角状の区画を描くもので, 区画外の地文を磨り消す。84は狭い無文帯を沈線で画する。口縁部には楕円状区画を描き, 区画外の地文を磨り消す。85・86はC類である。85は楕円状区画を配し, 区画外の地文を磨り消す。86は懸垂文を施し, 懸垂文内の地文を磨り消す。

SK-005 (第91・95図, 図版19・72)

遺構 (3)A区北部, G07グリッド東端付近に位置する。周囲にはいくつかのピットのほか, 小竪穴であるSK-006, 円形土坑であるSK-004, 014などが存在する。重複する遺構はないが, 北東側の上部が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が径 0.83m , 底面が $0.7\text{m} \times 0.6\text{m}$ で, 平面形状は整った円形である。深さは最大 0.93m で, 壁面は下半は垂直, 上半は急角度で立ち上がる。底面は平坦だが, 若干北へ傾斜している。覆土は上層が黒褐色土, 中層が暗褐色土, 下層が暗黄褐色ローム主体層である。覆土の状況からおおむね自然堆積と考えられる。

遺物 僅少で, 図示したものがすべてである。いずれも縄文土器で, 覆土中から出土した。87は平縁である。88は底面が平坦で, ヘラナデにより調整される。外周部はほとんど磨耗しない。

SK-026 (第91図, 図版20)

遺構 (3)A区北部, G08グリッド北端付近に位置する。周囲にはSI-002, 小竪穴であるSK-020が存在するが, 重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が $1.17\text{m} \times 1.05\text{m}$, 底面が $0.57\text{m} \times 0.49\text{m}$ で, 平面形状はやや不整な円形である。深さは 1.36m で, 壁面は下半が垂直, 上半は急角度で立ち上がる。底面はやや丸みを帯びるが, 凹凸は認められない。

遺物 出土しなかった。

SK-027 (第91図, 図版20)

遺構 (3)A区中央付近, G08グリッド中央部北側に位置する。周囲にはいくつかのピットのほか, 円形土坑であるSK-042が存在するが, 重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が $0.92\text{m} \times 0.83\text{m}$, 底面が $0.59\text{m} \times 0.51\text{m}$ で, やや楕円形の円形である。深さは最大 1.01m で, 壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は周囲が丸みを帯びるが, 中央付近は平坦である。

遺物 出土しなかった。

SK-037 (第91・95図, 図版20・73・78)

遺構 (3)A区中央部, G08グリッド南西端付近に位置する。周囲には小竪穴であるSK-049, 円形土坑であるSK-052が存在する。重複する遺構はないが, 北西側の一部が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が $1.5\text{m} \times 1.26\text{m}$, 底面が $0.9\text{m} \times 0.72\text{m}$ で, 平面形状は楕円形に近い不整な円形である。深さは最大 0.93m で, 壁面は下半がほぼ垂直, 上半は斜めに立ち上がる。底面は平坦である。覆土は上層が黒褐色土ないし暗褐色土, 中層が暗褐色土, 下層が黒褐色土である。上層にはロームブロックを主体

とする層を挟み、最下部の中央付近には混貝土層が認められるほか、外周には混入物を伴わない暗褐色土が堆積する一方、中層～下層はロームブロックを含むものの比較的均質である。上層と中層～下層では堆積状況が異なる印象を受けるが、おそらく中層～下層が自然堆積で、ある程度埋没した後に人為による埋戻し(上層)を受けたのであろう。貝層の内容については後述する(第4節)。

遺物 量は比較的多いが、図示したものの他はすべて細片である。ほとんどが縄文土器だが、石鏃が1点出土した。多くは中層の貝層周辺から出土している。89～101は縄文土器である。89～94はC類で、いずれも縄文を地文とする。89～91は平縁である。89はこの隆帯から垂下する隆帯により懸垂文を施し、内部の地文を磨り消す。89・90は同一個体である。92～94は幅広の懸垂文を施し、内部の地文を磨り消す。93・94は同一個体である。95・99はD類で、平縁である。96～98はE類で、96・97は縦横、98は横方向のみである。98は平縁で、幅広の無文帯は隆線により画される。なお96・98は胎土からみて同一個体と考えられる。100・101は平縁で、口縁端部は特に肥厚することなく、地文は縄文である。102は黒曜石製の石鏃である。断面は蒲鉾形で、先端部はやや裏面側に反っている。

SK-042 (第91・96図, 図版20)

遺構 (3)A区中央部、G08グリッド中央北寄りに位置する。周囲には円形土坑であるSK-027、043が存在する。重複する遺構はないが、上部の北東側1/2程度が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が径0.82m、底面が径0.45mで整った円形である。深さは最大0.64mで、壁面は急角度で立ち上がる。底面は若干丸みを帯びるが、おおむね平坦である。

遺物 僅少で、図示したものがすべてである。いずれも縄文を地文とし、覆土中から出土した。112は平縁で口縁端部は著しく肥厚し、無文帯はナゾリにより画される。隆帯による楕円状もしくは長方形区画を配するものと考えられることから、A類の可能性はある。113はB類である。波状縁で波頂部は尖り、文様構成は不明である。

SK-051 (第91図, 図版20)

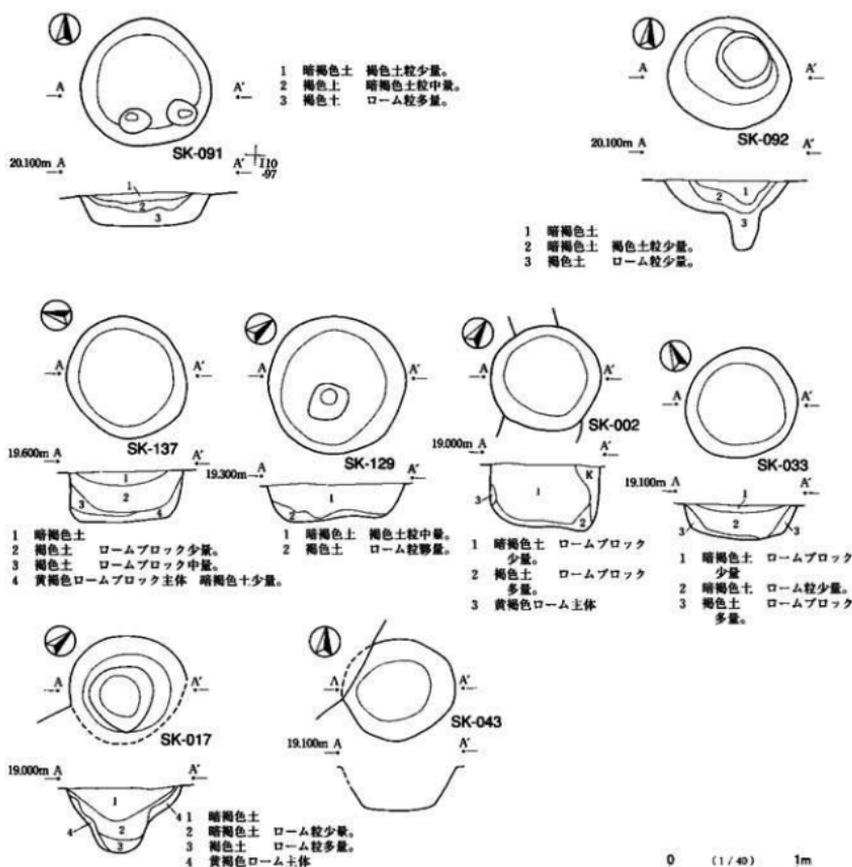
遺構 (3)A区中央部、G08グリッド南西端付近に位置する。周囲にはいくつかのピットのほか、小墜穴であるSK-049が存在する。重複する遺構はないが、北西側の1/2が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が長軸0.93m、底面が長軸0.48mで、平面形状はやや楕円状を呈する円形である。深さは最大0.85mで、壁面は下半が急角度で、上半がやや斜めに立ち上がる。底面はおおむね平坦である。

遺物 出土しなかった。

SK-052 (第91・96図, 図版20・74・77)

遺構 (3)A区中央部、G08グリッド南西端に位置する。周囲には小墜穴であるSK-049、円形土坑であるSK-037が存在する。楕円形土坑であるSK-050と重複し、新旧関係は不明だが、おそらく本遺構のほうが新しいと考えられる。また、上部の北西側を中心とする2/3程度が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は底面が0.73m×0.64mで、平面形状はやや楕円状の円形である。深さは1.1mで、壁面は下半が垂直、上半は急角度で立ち上がる。底面は平坦である。

遺物 僅少で、図示したものがすべてである。縄文土器のほか土製品が2点みられる。いずれも覆土中から出土した。103はD類である。胴部に大形の楕状把手がつく。104・105は土製品で、いずれも素材は無文である。104は土器片鏃で、破片を縦位に使用し、上下に浅く広い切込を施す。外形は長方形で、外縁は比較的丁寧に研磨される。105は破片の外周を粗削し、円形に整形した土製円板である。

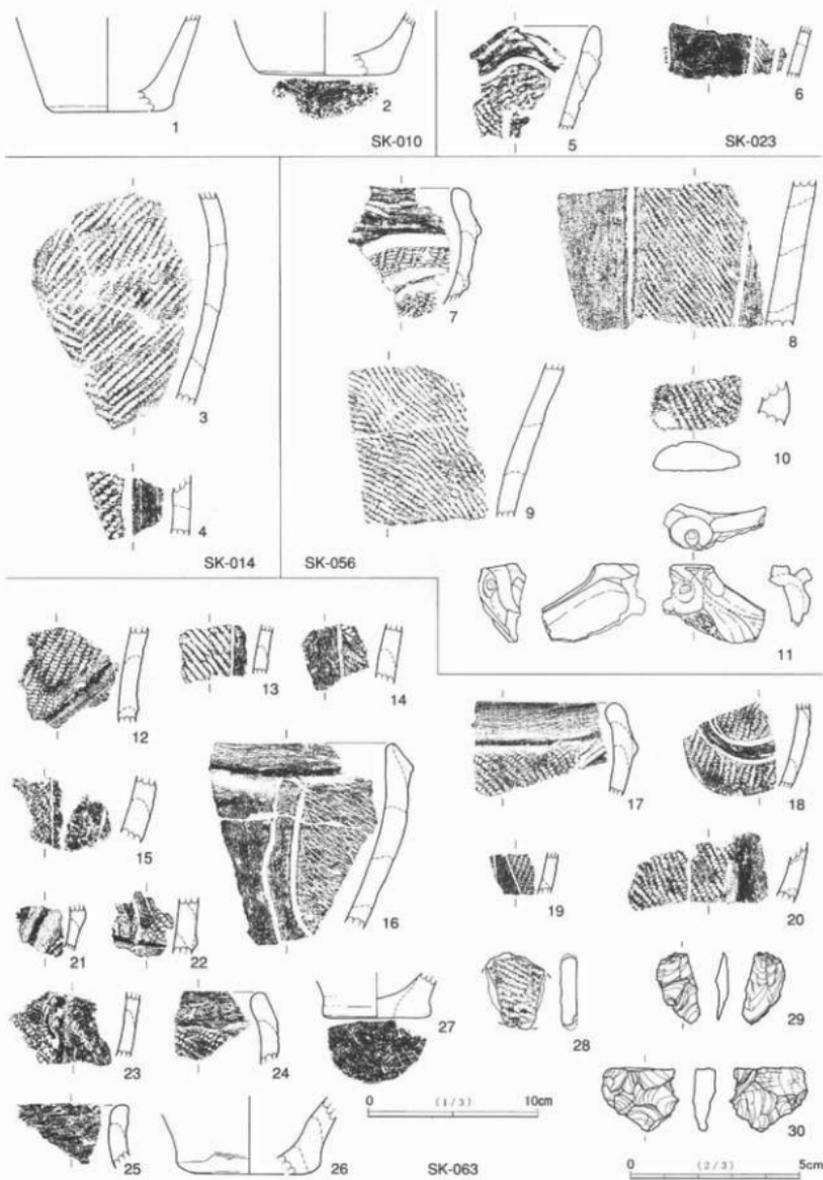


第92図 円形土坑(5)

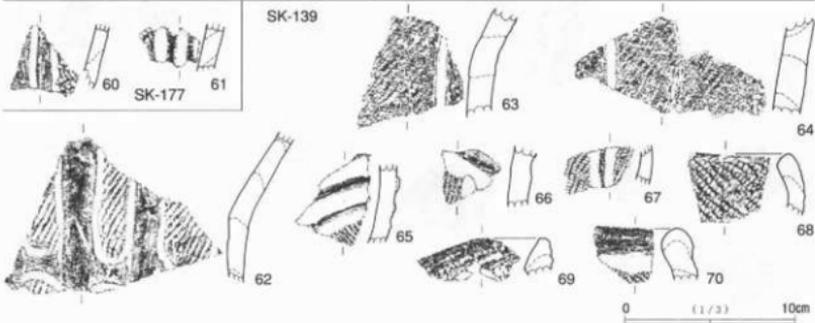
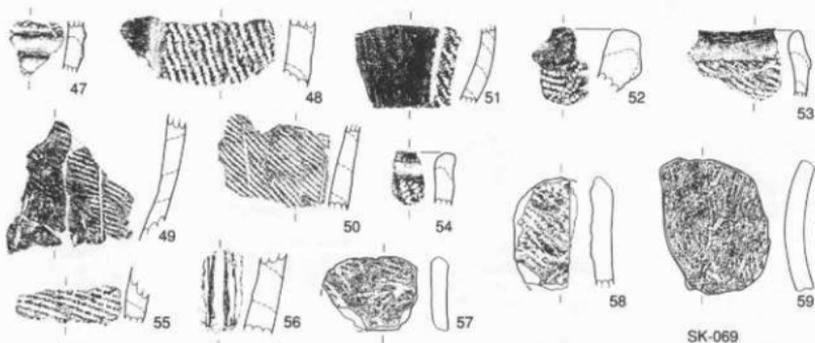
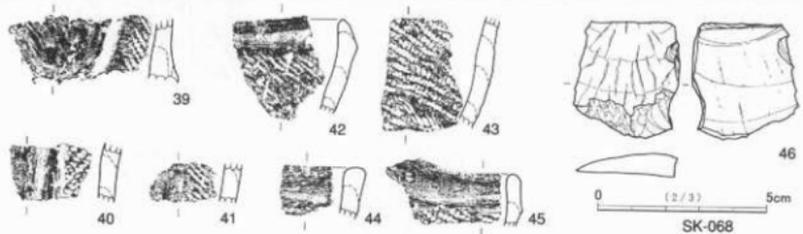
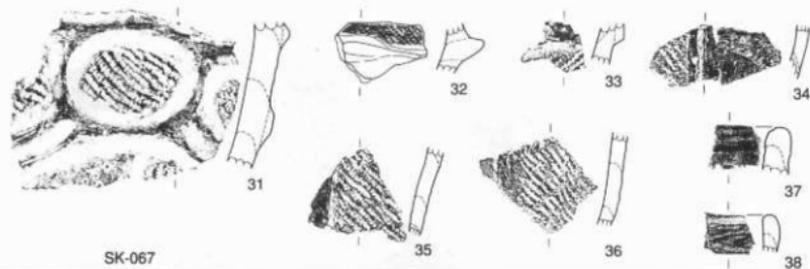
SK-064 (第91図, 図版20)

遺構 (3)A区南西部, F09グリッド中央部やや西寄りに位置する。周囲には円形土坑であるSK-063のほか、いくつかのピットが存在するのみで、遺構密度は低い。重複する遺構はないが、西側の一部が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は、検出面が幅0.82m、底面が幅0.74mで、平面形状はやや楕円状の円形である。深さは最大0.84mで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

遺物 出土しなかった。



第93図 円形土坑出土遺物(1)



第94図 円形土坑出土遺物(2)

SK-091 (第92図)

遺構 (3)B区東部、I10グリッド南東端に位置する。周囲にはピットのほか、SI-004、円形土坑であるSK-092、119が存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が1.03m×1.02m、底面が0.82m×0.76mで、平面形状はやや楕円状の円形である。深さは最大0.26mと浅く、壁面は現状ではやや斜めに立ち上がっている。底面は平坦で、小ピットが2基検出されている。おそらく本遺構に伴うものであろう。覆土は上層が暗褐色土、中層～下層が褐色土で、下層にはロームブロックが多く混入する。おおむね自然堆積と考えてよからう。

遺物 出土しなかった。

SK-092 (第92・96図、図版74)

遺構 (3)B区東部、I10グリッド南東端付近に位置する。周囲にはいくつかのピットのほか、SI-004、円形土坑であるSK-091、119などが存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が0.94m×0.87m、底面が0.71m×0.58mで、平面形状はやや楕円状の円形である。深さは最大0.25mで、壁面は緩やかに立ち上がる。底面は丸みを帯びた皿状で、中央にピットが存在する。覆土は上層～中層が暗褐色土、下層及び小ピット内が褐色土である。自然堆積と考えられる。

遺物 量は僅少で、図示したものがすべてである。いずれも縄文土器で、覆土中から出土した。106はA類で波状縁である。幅広の無文帯は沈線により画される。口縁部文様帯には沈線による横D字状区画が配され、縄文を充填する。107～109は縄文を地文とするC類で、107・108は同一個体である。108は縦横の区画を配し、その交点に渦巻状の意匠を配する。109は懸垂文を施す。110・111は同一個体でE類である。条線は11条程度を単位とし、やや粗い。縦方向に施文されるが、全体的に緩い波状を呈する。

SK-129 (第92図、図版21)

遺構 (3)B区南西部、H11グリッド中央北側に位置する。周囲には、いくつかのピットのほか小墜穴であるSK-130が存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が1.1m×1.08m、底面が0.9m×0.8mで、平面形状は整った円形である。深さは0.32mで、壁面はやや斜めに立ち上がる。底面はやや凹凸が認められるが、おおむね平坦である。覆土は上層～中層が暗褐色土、下層が褐色土で、下層には多くのローム粒を含む。おおむね自然堆積と考えてよからう。

遺物 出土しなかった。

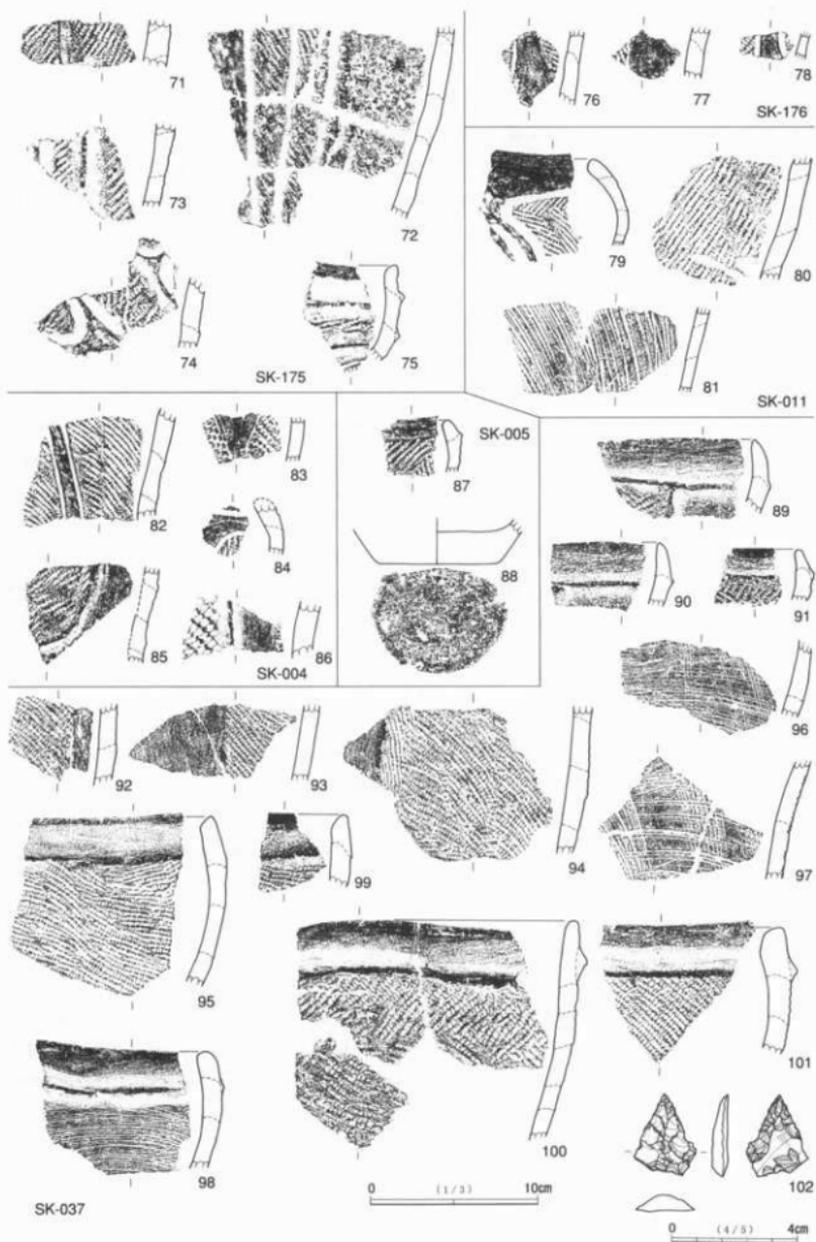
SK-137 (第92図、図版21)

遺構 (3)C区中央部、G12グリッド南東寄りに位置する。周囲にはいくつかのピットが存在するが近接する時期の遺構はなく、重複する遺構もない。遺構の規模は検出面が0.98m×0.89m、底面が0.77m×0.74mで、平面形状は整った円形である。深さは最大0.43mで、壁面は急角度で立ち上がる。底面はおおむね平坦だが、北側に向かって若干の傾斜が認められる。覆土は上層が暗褐色土、中層が褐色土、下層が褐色土ないし黄褐色ローム主体層で、中層～下層にはロームブロックが少なからず混入する。人為による埋戻しと考えられる。

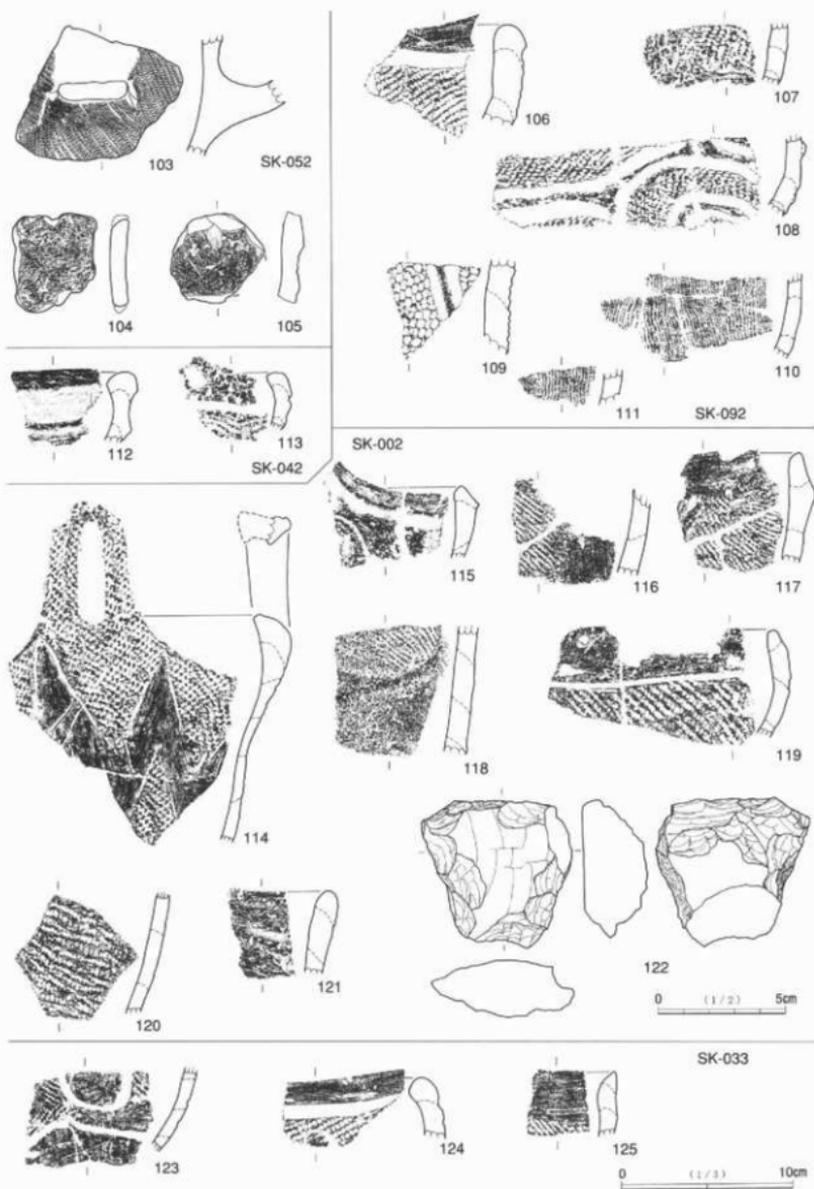
遺物 出土しなかった。

SK-002 (第92・96図、図版21・74・79)

遺構 (3)A区北端部、G07グリッド東端付近に位置する。周囲には円形土坑であるSK-004が存在する。楕円形土坑であるSK-001と重複しており、土層観察から本遺構のほうが新しい。このほか、北西側の一



第95図 円形土坑出土遺物(3)



第96図 円形土坑出土遺物(4)

部が建物の埋設管により破壊されている。遺構の規模は検出面が0.87m×0.83m、底面は0.67m×0.62mで、平面形状は整った円形である。深さは最大0.52mで、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は若干の凹凸が見られ、僅かに東側に傾斜している。覆土は上層～中層が暗褐色土、下層が褐色土で、ロームブロックを少なからず含んでおり、ほぼ単層として把握できる。人による埋戻しと考えられる。

遺物 比較的多いが、図示したものの以外は細片である。縄文土器のほかは、石斧が1点みられる。いずれも覆土中から出土した。また、114はSK-012、SK-013から出土した破片と接合した。114～121は縄文土器である。114・115は波状縁のB類である。114は縄文を地文とし、波頂部に環状把手を具える。山形意匠を描き、区画内の地文を磨り消す。115は波頂部の下に縦楕円状区画を配し、縄文を充填する。116～118はC類で、同一個体と考えられる。117は平縁である。116・118は縦楕円状区画を配し、縄文を充填する。119・120はD類である。120は平縁である。121は平縁で、口縁端部は肥厚し、ナゾリによる隆線が施される。122はホルンフェルス製の打製石斧で、刃部側半分程度を欠くが、分銅形を呈するものと考えられる。
SK-033 (第92・96図、図版74)

遺構 (3)A区中央部、G08グリッド西寄りに位置する。周囲には円形土坑であるSK-023、043が存在するが、重複する遺構はない。遺構の規模は検出面が0.91m×0.84m、底面が0.7m×0.65mで、平面形状は整った円形である。深さは0.29mで、壁面はやや斜めに立ち上がり、底面は皿状である。覆土は上層～中層が暗褐色土、下層が褐色土である。自然堆積と考えられる。

遺物 僅少で、図示したものがすべてである。いずれも縄文土器で、覆土中から出土した。123は沈線によりJ字状もしくは渦巻状の意匠を配し、区画内に縄文を充填するもので、称名寺1式の可能性が高い。124・125はD類で、いずれも平縁である。

SK-017 (第92図、図版21)

遺構 (3)A区中央部、F08グリッド東端に位置する。周囲にはピットが存在する。重複する遺構はないが、南東部の1/2が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が長軸0.94m、底面は0.36m×0.3mで、平面形状はやや楕円状である。深さは0.53mで、壁面は斜めに立ち上がる。底面は丸みを帯び、中位がテラス状となる。覆土は上層～中層が暗褐色土、下層が褐色土である。自然堆積であろう。

遺物 出土しなかった。

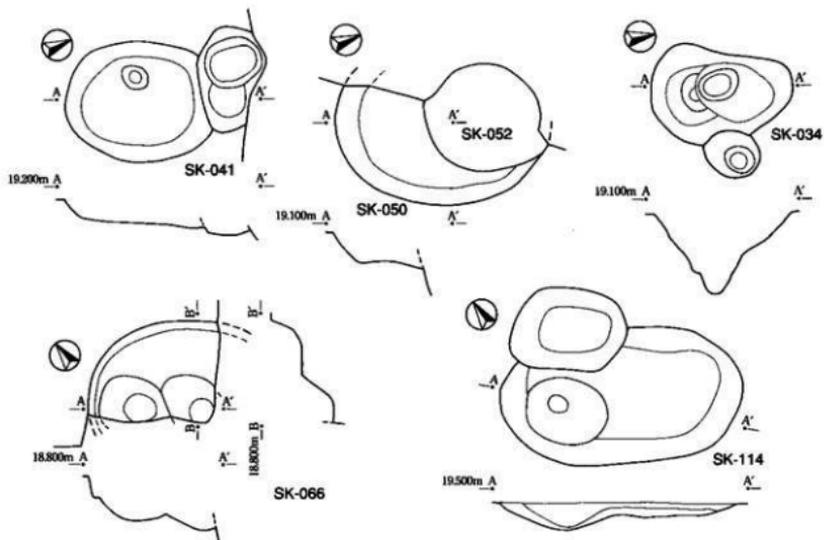
SK-043 (第92図、図版17)

遺構 (3)A区中央部、G08グリッド中央西寄りに位置する。周囲にはSK-023、027、033、042などの円形土坑が存在し、重複する遺構はないが、北西側が建物の基礎により破壊されている。遺構の規模は検出面が0.9m×0.82m、底面が0.6m×0.47mで、平面形状はやや楕円状である。深さは最大0.34mで、壁面は斜めに立ち上がる。底面は平坦だが、やや丸みを帯びる。

遺物 出土しなかった。

4. 楕円形土坑 (第97～100図、図版22～24・75・77・78・80・82)

一口に楕円形と言っても、様々な形態のものが混在する。(3)E区以外の全域から確認されているが、(3)A区のG08グリッド中央部付近、F09グリッド南部、G09グリッド南西部に小規模なまとまりが認められるほか、(3)B区北部のI10グリッド、(3)D区北部にまとまって存在する。またそれぞれのまとまりの内部でも、SK-044～046、SK-028～030・032、SK-095・096など、類似した形状の土坑がまとまって存在する傾向も認められる。ここでは、それらを大きさ、形状などから大きく4つに分類して記述する。



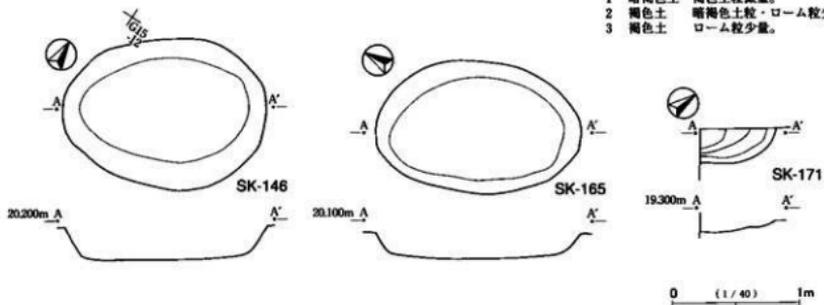
- 1 暗褐色土 褐色土粒少量。
2 褐色土 ローム粒少量。



- 1 暗褐色土 褐色土粒少量。
2 褐色土 暗褐色土粒少量。
3 褐色土 ローム粒少量。

- 1 暗褐色土 褐色土粒少量。
2 褐色土 ローム粒中量。

- 1 暗褐色土 褐色土粒少量。
2 褐色土 暗褐色土粒・ローム粒少量。
3 褐色土 ローム粒少量。



第97図 楕円形土坑(1)

①大型のもの

SK-041, 050, 066, 086, 114, 149, 156, 164, 165, 171の10基が挙げられる。いずれも重複する遺構はないが、SK-050, 066, 171などは建物の基礎などにより一部が破壊されている。はっきりしないものもあるが、いずれも長さ1.0mを超える。壁面は斜めに立ち上がるものが多いが、SK-041, 114, 171のように、浅いため不明なものもある。底面はおおむね平坦であるが、SK-086のようにやや凹凸をもつもの、SK-165, 171などのようにやや舟底状となるものも見られる。覆土は調査時の記載のあるものでは、上層が暗褐色土、中層～下層が褐色土で、下層にローム粒を含む場合が多い。

遺物はほとんどが皆無だが、SK-041, 066で図示しうる縄文土器が出土している。1～5はSK-041, 8・9はSK-066で、いずれも覆土中から出土した。1～4はB類で、縄文を地文とする。1は懸垂文を施し、懸垂文内の地文を磨り消す。2～4は同一個体と考えられる。波状線で、波頂部から右方向に延びる幅広いナゾリを施す。口縁部には連弧文を描くものと考えられ、沈線間の地文を磨り消す。5・8はC類である。5は縄文を地文とし、隆帯側面に及ぶ。8は懸垂文を施す。9はD類である。

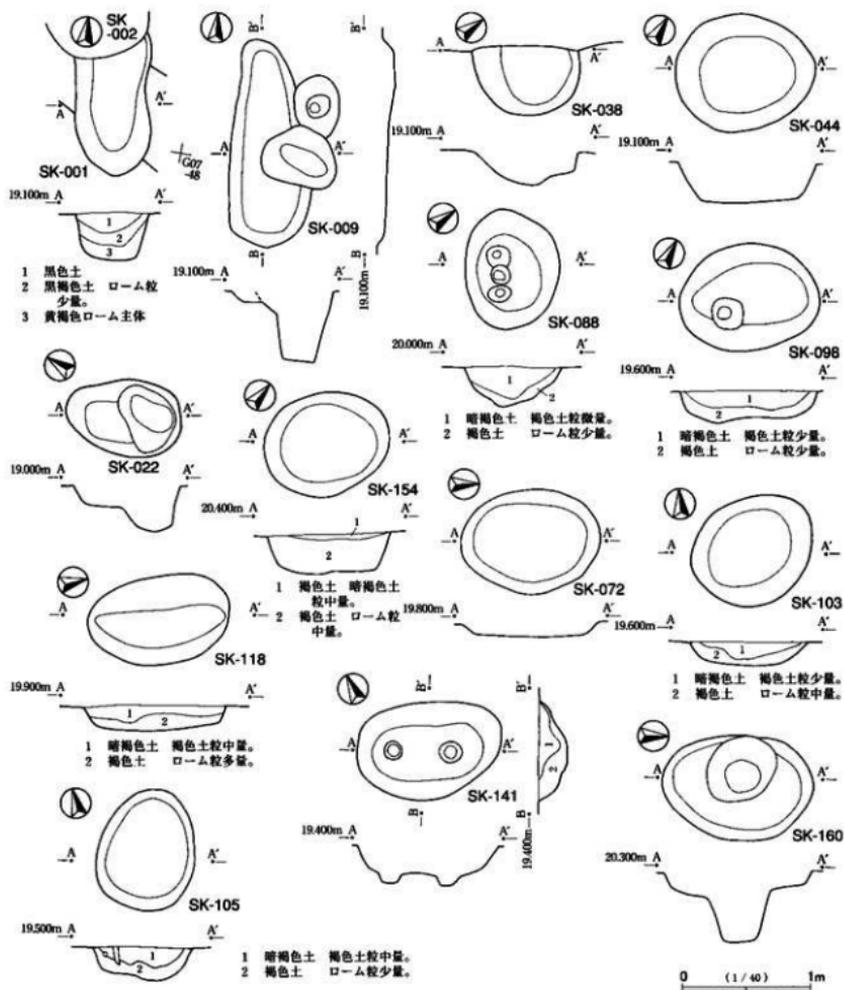
②中型のもの

SK-001, 009, 022, 034, 038, 044, 072, 088, 098, 103, 105, 118, 141, 154, 160の15基である。SK-001は円形土坑のSK-002と重複しており、土層観察から本遺構のほうが古い。またSK-160はピットと重複するが、新旧関係は不明である。このほかSK-038が建物の基礎により北西側を破壊されている。規模はいずれも長軸長1.0m前後である。壁面は斜めあるいはやや急角度で立ち上がるものが多いが、SK-072のように不明なものもある。底面は平坦なものが多いが、SK-034のように底面を持たないもの、SK-038, SK-105などのようにやや凹凸をもつものもある。また、SK-141は長軸の中央軸上に小ピットが2基認められるが、本遺構に伴うものと考えてよからう。覆土は調査時の記載のあるものでは、上層が黒褐色土ないし暗褐色土、中層～下層が褐色土で、下層にローム粒やロームブロックを含むものが多い。

遺物は皆無のものも多いが、SK-001, 009, 034, 072で図示可能な遺物が出土している。6・7はSK-034, 10～18はSK-001, 19はSK-009, 20はSK-072で、いずれも覆土中から出土した。6・7・10～17・19は縄文土器である。6・10・14は縄文を地文とするB類である。6は懸垂文と対向U字状意匠を交互に配し、区画内の地文を磨り消すため、後者の意匠がH字状にみえる。10は平線で連弧文が配され、沈線間の地文を磨り消す。14は懸垂文を施し、懸垂文内の地文を磨り消す。11～13・19はC類で、19を除き縄文を地文とする。11は渦巻状意匠を配するものである。12は懸垂文を施すもので、懸垂文内の地文を磨り消す。13は楕円状区画を配するもの、19は平線で縄文を充填するもので、共にA類となる可能性が高い。7・15はD類である。16・17は平線である。外面は無文で、横方向のナゾリを装飾的に用いる。18は土器片錘で、広く浅い切込みを施す。外縁部は丁寧に研磨され、外形は整った長方形を呈する。20は黒曜石製の凹基無茎鏃である。やや縦長で脚は短い。表裏共に細かい剥離が見られ、一次剥離面は遺存しない。先端部の一部を欠くが、使用による可能性がある。

③小型でやや細長い形状のもの

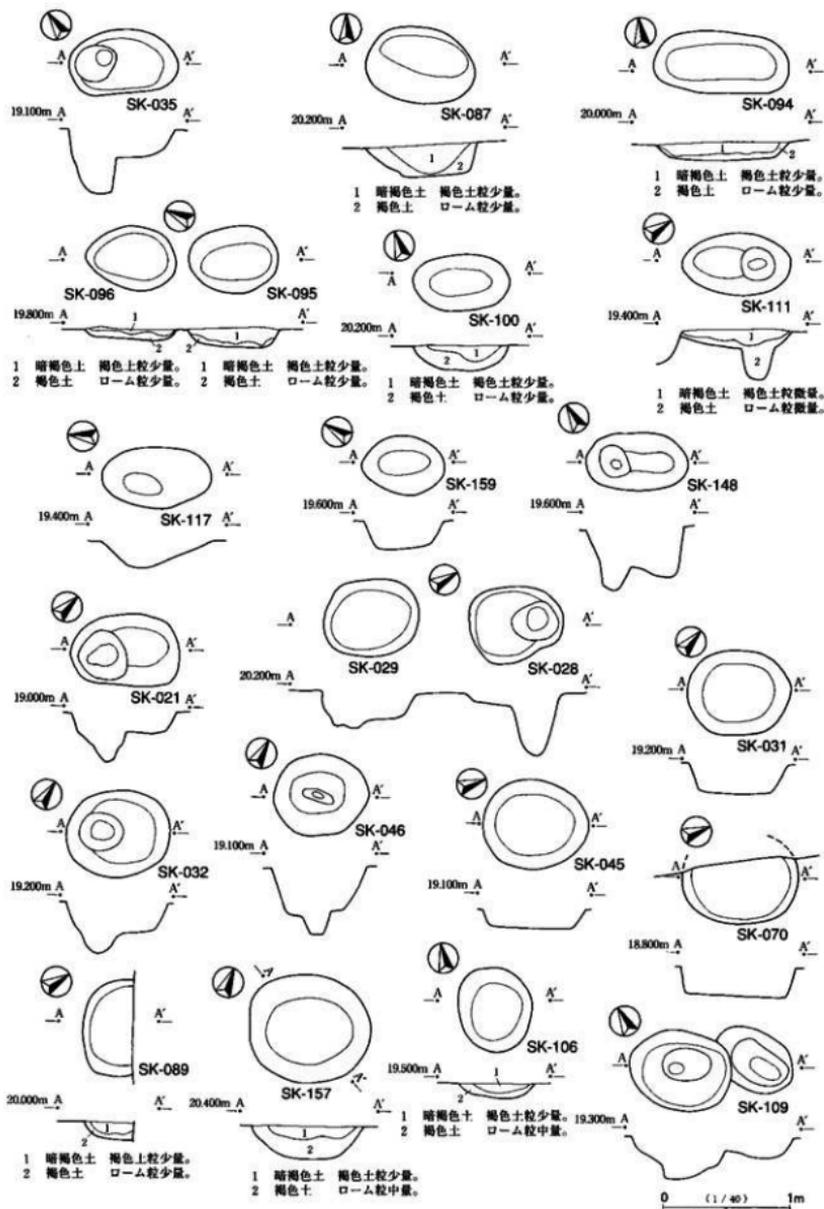
SK-035, 087, 094, 095, 096, 100, 111, 117, 148, 159の10基である。SK-035, 148はピットと重複しているが、新旧関係は不明である。またSK-111も同様と考えられるが、土層観察では新旧関係は認められない。規模はSK-094を除き、長軸長0.6m～0.9m、幅0.4m～0.6mの範囲に収まる。壁面は斜めに立ち上がるものがほとんどだが、SK-148のようにほぼ垂直に立ち上がるものもある。底面は平坦のもの



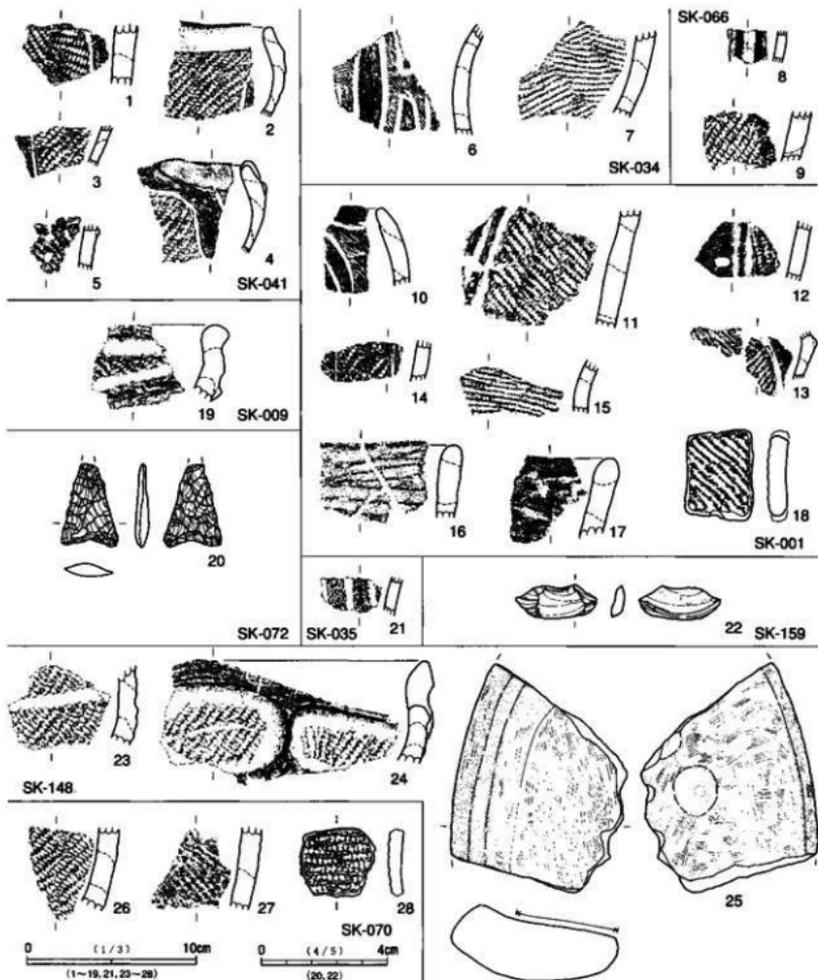
第98図 楕円形土坑(2)

が多いが、SK-117のように明瞭な底面をもたないものもある。覆土は調査時の記載のあるものでは、上層が暗褐色土、下層が褐色土で、いずれも下層にローム粒を少量含む。

遺物は僅少で、SK-035、148、159から図示可能なものが出土している。21はSK-035、22はSK-159、23～25はSK-148で、いずれも覆土中から出土した。21・23・24は縄文土器である。21はB類で、懸垂文に見えるが、おそらくは対向U字状の意匠を配するものと考えられ、区画外の地文を磨り消す。23はC類で、



第99图 楕円形土坑(3)



第100図 楕円形土坑出土遺物

縄文は隆帯の側面に及ぶ。24は波状線のA類で、隆帯により楕円状区画を配し、区画内に縄文を充填する。22は黒曜石の横長剥片で、二次調整の痕跡は認められない。25は安山岩製の石皿で、断片であるが、本来は楕円形であろう。側面は丁寧に研磨されており、石皿としては表面のみを使用し、裏面には凹石の痕跡が2か所認められる。

④小型で円形に近い形状のもの

SK-021, 028, 029, 031, 032, 045, 046, 070, 089, 106, 109 a b, 157の13基である。SK-021, 028, 032がビットと重複するが、新旧関係は不明である。また、SK-070, 089は建物の基礎により1/2程度が破壊されている。規模は長軸長0.7m~0.9m前後、幅は0.5m~0.8m前後の範囲に収まる。壁面はやや急角度で立ち上がるものが多く、SK-070のようにほぼ垂直に立ち上がるものもある。底面はおおむね平坦だが、SK-029, 109 aのようにやや不規則な凹凸をもつものもみられる。覆土は調査時の記載のあるものでは、上層が暗褐色土、下層が褐色土で、下層にはローム粒を含んでいる。

遺物は僅少で、SK-070の覆土中から図示可能な遺物が出土している。26・27はD類である。28は土製円板で、縄文のみを施す破片の外縁部は丁寧に粗割するが、ほとんど研磨されない。

5. 方形土坑 (第101図, 図版24・25・75・77)

(3)A・B区より検出された。SK-013, 016, 040, 048, 053, 075, 108, 126, 128, 133, 134の11基である。おおむね散在するが、SK-013, SK-016・048・053などのように他種の土坑を含めてやや密集する様子も認められる。平面形状は隅丸長方形を中心として、楕円状(SK-013, 040, 053)、平行四辺形状(SK-126, 134)、不整形(SK-108)など様々である。底面は凹凸をもつもの(SK-013, 016, 040)もあるが、おおむね平坦である。覆土はおおむね上層が黒褐色土、下層が褐色土でローム粒を含むが、調査時に記載のないものが多い。

遺物は僅少で、図示し得たのはSK-013, 133から出土した2点に過ぎない。2は縄文を地文とする土器で、沈線により山形の意匠を描き、区画外の地文を磨り消す。1は土器片鏝で、縄文を地文とするC類の素材を利用している。上下に浅い切欠を施し、外周は円形に粗割されるがほとんど研磨されない。

6. 大型土坑 (第102・103図, 図版25・26・75・76)

長軸長が1.5mをはるかに超える土坑で、小整穴や円形土坑には収まらない土坑をここにまとめた。調査区の全域に散在するが、(3)B区、(3)E区にやや偏在する傾向が認められる。いずれも出土遺物が少なく時期を推定するのが難しいため、縄文時代以外のが含まれている可能性がある。

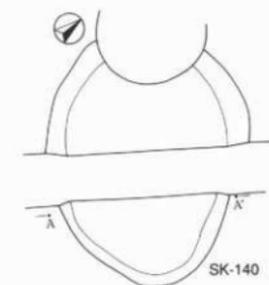
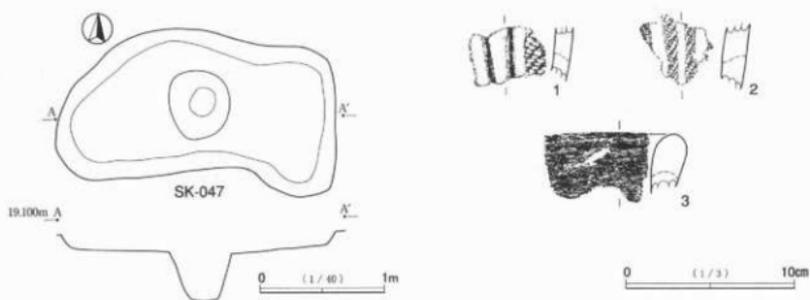
SK-030, 047, 110, 140, 145, 150, 151, 158, 163の9基である。平面形状は楕円形に類するものが多いが、蚕豆状(SK-047, 110)、卵形(SK-151)などがある。底面は平坦なものが多いが、傾斜を持つもの(SK-110, 145, 163)、明瞭な底面をもたないもの(SK-158)などがある。覆土について記載のあるものは少ないが、上層が暗褐色土、下層が褐色土でローム粒を含む。

遺物は僅少で、SK-047とSK-163から図示可能な縄文土器が出土している。1・2は縄文を地文とし、1は縹帯、2は沈線により懸垂文を施すものであるが、2は懸垂文内の地文を磨り消し、地文に単沈線を追加する。3は平縁である。4・5はいずれも平縁のD類である。

7. 小型円形土坑 (第104図, 図版26・27・76)

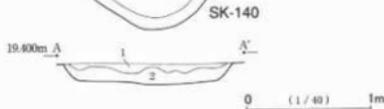
平面形状がおおむね円形ないしそれに類する形状を呈するもので、検出面での直径が1.0mに満たず、0.5mを超えるものうち、調査時に覆土に関する記載のあるもの、あるいは図示の可否を問わず縄文時代の遺物が出土しているものをここにまとめる。

SK-007, 018, 019, 058, 059, 062, 065, 071, 080, 081, 083, 084, 120, 147, 152, 153, 155の計17基であるが、形状と規模のみに着眼するとこの倍以上となる。(3)E区と(8)区を除くほぼ全域から散発的に検出されているが、他の土坑等やビット群など共に見出される例も多い。他の遺構と重複するものはな



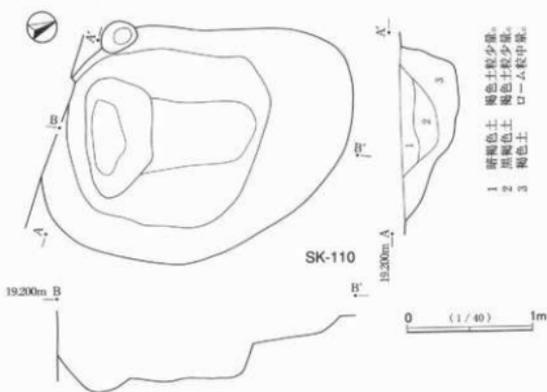
SK-140

- 1 暗褐色土 黑色土多量。
2 褐色土 ローム粒多量。

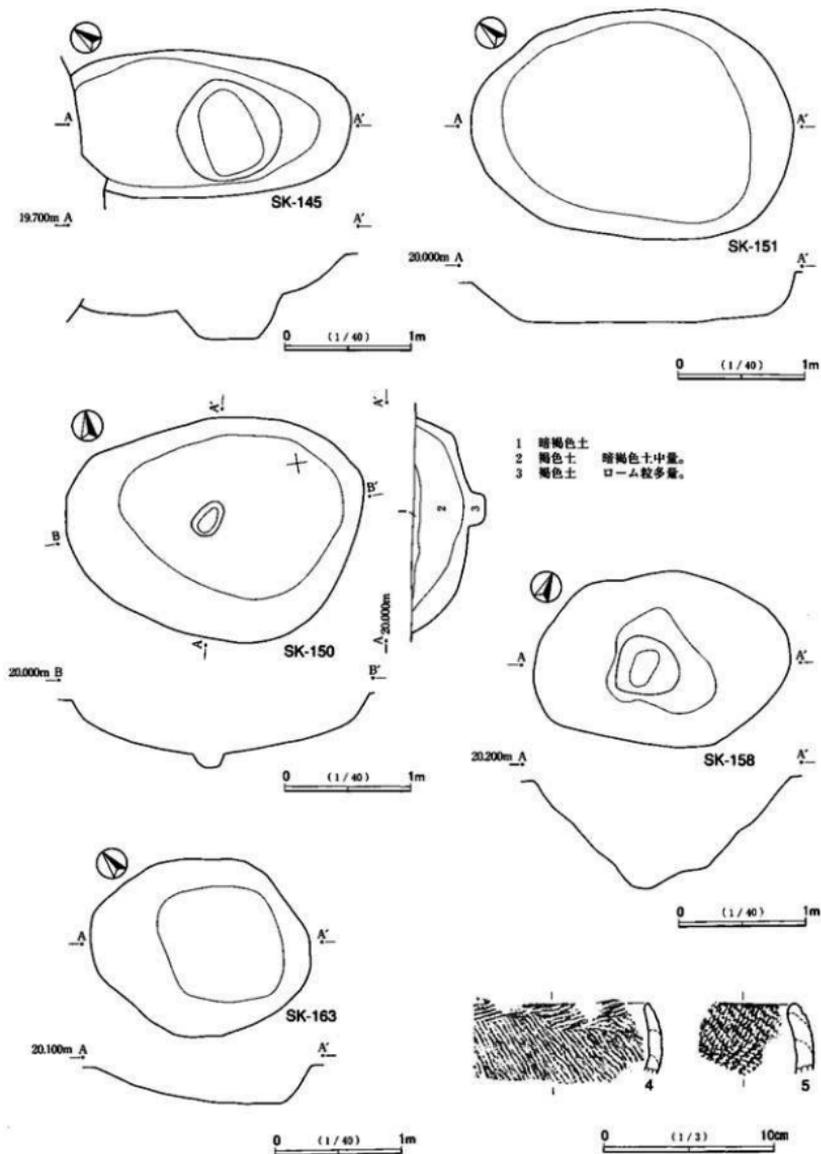


SK-030

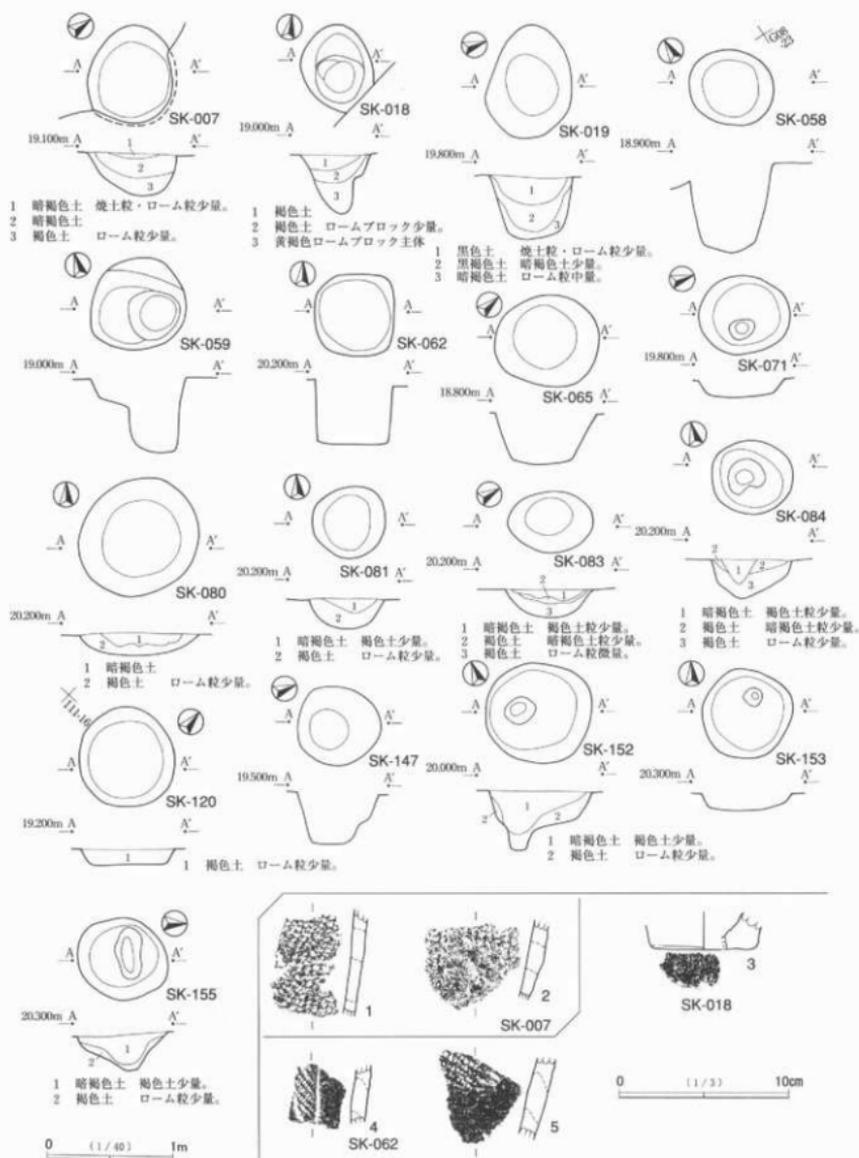
- 1 黒褐色土 ローム粒中量。
2 黄褐色ローム主体



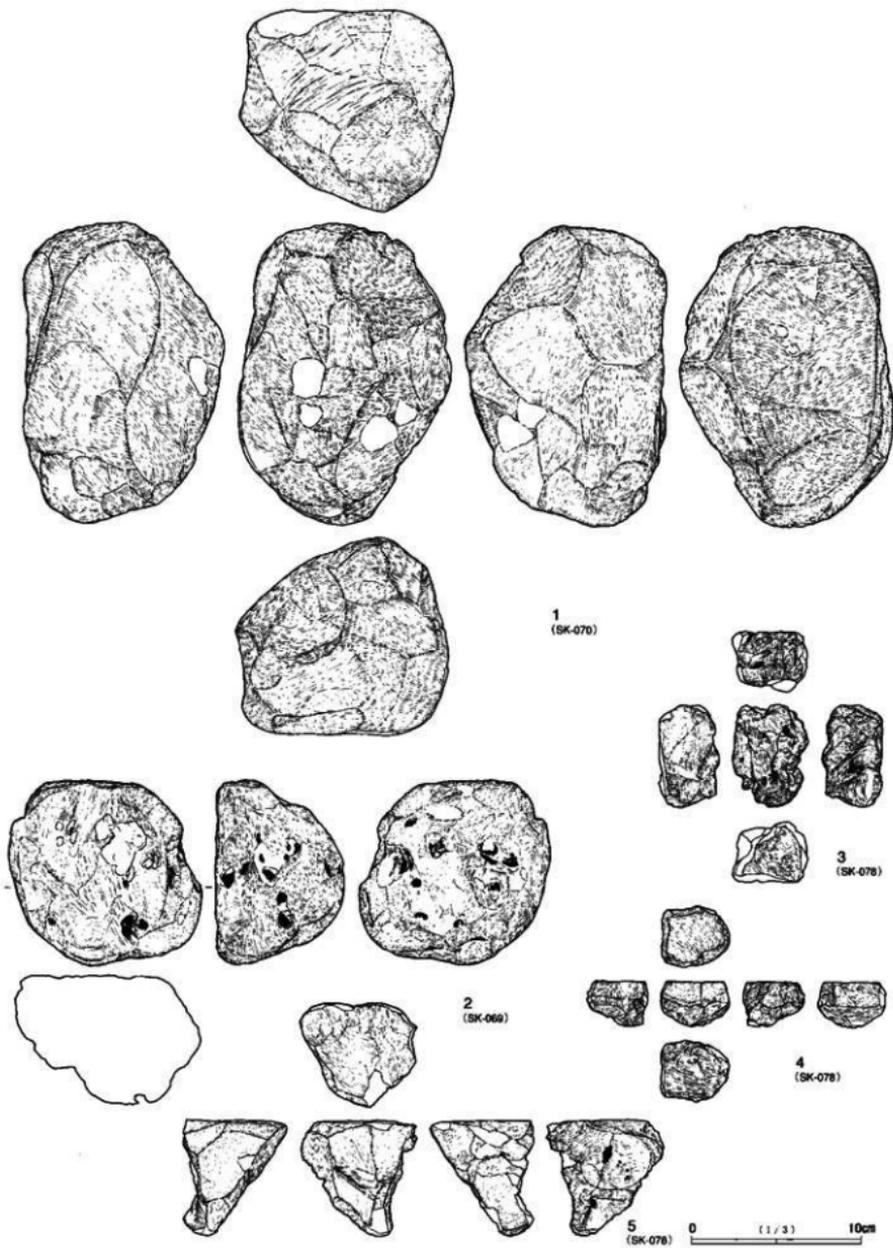
第102図 大型土坑(1)



第103図 大型土坑(2)



第104図 小型円形土坑



第106図 土坑等出土の石製品

いが、SK-007, 018が建物の基礎により破壊されている。平面形状は円形もしくは楕円状だが、SK-062のように隅丸方形のものもある。覆土は上層が暗褐色土ないし黒褐色土で、中層～下層が褐色土となるものが多いが、上層～中層が褐色土、下層がロームブロック主体層のもの（SK-018）、褐色土の単層として掘られるもの（SK-120）などもある。断面形態は様々で、多くは底面が丸みをもち壁面が斜めに立ち上がるが、急角度で立ち上がるもの（SK-007, 018, 058）、底面に平坦面をもち壁面が垂直に立ち上がるもの（SK-059, 062）、壁面が斜めに立ち上がるもの（SK-065, 120）がある。また、SK-071, 152, 155のように底面に小ピットをもつものもある。

遺物は皆無の土坑が多いが、出土したものでも僅少で、ほとんどが細片である。このうちSK-007(1・2)、SK-018(3)、SK-062(4・5)の覆土中から図示可能な遺物が出土した。いずれも縄文土器である。1・2・5はD類で、1・2は同一個体と考えられる。3は厚手の底部の断片で、無文である。底面はヘラナデにより調整され、平坦である。外周部は僅かに磨耗しているが、使用に伴うものかははっきりしない。4は縄文を地文とするB類で、対向U字状の意匠を描き、区画外の地文を磨り消す。

8. ピット (第105図, 図版27・76・82)

平面形状が円形ないしそれに類する形状を呈するもので、検出面での直径が0.5mに満たないもののうち、調査時に覆土に関する記載のあるもの、あるいは図示の可否を問わず縄文時代の遺物が出土しているものをここにまとめる。平面形状は円形もしくは楕円状で、壁面は垂直もしくは急角度で立ち上がるが、底面は平坦で明瞭なものほか、丸みを帯びて明瞭な底面をもたないものがある。覆土は上層～中層が暗褐色土、下層が褐色土で、ローム粒を含むものが多い。

遺物は僅少で、SK-012, 036, 061のものを図示した。いずれも縄文土器である。1・3はA類で、隆帯により楕円状区画を配し、縄文を充填する。2は複数の沈線により横方向の区画を配し、縄文を充填するもので、称名寺1式であろう。4は平縁で、地文は縄文である。

第4節 貝サンプルの分析結果

今回の調査では、縄文時代中期後葉から後期初頭の遺構内貝層を9か所検出した。当遺跡を含む中野木台遺跡群では、過去に当遺跡の2次調査で9か所、新山遺跡で6か所、中野木台遺跡で4か所の貝層の分析結果が報告されており、いずれも同時期の事例である。この時期は、中期中葉の集中居住・通年定住型の生業・居住様式や、大規模な貝塚の形成を特徴とする文化・社会が一旦崩壊し、分散居住・遊動型の様式を取り入れた時期にあたる。一般に魚貝類の利用は低調で、当遺跡群においても個々の貝層の規模は小さいが、この時期の貝層資料としては充実したものであり、当時の生業・居住様式や食生活を検討する上で、貴重な存在といえる。この点は、今回実施した発掘調査の意義を高めることにつながるかと考え、まず今回の分析の結果を記載した後、過去のデータも併せた考察を試みることにした。

1 分析方法

採取された貝サンプルには、計量前に水洗分離をしてしまっているため採取量不明のものがある。第3表に示した選別量と採取量は、水洗前と水洗分離後に土砂等の一部が流出したものを含んでいる量の多いサンプルについては、9.52mm・4mm・2mm・1mm・0.5mmメッシュの試験フルイによる水洗分離を行った上で、一部についての選別等を行った。約90リットル分について選別以降の分析を実施したことになる。貝類の選別は4mm以上を対象とした。二枚貝類は殻頂部の紋溝が約半分遺存するものを左右別に集計し、

多い方を最小個体数とした。巻貝類は各軸下端が遺存するものを集計した。このほかに微小貝、フジツボ類、土器片、黒曜石片、炭化種子、魚骨や獣骨片を検出した。選別対象は1mmまでである。骨は小形魚の椎体1点、焼けた魚類遊離歯2点、獣骨小片1点であり、偶然混入した程度である。炭化種子はコメ、ムギ大の種子、クルミの殻小片があるが、クルミ以外は砕石や陶磁器を含むサンプルから検出しており、後世の流入の可能性が高い。微小貝は多量に検出しているが今回は分析を実施できなかった。

計測作業は計測可能個体数が多いものについて、各サンプル最大200個を対象とした。水洗・選別時に9.52mmと4mmに篩い分けられているため、次の式を使って抽出を行った。9.52mmの個体数をA、4mmの個体数をB、合計計測予定数を100個とすると、9.52mm計測数 = $A / (A + B) \times 100$ 、4mm計測数 = $B / (A + B) \times 100$ である。計測にはパーソナルコンピュータに接続したデジタルノギスを用い、Microsoft社製の表計算ソフト(Excel)の分析ツールを使用した。分析は西野雅人が担当した。

2 貝層とサンプルの概要

貝層の時期は中期後葉を中心とするが、その前後の資料が各1か所存在する。中期中葉加曾利EⅡ式新段階に遡るSI-004、後期初頭称名寺期の可能性があるSK-010である。遺構の種類でみると、住居跡6か所、円形土坑(小竪穴)3か所である。いずれも小規模なブロック貝層であり、繰り返し廃棄されたような状況がみられない。住居跡は床面なしその直上、円形土坑では覆土中層に堆積しているのが特徴である。なお、SI-011についてはサンプルを採取したものの小片のみであったため、対象から除外した。

SI-003(第39図) 加曾利EⅢ式期の住居跡内貝層である。炉内中央最上層に0.5m×0.2m×0.1mの小ブロックを形成していた。オキアサリとハマグリが主体で、オキシジミとスガイが混じる。サンプルは混土貝層の全量を一括採取している。水洗前の量が不明であり、水洗・選別後の体積は6.8リットル、重量は5.8kgであった。全量を分析対象とした。

SI-004(第42図) 加曾利EⅡ式新段階の住居跡内貝層である。炉に一部かかる形で床面付近に小規模な貝層を形成していた。ハマグリが圧倒的に多く、オキアサリなどが混じる。攪乱箇所を挟む2単位のサンプルだが、体積3.9リットル、重量3.0kgと少ないため1カット扱いとし、全量を分析対象とした。

SI-006(第49図) 加曾利EⅢ期古段階の住居跡内に4.0m×2.0mの比較的大きな貝層を含む4つのブロック貝層を形成していた。土層断面図をみると、住居廃絶後、褐色土(第1層)が北側を中心に厚く堆積し、南側の掘鉢状の窪みに多量の土器や軽石とともに貝殻が廃棄されている。貝層の厚さは最大で0.3m程度である。当遺跡のなかでは規模が大きく、覆土中に存在する点で稀な事例であり、竪穴の規模・構造、積極的な廃棄行為といった点で当遺跡では傑出した存在といえよう。サンプルは4か所一括で採取されており、すべてが水洗・選別されて水洗前の量は不明である。水洗・選別後の各メッシュ面上に残った量が合計で297.2リットル、215.3kgである。作業量の軽減を図る必要から、各メッシュから任意に10%を抽出し、合計29.7リットルについて分析を実施した。貝種組成は複雑で、マガキ、ハマグリ、オキアサリ、アサリの4種を主体に、ウミナナ類、シオフキガイ、バカガイ、イボキサゴ、オキシジミ等もかなり含んでいる。構成種はSI-018、019に似る。

SI-018(第74図) 加曾利EⅢ式古段階の住居跡内貝層である。炉の覆土上層から床面上に溢れるように1.9m×1.2m×0.3mの貝層を形成している。サンプルは貝層全量を一括採取しており、197リットル、重量147.3kgに及ぶ。大量であるため、その5%、9.9リットルについて分析を実施した。貝種はオキアサリが圧倒的だが、構成種が多い点が特徴である。ハマグリ、マガキ、ウミナナ類、フトヘナトリガイ、バイ、

スガイ、アカニシなど生息域の異なる種を含んでおり、SI-006・019と同様、一度の利用・廃棄によるものとは考えにくい。なお、貝層下の炉は深さが50cm程あり、灰と炭化物を含む黒色土が互層をなしていた。この部分にも微細な動植物遺体が遺存した可能性があるが、サンプリングは行っていない。

SI-019 (第76図) 加曾利EⅢ式期の住居跡内貝層である。炉の西側に接した床面上に貝層を形成していた。硬化面に食い込み、上端が床面レベルである。攪乱が著しいため規模は不明だが、現状で0.8m×0.6m×0.1mである。貝層全量を一括採取して、水洗前で12リットル、重量8.4kgのサンプルを得た。貝種はオキアサリ、イボキサゴ、アサリの3種を主体とし、ハマグリ、シオフキガイ、バカガイなど多くの種を含んでおり、構成種はSI-006、SI-018に似ている。分層できない残りの悪い貝層である点からみて、一度別の場所に廃棄された後に、貝種が混じり合ったものが廃棄された可能性が高い。

SK-010 (第88図) 径1.3mの整った円形土坑の覆土下層に貝層を形成している。加曾利E式土器の小片が混じるものの、称名寺2期の1個体の破片が多数を占めており、称名寺期の小竈穴である可能性が高い。底面から若干浮いた部分に、0.8m×0.4m×0.2mの貝層を形成している。貝層はイボキサゴが圧倒的に多いが、現地ではハマグリが多めの中層を境に3つに分層されている。ただし、サンプルは一括採取である。水洗前の量は不明であり、すべて水洗された後の量が165.0リットル、重量136.4kgあった。大量であるため、9.52mmと4mmメッシュ面上の試料134.2リットルの約17%、23.8リットルを分析対象とした。内訳は9.52mmメッシュが112リットル採取のうち20リットル、4mmメッシュは22.2リットル採取のうち、3.8リットルである。貝種組成はイボキサゴが圧倒的で、オキアサリ、ハマグリが混じる。

SK-037 (第91図) 加曾利EⅣ式期の円形土坑内に堆積した貝層である。覆土中層に0.5m×0.4m×0.1mの薄い貝層を形成しており、全量一括採取されたサンプルをすべて分析対象とした。オキアサリが大半を占め、ハマグリが混じる。

SK-063 (第88図) 加曾利EⅣ式期の円形土坑内貝層である。覆土上層の第2層下面に0.4m×0.3m×0.1m未満のごく小さな貝層を形成しており、全量一括採取されたサンプルをすべて分析対象とした。アサリ、オキアサリ、イボキサゴが主体で、マガキが混じる。

3 分析の結果

(1) 貝種組成

第4表の通り全体で15科23種以上を検出した。おもな構成種は、第5表・第107図のように、内湾砂底種のイボキサゴ、オキアサリ、ハマグリ、アサリと、湾奥泥底干潟種のマガキの5種であるが、その割合はサンプルごとの差が大きい。主要5種以外もかなり混じっていて、その構成もかなり異なっているため、この7遺構のサンプルから当遺跡の貝類利用の特徴や、時期的な変化などを捉えることは難しい。ただ、幸いなことに、中野木台遺跡群で過去に多くのデータが公表されているので、主要種の組成の評価についてはそれらを加えた上で、後述したい。

(2) 計測値分布

主要5種とウミナナ類の計測を行った。計測可能な個体が少ない場合は省略している。ヒストグラムを第6表に示す。過去の報告では、当遺跡の2次調査において、オキアサリ・ハマグリ・マガキの計測を実施している。計測値についても、前回の結果も含めて後述する。

(3) マガキの付着痕

生息時に何に付着していたかを推定するため、左殻の殻頂付近を観察した(第7表)。その結果、マガ

第3表 貝サンプル一覧

試料名	時期	遺構	採取量 (g)	水洗後量 (kg)	選別率 (%)	選別量 (g)	位置	遺物%	備考
SI-003	加曾利EⅢ	住居跡	6.80	5.76 *	100	6.80	炉内/1層	079	0.5×0.2×0.1mの小貝層全量一括
SI-004	加曾利EⅡ	住居跡	3.90	2.95	100	3.90	床面	001,002	攪乱積み2単位で全量採取。1カット扱い
SI-006	加曾利EⅢ	住居跡	297.20	215.30 *	10	29.72	覆土中	002	47ロック全量一括。4×2m他大きな貝層
SI-018	加曾利EⅢ	住居跡	197.00	147.30	5	9.85	炉内～床面	—	1.9×1.2×0.3mの貝層全量一括
SI-019	加曾利EⅢ	住居跡	12.00	8.40	100	12.00	床面	—	0.8×0.6×0.1mの貝層全量一括
SK-010	称名寺?	円形土坑	134.20	136.41 *	17	23.80	覆土2-4層	—	0.8×0.4×0.2m, 3層あるが全量一括
SK-037	加曾利EⅣ	円形土坑	不明	不明	100	—	覆土5層	005-18	1箇所、0.5×0.4×0.1mの貝層全量一括
SK-063	加曾利EⅣ	円形土坑	不明	不明	100	—	覆土2-3層中	021	0.4×0.3×0.1m小貝層全量一括
合計			651.10	516.12		86.07			

*「採取/水洗後量」のうち、*としたものは水洗前の量が不明

*「選別率」は、全てを水洗したが、採取量の多いサンプルは選別・集計対象を一部とした

第4表 貝類種名一覧

綱	目	科	和名	学名	
腹足綱	原始腹足目	ニシキウズガイ科	イボキサゴ	<i>Umbonium (Sichium) moniliferum</i>	
		リュウテンサザエ科	スガイ	<i>Lunella coronata corensis</i>	
		タマキビガイ科	タマキビガイ	<i>Littorina brevicula</i>	
		カワニナ科	カワニナ	<i>Semislucospira libertina</i>	
	中腹足目	ウミニナ科	フトヘナガリガイ	<i>Cerithidea rhizophorum</i>	
			ウミニナ類	<i>Potamididae sp.</i>	
		タマガイ科	ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i>	
		アケキガイ科	アカニシ	<i>Rapana venosa</i>	
			イボニシ	<i>Thais (Retzia) clavigera</i>	
			アラムシロガイ	<i>Reticunassa festiva</i>	
	二枚貝綱	フネガイ目	ムシロガイ科	バイ	<i>Balyonia japonica</i>
			エソノバイ科	ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>
		ウグイスガイ目	フネガイ科	サルボウガイ	<i>Scapharca subcrenata</i>
				マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
イタボガキ科			シオフキガイ	<i>Mactra quadrangularis</i>	
バカガイ科			バカガイ	<i>Mactra chinensis</i>	
			フジナミガイ	<i>Soletellina boeddinghausi</i>	
			マテガイ科	<i>Solen strictus</i>	
			マルスダレガイ科	<i>Phacosoma japonicum</i>	
				<i>Ruditapes philippinarum</i>	
	オキアサリ	<i>Gomphina (Nacridiscus) aequaliter</i>			
	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>			
	オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>			
	オオノガイ科	オオノガイ	<i>Mya arenaria onogai</i>		

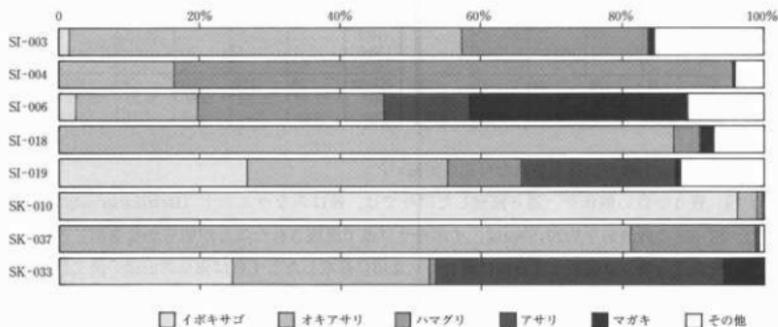
キ同士で付着していたと推定される個体が圧倒的に多く、カキ礁から採取したものが中心であったとみられる。ただし、加曾利EⅢ式期のSI-006には他の貝類や棒状のものに付着したのもかなり多く含まれているのに対して、EⅣ式期のSK-063ではすべてカキ礁に由来するようである。「棒状のもの」はおそらく植物の茎や根であろう。葦などの生える塩性湿地において植物や貝類に付着しながらカキ礁が形成されていったことをものがたる資料といえよう¹³⁾。

(4) 希少種の評価

サンプル数が少なく希少種の評価は難しいが、特徴的なものについて述べておく。取り上げた以外でも、ツメタガイ、イボニシ、マテガイなども少ないとはいえ、食用として採取されたものと考えられる。タマ

第5表 貝類同定結果

種名	時期 計	EⅡ	EⅡ	EⅢ	EⅢ	EⅢ	称名寺?	EⅣ	EⅣ
		SI-003	SI-004	SI-006	SI-018	SI-019	SK-010	SK-037	SK-063
イボキサゴ	16,328	6		74	4	237	15,581	1	425
オキアサリ	4,620	202	41	509	2,069	253	446	613	487
ハマグリ	1,550	96	198	782	88	93	143	134	16
アサリ	1,272	1		360	5	193	4	4	705
マガキ	1,035	2	1	908	42	6			76
その他	706	56	10	320	169	105	18	5	24
スガイ	52	21		11	19				1
タマキビガイ	2			2					
カワナ	9				8	1			
フルヘナカリガイ	24				24				
ウミニナ類	234			159	54	7	4		10
ツメタガイ	13	1		3	5	4			
アカニシ	20			1	16	1	1	1	
イボニシ	2				1			1	
アラムシロガイ	8					4	4		
ハイ	25			1	23				1
ハイガイ	3	1			2				
サルボウガイ	2			1		1			
シオフキガイ	137	2	3	69	8	47	2		6
バカガイ	74		7	28	2	34	1	2	
フジナミガイ					1				
マテガイ	9				1	3			5
カガミガイ	11			6	3	1			1
オキシジミ	80	31		38	3	1	6	1	
オオノガイ	1			1					
合 計	25,511	363	250	2,953	2,377	887	16,192	757	1,733
水洗前体積(D)		?	3.9	?	9.85	12	?	?	?
微小貝		11	11	多 小魚稚	30		2	5	
魚骨			遊離歯2	骨片1					
獣骨				64.0	0.0	0.4	1.0	10.0	
フジツボ類(q)				*			クルミ片2		
炭化種子				34			13		
土器片	1			*ムギ大1, *クルミ片2		6			9
混入?									



第107図 遺構別貝種組成

キビガイ、アラムシロガイは混獲とみてよいであろう。ハイガイは中期までは海老川河口付近に生息していた可能性を示すもので、カワナは淡水産資源の利用を示すものである。

スガイ 通常は岩礁種とされることが多いが、東京湾沿岸の貝塚ではカキ礁の発達とともに増え、食用に採取されることがあった。SI-003及びSI-018ではそれぞれ約20個であるが、マガキは少ないサンプルで

第6表 貝類計測値分布

イボキサゴ殻径			ウミナナ類殻高		マガキ殻高				アサリ殻長		
mm	SI-010	SK-063	mm	SI-006	mm	SI-006	SI-018	SK-063	mm	SI-006	SK-063
-10.0			-10.0		-5.0				-5.0		
-11.0			-12.0	1	-10.0	3	2		-10.0		
-12.0	1		-14.0	2	-15.0	23	2	2	-15.0	1	1
-13.0	8		-16.0	4	-20.0	17	2	2	-20.0	1	
-14.0	37	3	-18.0	4	-25.0	8	1		-25.0	10	10
-15.0	75	51	-20.0	1	-30.0	39	3	1	-30.0	14	76
-16.0	56	50	-22.0	7	-35.0	59	2		-35.0	7	74
-17.0	20	31	-24.0	10	-40.0	23	3	2	-40.0	3	9
-18.0	3	14	-26.0	4	-45.0	11	1	2	-45.0	3	3
-19.0		2	-28.0	4	-50.0	10	2	5	-50.0		
-20.0			-30.0	1	-55.0	4	4	11	-55.0		
-21.0			-32.0		-60.0	1	1	7	-60.0		
-22.0			-34.0		-65.0	-	1	4	-65.0		
-23.0			-36.0		-70.0	-		5	-70.0		
-24.0			-38.0		-75.0	1		3	-75.0		
-25.0			-40.0		-80.0	1		1	-80.0		
-26.0			-42.0		-85.0				-85.0		
-27.0			-44.0		-90.0				-90.0		
-28.0			-46.0		-95.0			1	-95.0		
試料数	200	152	試料数	38	試料数	200	24	46	試料数	39	173
AV.	14.74	15.51	AV.	20.89	AV.	30.10	34.76	52.93	AV.	28.24	30.08
DEV.	1.04	1.18	DEV.	4.61	DEV.	11.21	16.55	16.07	DEV.	6.59	3.71

ハマグリ殻長							オキアサリ殻長						
mm	SI-003	SI-004	SI-006	SI-018	SK-010	SK-037	mm	SI-003	SI-006	SI-018	SK-010	SK-037	SK-063
-5.0							-5.0						
-10.0							-10.0						
-15.0							-15.0						
-20.0							-20.0						
-25.0		22	39	5		1	-25.0		3	25	10	2	6
-30.0	6	19	71	4	3		-30.0	5	45	63	17		12
-35.0	7	6	34	6	8	8	-35.0	9	24	61	21	21	21
-40.0	4		22	6	5	14	-40.0	8	38	15	10	54	58
-45.0			9	1	5		-45.0	8	14	14	15	48	40
-50.0			3	1	6	1	-50.0	5	9	7	12	30	14
-55.0			3	1	3		-55.0	1	1		1	5	1
-60.0							-60.0						
-65.0							-65.0						
-70.0							-70.0						
-75.0							-75.0						
-80.0							-80.0						
試料数	17	47	186	21	31	23	試料数	36	159	170	78	162	152
AV.	32.45	25.92	29.71	34.04	39.08	35.95	AV.	37.92	32.26	31.80	36.23	40.35	37.89
DEV.	3.49	3.18	6.60	7.30	8.39	3.20	DEV.	6.99	7.44	5.86	7.31	5.22	5.80

あり、当遺跡の場合も食用に採取された可能性が高い。

ウミナナ類 残りが良い個体を一通り観察した限りでは、種はみなウミナナ (*Batillaria multiformis*) であった。SI-006の計測値平均20.89mmは、イボキサゴ漁で混獲されたことが明らかな事例に近い。ただし、貝種組成を見る限りは混獲とするのは難しい。食用に採取したとすれば東京湾沿岸の縄文貝塚ではきわめて稀な例となるが、ここでは判断を保留しておく。

アカニシ、バイ SI-018で比較的多くまわっており、いずれも群生種ではないため、積極的に採取していた可能性がある。

シオフキガイ、バカガイ いずれも、SI-006・019でまわっていたが、両種が共に多いのは偶然ではかろう。シオフキガイは東京湾沿岸の貝塚の主要構成種のひとつで、とくにハマグリ主体の貝層に伴う出現率の高い種で、最優占種となる層もみられる。もともと棲息環境に近いのはアサリと考えられるが、縄文貝塚のデータのみを限り、村田川以南（外湾）ではシオフキガイが、都川以北（湾奥）ではアサリが上回っていて例外は少ない。今回の分析で、都川よりかなり湾奥側に存在する海老川水系でもシオフキガイが

第7表 マガキ付着痕

遺跡 時期	SI-006	SI-018	SK-063
	加EⅡ	加EⅢ	加EⅣ
A:マガキに付着*	374	4	58
B:二枚貝に付着	96	1	
C:ウミナギに付着	5		
D:椎状のものに付着	12	1	
計	486	6	58
殻長平均(mm)	30.1	34.8	52.9

*付着痕なし、またはマガキ同士で付着

少ないという結果を得ることができた。一方、バカガイはイボキサゴやハマグリと重なる海域に多産する貝種であるが、東京湾沿岸のイボキサゴやハマグリ主体貝層に多く混じる例は知られておらず、縄文人が意識的に採取を避けた可能性が指摘されている。

オキシジミ SI-003・006でややまとまっていた。早期後葉には、ハイガイ、マガキとともに湾奥干潟主体の貝層に

安定しており、それ以降も稀に多く入る例をみる。

4 中野木台遺跡群の貝層

(1) 比較試料

中野木台遺跡群の過去の多くの貝サンプルデータは、時期的には加曾利EⅡ式期終末頃からEⅣ式期がほとんどである²⁾。検出状況は遺跡群全体では、住居跡では炉周辺の床面、またはその直上に堆積する例が多く、小竪穴では覆土中層にレンズ状堆積する例が多い。またそのいずれの場合においても、個々の貝層の規模は小さいという特徴に変わりはない。比較データとして、過去に報告された試料のうち、時期を絞り込むことが可能な試料を取り上げ、貝種組成と計測値分布の傾向を検討することにしたい。

新山東遺跡3次 加曾利EⅡ：1，EⅢ：4，EⅣ：2，称名寺？：1（今回）

新山東遺跡2次 加曾利EⅢ：8，EⅣ：1（高橋2001）

（中野木）新山 加曾利EⅣ：6（長岐1977）

新山台 加曾利EⅣ：4（石坂1996，中野木（4））

(2) 貝種組成の特徴

第8表・第108図は、今回の分析結果に過去の分析結果を加えて、時期順に並べたものである。全体的にみて、おもな構成種は、内湾砂底種のイボキサゴ・オキアサリ・ハマグリ・アサリと、湾奥泥底干潟種のマガキの5種である。主要5種のなかでの割合はサンプルごとの差が大きい。主要種以外の入り方も同様である。この傾向は、今回分析した結果と同じであり、試料数を増やしても変わることがなく、当遺跡群の貝層の特徴といえそうである。東京湾の大形貝塚に代表される、ごく少数の主要種に強く偏ったあり方とは明らかに異なっている。サンプルごとのばらつきが大きいため時期的な特徴を捉えるのは難しいが、第9表・第109図にはあえて時期ごとに個体数を合計したグラフを示した。加曾利EⅡ式期と称名寺式期はそれぞれ1サンプルのみであるため、時期の傾向をどの程度示しているか疑問が残る。そこで、参考として海老川と菊田川水系のデータを補った。称名寺式期のデータは習志野市藤崎堀込貝塚（金子1977）のもの、堀之内式期のデータは、船橋市・宮本台貝塚（小池1974）、習志野市藤崎3丁目南遺跡（遠藤1995）、藤崎堀込貝塚（金子）のものである。

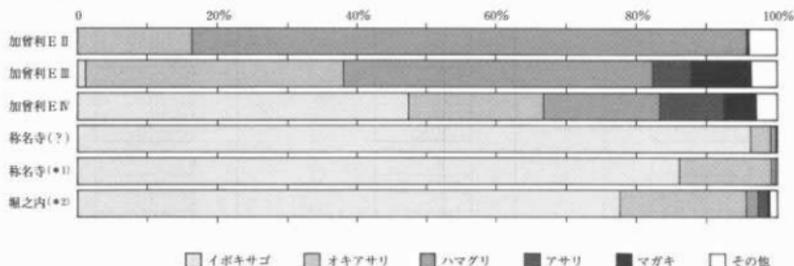
(3) 主要5種について

主要5種のなかで、もっとも多くのサンプルに入っていて、かつ数量が安定しているのはオキアサリである。殻長の計測値（第110図）をみると、加曾利EⅢ式期は平均が27.5mmとごく小さいサンプルから、平均38mm程度の大きいサンプルまでばらつきが目立つのに対して、EⅣ式期と称名寺式期では大きい例ばかりになっている。中期後葉から後期初頭に向けてやや大きくなる傾向が認められる。オキアサリは、中期後葉から後期中葉にかけて、海老川-菊田川-花見川-汐田川の各水系の貝塚で盛んに利用された。こ

第9表 中野木台遺跡群時期別貝種組成

種名	加曾利EⅡ	加曾利EⅢ	加曾利EⅣ	称名寺?	称名寺*1	堀之内*2
イボキサゴ	0	321	46,917	15,581	27,566	35,877
オキアサリ	41	10,089	19,036	446	4,168	8,268
ハマグリ	198	12,158	16,513	143	197	843
アサリ	0	1,471	8,997	4	4	62
マガキ	1	2,357	4,529	0	1	76
その他	10	998	2,930	18	86	512
合計	250	27,394	98,922	16,192	32,022	46,228

*1: 藤崎堀込(金子1977)
 *2: 宮本台遺跡, 藤崎3丁目南, 藤崎堀込
 (小池1974, 遺跡1995, 金子1977)



第109図 中野木台遺跡群時期別貝種組成

の地域は、奥東京湾湾口部や都川・村田川水系という中・後期の大型貝塚形成の中心地に挟まれた部分にあたるが、宮本台貝塚、藤崎堀込貝塚、千葉市・榎橋貝塚などの大規模な貝層は、オキアサリの大量採取によって形成されたものである。さらに、後期中葉にはこれらの貝塚集落や、四街道市八木原貝塚の集落を通じて、印旛沼水系の多くの集落にもオキアサリが流通していたことが明らかにされている(阿部・建石他2000)。上限は飯山満東遺跡の前期中葉・黒浜式期の貝層に混じる(清藤1975)ものあたりであろうか¹⁰⁾。縄文時代以降の分析例は少ないが、習志野市谷津貝塚の古墳時代・平安時代例(白石・新聞2000・2001)や、船橋市印内台遺跡の奈良・平安時代例(白井2002・石坂2003など)では、オキアサリは皆無である。本種は古代には東京湾から姿を消していた可能性が高い。本種の生態については不明点が多く、この地域に大きな個体群が形成されたことも謎ばかりであって、今後の解明が待たれる。

ハマグリとイボキサゴは合計するとオキアサリに劣らない。しかし、ハマグリは前半のEⅡ式～EⅢ式期、イボキサゴは後半のEⅣ式期以降で、一部のサンプルに大量に入っており、時期ごとの数値を押し上げる傾向がある。ハマグリは、オキアサリに次いで利用頻度が高かったものと思われる。加曾利EⅢ式期にはとくに多く、後半は減る傾向が認められた。計測個体数が少ない種が多いためサイズの変化は捉えにくい。加曾利EⅣ式、称名寺式期には大型化する傾向を示す。イボキサゴは加曾利EⅢ式期までは少なく、EⅣ式期以降に増えたようである。マガキとアサリは以上の3種に比べると少なく、サンプルによって多寡が明確である点が特徴である。マガキはEⅢ式には他の貝殻等に付着した小さめの個体が多く、その後カキ礁に由来する大きめの個体が増えてゆく傾向がうかがえた。

(4) 魚類・哺乳類の利用

今回分析したサンプルから検出した魚類遺体は小形魚の椎体1点と焼けた魚類遊離骨2点、獣骨はごく小さな骨片1点に過ぎない。いずれも偶然紛れ込んだと考えられる程度であり、貝層には骨が廃棄される機会が皆無に近かったと推定される。これは、中期中葉・加曾利E式前半期の東京湾沿岸の大型貝塚の貝層では必ずといってよほど小魚の骨が混じるあり方とは対照的である。この時期は漁具も少なく、貝類の採取のために海岸に行っても魚はあまり獲らなかった可能性が高い。一方、狩猟活動については比較的

石鏃の製作が活発な時期にあたることなどから、一概に低調であったとみることはできない。

5 小結

当遺跡群の中期後葉を中心とする貝層の特徴を、以下のようにまとめることができる。

- ①貝層は小規模であり、継続的な廃棄は認められない。
- ②住居跡内では炉の内部や床面上に、小竪穴内では覆土中層にレンズ状堆積する貝層が大半である。
- ③主要貝種の組成比は安定せず、また、主要種以外の利用の仕方もばらつきが多い。
 - a. もっとも安定的に利用されたのはオキアサリである。
 - b. ハマグリ、イボキサゴも時期的な変化はあるが頻繁に利用された。
 - c. マガキ、アサリは時折まとめて採取された。
- ④貝層には、魚類や哺乳類などの遺体が含まれない。

このような特徴から、貝類の利用はそれほど頻繁ではなく、一度の漁・消費の量も少なかったものと推定され、特定の貝種の集中利用もみられない。また、魚類はほとんど利用されていなかった可能性がある。海岸へのアクセスに恵まれた立地にありながら魚貝類の利用が低調であることは、すでに指摘されている（金刺・西川1977）とおりである。また、住居跡の床面上に堆積する貝層は、通年定住型の集落ではほとんどみられないものであり、居住様式の差が現れている可能性が高い。さまざまな点で、前後の大型貝塚を形成する時期とは対照的な特徴を示している。海老川水系や、周辺の貝層の分析例は未だ不充分だが、縄文時代の生産居住様式の変化や多様性を知る上でとても重要な地域となっていくことであろう。

注

- 1 前回の報告（高橋2001）では、マガキは岩面に付着するとし、小さな岩が存在した可能性を述べているが、マガキの棲息条件として岩は必須のものではなく、今回の付着痕の観察によっても否定される。
- 2 加曾利E式の編年は、いわゆる吉井城山編年（岡本他1965）と加納実の編年（加納1994）に基づく。加曾利EⅢ式・EⅣ式は細別が可能であるが、今回は詳細な検討ができなかった。貝種組成や計測値の時期的な変化をみるためには、本来、細別を採用したいところである。
- 3 飛ノ台貝塚の早期後葉の貝層では報告されておらず、踏破時期には真間川低地の上台貝塚や塚原貝塚でも混じっているため、縄文海進の後半頃から利用され始めたようである。

文献

- 阿部芳郎・建石徹也 2000 「縄文後期における遺跡群の成り立ちと地域構造」 鎌倉史学109
- 石坂雅樹 1996 「中野木台遺跡群（4）」 船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター
- 石坂雅樹 2003 「印内台遺跡群（32）」 船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター
- 遠藤啓子 1995 「住居跡および土坑出土の自然遺物」 『藤崎3丁目南遺跡』 習志野市教育委員会他
- 岡本勇他 1965 「関東」 『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』 河出書房新社
- 金子浩昌 1961 「海老ヶ作貝塚」 『印刷手賀』 千葉県教育委員会
- 金子浩昌 1977 「動物遺体」 『習志野市藤崎堀込貝塚』 習志野市教育委員会
- 金刺伸吾・西川博孝 1977 「動物遺体」 『中野木新山遺跡』 中野木新山遺跡調査団
- 加納 実 1994 「加曾利EⅢ・Ⅳ式土器の系統分析-配列・編年の前提作業として-」 貝塚博物館紀要21, 加曾利貝塚博物館
- 小白裕子 1974 「宮本台遺跡出土ハマグリの採集期について」 『宮本台』 船橋市教育委員会
- 白石 浩・新開玲子 2000 「谷津貝塚F地点」 『平成12年度市内遺跡発掘調査報告書』 習志野市教育委員会
- 白石 浩・新開玲子 2001 「谷津貝塚E地点発掘調査報告書」 習志野市教育委員会
- 白井太郎 2002 「印内台遺跡群（27）」 船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター
- 清藤一順 1995 「貝層の検出状況」 『嵐山溝東遺跡』 千葉県都市公社
- 高橋博文 2001 「貝層標本の分析結果」 『船橋市新山東遺跡』 千葉県文化財センター
- 長岐 勉 1977 「動物遺体」 『中野木新山遺跡』 中野木新山遺跡調査団

第4章 奈良・平安時代以降

縄文時代以外の時期の遺構は、南端の(3)D区と(3)E区および北端の(6)区に限定される。該期の遺構は道路と考えられる溝状遺構3条及び掘立柱建物跡5棟のほか、組み合わせが不明な柱穴群である。

第1節 奈良・平安時代

1. 溝状遺構

SD-001 (第111～113図, 図版84・85・88)

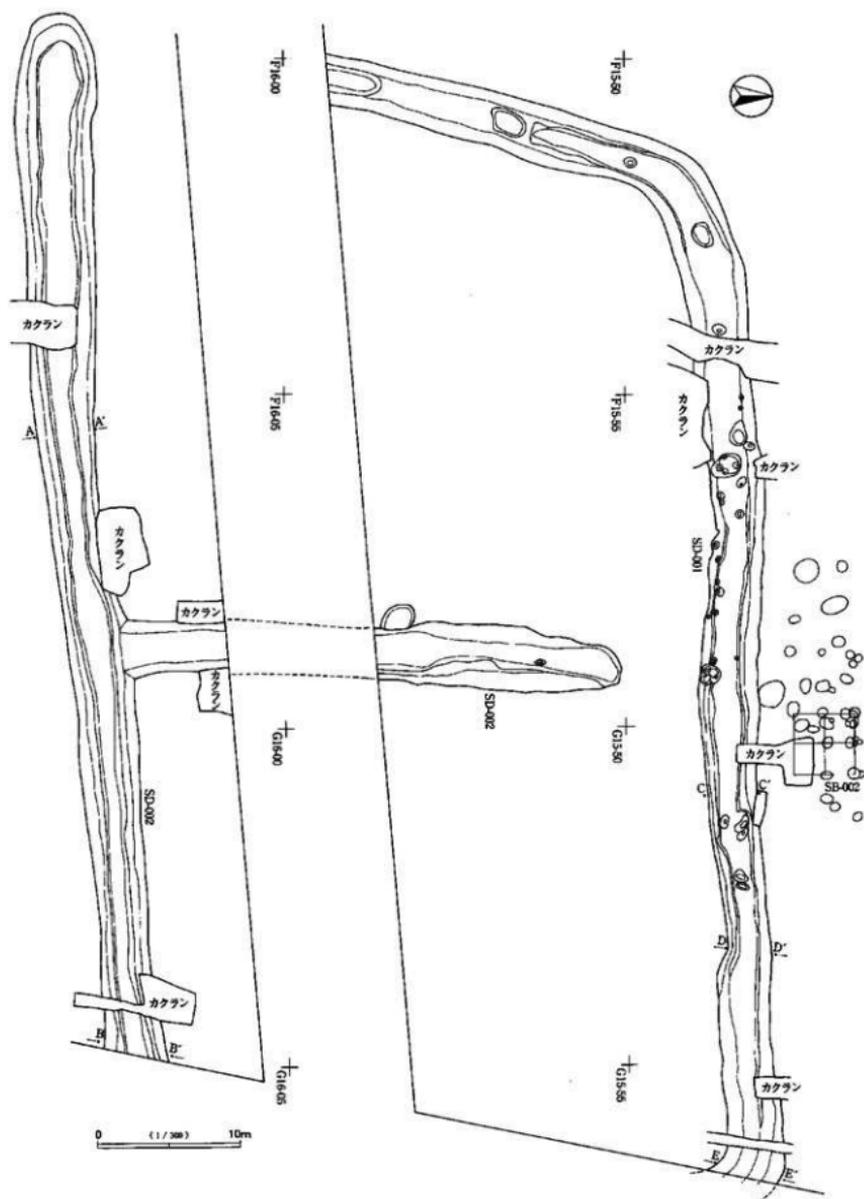
調査時には(3)E区と(3)D区が連続していると捉え、同一記号・番号を付したが、現道部分については未調査で、現状では接続している部分がないため、それぞれ末尾に調査区を示す(D), (E)を付した。

SD-001 (D)は直線部はおよそ50m、西端は大きく弧を描き南に湾曲する。東側は調査区域外であるため不明だが、東端が南に湾曲する傾向にあり、F15-39付近を中心にして左右対称となるかもしれない。総延長で84mを調査した。規模は上端3.7m～2.6m、下端2.4m～2.6m、深さ0.61m～0.93mである。断面逆台形、底面は平坦で、壁面は急角度で立ち上がる。土層断面から何度かの掘返しと、使用面の再構築が見られる。平面図からはF15-61・90周辺で、明らかな垂直方向への段差を確認できる。また、G15-31付近では、水平方向のズレを確認できる。SD-001 (E)は総延長63mである。規模は上端4.8m～2.85m、下端2.1m～0.8m、深さ0.82m～0.91mである。断面は逆台形で、底面は平坦である。壁面は急角度で立ち上がる。土層断面から、何度かの掘返しが見られる。

SD-002 (第111～113図, 図版85・88)

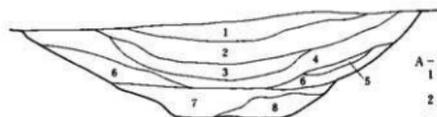
SD-001 (E)のF16-28付近からはほぼ真北に延びる溝状遺構である。生活道路がかかっているため一部を調査できなかったが、本来は途切れることなく続いているのであろう。その場合長さ29.50m、上端3.9m～3.0m、下端0.9m～1.8m、深さ0.85m～0.46mである。北壁が攪乱を受けているが、残存する底面は北端で急激に立ち上がって消滅する。調査時の所見で、床面はSD-001 (E)の7層(A)上面とレベル差がなくほぼ連続していることから、SD-001 (E)が埋没し、7層が形成された後、調査区内中央から北側に突き出すようなSD-002が造成されたものと思われる。逆にもっとも古い段階のSD-001 (E)にはSD-002の張り出しは見られなかったものと判断される。壁面に残る段差と覆土の堆積状況を観察すると、埋戻しと造成を何度か繰り返して、使用され続けたのであろう。7層はやや硬いが、はっきりとした硬化面はない。

遺物 いわゆるロクロ土師器と須恵器があり、ほとんどがSD-001 (D)の覆土中だが、4がSD-001 (E)、8がSD-002から出土した。1・2は土師器高台付皿である。1は内面にヘラミガキと黒色処理を施す。高台裏に「無」、体部外面に墨書があるが、後者は判読できない。胎土は微砂粒を含む。外面はにぶい黄褐色で、焼成は良いが軟質で、口径13.5cm、高台径6.4cm、器高2.7cmである。2は体部外面に墨書が見られるが、欠損して判読不能である。外面は明黄褐色で、焼成は良好である。口径15.8cm、高台径8.1cm、器高2.3cmである。3は削出高台の土師器皿である。



第111図 溝状遺構(1)

A



A'-19.6m

A-A'

- 1 黒色土
- 2 黒色土主体、少量のハードロームブロック (3mm~5mm●)
- 3 暗褐色土
1層+少量のソフトローム
- 4 暗褐色土
2層より黒色土が多い。
- 5 褐色土
ソフトローム、ハードロームが多く、黒色土が混ざる。
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土と暗褐色土を同量含む、ハードロームブロック (3mm~5mm●) を少し含む
- 8 暗褐色土
暗褐色土とソフトローム主体、ハードロームブロック (5mm~10mm●) を少し含む
- 7層よりソフトロームが多い、ハードロームブロックも多く含む

B

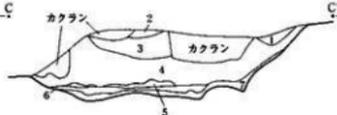


B'-19.5m

B-B'

- 1 黒色土
- 2 黒色土主体、少量のハードロームブロック (3mm~5mm●)
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土
1層+少量のソフトローム
- 5 暗褐色土
2層よりやや明るいソフトローム、ハードロームが多く、黒色土が混ざる
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土と暗褐色土を同量含む、ハードロームブロック (3mm~5mm●) を少し含む
- 8 暗褐色土
暗褐色土とソフトローム主体、ハードロームブロック (5mm~10mm●) を少し含む
- 7層よりソフトロームが多い、ハードロームブロックも多く含む

C

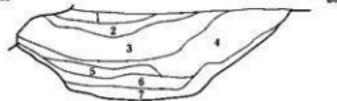


C'-20.1m

C-C'

- 1 暗褐色土
- 2 褐色土粒 (0.1mm~1mm●) を含む、約1%
- 3 やや明るい暗褐色土
- 4 褐色土粒 (0.1mm~1mm●) を含む、約5%
- 5 やや明るい暗褐色土
- 6 褐色土粒 (0.1mm~1mm●) を含む、約15%
- 7 ソフトローム粒 (0.1mm●) をわずかに含む
- 8 暗赤褐色土
- 9 硬土層、固まった部分あり
- 6 灰黄褐色土
- 7 ハードローム粒 (0.5cm~2cm●) を含む、20%、硬い
- 7 に近い黄褐色土
- ハードローム粒 (2cm~5cm●) を含む、40%、硬い

D

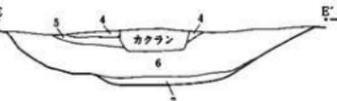


D'-20.3m

D-D'

- 1 黒色土
- 2 暗褐色土
- 3 やや明るい暗褐色土
- 4 褐色土粒 (0.1mm~1mm●) を含む
- 5 やや明るい暗褐色土
- 6 褐色土粒 (0.1mm~1mm●) を含む、ソフトローム粒 (5mm~20mm●) を含む、硬い
- 7 暗褐色土
- 8 硬土層 (1mm~20mm●) を含む、やや軟らかい
- 9 灰黄褐色土
- 10 ハードローム粒 (5mm~20mm●) を含む、硬い
- 11 に近い黄褐色土
- 12 ハードローム粒 (5mm~40mm●) を含む、硬い

E



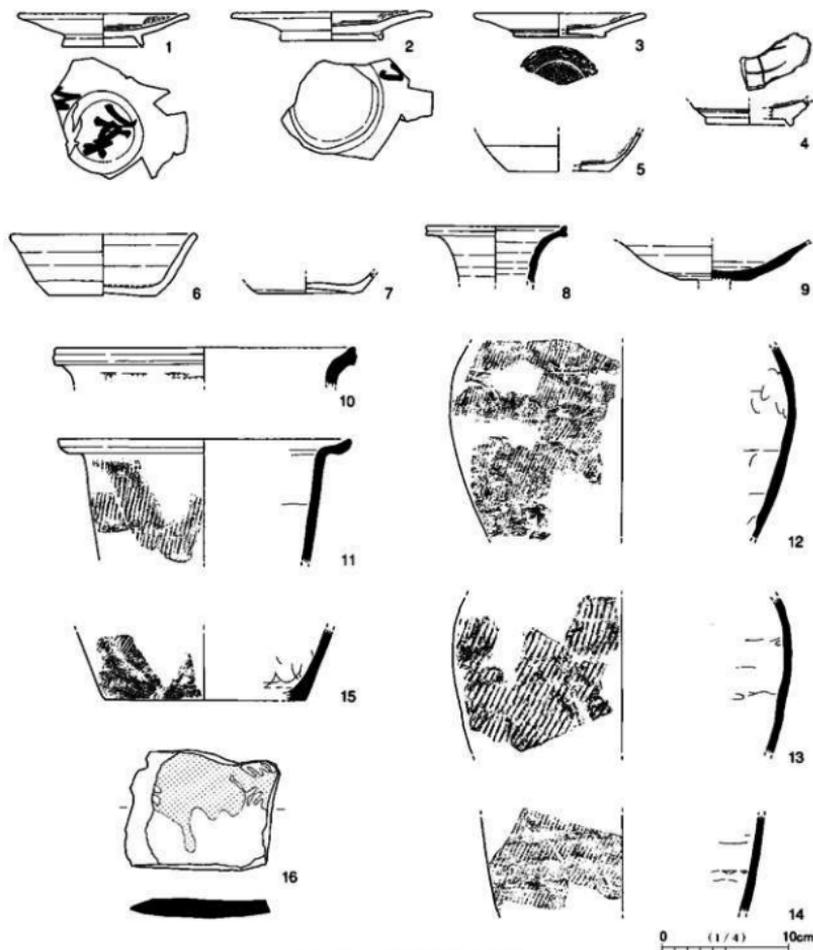
E'-20.1m

E-E'

- 1 黒色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土粒 (0.5mm~1mm●) を含む、約5%
- 5 やや明るい暗褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土 (0.1mm~1mm●) を含む、約25%、ソフトローム粒 (5mm●程度) を含む、約3%
- 8 に近い黄褐色土
- 9 ハードローム粒 (1cm~2cm●) を含む、約10%、硬く貼っている

0 (1/50) 2m

第112図 溝状遺構(2)



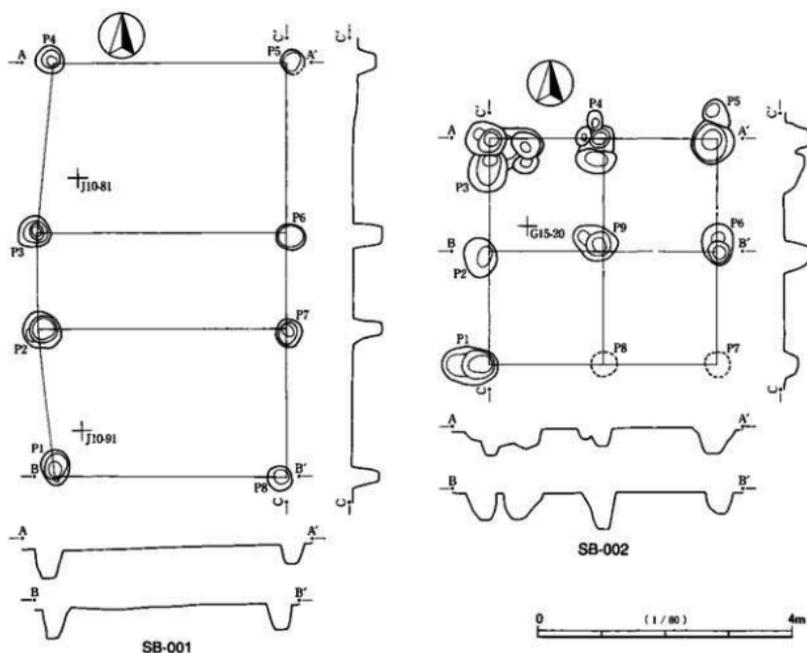
第113図 溝状遺構出土遺物

底面中央には回転糸切痕が残る。胎土には白色微粒とスコリアを含む。色調は全体がにぶい橙色で、口径13.5cm、高台径7.2cm、器高1.9cmである。4は貼付高台の杯である。内面に焼成後「井」の線刻を施すが、全体は不明である。高台裏に回転糸切痕を残す。高台径7.0cmで、色調はにぶい橙色である。5は内面に黒色処理を施す土師器杯である。色調は外面がにぶい橙色で、体部内面はヘラミガキ、底面は回転ヘラケズリ調整である。6・7は土師器杯で、胎土中に白色微粒・雲母粒を含む。色調は、内面がにぶい橙色、外面はにぶい橙色～黒色、断面は黒色で、焼成は良好

である。口径14.8cm、底径8.6cm、器高4.9cmである。底部は回転糸切りで、底面外周と体部下端は回転ヘラケズリを施す。7は外面に6同様の調整が施され、底径7.5cmである。8は須恵器長頸瓶である。色調は灰色で、口縁に自然釉が付着する。胎土中に黒色斑を含み、焼成は良好である。9は須恵器高杯で、胎土中には白色微粒を含む。色調は灰色で硬質である。内面の口縁付近には自然釉が付着する。10は須恵器甕で、白色微粒とスコリアを含み、色調はにぶい橙色である。焼成は良好で外面に平行タキを施す。11~14は須恵器甕である。11は胎土に白色微粒とスコリアを含む。色調はにぶい褐色で焼成は良好である。外面に平行タキ、内面はヘラナデを施す。12~14は胎土中に白色微粒やスコリアを含み、内面はナデにより調整され、指頭圧痕が残るものもある。外面は灰色、内面は暗灰黄色で、断面はにぶい橙色である。15は須恵器甕である。外面には平行タキ目とヘラケズリ痕が残る。底面は砥石として使用されていたようである。内面に指頭圧痕が残る。胎土中に白色微粒を含み、色調は淡灰色で軟質である。16は須恵器甕の胴部を転用した甕で、SD-002 (D) 覆土中から出土した。内面が磨かれているが、墨痕は認められない。胎土中には白色粒子や黒色微粒を含み、色調は灰色である。

2. 掘立柱建物跡

SB-001 (第114図, 図版86)



第114図 掘立柱建物跡

(3)B区最北端、J10グリッド南西端に位置する。1間×3間の8本の柱穴からなる掘立柱建物跡である。全体の柱穴の配置を見ると、西側の長軸方向の4本が一直線に並ばないこと、内側2本の間隔が、外側2本との間隔と大きな隔りがあり、一棟と考えて良いのか疑問が残る。場合によっては北南それぞれ4本柱の2軒の掘立柱建物になる可能性もある。前者の場合北側の梁行が3.8m、東側の桁行が3間で6.6m、後者の場合、北側の掘立柱建物は北側3.8m×東側2.7m、南側の掘立柱建物は南側3.6m×東側2.38mとなる。最も大きなP2で直径0.61m、底径0.33m、深さ0.54mの円筒形、最も小さなP8で直径0.4m、底径0.23m、深さ0.42mとなる。調査時の記載がなく、柱痕を含めた覆土は不明である。

SB-002 (第114図)

(3)D区のF15グリッド北東端に位置する。9本の柱穴からなる2間×2間の総柱の掘立柱建物跡であるが、南端の中央および南東端の柱穴は攪乱により残っていない。北東端の柱穴は4本以上の柱穴が重複している。北側が2間で3.6m×西側が2間で3.6mであり、柱間は1.8mとなる。中心部の柱穴P9は最も深く、直径0.7m、底径0.21m、深さ0.6mになる。

第2節 中世以降

中世と断定できる遺物はない。遺構は形態から掘立柱建物跡3棟が中世以降の可能性がある。

1. 遺構

SB-003 (第115図、図版86・87)

(6)区中央部、I07グリッド中央付近に位置する。攪乱により柱穴の一部が削平されている。残存部を合わせると東西3間、南北2間になる。ただ南側には中央近くに1本の柱穴が位置し、北側が比較的等間隔に2本の柱穴が並ぶのとは対照的である。規模は西側梁行が2.8m×北側桁行が推定3.77mである。柱穴はいずれも小型で、最大のP5が直径0.3m、底径0.1m、深さ0.23mである。

SB-004 (第115図、図版86・87)

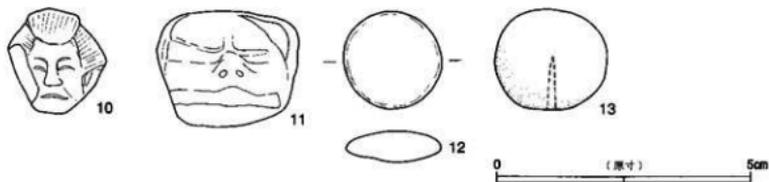
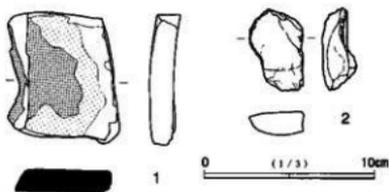
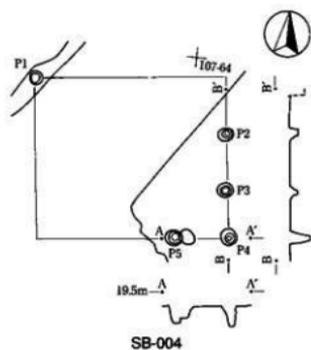
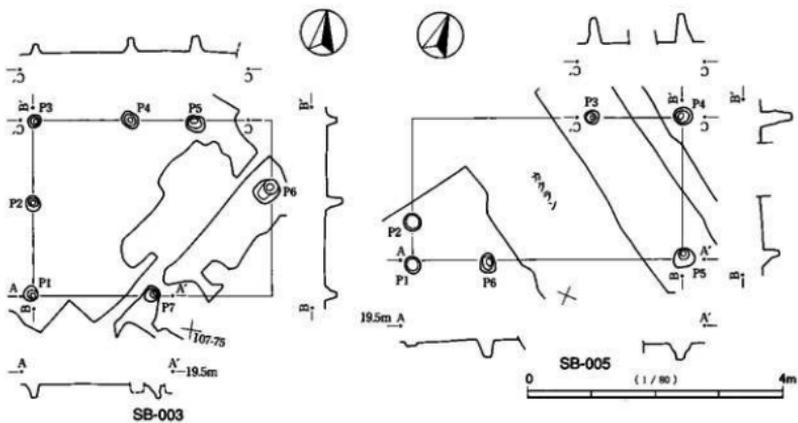
(6)区南西部、I07グリッド南西側に位置する。攪乱により柱穴の大半が削平されている。残存部を合わせると東西3間、南北3間になる可能性がある。規模は比較的残りの良い東側で推定2.66m、南側で推定3.0mである。柱穴はいずれも小型で、最大のP4が直径0.26m、底径0.1m、深さ0.34mである。

SB-005 (第115図、図版86・87)

(6)区中央部、I07グリッド中央付近に位置する。攪乱により柱穴の大半が削平されている。残存部を合わせると東西3間、南北2間になる可能性がある。規模は比較的残りの良い南側で推定4.25m、東側で推定2.6mである。柱穴はいずれも小型で、最大のP4が直径0.3m、底径0.1m、深さ0.5mである。

2. 遺物 (第115図、図版88)

1は須恵器甕の胴部破片を転用した硯で、SD-002(D)の覆土上層から出土した。外面から断面部にかけて著しく磨滅している。胎土中には白色粒や灰色微砂粒を含む。色調は灰色だが、断面は若干赤みを帯び、やや軟質である。2は瑠璃製の火打石である。3～11は泥面子で、いずれも遺跡内から表採したものである。すべて型押しで円盤状を呈するものが多く、3が金魚、4が轡と梯子、5が轡、6が風車、7が鎌と桶徳、9が農家である。また不整形のものは、人面をかたどったもの(10)、獅子頭(11)などがある。12・13は土製品で、12が碁石、13は丸玉であり、13には細い孔が穿たれるが、貫通しない。



第115図 中世以降の遺構と遺物

第5章 まとめ

第1節 旧石器時代

今回の調査では2か所、前回分を合わせると5か所の石器集中地点が認められた。そのうち第1地点については、おおむねⅢ層から出土していること、石材がガラス質安山岩を中心とすること、台地の南斜面にかかる位置に所在することから、前回調査の石器集中地点2とよく似ている。ただ、石器集中地点2は非常に範囲が広く、十数点にも及ぶ多数の母岩が想定され、かなり寸詰まりの剥片が多いのに対し、第1地点は非常に範囲が狭く、母岩は1個～2個程度、剥片もすべてが顕著な縦長の形状を呈すること、剥片同士がほとんど接合していない点などが異なっている。ただ、両地点間の距離は50m程度で、その間はほとんどが未調査であることから、第1地点は場合によっては石器集中地点2に連なる可能性も考えられる。第2地点についてはすべての剥片が黒曜石であること、Ⅳ層～Ⅴ層から出土していることが特徴であり、本遺跡の他の石器集中地点とは様相が異なっている。

第2節 縄文時代

1. 集落について (第116図)

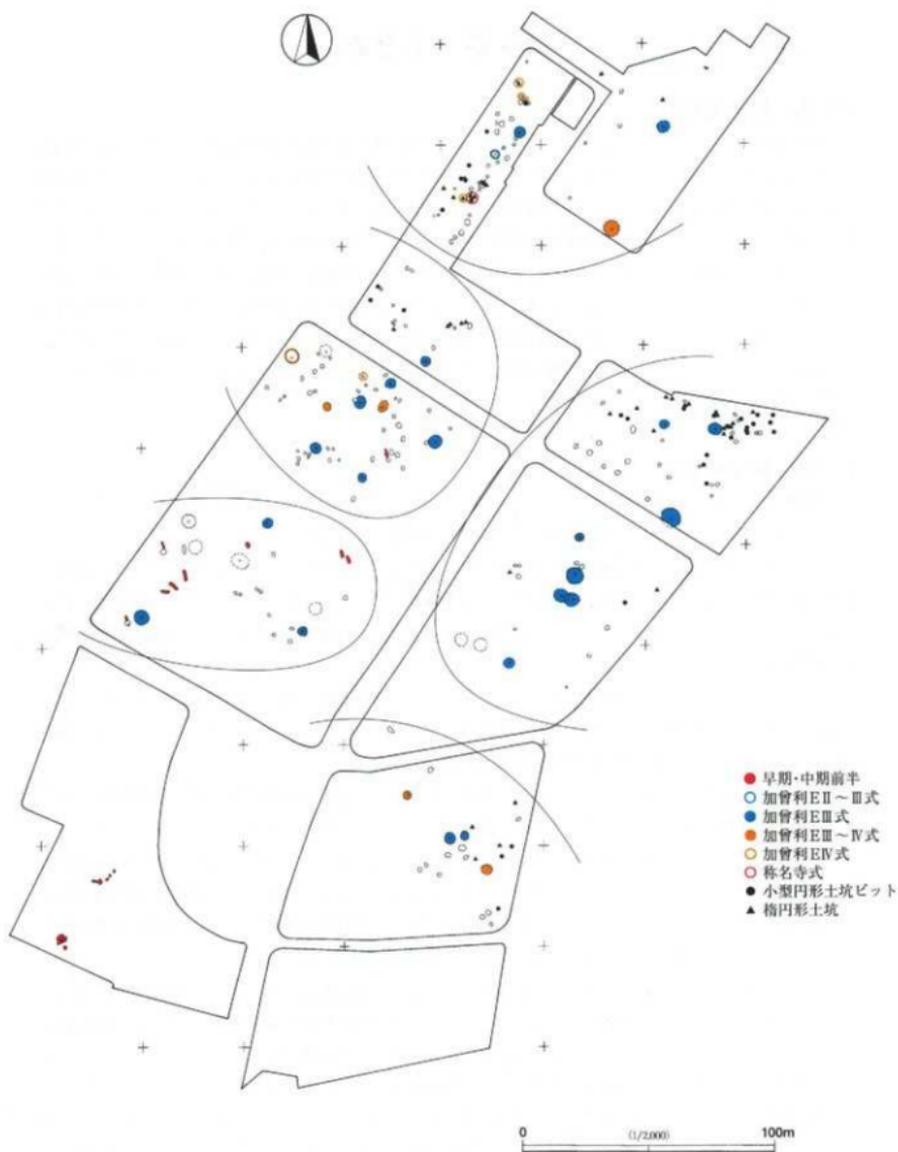
報告の成果をふまえながら、縄文時代の集落について概観してみたい。

まず、早期の遺構は、調査区南側のC15グリッドに炉穴と陥穴がややまとまって分布するほか、調査区北側のH07グリッド及びI07グリッドでも炉穴が2基検出された¹⁾。これらの遺構は、出土遺物から燃糸文系ないし条痕文系の時期に属し、中期の遺構が分布する範囲からは離れて存在し、台地の南北斜面部に近い位置に立地する点が特徴である。

中期に入って阿玉台式期の土坑がE11グリッド周辺で1基のみ形成された。本遺跡では他に確認されていないが、隣接する大仲台遺跡で阿玉台式の遺物包含層が検出されている。いずれにしても散漫な分布状況といわざるを得ず、集落全体の様相については不明である。

中期後半は本遺跡の最盛期であり、広範囲に集落が展開する。加曾利EⅢ式期が主体であるが、一部に後期初頭まで存続するものがある。堅穴住居跡について見ると、前回報告分のSI-012 (E10グリッド付近)を除き、すべてEⅢ式を伴うが、なかにはEⅣ式まで下る可能性のあるものを含み、SI-002はEⅡ式に近い様相を示している。土坑については遺物を出土しないものが多いため、時期を確定できるものが少ないが、覆土の様相や配置からみる限り、傾向としてはおよそ住居跡の時期と重なり、加曾利EⅢ式からEⅣ式に含まれるものが大多数とみられる。

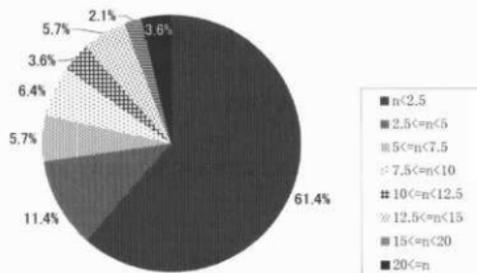
これらの遺構の分布状況は、いわゆる環状集落と言えるような構造ではなく、いくつかのブロックごとに群在する傾向が窺われる。加曾利EⅢ式の時期にはそれまでの典型的な環状集落が崩壊し、分散居住へと変化していくことが知られているが、本遺跡はまさしくそうした状況を反映したものとイえよう。団地の建替えという調査の性格上、攪乱が著しく本来の遺構分布を把握しきれていない可能性が高いが、仮に遺構群を想定した場合、北側のブロック、中央部北西側のブロック、中央部南西側のブロック、中央部東側のブロック、南側のブロックというおよそ5群に分割できよう。そして、各ブロック内には、必ず貝殻が投棄された住居跡が含まれる点も特徴である。炉の構造は、全体としては地床炉が圧倒的に多く、土



第116図 新山東遺跡縄文時代遺構分布図

第10表 新山東遺跡出土の軽石

遺構等	総点数	総重量(g)
SI-001	2	1.20
SI-003	18	27.91
SI-004	1	0.37
SI-006	140	806.39
SI-012	4	4.01
SI-014	2	1.66
SI-016	1	4.45
SK-049	4	6.72
SK-069	1	100.74
SK-070	3	325.89
SK-078	5	76.40
G08-90	2	7.17
H12-33	5	141.85
表探	10	168.11
位置不明	1	4.79



第117図 SI-006出土軽石重量分布

器片圍が約14%含まれる。このような住居跡は、中央北西ブロックと中央東側ブロックにみられ、特に後者に集中する傾向がみられる。

加曾利EⅢ式を中心とした時期を過ぎると、明らかにEⅣ式期に属する遺構は前述のSI-012と数基の土坑（SK-063ほか）のみとなり、散漫な分布を示すようになる。なお、周辺遺跡に目を転じると、隣接する中野木台遺跡群でEⅣ式期の竪穴住居跡等が10軒以上は確認されており、本遺跡の集落の解体に呼応するように周辺域への分散傾向が見て取れる。さらに後期初頭にはG08グリッド周辺で称名寺1式の土坑が数基形成される。遺構外出土遺物には堀之内式や加曾利B式の土器が認められるが、これ以降は遺構の構築はみられず、集落としては廃絶されたものと考えられる。

2. 遺物について

遺跡全体の遺存状況が悪いため、量はそれほど多いわけではない。遺構も攪乱や削平が著しいため、多くの遺物が調査前に失われているものと考えられる。そのなかで土器については、今回報告分のなかではSI-006が最も量が多く、まとまった内容である。また、SK-008の把手付壺形土器（第80図1）は類例の少ない資料であろう。微隆起線を施す加曾利EⅣ式の有孔鈔付土器とは異なり、EⅢ式風の意匠文を施し縄文を充填するものであり、市原市武士遺跡171号土坑や埼玉県島之上遺跡17号土坑の出土例に、器形や文様要素の共通する部分がある。

その他の遺物も決して多くはないが、ここでは軽石製品を取り上げておきたい。無論、縄文時代の遺跡から軽石製品が出土する例は決して珍しいことではないが、今回の例は数量的にもかなりまとまっており、それも一遺構からの出土量が圧倒的である点が一般的な遺跡と異なっており、本遺跡の特徴のひとつといえる。図化しなかったものを含め、総点数199点、総重量1677.66gを計る（第10表）。このうちSI-006からは70%を占め、重量比でも48%にのぼる。さらにその内訳をみると（第117図）、2.5g以下のものが約6割を占めているが、これらはほとんどが図化できなかった小片である。遺構外出土品を含め図化した資料を概観すると、大きさには非常にばらつきがあり、3cm～4cm前後の小型品から長さ18cmに及ぶ大型品まで存在する。形状は扁平なものや立体的なものがあり、前者の穿孔を有するものは浮子と考えられる。表面はいずれも研磨されており、明瞭なカール状の研磨痕跡を持つものほか、多方向からの研磨痕跡が認められるものもあり、こうした面状の研磨痕を有するものを砥石と判断した。両者の割合を比較すると、浮子とみられるものはごく僅かで、砥石と考えられる資料がほとんどを占めている。砥石としての用途を

考えると、本遺跡での石器の出土量が少ないことなどから石器製作の際に使用したものとは考えにくい。ここでは土器片鏟や土製円板などの土製品の周縁を研磨する際に使用した可能性を指摘しておきたい。遺跡全体をみると土製品は特に多いというわけではないが、土製品も多量の軽石製品を出土した SI-006 と他 1 軒の住居跡から集中して出土している点が興味深い。

註

- 1 今回炉穴としたものは他に 4 基あるが、周辺の遺構の分布状況や遺構の構造などから中期の炉跡との判別が困難なためここでは除外する。

第 3 節 奈良・平安時代以降

1. 奈良・平安時代

今回の調査で検出された遺構は溝状遺構 2 条と掘立柱建物跡である。

溝状遺構は、SD-001・SD-002 共に F15-61、90 グリッド付近で明らかな垂直方向への底面の段差を確認できる。また、G15-31 グリッド付近では、水平方向のズレを確認できることから、全体的に見ると底面が平坦で立ち上がりも明瞭な細長い溝状遺構の集合体の可能性もある。特に明瞭な硬化面は確認できなかったが、ここでは道路遺構としておきたい。大半の遺物は位置が不明であるため、所属時期や遺構間の時期差を捉えることはかなり難しい。ただ、今回の調査区では他に例のない 10 世紀前後の残存率の高い須恵器・土師器がまとまって、覆土中位から出土していることから、遅くともこの時期には機能を失っていた遺構と判断できる。また、F15-39、G15-30 グリッド北側には明らかに縄文時代のもとは異なるピットが多く認められる。調査段階では意識されていなかったようだが、その一部を組み合わせ、掘立柱建物跡 (S B-002) として掲載した。G15-31 付近の SD-001 (D) の覆土 (C) を観察すると、最上層の灰黄褐色土の上に、厚さ 3 cm～8 cm の焼土層が確認できる。その位置より 9 m 東側 (D) でも焼土を含む層を確認できることから、掘立柱建物が焼失した際の焼土層である可能性も考えられるが、残念ながら柱穴の土層からは明確な結論を得ることはできなかった。

2. 中世以降

今回の調査でこの時期としてあげたものは S B-003～005 の 3 棟の掘立柱建物だけで、いずれも (6) 区内に 3 棟とも近接して建てられている。個々の柱穴が小型で、中世特有の横方向から掘り込む抜取り痕が見あたらないこと、周辺の遺跡をみても中近世の集落を構成する遺構が認められた例がないことなどから、村落を形成するような定住性を持った家屋のような建物ではなく、一時的に使用した倉庫、物置あるいは獣舎などの可能性が高い。いずれにしても本遺跡周辺の中世の様相については、考察に値する試料に乏しく、今後の調査の進展に期待したい。

第11表 遺物観察表①(旧石路)

地点等	探洞 遺物	出土位置 位置	層位	器種	石材	寸法(mm)			重量 (g)	原石産地	備考
						長	幅	厚			
第1地点	8	E15-59	IXa	RF	AnV	72.5	19.5	10.2	11.55	大洗産?	2点検合
			Ixc	RF	AnV	86.8	21.7	14.1	14.12	大洗産?	
			IXa	Fl	AnV	49.0	16.8	8.1	7.99	大洗産?	
			IXa	Fl	AnV	57.0	15.9	8.1	8.29	大洗産?	
			IXa	Fl	AnV	68.0	10.5	5.3	3.51	大洗産?	
			IXa	Fl	AnV	63.0	20.0	9.8	12.77	大洗産?	
			IXa	Fl	AnV	41.9	20.5	8.3	7.09	大洗産?	
			IXa	Fl	AnV	53.9	13.0	6.5	4.58	大洗産?	
	9	10	IXc	Fl	AnV	86.4	21.5	13.7	25.02	大洗産?	
				Fl	Ds	65.8	19.2	7.6	11.04	久慈川・袋田周辺産	
				Fl	AnV	51.4	13.0	7.9	5.34	大洗産?	
				Fl	AnV	57.6	30.8	9.9	19.07	大洗産?	
				IXa	RF	AnV	81.7	46.8	12.2	36.73	
第2地点	11	J07-40	V	SS	Ob	66.8	22.1	18.9	33.17		
			V-VI	Fl	Ch	26.9	21.9	8.9	5.52		
			V	Fl	Ob	17.1	25.3	8.5	2.18		
			V	Fl	Ob	14.6	15.8	4.6	0.66		
			V-VI	Fl	Ob	25.4	16.0	5.3	1.47		
			IV-V	Fl	Ob	28.3	14.8	6.8	1.77		
			IV-V	Fl	Ob	23.2	19.9	9.1	2.38		
			V	Co	Ob	17.3	18.1	6.9	1.14		
早狭	12	G14-73	-	Co/GR	AnV	40.6	48.3	20.5	35.94	利根川産	
			-	SS	ShH	48.6	21.4	5.9	4.00	日本海沿岸産	
			-	PQ	Ch	43.10	26.46	13.95	18.22		
			-	Co	Ch	23.0	19.7	6.8	2.77	富士川産	
			-	UF	SH	36.4	14.6	6.5	2.53		
			-	UF	ShQ	45.9	18.0	15.9	7.04	茨城北部産	
			-	Fl	ShB	17.1	19.1	7.0	1.52	利根川産	
			-	Fl	AnV	24.7	24.5	7.6	3.36	大洗産?	
			-	Fl	AnV	21.2	19.5	6.4	1.49	大洗産?	
			-	VB	RF	Ob	35.4	20.8	8.5	3.66	
			-	Fl	AnV	33.4	27.9	12.8	9.79	富士川産?	
			-	Fl	An	37.3	14.9	10.2	5.30	利根川産	
			-	Co	ShB	52.1	43.9	24.3	49.41	利根川産	

第12表 遺構計測表①(炉穴等)

番号	形状	時期	位置	主軸 (N-)	上端(m)		下端(m)		深さ (m)	火床	備考
					長	幅	長	幅			
SK-054	楕円形	早期?	G08-32	35.5°-E	0.79	0.58	-	0.48	0.21	1	火床部のみ。
SK-055	円形	早期?	G09-81	-	0.74	-	0.52	0.13	1	火床部のみ、半欠。	
SK-123	楕円形	早期?	I11-25	61.0°-W	0.56	0.49	0.41	0.32	0.05	1	火床部のみ。
SK-135	楕円形	早期?	H13-32	33.0°-E	0.74	0.40	0.58	0.23	0.10	1	火床部のみ。
SK-168	楕円形	早期	H07-26	71.0°-W	1.72	1.20	-	-	0.29	2	1/3欠。
SK-173	三角形	早期	H07-35	12.5°-E	1.60	1.24	1.45	0.75	0.21	2	

第13表 遺構計測表②(竪穴住居)

番号	形状	時期	主軸 (N-)	遺構下幅(m)			柱穴	門区(m)				形式	伊(m)			覆土
				長	幅	深さ		①/②	③/⑤	④/⑩	長		幅	深		
SI-001	円形	加曾利EⅢ	38.0°-W	3.98	4.06	0.16	5/5	1.42 1.94	2.57	1.90	A	0.72	0.66	0.18	-	
SI-002	円形	加曾利EⅡ ~EⅣ	18.0°-E	-	3.20	0.08	3/4	1.32	(2.04)	2.04	A	0.53	-	0.04	-	
SI-003	円形	加曾利EⅡ新 ~EⅢ古	5.0°-W	3.56	3.78	0.20	4/4	1.98	3.01	3.16	A	0.84	0.84	0.34	貝層(上層)	
SI-004	楕円形	加曾利EⅡ新	80.5°-W	5.36	-	0.30	4/5	2.18 3.05	(3.24)	2.40	A	0.82	0.66	0.05	-	
SI-005	楕円形?	加曾利EⅡ新	32.0°-E	-	-	0.12	4/5	1.28 2.23	(3.46)	1.96	B	0.72	0.58	0.18	-	
SI-006	不整形円形	加曾利EⅡ新 ~EⅢ古	35.5°-E	-	6.88	0.44	4/5	3.06 4.48	5.12	(5.14)	A	1.38	1.24	0.36	貝層(上~中層)	
SI-008	?	加曾利EⅡ新?	85.0°-W	-	-	-	5/5	2.11 3.17	3.08	1.32	B	0.68	0.64	0.24	-	
SI-009	?	?	33.0°-E	-	-	-	7/8	2.00 3.90	3.34 3.56	(1.04) 2.14	A	-	-	-	-	
SI-010	?	?	TN	-	-	-	4/6	2.02 (4.30)	3.84	2.84	A	-	-	-	-	
SI-011	不整形円形	加曾利EⅡ新 ~EⅢ古	83.0°-W	6.48	-	0.08	7/7	3.84 5.08	4.46 4.10	2.20	A	1.16	1.02	0.42	貝層(炉上層)	
SI-012	?	加曾利EⅡ新 ~EⅢ古	48.5°-W	-	-	-	6/6	3.48 2.63	3.92	2.63	B	0.94	0.77	0.13	-	
SI-013	?	加曾利EⅢ	62.0°-W	-	-	-	7/7	3.26 4.90	2.90 2.05	1.35	A	1.06	0.82	0.13	-	
SI-014	楕円形	加曾利EⅢ古	41.5°-W	3.40	-	0.15	4/6	1.06 -	(2.99)	2.98	A	-	-	0.15	-	
SI-015	楕円形	加曾利EⅢ	9.5°-E	-	4.45	0.09	3/7?	-	3.00	(1.46)	A	-	-	-	-	

番号	形状	時期	主軸 (N-)	遺構下層(m)			柱 穴	内径(m)			形 式	径(m)			覆土	
				長	幅	深さ		①/②	③/④	⑤/⑥		長	幅	深		
SI-016	楕円形	加曾利EⅢ	31.5°-W	4.04	4.26	0.24	4/5	2.00	2.35	(1.84)	1.83	A	0.75	0.71	0.34	-
SI-017	隅丸長方	加曾利EⅢ	5.0°-E	3.56	2.64	0.16	-	-	-	-	-	A	-	-	-	-
SI-018	円形	加曾利EⅢ新 ~EⅢ古	10.5°-W	2.92	3.00	0.14	5/6	2.70	2.70	1.18 1.20	-	A	1.00	0.93	0.52	貝層(中~下層)
SI-019	円形?	加曾利EⅢ ~EⅣ	2.5°-W	-	-	-	4/6	(4.76)	4.46	(3.04) (2.68)	-	A	-	-	0.24	貝層(下層)
SI-020	楕円	加曾利EⅢ? ~EⅣ?	-	-	-	-	-	-	-	-	-	A	-	-	0.28	-

第14表 遺構計測表③(小竪穴・円形土坑)

番号	区分	形状	個別時期	位置	上層(m)		下層(m)		深さ (m)	覆土	備考	
					長	幅	長	幅				
SK-006	小竪穴	円形	加曾利EⅡ~EⅢ	G07-58	1.62	1.58	1.43	1.34	0.95	-	-	
SK-008		円形	加曾利EⅢ~EⅣ	G07-76	1.66	1.35	-	1.50	1.05	-	-	
SK-015		楕円形	?	G07-65	-	1.48	1.37	1.15	0.27	-	-	
SK-020		楕円形	加曾利E	G08-16	1.65	1.59	1.38	1.08	0.12	-	-	
SK-049		円形	加曾利E	G08-81	1.68	1.52	1.58	1.40	1.01	-	-	
SK-057		円形	加曾利EⅡ~EⅢ	G07-77	-	1.46	1.36	1.20	0.23	-	-	
SK-127		円形	加曾利E	H11-04	-	1.72	-	1.55	0.25	-	-	
SK-130		楕円形	?	H11-27	2.18	1.91	1.99	1.64	0.38	-	-	
SK-131		隅丸方形	?	H11-18	1.82	1.70	1.69	1.50	0.21	-	-	
SK-142		隅丸方形	加曾利EⅡ~EⅢ	H12-13	1.56	1.54	1.20	1.18	0.29	-	-	
SK-143		楕円形	加曾利EⅡ~EⅢ	H12-23	1.98	1.87	1.54	1.46	0.73	-	北隅ピット(1) 中央ピット(1)	
SK-161		楕円形	?	G13-01-02	2.83	-	2.59	-	0.22	-	覆土(上層)	
SK-162		楕円形	?	G14-90	2.28	1.82	2.06	1.64	0.23	-	ピット(4)	
SK-174		楕円形	加曾利EⅡ~EⅢ	H07-67-68	1.82	1.66	1.62	1.48	0.73	-	-	
SK-010		円形1	円形	称名寺2	G07-97	-	1.14	-	0.94	0.50	-	貝層(中~下層)
SK-014			円形	加曾利E	G07-58	-	-	-	-	0.46	-	-
SK-023			不整円形	称名寺1?	G08-23	-	1.24	-	0.90	0.41	-	-
SK-024	円形		?	G08-06	1.08	0.80	0.98	0.88	0.50	-	-	
SK-056	円形		加曾利EⅡ~EⅢ	G07-65	1.06	1.00	1.04	1.03	0.48	-	-	
SK-060	円形		?	F10-09	1.29	-	1.12	-	0.32	-	-	
SK-063	楕円形		加曾利EⅣ	F09-43-44	1.24	1.23	1.06	0.95	1.00	-	貝ブロック(上層)	
SK-067	円形		加曾利EⅢ	F09-75	-	-	-	-	0.90	0.54	-	
SK-068	楕円形		加曾利EⅣ	F09-75	1.09	1.01	0.88	0.81	0.47	-	遺物(上層)	
SK-069	楕円状		加曾利E	F09-75	1.00	-	0.80	-	0.43	-	-	
SK-124	楕円状		?	J10-81	-	1.04	-	0.86	0.56	-	SK125より旧	
SK-125	楕円状		?	J10-81	-	1.22	1.05	0.94	0.90	-	SK124より新	
SK-132	円形		?	H11-11-21	1.28	1.22	0.89	0.92	0.36	-	-	
SK-138	円形		?	G12-17-27	1.20	1.14	0.77	0.74	0.58	-	-	
SK-139	円形		加曾利E	G12-17-27	1.36	1.26	1.00	0.87	0.27	-	中央ピット(1)	
SK-146	円形		?	H12-84	1.47	1.29	1.41	1.11	0.72	-	覆土(上~中層)	
SK-175	円形		加曾利EⅢ/EⅣ	H07-87	1.43	1.31	1.33	1.20	0.45	-	-	
SK-176	円形	加曾利EⅢ~EⅣ	H07-94	1.09	0.98	0.99	0.91	0.18	-	-		
SK-177	楕円状	?	H08-62	0.92	0.83	0.82	0.71	0.38	-	-		
SK-011	円形2	円形	加曾利EⅢ?	G07-97	1.37	1.26	0.85	0.79	0.22	-	-	
SK-039		円形	?	F09-26	1.40	1.26	0.97	0.81	0.26	-	-	
SK-073		隅丸方形	?	H11-37-47	1.46	1.28	1.20	1.00	1.00	-	-	
SK-116		隅丸方形	?	H10-55-56	1.19	1.08	1.05	0.82	0.08	-	-	
SK-119		円形	?	H10-99	1.33	-	1.21	0.93	0.63	-	-	
SK-144		円形	?	H13-04-14	1.48	1.41	1.23	1.14	0.24	-	-	
SK-166		円形	?	F15-27	1.46	1.35	1.27	1.16	1.16	-	-	
SK-003		円形3	円形	?	G07-18	0.78	0.75	0.53	0.47	0.63	-	-
SK-004			円形	加曾利EⅢ~EⅣ	G07-58	1.13	0.97	0.75	0.72	0.96	-	-
SK-005			円形	加曾利EⅢ~EⅣ	G07-58	0.83	-	0.70	0.60	0.93	-	-
SK-026	円形		?	G08-16	1.17	1.05	0.57	0.49	1.36	-	-	
SK-027	円形		?	G08-34	0.92	0.83	0.59	0.51	1.01	-	貝層	
SK-037	楕円状		加曾利EⅣ	G08-91	1.50	1.26	0.90	0.72	0.93	-	貝層(中層)	
SK-042	円形		?	G08-34	0.82	-	0.45	0.45	0.64	-	-	
SK-051	円形		?	G08-72	0.93	-	0.48	-	0.85	-	-	
SK-052	楕円状		加曾利EⅣ?	G08-91	-	-	0.73	0.64	1.10	-	-	
SK-064	円形		?	F09-55	-	0.83	-	0.74	0.84	-	-	
SK-002	円形4	円形	加曾利EⅣ	G07-37	0.87	0.83	0.67	0.62	0.52	-	SK-001より新	
SK-017		円形	?	F08-69	0.94	-	0.36	0.30	0.53	-	-	
SK-033		円形	加曾利EⅢ~EⅣ	G08-43	0.91	0.84	0.70	0.65	0.29	-	-	
SK-043		円形	?	G08-33	0.90	0.82	0.60	0.47	0.34	-	-	
SK-091		円形	?	H10-86	1.03	1.02	0.82	0.76	0.26	-	-	
SK-092		円形	加曾利EⅢ	H10-88-98	0.94	0.87	0.71	0.58	0.25	-	中央ピット(1)	
SK-129		円形	?	H11-25	1.10	1.08	0.90	0.80	0.32	-	-	
SK-137		楕円状	?	G12-87	0.98	0.89	0.77	0.74	0.43	-	-	

第15表 遺構計測表④(楕円形土坑・方形土坑・大型土坑)

番号	区分	形状	時期	位置	主軸(N-S)		上端(m)		下端(m)		深さ(m)	備考	
					長	短	長	短	長	短			
SK-034	楕円1	不整楕円	称名寺1?	G08-53	8.5-E	1.10	-	0.84	0.56	0.64	2基, 新旧不明		
SK-041		楕円形	加曾利EⅡ	G08-52	18.5-E	-	0.83	0.89	0.71	0.22			
SK-050		楕円形	?	G08-91	15.0-E	-	-	-	-	0.29			
SK-066		楕円形	加曾利EⅡ~EⅣ	F09-76-96	-	-	-	-	-	0.25			
SK-066		楕円形	?	G10-68-79	75.0-W	1.30	0.96	1.10	0.61	0.28			
SK-114		長楕円形	?	H10-47	61.5-W	1.92	1.06	1.49	0.75	0.24			
SK-149		楕円形	?	G15-74	15.5-W	1.62	1.26	1.32	0.82	0.38			
SK-156		楕円形	?	G14-77	21.5-E	1.48	1.28	1.06	0.97	0.51			
SK-164		楕円形	?	G15-12	61.5-E	1.60	1.20	1.32	0.82	0.28			
SK-165		楕円形	?	F15-18	29.0-W	1.62	1.04	1.37	0.82	0.21			
SK-171		楕円形	?	N7-52	-	-	-	-	-	0.69			
SK-001		楕円2	長楕円形	加曾利EⅣ	G07-37	11.5-W	-	0.60	-	0.42		0.36	SK-002より旧
SK-009			不整長楕円	加曾利EⅡ/EⅢ	G07-75	8.0-W	1.65	0.55	1.43	0.45		0.09	
SK-022			楕円形	?	G08-40	13.5-W	0.90	0.62	-	0.31		0.18	
SK-038			楕円形	?	G08-14	54.0-W	-	0.85	-	0.45		0.28	
SK-044	楕円形		?	G08-34	56.0-E	1.11	0.94	0.76	0.62	0.32			
SK-072	楕円形		?	I11-36-46	TN	1.10	0.84	0.89	0.62	0.12			
SK-088	楕円形		?	I10-70-88	65.0-W	0.95	0.75	0.60	0.50	0.32			
SK-098	楕円形		?	I10-64	65.0-E	1.10	0.55	0.92	0.49	0.26			
SK-103	楕円形		?	I10-54	55.5-E	1.01	0.85	0.71	0.58	0.22			
SK-105	楕円形		?	I10-52	19.0-E	0.97	0.77	0.78	0.64	0.27			
SK-118	長楕円形		?	I10-87	11.5-E	1.11	0.73	1.01	0.30	0.20			
SK-141	楕円形		?	G13-26	64.5-W	1.12	0.78	0.88	0.44	0.24			
SK-160	楕円形		?	F09-85	2.1-E	1.00	0.85	0.76	0.63	0.34			
SK-160	楕円形		?	G14-82	2.1-E	1.18	0.84	1.02	0.71	0.21			
SK-035	楕円3		楕円形	加曾利E/称名寺1	G08-53	74.5-W	0.86	0.52	-	0.42	0.23	ビット深さ0.30m+0.32m	
SK-067		楕円形	?	J10-60	78.0-W	0.87	0.61	0.72	0.31	0.28			
SK-094		長楕円形	?	I10-87-88	80.5-W	1.05	0.47	0.86	0.28	0.15			
SK-095		楕円形	?	I10-67	13.5-W	0.70	0.54	0.55	0.30	0.16			
SK-095		楕円形	?	I10-66	6.5-W	0.73	0.51	0.58	0.36	0.18			
SK-100		楕円形	?	I10-64	73.0-W	0.63	0.45	0.50	0.21	0.20			
SK-111		楕円形	?	H10-69	28.5-E	0.84	0.50	0.64	0.25	0.15			
SK-117		楕円形	?	H10-66	5.5-W	0.88	0.50	0.30	0.17	0.21			
SK-148		楕円形	加曾利EⅡ~EⅣ	I12-41	57.5-W	0.80	0.45	-	0.16	0.41			
SK-159		楕円形	?	G13-33	26.5-W	0.66	0.47	0.42	0.19	0.23			
SK-021		楕円4	楕円形	?	G08-51	43.0-E	0.67	0.59	-	0.31	0.17		ビット深さ0.54m
SK-028			楕円形	?	G08-70	33.5-E	0.74	0.62	-	0.52	0.10		
SK-029			楕円形	?	G08-80	35.0-E	0.74	0.62	0.61	0.48	0.30		
SK-031			楕円形	?	G09-72	49.0-E	0.81	0.67	0.57	0.47	0.26		
SK-032			楕円形	?	G09-71	55.5-E	0.82	0.69	0.61	0.49	0.25		
SK-045	楕円形		?	G08-34	21.0-E	0.84	0.72	0.64	0.49	0.14			
SK-046	楕円形		?	G08-44	56.5-E	0.77	0.66	0.43	0.33	0.39			
SK-070	楕円形		?	F09-85	23.0-E	0.82	-	0.78	-	0.23			
SK-089	楕円形		?	I10-88	50.0-W	0.76	-	0.62	-	0.14			
SK-106	楕円形		?	I10-52	13.0-E	0.67	0.59	0.46	0.41	0.12			
SK-109a	楕円形		?	I10-81	58.0-W	0.82	0.63	0.66	0.50	0.34			
SK-109b	楕円形		?	I10-81	34.0-W	0.66	0.46	0.48	0.28	0.36			
SK-157	楕円形		?	G14-57	64.5-E	0.95	0.86	0.70	0.53	0.27			
SK-013	方形		楕円状	?	G07-58	58.0-W	-	-	-	-	0.51	ビットより旧	
SK-016			隅丸長方形	?	G08-41	20.0-E	0.97	0.82	0.79	0.54	0.26		
SK-040		楕円状	?	F09-27	23.5-W	1.51	0.83	1.13	0.55	0.24			
SK-048		隅丸長方形	?	G08-43	71.0-E	1.12	0.84	0.87	0.65	0.19			
SK-053		楕円状	?	G08-62	80.0-W	-	0.83	-	0.58	0.26			
SK-075		長方形	?	I11-56	26.0-W	-	0.65	-	0.51	0.11			
SK-108		不整方形	?	I10-91	28.0-W	1.16	1.04	0.71	0.77	0.21			
SK-126		不整方形	?	H10-93	30.0-E	1.67	1.32	1.48	1.09	0.16			
SK-128		隅丸長方形	?	H10-95	25.5-E	-	-	-	-	0.21			
SK-133		隅丸長方形	?	I11-51	58.0-W	-	1.51	-	1.13	0.23			
SK-134		不整方形	?	I11-32	49.0-W	1.50	1.21	1.25	1.01	0.15			
SK-030		大型	楕円形	?	G09-72	26.0-E	2.16	1.40	1.48	1.05	0.30		SK-119aと重複, 新旧不明 SK-119aと重複
SK-047			不整楕円形	?	G08-44	81.0-E	2.24	1.16	2.00	0.92	0.17		
SK-110			楕円状	?	H10-88-89	18.0-E	-	1.90	1.53	1.43	0.47		
SK-140			楕円状	?	G13-27-37	50.0-W	-	1.64	-	1.30	0.16		
SK-145	楕円状		?	H13-84	34.0-W	-	1.18	-	1.02	0.50			
SK-150	不整楕円形		?	G15-73	74.0-W	2.35	1.81	1.76	1.31	0.45			
SK-151	楕円状		?	G15-84	41.5-W	2.55	1.83	1.94	1.55	0.39			
SK-158	楕円状		?	F14-28	66.5-E	2.02	1.41	1.76	0.89	0.89			
SK-163	楕円状		?	F18-29	53.0-W	1.73	1.42	0.94	0.92	0.31			

第16表 遺構計測表⑤(小型円形土坑・ビット)

番号	区分	形状	位置	上端(m)		下端(m)		深さ(m)	備考
				長	短	長	短		
SK-007	小型	円形	G07-84	0.70	0.61	0.56	0.33	SK-084 SK-120 SK-147 SK-152 SK-153 SK-155 SK-012 SK-036 SK-061 SK-077	
SK-018		円形	G08-32	0.70	0.57	0.48	0.46		
SK-019		楕円	G08-32	0.91	0.69	0.48	0.41		
SK-059		楕円	G08-60	0.75	0.74	-	0.46		
SK-062		隅丸方	F09-52	0.65	0.64	0.57	0.56		
SK-065		楕円	F09-66	0.81	0.73	0.50	0.50		
SK-071		楕円	I11-36	0.71	0.63	0.53	0.49		
SK-080		円形	J10-71	0.98	0.92	0.63	0.62		
SK-081		楕円	J10-80	0.58	0.58	0.43	0.38		
SK-083		楕円	J10-80	0.67	0.49	0.38	0.30		
SK-084		小型	円形	J10-80	0.64	0.59	0.49		0.45
SK-120			円形	I11-06	0.79	0.76	0.61		0.50
SK-147			楕円	H12-57	0.66	0.62	0.31		0.30
SK-152		円形	G15-65	0.84	0.80	0.68	0.64		
SK-153		円形	G15-05	0.72	0.72	0.59	0.57		
SK-155	楕円	G14-96	0.70	0.65	0.54	0.47			
SK-012	ビット	楕円	G07-58	0.65	0.54	0.33	0.32		
SK-036		円形	G08-53	0.55	-	0.26	0.23		
SK-061		円形	F09-43	0.47	0.45	0.40	0.30		
SK-077		楕円	J10-82	0.24	0.24	0.14	0.11		

番号	区分	形状	位置	上層(m)		下層(m)		深さ(m)	備考	番号	区分	形状	位置	上層(m)		下層(m)		深さ(m)	備考
				長	幅	長	幅							長	幅	長	幅		
SK-078	ピット	円形	J10-72	0.41	0.37	0.24	0.24	0.11		SK-099	ピット	円形	J10-64	0.53	0.48	0.29	0.29	0.22	
SK-082		楕円	J10-80	0.47	0.42	0.35	0.34	0.34		SK-101		円形	J10-64	0.41	0.40	0.37	0.29	0.20	
SK-085		円形	J10-79	0.39	0.35	0.22	0.19	0.20		SK-102		円形	J10-63	0.40	0.39	0.26	0.25	0.12	
SK-090		円形	J10-88	0.60	0.54	0.29	0.30	0.57		SK-112		楕円	H10-78	0.42	0.33	0.20	0.19	0.12	
SK-093		楕円	J10-98	0.50	0.50	0.40	0.35	0.60		SK-113		円形	H10-77	0.54	0.47	0.16	0.10	0.22	
SK-097		円形	J10-76	0.38	0.37	0.18	0.14	0.12		SK-121		楕円	J11-15	0.51	0.50	0.26	0.24	0.18	

第17表 遺物観察表②(縄文土器)

遺物番号	探度	Fig	No	器種	部位	時期	形状	焼	土質	混入物						備考			
										色	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)		(6)	その他	
遺物外	14			1	深鉢	r	早期 集成	?	B	黒焼/暗焼	◎	◎	△	△	△	△	△	織物	口縁部凹孔
				2	深鉢	r		?	A	黒焼/灰黄焼	◎	◎	△	△	△	△	△	織物	
				3	深鉢	r		?	A	焼灰/暗焼	◎	◎	△	△	△	△	△	織物	
				4	深鉢	m		?	B	灰焼/橙	◎	◎	△	△	△	△	△	織物	
				5	深鉢	m		?	A	黒灰/灰黄	◎	◎	△	△	△	△	△	織物	
				6	深鉢	m		?	A	黒灰/灰黄	◎	◎	△	△	△	△	△	織物	
				7	深鉢	m		?	A	黒灰/灰黄	◎	◎	△	△	△	△	△	織物	
				8	深鉢	m		?	B	黒焼/赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△	織物	
				9	深鉢	m		?	A	黒灰/灰黄	◎	◎	△	△	△	△	△	織物	
				10	深鉢	m		?	A	焼灰/灰黄	◎	◎	△	△	△	△	△	織物	
				11	深鉢	m		?	A	焼灰/灰黄	◎	◎	△	△	△	△	△	織物	
15				12	深鉢	r	中期 初期	?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△			
				13	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				14	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				15	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				16	蓋	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				17	深鉢	r-m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				18	深鉢	m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				19	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				20	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				21	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				22	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				23	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				24	深鉢	r-m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				25	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				26	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				27	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				28	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				29	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				30	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				31	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				32	深鉢	r-m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				33	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				34	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				35	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				36	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				37	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				38	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				39	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
16				40	深鉢	r	中期 後葉	?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△			
				41	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				42	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				43	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				44	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				45	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				46	深鉢	m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				47	深鉢	m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				48	深鉢	m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				49	深鉢	m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				50	深鉢	m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				51	深鉢	m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				52	深鉢	m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				53	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				54	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				55	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				56	深鉢	r-m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				57	深鉢	r-m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				58	深鉢	m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
59	深鉢	m	?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△							
60	深鉢	r	?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△							
61	深鉢	r	?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△							
17				62	深鉢	r-m	中期 後葉	?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△			
				63	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				64	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				65	深鉢	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				66	蓋	r		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				67	深鉢	m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				68	深鉢	m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		
				69	深鉢	m		?	A	赤焼	◎	◎	△	△	△	△	△		

通稱 番号	種別		器種	部位	時期	焼		土	混入物					備考				
	Fig	No.				形式	紋		色調	(1)	(2)	(3)	(4)		(5)	(6)	その他	
遺構外	17	70	深鉢	m	中期 後半	加曾利EⅢ/IV	C	B	橙・鈍黄灰	●	●	○	△	○	△		外周磨粒	
		71	深鉢	m			B	C	黄橙・黄褐	●	●	○	△	○				
		72	深鉢	m-b			A	B	黒褐・暗褐	●	●	○	○	○				
		73	深鉢	b			B	C	鈍橙/暗灰褐	●	●	○	△	○				
		74	深鉢	m-b			B	B	黒褐・橙	●	●	○	○	○				
		75	深鉢	m-b			A	B	橙/暗灰黄	●	●	○	○	○				
		76	深鉢	m-b			A	A	鈍橙・灰黄	△	○	○	○	○				
	77	深鉢	b	B		B	暗灰	●	●	○	○	○						
	18	78	78	深鉢		m	加曾利EⅢ	A	C	橙・灰黄・灰褐	○	○	○	△	○			同一
			79	深鉢		m		B	C	黄灰・暗灰	●	●	○	○	○			
			80	深鉢		m		B	C	橙/暗灰	●	●	○	○	○			
			81	深鉢		m		B	B	灰褐/暗褐	○	○	○	○	○			
			82	深鉢		m		A	B	暗赤褐・黒褐	○	○	○	○	○			
			84	深鉢		m		B	B	灰黄・灰	○	○	○	○	○			
85			深鉢	m	A	B		淡橙・灰	○	○	○	○	○					
86		深鉢	m	B	C	灰黄・暗灰	●	●	○	○	○							
87		深鉢	r-m	A	A	淡橙・鈍橙	○	○	○	○	○							
88		深鉢	m	A	A	灰黄・暗灰	○	○	○	○	○							
89		深鉢	r-m	B	B	鈍灰黄・暗灰	○	○	○	○	○							
90		深鉢	m	A	C	橙/灰黄	○	○	○	△	○							
91		深鉢	m	A	C	暗灰・灰褐	●	●	○	○	○							
92		深鉢	r-m	B	B	灰白・暗灰	△	○	○	○	○							
19	93	93	深鉢	r	加曾利EⅢ/IV	A	C	黒灰	●	●	○	○		同一				
		94	深鉢	r		A	C	黒灰	●	●	○	○						
		95	深鉢	r		A	B	鈍黄褐	○	○	○	○						
		96	深鉢	r		B	B	鈍橙・暗灰	○	○	○	○						
		97	深鉢	r		B	B	暗灰/灰褐	○	○	○	○						
		98	深鉢	r		加曾利EⅢ	A	C	橙・灰	○	○	○	○					
		99	深鉢	r			A	C	鈍赤褐	○	○	○	△					
	100	深鉢	m	A	C		橙・灰黄	○	○	○	○							
	101	深鉢	m	A	C		橙・灰褐	○	○	○	○							
	102	深鉢	m	加曾利EⅢ/IV	B		B	灰白・淡黄	△	○	○	○						
	103	深鉢	r-m		B		C	黒褐	○	○	○	○						
	104	深鉢	m	加曾利EⅣ新	B		C	暗褐・橙	●	●	○	○						
	105	深鉢	m		A	C	鈍橙・灰褐	●	●	○	○							
	106	深鉢	m	加曾利EⅢ/IV	A	C	鈍赤褐	○	○	○	○							
107	深鉢	m	B		C	橙・黄灰・暗灰	○	○	○	○								
108	浅鉢	m	加曾利EⅢ/IV	B	C	赤褐・暗褐	○	○	○	○								
109	浅鉢	r		A	B	灰黄・暗灰黄	○	○	○	○								
110	浅鉢	r		B	B	淡橙・淡黄・灰	○	○	○	○								
111	浅鉢	m		B	B	淡橙・淡黄・灰	○	○	○	○								
112	浅鉢	m		B	B	淡橙・淡黄・灰	○	○	○	○								
113	浅鉢	m		B	B	淡黄・淡黄・灰	○	○	○	○								
114	深鉢	m-b		加曾利EⅢ	A	C	赤黄褐・灰	○	○	○	○							
115	深鉢	m-b	加曾利EⅢ/IV		A	C	鈍橙/鈍灰黄	●	●	○	○							
116	深鉢	m-b		B	C	赤褐・橙/黒褐	●	●	○	○								
22	117	117	蓋	r+t	加曾利EⅣ新	B	C	橙・灰黄・灰	○	○	○	△		外周スス				
		118	深鉢	r		B	C	鈍褐/橙	○	○	○	○						
	119	深鉢	r	加曾利EⅢ	A	A	黒褐	△	○	○	○							
	120	深鉢	r		A	B	黒褐	○	○	○	○							
	121	深鉢	r	加曾利EⅣ新	A	C	鈍赤褐	○	○	○	○							
	122	深鉢	r		B	C	淡黄灰/暗灰黄	○	○	○	○							
	123	浅鉢	r	加曾利EⅢ	A	B	暗灰/黒灰	○	○	○	○							
	124	深鉢	r-m		加曾利EⅣ	B	B	黒褐	○	○	○	○						
	125	深鉢	r	加曾利EⅢ		B	C	黒灰	○	○	○	△						
	126	浅鉢	r		加曾利EⅣ	A	A	鈍灰褐/橙	△	○	○	○						
	127	浅鉢	r	加曾利EⅣ新		B	B	黒灰/黄褐	○	○	○	○						
	128	深鉢	r		B	A	橙/灰	△	○	○	○							
	129	深鉢	r	加曾利EⅢ	A	B	黒灰・灰	○	○	○	○							
	130	深鉢	r		A	C	鈍黄褐・暗灰	●	●	○	○							
131	浅鉢	r	加曾利EⅣ新	A	A	鈍赤褐	△	○	○	○								
132	浅鉢	r		A	A	暗灰・暗灰	○	○	○	○								
133	深鉢	r	加曾利EⅢ	A	B	橙	○	○	○	○								
134	深鉢	r		B	C	褐・黒褐	●	●	○	○								
135	深鉢	r	加曾利EⅢ	A	C	暗褐	●	●	○	○								
136	深鉢	r		B	B	鈍赤褐・橙	○	○	○	○								
137	深鉢	r	加曾利EⅣ新	A	C	橙・灰	○	○	○	○								
138	深鉢	r		B	B	黒灰/淡黄褐	○	○	○	○								
139	深鉢	r	加曾利EⅣ新	B	C	暗褐	○	○	○	○								
140	浅鉢	r		A	A	鈍黄褐	△	○	○	○								
141	浅鉢	r	加曾利EⅢ	B	C	暗灰/黒褐	△	○	○	○								
142	深鉢	r		A	B	黒褐・灰黄	○	○	○	○								
143	深鉢	m	加曾利EⅢ	B	B	灰黄・鈍橙	○	○	○	○								
144	深鉢	m		A	B	橙/暗灰	○	○	○	○								
145	深鉢	m	加曾利EⅢ	A	C	鈍黄橙・灰褐	○	○	○	○								
146	深鉢	m		A	B	橙・灰褐	○	○	○	○								
147	深鉢	r+t	加曾利EⅢ/IV	A	B	橙・鈍橙	△	○	○	○								
148	深鉢	m		B	C	淡黄褐/褐色・暗灰	○	○	○	○								

遺構 番号	棟号 Fig. No.	器種 No.	部位	時期	胎土		混入物						備考				
					形式	検 査	色調	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)		(6)	その他		
遺構外	22	149	深鉢	m	中期 後葉	加曾利E	A	B	楊/暗灰	○	○	○	○	○	○	} 同一	
		150	深鉢	m		A	B	櫻/暗灰	○	○	○	○	○	○			
	151	深鉢	r	加曾利E?		A	B	漆喰/灰黄	○	○	△	○	○	○			
	152	深鉢	m	加曾利E		B	C	黄白/灰	●	●	●	○	○	○			
	23	153	深鉢	m-b		B	C	赤橙/暗褐	●	●	●	○	○	○	} 底面網代底		
		154	深鉢	b		A	C	橙/暗灰	●	●	●	○	○	○			
		155	深鉢	b		A	C	橙/暗灰	●	●	●	○	○	○			
		156	深鉢	m-b		加曾利EⅡ/IV	B	C	赤橙/灰褐-暗灰	●	●	●	○	○			○
		157	深鉢	b		加曾利E	C	C	赤橙/灰	●	●	●	○	○			○
		158	深鉢	b		B	C	楊/暗灰/灰黄	○	○	○	○	○	○			
		159	深鉢	b	A	B	楊/黒灰/焼灰褐	△	○	○	○	○	○				
		160	蓋?	b	加曾利E?	B	C	橙/黒/暗灰	○	○	○	○	○	○		} 西方鉢	
		161	深鉢	b	加曾利EⅡ/IV	A	C	赤橙/暗褐	●	●	○	○	○	○			
		162	蓋	r+t	加曾利EⅣ	A	B	赤橙/灰黄	○	○	○	○	○	○			
		163	深鉢	t	加曾利E	A	B	赤橙/暗	○	○	○	○	○	○		} 同一	
		164	深鉢	r	大木10?	A	A	灰黄/暗灰	○	△	○	○	○	○			
		165	深鉢	r-m	曾利系	A	B	黄橙/灰褐	○	○	○	○	○	○			
		166	小型鉢	m-b	A	B	灰-暗灰	○	○	○	○	○	○	} 赤彩、外周磨耗			
		167	深鉢	m	A	B	灰黄褐	○	○	○	○	○	○				
	168	深鉢	m	A	B	楊/黒褐	○	○	△	○	○	○					
	169	深鉢	r	A	B	赤橙	○	○	○	○	○	○					
	170	深鉢	r	A	B	赤橙	○	○	○	○	○	○					
	171	深鉢	r	A	B	暗橙	○	○	○	○	○	○					
	24	172	浅鉢?	r	後期 初葉	称名寺1	A	B	灰黄/灰黄	○	○	○	○		○		} 同一
		173	深鉢	r			A	C	橙-黄橙/暗灰褐	○	●	●	○		○	○	
		174	深鉢	r			B	C	黒灰-灰橙	○	○	○	○		○	○	
		175	深鉢	r			B	C	褐灰-灰褐	○	○	○	○		○	○	
		176	深鉢	m			A	C	灰灰黄/暗灰褐	○	○	○	○	○	○		
		177	深鉢	r			B	C	橙-灰黄	○	○	○	○	○	○		
		178	浅鉢?	r			A	C	橙-灰黄/灰褐	○	○	○	○	○	○		
		179	深鉢	r			A	C	灰黄褐-灰橙	○	○	○	○	○	○		
		180	深鉢	r			A	B	焼橙/黒褐	○	○	○	○	○	○		
		181	深鉢	r			B	B	純橙/灰	△	○	○	○	○	○		
		182	深鉢	r-m			A	A	黄灰-暗灰	○	○	○	○	○	○		
		183	深鉢	r			A	C	灰黄/純橙	○	○	○	○	○	○		
		184	深鉢	r			C	B	橙-灰黄灰	○	○	○	○	○	○		
		185	深鉢	m			A	B	灰白-灰橙	○	○	○	○	○	○		
		186	深鉢	m			A	B	純橙/灰黄	○	○	○	○	○	○		
		187	深鉢	m	A	B	黒灰	○	○	○	○	○	○				
		188	深鉢	m	A	C	灰灰黄/暗灰	○	○	○	○	○	○				
		189	深鉢	r	A	A	灰橙	△	○	○	○	○	○				
		190	深鉢	m	B	B	焼灰/灰白	○	○	○	○	○	○				
		191	深鉢	m	B	B	純橙-灰黄灰	△	○	○	○	○	○				
		192	深鉢	m	C	C	黄橙-灰橙	○	○	○	○	○	○	} 同一			
		193	深鉢	m	C	C	黄橙-灰橙	○	○	○	○	○	○				
		194	深鉢	r	C	C	黄橙-灰橙	○	○	○	○	○	○				
		195	深鉢	r	B	A	灰黄橙/橙	△	○	○	○	○	○	} 黄灰灰粒			
196		深鉢	r	A	B	灰/灰黄	△	○	○	○	○	○					
197		深鉢	t	A	B	灰黄/灰橙	○	○	○	○	○	○					
198		深鉢	t	A	B	灰黄/純橙	○	○	○	○	○	○					
199		深鉢	t	A	B	純灰黄/赤灰黄	○	○	○	○	○	○					
200		深鉢	m	A	B	灰橙	○	○	○	○	○	○	} 黄白粒				
201		深鉢	m	A	B	灰橙	○	○	○	○	○	○					
202	深鉢	m	A	C	純橙-焼灰	○	○	○	○	○	○						
203	深鉢	m	B	B	橙/黄灰	○	○	○	○	○	○						
204	深鉢	m	B	C	橙/暗灰	○	○	○	○	○	○						
25	205	深鉢	r	後期 中葉	加曾利B1	A	B	純赤褐/暗褐	○	○	○	○		○	} 同一		
	206	深鉢	r			A	B	純赤褐/暗褐	○	○	○	○		○		○	
	207	深鉢	m			A	B	純赤褐/暗褐	○	○	○	○		○		○	
	208	深鉢	r		A	C	漆喰/灰黄褐	○	○	○	○	○		○	} 同一		
	209	深鉢	r		加曾利B2	B	B	赤褐/灰褐	○	○	○	○		○		○	
	210	深鉢	r		B	B	赤褐/灰褐	○	○	○	○	○	○				
	211	浅鉢	r		A	B	灰黄灰/灰橙-灰	○	○	○	○	○	○	} 白唇赤帯紋 内面彫刻物			
	212	深鉢	r+t		加曾利B1	A	C	灰黄	○	○	○	○	○				
	213	深鉢	r+t		A	C	橙/灰黄/暗褐	○	○	○	○	○	○				
	214	深鉢	r		加曾利B2/3	A	B	赤褐/灰褐	○	○	○	○	○		○		
	215	深鉢	r		A	B	赤褐/灰褐	○	○	○	○	○	○				
	216	深鉢	m		加曾利B3	A	B	灰黄褐	○	○	○	○	○		○		
	217	深鉢	r-m		加曾利B	A	A	純橙	△	○	○	○	○		○	} SI-001-SK-010: 221と同一?	
	218	深鉢	m		加曾利B3	A	B	灰橙	○	○	○	○	○		○		
	219	浅鉢	r		A	B	灰黄/灰	△	○	○	○	○	○				
220	蓋	r	A	B	純灰黄/灰	○	○	○	○	○	○						
221	深鉢	m	A	B	純橙/暗灰褐	○	○	○	○	○	○	} 219と同一? 円形穿孔					
222	深鉢	m	加曾利B?	A	B	純橙/暗灰褐	○	○	○	○	○						
SK-168	32	2	深鉢	b	早期	糸織紋系	A	B	赤褐/黒	○	○	○	○	○	} 織織 織織		
		2	深鉢	b		A	B	赤褐/黒	○	○	○	○	○	○			
SI-001	34	1	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EⅡ新	A	B	焼灰	○	○	○	○	○	} 出産		
		2	深鉢	r		加曾利EⅡ/Ⅲ	A	B	灰橙/灰黄褐	○	○	○	○	○			
		3	深鉢	r		加曾利EⅡ	A	B	灰黄/灰褐	○	○	○	○	○			

測番号	押区 Fig No.	器種	部位	時期	形式	焼		色澤	混入物					備考			
						焼	色		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)		(6)	その他	
SI-001	34	4	深鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅠ	A	櫻	●	●	○	○	○	○	○	同一 内面炭化物	
		5	深鉢	m		加曾利EⅣ	A	B	灰黄褐<暗灰褐	○	○	○	○	○	○		
		6	深鉢	m		加曾利EⅢ	A	B	櫻<黒褐	○	○	○	○	○	○		
		7	深鉢	m		A	B	櫻<黒褐	○	○	○	○	○	○	○		
		8	深鉢	m		A	B	櫻<黒褐	○	○	○	○	○	○	○		
		9	深鉢	r-m		B	A	櫻	○	○	○	○	○	○	○		
		10	深鉢	r		A	A	黒褐<赤褐	○	○	○	○	○	○	○		
		11	深鉢	r		A	B	櫻<黒褐	○	○	○	○	○	○	○		
		12	深鉢	m		加曾利EⅠ古	B	A	赤褐<黒褐	○	○	○	○	○	○		○
		13	深鉢	m		B	B	赤褐<黒褐	○	○	○	○	○	○	○		○
		14	深鉢	m		B	B	赤褐<黒褐	○	○	○	○	○	○	○		○
	15	深鉢	m	B	C	赤褐<黒褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	16	深鉢	m	B	C	赤褐<黒褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	17	深鉢	m	B	C	赤褐<黒褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	18	深鉢	r	A	A	櫻<灰褐<暗灰褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	19	深鉢	r	A	B	赤褐<灰褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	20	深鉢	m	A	B	赤褐<灰褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	21	深鉢	m	A	B	赤褐<灰褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	22	深鉢	r	A	B	暗褐<黒褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	23	深鉢	m	A	B	暗褐<黒褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	24	深鉢	m	A	B	櫻<黒褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	25	深鉢	m	A	B	櫻<黒褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	26	深鉢	m	加曾利EⅡ	A	B	櫻<暗灰褐<黄灰	○	○	○	○	○	○	○			
	27	浅鉢	r	加曾利EⅠ里	A	A	櫻<灰褐	○	○	○	○	○	○	○			
	28	深鉢	m	加曾利EⅣ	A	A	赤灰褐<灰褐	○	○	○	○	○	○	○			
	29	小型鉢	m	加曾利EⅣ新	A	A	赤褐<黄灰	○	○	○	○	○	○	○			
	30a	深鉢	r-m	加曾利EⅡ	A	C	赤褐<黒褐	△	○	○	○	○	○	○			
	30b	深鉢	m	A	C	赤褐<黒褐	△	○	○	○	○	○	○	○			
	31c	深鉢	r	A	C	赤褐<黒褐	△	○	○	○	○	○	○	○			
	31d	深鉢	r	A	C	赤褐<黒褐	△	○	○	○	○	○	○	○			
	31	深鉢	r	A	A	櫻<灰黄<赤黄灰	△	○	○	○	○	○	○	○			
	32	深鉢	r	A	A	灰黄褐<暗褐	△	○	○	○	○	○	○	○			
	33	深鉢	m	A	B	赤褐<灰褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	34	浅鉢	m	A	B	鈍灰褐<暗灰褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	35	深鉢	r	A	B	赤褐<黒褐	○	○	○	○	○	○	○	○			
	36	深鉢	b	加曾利EⅡ?	B	C	灰黄<赤褐	○	○	○	○	○	○	○			
SI-002	38	1	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EⅡ新	B	C	櫻<赤褐<黒褐	●	●	○	○	○	○	二次被熱	
		2	深鉢	r		加曾利EⅡ/B	○	○	○	○	○	○	○				
		3	盤	r		A	C	櫻<暗灰褐	○	○	○	○	○	○			
		4	浅鉢	r		A	C	赤褐<暗灰褐	○	○	○	○	○	○			
SI-003	40	1	深鉢	r-m	中期 後葉	加曾利EⅣ	A	C	赤褐<暗灰褐	○	○	○	○	○	同一 白粒		
		2	深鉢	m		加曾利EⅡ新	B	B	暗灰褐<赤褐	○	○	○	○	○			
		3	深鉢	m		加曾利EⅢ古	B	B	暗灰褐<赤褐	○	○	○	○	○			
		4	深鉢	r		A	C	鈍褐<暗灰褐	○	○	○	○	○	○			
		5	深鉢	m		加曾利EⅠ里	B	C	鈍黄灰<暗灰褐	○	○	○	○	○			
	6	深鉢	r	加曾利EⅢ古		A	B	赤褐<黒褐	○	○	○	○	○				
41	7	深鉢	r-m	加曾利EⅠ里	B	B	鈍黄褐	○	○	○	○	○	○				
8	浅鉢	m-b	B	B	暗褐<黒褐	○	○	○	○	○	○	○	○				
SI-004	43	1	深鉢	r-m	中期 後葉	加曾利EⅡ新	A	B	櫻<鈍灰褐	○	○	○	○	○	把手下透孔 黄粒 同一		
		2	深鉢	r		A	A	黄灰<鈍灰褐	△	○	○	○	○	○			
		3	深鉢	r		A	B	灰黄<鈍灰褐	○	○	○	○	○	○			
		4	深鉢	r		A	C	赤褐<鈍灰褐	○	○	○	○	○	○			
		5	深鉢	r		A	C	赤褐<鈍灰褐	○	○	○	○	○	○			
		6	深鉢	r		A	C	櫻	○	○	○	○	○	○			
		7	深鉢	r		A	C	櫻	○	○	○	○	○	○			
		8	深鉢	r		A	A	暗褐<黒褐	○	○	○	○	○	○			
		9	深鉢	r-m		A	B	赤褐<黒褐	△	○	○	○	○	○			
	10	深鉢	m	A	A	赤褐<鈍灰	○	○	○	○	○	○					
	11	深鉢	m	加曾利EⅢ古	A	C	黄褐<灰褐	○	○	○	○	○	○				
	12	深鉢	r	加曾利EⅣ新	A	C	赤褐<灰褐	○	○	○	○	○	○				
	13	深鉢	m	A	B	黄褐<黒褐	○	○	○	○	○	○					
	14	深鉢	m	A	C	赤褐<黒褐	○	○	○	○	○	○					
	15	深鉢	m	A	C	赤褐<黒褐	○	○	○	○	○	○					
	16	深鉢	m	A	C	櫻<灰褐	○	○	○	○	○	○					
	17	深鉢	m	B	C	鈍灰<黒褐<灰褐	○	○	○	○	○	○					
	18	深鉢	m	B	C	赤褐<黒褐	○	○	○	○	○	○					
	19	深鉢	m	A	B	鈍褐	○	○	○	○	○	○					
	20	深鉢	m-b	A	B	櫻<黒褐	○	○	○	○	○	○					
	21	深鉢	m-b	A	B	鈍黄褐<黒褐<暗灰褐	○	○	○	○	○	○					
	22	深鉢	m-b	加曾利EⅡ	B	B	赤褐<黒褐	○	○	○	○	○	○				
23	深鉢	m	加曾利EⅣ新	A	C	鈍赤褐<黒褐	○	○	○	○	○	○					
24	深鉢	r	A	B	灰黄褐<黒褐	△	○	○	○	○	○						
25	深鉢	m	加曾利EⅢ古	B	B	櫻<鈍黄褐<黒褐	○	○	○	○	○	○					
26	深鉢	m	加曾利EⅣ新	A	C	鈍黄褐<暗灰褐	○	○	○	○	○	○					
27	深鉢	r	加曾利EⅡ	A	C	櫻<黒褐	○	○	○	○	○	○					
45	28	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EⅡ	A	B	黒褐<灰黄褐	○	○	○	○	○	○	同一 白粒 <<5K-067>		
29	深鉢	r	A		B	黒褐<灰黄褐	○	○	○	○	○	○	○				
30	深鉢	r-m	B		B	黄褐<黒褐<灰褐	○	○	○	○	○	○	○				
31	浅鉢	r	A		B	赤褐	○	○	○	○	○	○	○				
32	深鉢	m	A		B	櫻	○	○	○	○	○	○	○				

道庁 番号	種別		時期	形式	焼		塵土		塵入物				備考		
	Flr	No.			粒	色別	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)		その他	
SI-004	45	33 釜	r	中期 後葉	加曾利E	A	B	煙/灰濁-黒焼	○	●	●	△	○	-	
		34 洗鉢	r		加曾利E	A	C	黄煙/灰濁	○	●	●	△	○	-	
		35 洗鉢	r-m		加曾利EIV新	B	B	灰濁-黒焼	○	●	●	△	○	-	
SI-005	48	1 洗鉢	r-m	中期 後葉	加曾利EII新	A	B	煙-灰黄焼	●	●	●	○	-	-	
		2 洗鉢	r-m		加曾利EII新	A	B	煙	○	●	●	△	○	-	
		3 洗鉢	m-b		加曾利EII新	A	B	煙/黒焼/鈍煙	○	●	●	△	○	-	
		4 洗鉢	m		加曾利EII新	A	B	煙/暗灰濁	○	●	●	△	○	-	
		5 洗鉢	m		加曾利EII新	A	B	赤焼	○	●	●	△	○	-	
		6 洗鉢	m		加曾利EII新	A	B	鈍煙-灰黄	○	●	●	△	○	-	
		7 洗鉢	m		加曾利EII新	A	B	赤焼-煙	○	●	●	△	○	-	
		8 洗鉢	m		加曾利EII新	A	B	赤焼-煙	○	●	●	△	○	-	
		9 洗鉢	m		加曾利EII新	A	B	煙-灰黄/暗灰濁	○	●	●	△	○	-	
		10 洗鉢	r-m		加曾利EII新	B	C	煙-灰黄/暗灰濁	○	●	●	△	○	-	
SI-006	51	1 洗鉢	rmb	中期 後葉	加曾利EII日/量	C	C	煙/灰濁	○	●	●	△	○	-	
		2 洗鉢	r		加曾利EII日/量	A	B	煙/暗灰濁	○	●	●	△	○	-	
		3 洗鉢	r		加曾利EII日/量	A	C	灰黄灰-暗灰濁<暗焼	○	●	●	△	○	-	
		4 洗鉢	r-m		加曾利EII日/量	A	B	鈍煙<暗焼	○	●	●	△	○	-	
		5 洗鉢	m		加曾利EIV新	A	A	灰黄/煙	△	○	○	○	-	-	土塵粒
		6 洗鉢	m		加曾利EII日/量	A	B	煙-赤焼	○	●	●	△	○	-	灰白粒
		7 洗鉢	r		加曾利EII日/量	A	B	煙-灰濁-暗灰黄	○	●	●	△	○	-	
		8 洗鉢	r		加曾利EII日/量	A	B	煙-灰濁	○	●	●	△	○	-	
		9 洗鉢	r		加曾利EII日/量	B	C	黒焼	○	●	●	△	○	-	
		10 洗鉢	r		加曾利EII日/量	A	C	暗焼-灰濁	○	●	●	△	○	-	白粒
		11 洗鉢	r		加曾利EII日/量	A	B	鈍煙焼<暗灰	○	●	●	△	○	-	
		12 洗鉢	r		加曾利EII日/量	A	B	煙-暗焼灰/黒灰	○	●	●	△	○	-	
		13 洗鉢	r		加曾利EII日/量	B	B	煙-鈍灰濁<暗灰	○	●	●	△	○	-	
		14 洗鉢	r		加曾利EII日/量	A	C	暗赤焼-黒焼	○	●	●	△	○	-	灰白粒
		15 洗鉢	r		加曾利EII日/量	A	A	煙-赤焼	△	○	○	○	-	-	塵粒
	16 洗鉢	r	加曾利EII日/量	A	B	鈍黄焼<黒灰	○	●	●	△	○	-			
	17 洗鉢	r	加曾利EII日/量	A	C	煙-灰濁	○	●	●	△	○	-	灰黄粒		
	18 洗鉢	r	加曾利EII日/量	A	C	煙-灰濁	○	●	●	△	○	-	灰黄粒		
	19 洗鉢	r	加曾利EII日/量	B	C	洗黄煙<暗灰濁	○	●	●	△	○	-			
	20 洗鉢	r	加曾利EII日/量	A	C	赤焼/暗灰濁	○	●	●	△	○	-			
	21 洗鉢	m	加曾利EIV新	B	C	鈍煙<鈍灰濁	○	●	●	△	○	-			
	22 洗鉢	r	加曾利EII日/量	B	C	鈍灰-灰濁	○	●	●	△	○	-	灰黄粒		
	23 洗鉢	r	加曾利EII日/量	A	B	煙<黒灰	○	●	●	△	○	-			
	24 洗鉢	r	加曾利EII日/量	A	C	灰黄<灰濁-暗灰黄	○	●	●	△	○	-			
	25 洗鉢	r	加曾利EII日/量	A	C	赤焼/黒焼	○	●	●	△	○	-			
	26 洗鉢	r	加曾利EII日/量	B	C	煙	○	●	●	△	○	-			
	27 洗鉢	r	加曾利EII日/量	A	B	鈍煙/黒焼	○	●	●	△	○	-			
	28 洗鉢	m	加曾利EIV	A	B	煙<黒灰	○	●	●	△	○	-			
	29 洗鉢	m	加曾利EIV新	B	C	灰濁/鈍灰	○	●	●	△	○	-			
	30 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	A	黒灰	○	●	●	△	○	-	塵粒		
	31 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	A	黒灰	○	●	●	△	○	-	塵粒		
	32 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	A	黒焼/鈍黄灰濁	△	○	○	○	-	-	31-33-45と同一		
	33 洗鉢	r	加曾利EII日/量	A	A	黒灰	○	●	●	△	○	-	30-33-45と同一		
	34 洗鉢	r	加曾利EII日/量	B	B	煙-黄灰	○	●	●	△	○	-	30-31-45と同一		
	53	35 洗鉢	m	加曾利EII日/量	B	B	黒焼/暗焼-暗灰濁	○	●	●	△	○	-	灰白粒	
		36 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	A	黄灰	△	○	○	○	-	-	白粒	
		37 洗鉢	m	加曾利EII日/量	B	B	黒焼/暗焼-暗灰濁	○	●	●	△	○	-	灰白粒	
		38 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	C	赤焼-洗煙/灰濁	○	●	●	△	○	-	白粒	
		39 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	C	煙-黒灰	○	●	●	△	○	-	白粒	
		40 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	C	洗煙/灰濁/黒焼	○	●	●	△	○	-	白粒	
		42 洗鉢	m	加曾利EII日/量	B	B	赤焼/暗赤焼	○	●	●	△	○	-		
		43 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	B	鈍灰/鈍煙	○	●	●	△	○	-		
		44 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	B	鈍赤煙<鈍灰濁	○	●	●	△	○	-		
		45 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	A	黒灰	○	●	●	△	○	-	塵粒	
		46 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	B	煙/黄灰-灰濁	△	○	○	○	-	-	白粒	
47 洗鉢		m	加曾利EII日/量	A	B	鈍煙/暗灰濁	○	●	●	△	○	-			
48 洗鉢		m	加曾利EII日/量	A	C	赤焼/黒焼	○	●	●	△	○	-			
49 洗鉢		m	加曾利EII日/量	A	B	赤焼-煙/黒焼	○	●	●	△	○	-			
50 洗鉢		m	加曾利EII日/量	A	B	煙-灰濁	○	●	●	△	○	-			
54	51 洗鉢	r	加曾利EII日/量	A	B	赤焼/鈍煙/暗灰濁	○	●	●	△	○	-	白粒		
	52 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	B	鈍灰黄/暗灰濁	○	●	●	△	○	-			
	53 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	C	赤焼/黒焼	○	●	●	△	○	-			
	54 洗鉢	r	加曾利EII日/量	A	A	黄焼<灰濁	○	●	●	△	○	-			
	55 洗鉢	r	加曾利EII日/量	C	C	煙-黒焼<暗灰濁	○	●	●	△	○	-			
	56 洗鉢	r	加曾利EII日/量	A	C	黄灰/洗黄煙	○	●	●	△	○	-	灰白粒		
	57 洗鉢	r	加曾利EII日/量	B	B	煙-暗灰	○	●	●	△	○	-			
	加曾利EIV新	58 洗鉢	r	加曾利EIV新	B	C	鈍煙	○	●	●	△	○	-		
		59 洗鉢	r	加曾利EIV新	B	B	鈍煙	○	●	●	△	○	-		
		60 洗鉢	m	加曾利EII日/量	A	B	煙/鈍煙焼	○	●	●	△	○	-		
		61 洗鉢	m	加曾利EII日/量	B	B	鈍焼/黒焼	○	●	●	△	○	-		
		62 洗鉢	m	加曾利EIV新	A	B	鈍灰焼<暗灰	○	●	●	△	○	-		
		63 釜	m	加曾利EII日/量	A	C	鈍煙/暗灰	○	●	●	△	○	-	灰黄粒	
		64 洗鉢	r	加曾利EIV新	B	C	黄灰焼<暗灰濁	○	●	●	△	○	-	灰白粒	
		65 洗鉢	r	加曾利EIV新	A	B	鈍煙-洗黄灰濁	○	●	●	△	○	-		
66 洗鉢		r	加曾利EIV新	A	B	鈍煙-洗黄灰濁	○	●	●	△	○	-			
67 洗鉢		m	加曾利EIV新	B	C	黄煙/煙	○	●	●	△	○	-	灰白粒		

通称番号	押印		器種	部位	時期	形式	粘土		産人物				備考				
	Fig.	No.					粒	点	(1)	(2)	(3)	(4)		(5)	(6)	その他	
SI-006	55	68	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EⅡ	A	黄灰/灰-暗灰	△	○	△	△	○	○	黄白粒	同一 +5K-073 再生口縁? 炉内	
		69	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
		70	浅鉢	m			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
		71	浅鉢	m			C	黄灰/黄灰-暗灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
		72	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
		73	浅鉢	r			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
		74	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
		75	浅鉢	r			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
		76	浅鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
		77	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
		78	浅鉢	m			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
		80	深鉢	r			A	赤褐色-暗灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
		81	深鉢	r			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
		82	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	○		黄白粒
50	83	蓋	r	A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒					
84	深鉢	b	B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	○	白粒					
SI-008	62	1	浅鉢	r	中期 後葉 ?	加曾利EⅡ	B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒	同一、二次被熱	
		2	深鉢	r			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
		3	深鉢	m			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
SI-011	65	1	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EⅡ/Ⅲ	A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒	10上同-? 同一、炉体 8上同-、炉体 6上同-、炉体 1上同-? 炉体	
		2	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
		3	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
		4	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
		5	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
		6	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
		7	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
		8	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
		9	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
		10	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
		11	深鉢	m-b			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
		12	小型鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	白粒		
SI-012	67	1	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EⅡ/Ⅲ	A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒	上下層再生、炉体 下層再生、炉体 炉体 二次被熱?	
		2	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		3	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		4	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		5	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		6	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		7	深鉢	m			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		8	深鉢	r			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		9	深鉢	m			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		10	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		11	深鉢	m-b			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		12	蓋	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		13	深鉢	r			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		14	浅鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
SI-013	68	1	深鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅡ	B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒	底面剥離	
		2	深鉢	m			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		3	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		4	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		5	浅鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		6	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
SI-014	69	1	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EⅡ古	B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒	同一	
		2	深鉢	r			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		3	深鉢	r			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		4	深鉢	r			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		5	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		6	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		7	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		8	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		9	深鉢	m			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		10	浅鉢	r			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		11	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		12	深鉢	r			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		13	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		14	蓋	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
15	蓋	r	A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒						
16	蓋	r	A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒						
17	深鉢	t	A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒						
SI-015	70	1	深鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅡ	A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒	内面炭化物 外面炭化物	
		2	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		3	深鉢	m			B	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		4	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
SI-016	72	1	深鉢	b	中期 後葉	加曾利EⅡ	A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒	同一	
		2	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		3	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		4	深鉢	r			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		
		5	深鉢	m			A	暗灰/灰	○	○	○	○	○	○	灰白粒		

遺構 番号	埋回		部種	部位	時期	土質		混入物						備考		
	Flg	No.				形式	色調	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)		その他	
SI-016	72	6	深鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅢ	A B	成粒<黒焼	●	●	○	○	○	○		外面・口縁炭化物
		7	深鉢	m		加曾利EⅣ	A B	灰黄<黒	○	○	○	○	○			
		8	深鉢	m		加曾利EⅢ	A B	橙/暗褐	○	○	○	○	○			
		9	深鉢	r-m		加曾利EⅢ	A B	暗褐<暗灰褐	○	○	○	○	○			
		10	浅鉢	r+t		加曾利EⅢ	B C	赤黄<赤	●	●	○	○	○			
SI-017	73	1	深鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅢ	A C	橙<黄	○	○	○	○	○	○	白粒	} 同一
		2	深鉢	r		加曾利EⅢ/Ⅳ	A B	赤灰黄/暗褐	○	○	○	○	○			
		3	深鉢	m		加曾利EⅢ	A B	赤黄/黒焼	○	○	○	○	○			
		4	深鉢	b		加曾利EⅢ	A B	赤黄/黒焼	○	○	○	○	○			
SI-018	75	1	深鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅡ/Ⅲ	B C	橙/灰褐<黒焼	○	○	○	○	○	○		内面炭化物
		2	深鉢	m		加曾利EⅡ/Ⅲ	A B	赤黄<黒焼	○	○	○	○	○			
		3	深鉢	m		加曾利EⅡ/Ⅲ	A B	赤黄<黒焼	○	○	○	○	○			
		4	深鉢	m		加曾利EⅡ/Ⅲ	A B	赤黄<黒焼	○	○	○	○	○			
		5	深鉢	m		加曾利EⅡ/Ⅲ	A B	赤黄<黒焼	○	○	○	○	○			
		6	小型鉢	r-m		加曾利EⅡ	A A	灰褐<橙	○	○	○	○	○			
		7	深鉢	r		加曾利EⅡ	A B	橙/灰褐<黒焼	○	○	○	○	○			
SI-019	76	1	深鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅣ新	B C	赤黄<鈍橙	○	○	○	○	○	○		外面炭化物
		2	深鉢	m		加曾利EⅣ新	A B	橙<黒焼	○	○	○	○	○			
		3	深鉢	m		加曾利EⅣ新	A A	赤黄<橙	○	○	○	○	○			
		4	深鉢	m		加曾利EⅣ新	A C	黒焼/鈍灰褐	○	○	○	○	○			
		5	深鉢	m		加曾利EⅣ新	A C	赤黄<橙	○	○	○	○	○			
		6	深鉢	r		加曾利EⅣ	A C	赤黄<灰黄	○	○	○	○	○			
		7	深鉢	m		加曾利EⅣ新	B C	鈍赤黄<黒焼	○	○	○	○	○			
		8	深鉢	m		加曾利EⅣ	A B	赤黄<鈍灰黄	○	○	○	○	○			
		9	深鉢	m		加曾利EⅣ	A C	黒焼<暗灰褐/橙	○	○	○	○	○			
		10	深鉢	r		加曾利EⅣ	A A	灰白<灰黄	○	○	○	○	○			
		11	深鉢	m		加曾利EⅢ	A B	橙/灰黄褐	○	○	○	○	○			
		12	深鉢	m		加曾利EⅢ	A C	橙/黒焼	○	○	○	○	○			
		13	深鉢	m		加曾利EⅢ	A C	橙/黒焼	○	○	○	○	○			
		14	深鉢	m		加曾利EⅢ	A A	橙/黒焼	○	○	○	○	○			
		15	深鉢	m		加曾利EⅢ	A C	橙/黒焼	○	○	○	○	○			
SI-019	76	16	深鉢	m-b	中期 後葉	加曾利EⅣ	A C	赤黄<橙	○	○	○	○	○		13.15と同一	
SI-020	77	1	深鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅢ	A C	鈍赤褐<灰褐	○	○	○	○	○	○		12.13と同一
		2	浅鉢	m		加曾利EⅢ	A C	赤黄<黒灰	○	○	○	○	○		灰白粒	
SK-006	78	1	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EⅡ/Ⅲ	A C	鈍赤<黒灰	○	○	○	○	○	○		5と同一
		2	深鉢	m		加曾利EⅢ	A B	褐灰	○	○	○	○	○			
		3	深鉢	r		加曾利EⅡ/Ⅲ	A C	橙<灰黄褐<暗灰	○	○	○	○	○			
		4	深鉢	m		加曾利EⅡ/Ⅲ	B B	橙/黒焼	○	○	○	○	○			
		5	深鉢	m		加曾利EⅡ/Ⅲ	A C	橙<灰黄褐	○	○	○	○	○			
		6	深鉢	m		加曾利EⅢ	B B	橙/灰黄褐	○	○	○	○	○			
		7	深鉢	r		加曾利EⅡ/Ⅲ	C B	鈍橙<暗灰	○	○	○	○	○			
		8	蓋	r		加曾利EⅡ/Ⅲ	C B	橙/灰黄<暗灰黄	○	○	○	○	○			
		9	蓋	r		加曾利EⅡ/Ⅲ	A B	鈍橙<灰黄	○	○	○	○	○			
		10	蓋	r		加曾利EⅡ/Ⅲ	A B	鈍赤褐<灰褐	○	○	○	○	○			
		11	蓋鉢	b		加曾利EⅡ/Ⅲ	A A	橙/黒焼	○	○	○	○	○			
SK-008	80	1	小型蓋	r-m-b	中期 後葉	加曾利EⅣ新	A A	黒焼<鈍灰黄	○	○	○	○	○	○		橋状把手(6) 内面炭化物
		2	深鉢	m		加曾利EⅣ新	A A	淡黄灰<黒灰	○	○	○	○	○			
		3	深鉢	m		加曾利EⅣ新	A B	橙<暗灰	○	○	○	○	○			
		4	深鉢	m		加曾利EⅣ新	B B	褐灰	○	○	○	○	○			
		5	深鉢	m		加曾利EⅣ新	A C	橙/黒焼/暗褐	○	○	○	○	○			
		6	深鉢	r		加曾利EⅣ新	A A	赤黄灰<黒灰	○	○	○	○	○			
		7	深鉢	m		加曾利EⅢ	A C	橙/暗灰褐	○	○	○	○	○			
		8	深鉢	r-m		加曾利EⅣ	A C	灰黄/橙	○	○	○	○	○			
		9	深鉢	r		加曾利EⅣ	A C	灰黄/暗灰黄<橙	○	○	○	○	○			
		10	深鉢	r		加曾利EⅣ	A C	鈍赤/黒焼	○	○	○	○	○			
		11	深鉢	r		加曾利EⅣ新	B C	鈍橙	○	○	○	○	○			
		12	深鉢	r		加曾利EⅣ	A C	赤黄<淡灰黄	○	○	○	○	○			
		13	深鉢	r		加曾利EⅣ	A C	鈍橙<鈍灰黄	○	○	○	○	○			
		14	深鉢	m-b		加曾利EⅣ	B C	赤黄<暗褐	○	○	○	○	○			
		15	深鉢	m		加曾利EⅣ	B C	赤黄<灰黄	○	○	○	○	○			
		16	深鉢	m		加曾利EⅣ	B C	赤黄<灰黄	○	○	○	○	○			
		17	深鉢	m		加曾利EⅣ	B C	赤黄<灰黄	○	○	○	○	○			
		18	深鉢	m		加曾利EⅣ	B B	黄灰<灰黄	○	○	○	○	○			
		19	蓋	m-b		加曾利EⅣ	A B	黒/赤焼	○	○	○	○	○			
		20	蓋	r-m+t		加曾利EⅣ	B C	赤焼/暗褐/赤焼	○	○	○	○	○			
SK-020	81	1	深鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅣ新	A C	灰黄/灰/橙	○	○	○	○	○		} 同一	
		2	深鉢	r		加曾利EⅣ	A C	橙<灰褐	○	○	○	○	○			
SK-049	82	1	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EⅢ	A C	暗灰/淡橙	○	○	○	○	○	○		} 同一
		2	深鉢	r		加曾利EⅢ	A C	淡黄橙<黄灰	○	○	○	○	○			
		3	深鉢	r		加曾利EⅢ	A C	淡黄橙<黄灰	○	○	○	○	○			
		4	深鉢	m		加曾利EⅢ	A B	橙/暗灰褐	○	○	○	○	○			
		5	深鉢	m		加曾利EⅢ	A B	灰黄<黒焼	○	○	○	○	○			
		6	深鉢	m		加曾利EⅢ	A B	黒焼	○	○	○	○	○			
		7	深鉢	r		加曾利EⅡ/Ⅲ	B B	灰黄	○	○	○	○	○			
		8	深鉢	r		加曾利EⅡ/Ⅲ	A B	鈍橙<暗灰	○	○	○	○	○			
SK-057	83	1	深鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅣ	A B	鈍橙	○	○	○	○	○		} 同一	
		2	深鉢	m		加曾利EⅣ	A B	橙<淡橙	○	○	○	○	○			
SK-142	84	1	深鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅡ/Ⅲ	A C	橙<鈍灰黄	○	○	○	○	○		} 同一	
		2	深鉢	m		加曾利EⅡ/Ⅲ	A C	橙<鈍灰黄	○	○	○	○	○			

遺構番号	神座 File Nos.	器種	部位	時期	形式	土		混入物					備考						
						粒	色調	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)		(6)	その他				
SK-142	84	3	深鉢	m	中期 後葉	加曾利E II / III	A	橙/灰	△	○	△	○	-	-	灰粒粒				
		4	深鉢	m			A	B	灰黄<灰	○	●	○	○	-	-				
		5	深鉢	r			加曾利E	A	A	黒馬	△	○	△	○	-	-			
								B	C	灰<灰黄	○	○	○	○	-	-			
SK-143	85	1	深鉢	r	中期 後葉	加曾利E III	B	C	灰<灰黄	○	●	○	○	-	-				
		2	深鉢	m			加曾利E II / III	A	B	橙<暗灰褐	○	○	○	○	△	-	-		同一
		3	深鉢	m				A	B	橙<暗灰褐	○	○	○	○	△	-	-		
		4	深鉢	m				A	B	橙<暗灰褐	○	○	○	○	△	-	-		
		5	深鉢	m				A	B	橙<暗灰褐	○	○	○	○	△	-	-		
		6	深鉢	m				A	B	橙<暗灰褐	○	○	○	○	△	-	-		
		7	深鉢	m				A	B	灰黄<黒灰	○	○	○	○	○	-	-		
		8	深鉢	m				A	C	赤褐<黒馬	○	○	○	○	○	-	-		
		9	深鉢	m				A	C	赤褐<黒馬	○	○	○	○	○	-	-		
		10	深鉢	r				A	B	橙<暗灰	○	○	○	○	△	-	-		
		11	浅鉢	r			加曾利E	A	C	暗褐<灰橙	○	○	○	○	○	-	-	微粒	
		12	浅鉢	r				A	B	赤褐<暗褐	○	○	○	○	○	-	-		
		13	深鉢	t				B	B	暗褐<黒馬	○	○	○	○	○	-	-		
SK-174	87	1	深鉢	r	中期 後葉	加曾利E II / III	A	B	橙<暗灰黄	○	○	△	○	-	-				
		2	深鉢	m			A	B	灰橙<黒馬	○	○	△	○	-	-				
		3	深鉢	m			A	B	灰黄<橙	○	○	△	○	-	-				
		4	深鉢	m			A	C	橙<鈍橙	○	○	△	○	-	-				
		5	深鉢	m			A	C	橙<鈍橙	○	○	△	○	-	-				
		6	深鉢	m			加曾利E	A	B	暗褐	○	○	-	-	-	-			
		7	深鉢	m				A	B	赤褐<黒馬	○	○	○	○	-	-	黄電粒		
		8	深鉢	m				A	C	赤褐<灰黄	○	○	△	○	-	-			
		9	浅鉢	r			加曾利E IV 新	A	B	灰黄<暗灰黄	○	○	△	○	-	-	赤影		
SK-010	93	1	深鉢	m-b	中期 後葉	加曾利E?	A	C	灰橙<赤灰黄	○	○	○	○	-	-	外周磨耗			
		2	深鉢	b			B	C	赤褐	○	○	○	○	-	-	外周磨耗			
SK-014	4	3	浅鉢	m	中期 後葉	加曾利E IV 新	B	C	鈍橙<暗灰	○	○	○	○	-	-				
							A	C	灰橙<暗褐	○	○	○	○	-	-	灰粒粒			
SK-023	5	7	深鉢	r	後期 初頭	特名寺1	A	B	黄橙<黄灰	○	○	△	○	-	-				
		8	深鉢	m			A	A	灰黄<黄灰	○	○	△	○	-	-				
SK-066	9	7	深鉢	r	中期 後葉	加曾利E III	A	B	灰黄<暗灰	○	○	△	○	-	-				
		8	深鉢	m			加曾利E II	A	C	鈍橙<暗灰	○	○	○	○	-	-			
		9	深鉢	m			加曾利E IV	B	B	赤褐<黒馬	○	○	-	-	-	-			
		10	深鉢	m			加曾利E	A	C	暗灰	○	○	○	○	-	-	磨擦状突起		
		11	浅鉢	t				A	C	橙<灰	○	○	○	○	-	-	外周スス		
SK-063	12	13	深鉢	m	中期 後葉	加曾利E IV	A	B	鈍赤褐<灰褐	○	○	○	△	○	-	-			
		13	深鉢	m			A	A	鈍橙<暗灰黄	△	○	△	△	-	-				
		14	深鉢	m			A	C	橙<鈍橙	○	○	○	○	-	-				
		15	深鉢	m			B	C	赤褐<黒馬	○	○	○	○	-	-	自粒			
		16	深鉢	r			加曾利E IV 新	A	C	暗灰<灰黄	○	○	△	○	-	-			
		17	深鉢	m				A	C	鈍橙<暗	○	○	○	○	-	-			
		18	深鉢	m				A	B	橙<黒馬	○	○	○	○	-	-			
		19	深鉢	m				A	B	灰黄<黒馬	△	○	△	○	-	-			
		20	深鉢	m				A	C	暗灰<黒馬	○	○	○	○	-	-			
		21	深鉢	m			加曾利E III	A	B	暗灰褐	△	○	△	○	-	-			
		22	深鉢	m			加曾利E IV	A	A	鈍橙<暗灰	△	○	-	-	-	-			
		23	深鉢	m			加曾利E IV 新	A	B	赤褐<黒馬	○	○	△	○	-	-			
		24	深鉢	r			加曾利E IV	B	B	灰黄橙<暗灰	○	○	○	○	-	-			
		25	深鉢	r				A	A	鈍橙<暗灰黄	○	○	△	○	-	-	灰黄粒		
26	深鉢	b			加曾利E	B	C	橙<黄橙	○	○	○	○	-	-	外周磨耗				
27	深鉢	b				A	B	橙	○	○	○	○	-	-					
SK-067	94	31	深鉢	r-m	中期 後葉	加曾利E III	B	B	灰黄<鈍橙	○	○	○	○	-	-				
		32	深鉢	r				A	B	灰黄	○	○	○	○	-	-			
		33	深鉢	r				A	B	橙<暗灰褐<暗褐	○	○	○	○	-	-			
		34	深鉢	m				B	B	橙<黄灰<暗灰	○	○	○	○	-	-			
		35	深鉢	m			加曾利E IV	A	B	暗灰<黒灰	○	○	○	○	-	-			
		36	深鉢	m			加曾利E IV 新	B	C	橙	○	○	○	○	-	-			
		37	深鉢	r			加曾利E	A	C	灰橙<赤灰黄	○	○	○	○	-	-			
		38	深鉢	r				A	B	灰黄橙	○	○	○	○	-	-			
SK-068	39	40	深鉢	m	中期 後葉	加曾利E III	A	A	灰黄<鈍橙	△	△	○	-	-					
		40	深鉢	m			B	C	暗赤褐<暗褐	○	○	○	○	-	-				
		41	深鉢	m			加曾利E IV 新	B	C	橙<黒馬	○	○	○	○	-	-	灰粒粒		
		42	深鉢	m				A	B	橙<黒馬	○	○	○	○	-	-			
		43	深鉢	r			加曾利E	A	B	赤褐<暗灰黄	○	○	○	○	-	-			
		44	深鉢	r				B	C	橙	○	○	○	○	-	-			
		45	深鉢	r			加曾利E IV 新	A	B	鈍橙<暗灰褐	○	○	△	○	-	-			
SK-069	47	48	深鉢	m	中期 後葉	加曾利E III	A	B	鈍橙<暗灰黄	○	○	△	○	-	-				
		48	深鉢	m			A	B	灰黄<暗灰黄<鈍橙	○	○	○	○	-	-				
		49	深鉢	m			加曾利E IV	C	B	灰黄<黄灰	○	○	△	○	-	-			
		50	深鉢	m				A	B	灰黄<暗灰黄	○	○	△	○	-	-			
		51	浅鉢	r-m			加曾利E IV 新	B	B	橙<鈍橙	△	○	○	-	-				
		52	深鉢	r			加曾利E	B	C	橙	○	○	○	○	-	-			
		53	深鉢	r			加曾利E IV 新	A	C	橙	○	○	○	○	-	-			
		54	深鉢	r			加曾利E	A	B	鈍橙<暗灰黄	○	○	△	○	-	-			
55	深鉢	m				A	B	鈍橙<暗褐	○	○	△	○	-	-					
56	深鉢	m			曾利基	A	B	橙<黄灰<暗灰	○	○	○	○	-	-					
SK-177	60	60	深鉢	m	中期 後葉	加曾利E IV 新	A	B	暗<黒灰	○	○	○	○	-	-				
		61	深鉢	m			加曾利E III	A	B	橙<暗灰	○	○	○	○	-	-	粘土が類似		

遺蹟 番号	碑号		器種	部位	時期	形式		粘土		混入物						備考
	Flt.	No.				種	色調	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	その他		
SK-139	94	62	深鉢	m	中期 後葉	加曾利E道	B	淡黄灰<暗灰	●	○	○	○	○	○	} 同一	
		63	深鉢	m			A	黄緑<暗灰	●	○	○	○	○	○		
		64	深鉢	m			A	黄緑<暗灰	●	○	○	○	○	○		
		65	深鉢	m			A	灰褐<赤褐	○	○	○	○	○	○		
		66	深鉢	m			A	黄緑<暗灰/灰黄	○	○	○	○	○	○		
		67	深鉢	r			加曾利EIV新	A	黄	○	○	○	○	○		○
		68	深鉢	r			加曾利E道	B	灰黄<黒灰	○	○	○	○	○		○
		70	浅鉢	r			B	暗灰<黄緑	○	○	○	○	○	○		○
SK-175	95	71	深鉢	m	中期 後葉	加曾利E道	A	暗褐/黒褐	●	○	○	○	○	} 同一		
		72	深鉢	m			B	暗褐/黒褐	●	○	○	○	○			
		73	深鉢	m			A	暗褐/黒褐/黄緑	●	○	○	○	○			
		74	深鉢	m			A	暗褐/黒褐/黄緑	●	○	○	○	○			
		75	深鉢	r			A	暗褐/黒褐/黄緑	●	○	○	○	○		○	
SK-176	76	深鉢	m	中期 後葉	加曾利EIV新	A	暗灰	○	○	○	○	○	} 同一			
		77	深鉢			m	A	暗灰	○	○	○	○		○		
		78	深鉢			m	A	黄緑	○	○	○	○		○		
SK-011	80	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EIV新	A	黄緑/灰褐	○	○	○	○	○	}			
		81	深鉢			m	A	黄緑/淡黄灰	○	○	○	○		○		
SK-004	82	深鉢	m	中期 後葉	加曾利E道	A	黄灰<暗灰/黄	○	○	○	○	○	} 白粒			
		83	深鉢			m	A	黄灰<暗灰/黄	○	○	○	○		○		
		84	深鉢			r	加曾利E道/IV	A	黄緑/暗灰	○	○	○		○	○	
		85	深鉢			m	加曾利EIV新	B	黄緑<暗灰/暗灰	○	○	○		○	○	
		86	深鉢			m	加曾利EIV	B	黄緑/暗灰	○	○	○		○	○	
SK-005	87	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EIV新	A	淡黄<黒褐	○	○	○	○	○	}			
		88	浅鉢			b	加曾利E道/IV	B	黄緑<灰黄	○	○	○		○	○	
SK-037	89	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EIV新	B	黄<黒灰	●	○	○	○	○	} 同一			
		90	深鉢			r	C	黄<黒灰	●	○	○	○		○		
		91	深鉢			r	A	黄<赤褐	○	○	○	○		○		
		92	深鉢			m	A	赤褐<黄緑	○	○	○	○		○		
		93	深鉢			m	A	黄緑<黄	○	○	○	○		○		
		94	深鉢			m	A	暗赤褐<灰褐	○	○	○	○		○		
		95	深鉢			r-m	加曾利EIV	A	黄緑/黄緑	○	○	○		○	○	
		96	深鉢			m	加曾利EIV?	B	暗灰/灰<黄	○	○	○		○	○	
		97	深鉢			m	B	黒灰/暗褐	○	○	○	○		○		
		98	深鉢			r	B	黄灰<暗灰	○	○	○	○		○		
		99	深鉢			r	大木10?	B	黄<灰黄	○	○	○		○	○	
100	深鉢	r-m	A	暗褐	○	○		○	○	○						
101	浅鉢	r	A	黄<灰黄	○	○	○	○	○	○						
SK-042	96	深鉢	r	中期 後葉	加曾利EIV	A	淡黄<灰褐/赤褐	○	○	○	○	○	}			
		98	深鉢			r	加曾利EIV新	B	灰黄<黄	○	○	○		○		
SK-052	103	深鉢	r+m	中期 後葉	加曾利EIV	A	灰黄<黒灰<黒	○	○	○	○	○	黄化懸着			
SK-092	106	深鉢	r	中期 後葉	加曾利E道	A	黄緑<黄灰	○	○	○	○	○	} 同一			
		107	深鉢			m	B	淡黄緑<黄	○	○	○	○		○		
		108	深鉢			r	B	淡黄緑<黄	○	○	○	○		○		
		109	深鉢			m	A	黄白<灰	○	○	○	○		○		
		110	浅鉢			m	加曾利E	A	淡黄<淡灰黄	○	○	○		○	○	
		111	浅鉢			m		B	淡黄<淡灰黄	○	○	○		○	○	
		SK-002	114			深鉢	r	中期 後葉	加曾利EIV	B	灰黄<黄緑	○		○	○	○
115	深鉢			r	A	黒灰/黄緑	○			○	○	○	○			
116	深鉢			m	B	黄	○			○	○	○	○			
117	深鉢			r	B	黄	○			○	○	○	○			
118	深鉢			m	B	黄	○			○	○	○	○			
119	深鉢			r	加曾利E	B	黄緑<黄緑			○	○	○	○	○		
120	深鉢			m		A	暗灰/黄灰<黄灰			○	○	○	○	○		
121	深鉢			r	B	黄	○			○	○	○	○			
SK-033	123	小皿	m	中期 後葉	加曾利EIV新	B	黄灰<黄緑	○	○	○	○	○	}			
		124	深鉢			r	加曾利E道	A	黄<暗灰黄	○	○	○		○		
		125	深鉢			r	加曾利EIV	A	黄灰<黄灰	○	○	○		○		
SK-041	100	1	深鉢	m	中期 後葉	加曾利E道/IV	A	黄灰/黄	○	○	○	○	} 同一			
		2	深鉢	r			加曾利E道	A	黄緑<灰褐	○	○	○		○		
		3	深鉢	m			A	黄緑	○	○	○	○		○		
		4	深鉢	m			B	黄緑<灰褐	○	○	○	○		○		
		5	深鉢	m			B	黄	○	○	○	○		○		
SK-034	6	深鉢	m	後期 初期	弥生 1	A	黄赤褐/黒褐	○	○	○	○	○	}			
		7	深鉢			m	加曾利E	A	黄緑<暗灰	○	○	○		○		
		8	深鉢			m	加曾利E道	B	暗灰	○	○	○		○		
SK-066	9	深鉢	m+m	中期 後葉	加曾利E	A	黄灰<暗灰	○	○	○	○	○	}			
		10	深鉢			r	加曾利EIV新	A	黄灰<暗灰	○	○	○		○		
SK-001	11	深鉢	m	中期 後葉	加曾利E道	B	黄<暗灰	○	○	○	○	○	} 二次被煎?			
		12	深鉢			m	A	黄灰<黄緑	○	○	○	○		○		
		13	浅鉢			r	B	黄<灰黄	○	○	○	○		○		
		14	深鉢			m	加曾利EIV	A	黄赤褐<赤褐	○	○	○		○	○	
		15	深鉢			r	加曾利E	A	黄赤褐<黄緑	○	○	○		○	○	
		16	深鉢			m	?	A	黄	○	○	○		○	○	
		17	深鉢			r	A	黄<黄緑	○	○	○	○		○	○	
SK-009	19	深鉢	r	中期 後葉	加曾利E道/IV	A	黄<暗灰	○	○	○	○	○	} 同一?			
		20	深鉢			r	A	黄灰<黄灰	○	○	○	○		○		
SK-033	21	深鉢	m	後期 後葉	弥生 1	A	黄灰<黄灰	○	○	○	○	○				

遺構番号	探区 Fig. No.	層位 No.	部材	部位	時期	形式	土質		混入物						備考		
							焼	色調	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)		その他	
SK-148	100	23	泥鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅢ	A	C	焼/黒灰/黄灰	○	○	○	○	○	○	○	同一?
		24	泥鉢	r			A	C	黒灰/黄灰	○	○	○	○	○	○		
SK-070		26	泥鉢	m	中期 後葉	加曾利E	A	C	赤黄灰/暗灰黄	○	●	△	○	○	○	同一	
		27	泥鉢	m			A	C	赤黄灰/暗灰黄	○	●	△	○	○	○		
SK-013	102	2	泥鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅣ新	A	A	黒焼	△	△	○	○	○	○	同一	
SK-047	103	1	泥鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅣ	A	B	暗黄灰/暗灰	○	○	○	○	○	○		
		2	泥鉢	m			A	B	暗黄灰/暗灰	○	○	○	○	○	○		
		3	泥鉢	r			A	C	黄灰/暗灰黄	○	●	△	○	○	○	白粒	
SK-163	104	4	泥鉢	r	中期 後葉	?	A	B	焼/黒灰	○	○	○	○	○	○	同一	
		5	泥鉢	m			B	B	焼/黒灰	○	○	○	○	○	○		
SK-007	106	1	泥鉢	m	中期 後葉	加曾利E	B	B	暗赤焼/黒焼	○	○	○	○	○	○	同一	
		2	泥鉢	m			B	B	暗赤焼/黒焼	○	○	○	○	○	○		
SK-018		3	泥鉢	b	中期 後葉	加曾利E	B	B	暗/暗焼	○	○	○	○	○	○	同一	
SK-062		4	泥鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅣ新	B	C	灰黄/焼	○	○	○	○	○	○		
		5	泥鉢	m			A	C	焼/暗灰黄	○	○	○	○	○	○		
SK-012	107	1	泥鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅣ新	B	B	赤黄灰/暗灰/焼	△	△	○	○	○	○	同一	
SK-036		1	泥鉢	r	後期 初期	地名寺1	A	C	暗焼/黒焼	○	○	○	○	○	○		
SK-061		3	泥鉢	m	中期 後葉	加曾利EⅣ新	A	B	灰黄/灰/焼	○	○	○	○	○	○		
		4	泥鉢	r			A	B	焼灰/灰焼	○	○	○	○	○	○		

第18表 遺物観察表③(縄文時代土製品)

遺構番号	探区 Fig. No.	層位 No.	部材	部位	寸法(mm)		重量 (g)	備考	遺構番号	探区 Fig. No.	層位 No.	部材	部位	寸法(mm)		重量 (g)	備考
					長	幅								長	幅		
G07-87	26	1	片鉢	m	5.4	5.2	26.5		SI-001	36	39	円板	m	7.7	(6.8)	(51.7)	一部欠
G07-88		2	片鉢?	m	(6.6)	(4.7)	(57.7)	切欠不明瞭			40	円板	m	4.1	3.9	17.1	
		3	片鉢	m	6.0	5.3	45.0				41	円板	m	3.9	3.5	14.4	
		4	片鉢	m	6.6	4.3	49.1	下切欠不明瞭	SI-004	45	36	片鉢	m	8.1	7.3	80.6	
G08-34		5	片鉢	m	2.5	1.3	13.1				37	片鉢	m	7.2	5.5	52.2	
G08-90		6	片鉢	m	5.6	4.3	57.1				38	片鉢	r	5.9	4.9	39.1	
G08-91		7	片鉢	m	3.7	3.5	22.6				39	片鉢	m	5.0	3.9	23.1	
H11-07		8	片鉢	m	4.5	3.2	20.0	半欠			40	片鉢	m	(3.6)	5.1	(16.7)	半欠
H12-23		9	片鉢	m	6.8	6.0	67.2	一部欠			41	片鉢	m	5.8	4.6	37.5	
		10	片鉢	m	5.3	(4.3)	(22.4)	上下欠			42	片鉢	m	5.0	3.7	21.8	1/3欠
		11	片鉢	m	6.6	6.3	(61.3)				43	片鉢	m	6.0	5.1	44.4	
H12-33		12	片鉢	m	6.1	(4.1)	(42.6)	裏面線ズレ			44	片鉢	m	(4.0)	4.8	(19.1)	半欠
H12-52		13	片鉢	m	4.8	4.1	27.3	一部欠			45	片鉢	r	(4.3)	5.1	(33.8)	半欠
		14	片鉢	m	(4.9)	4.3	(35.5)	下端欠			46	片鉢	m	(2.7)	3.4	(12.3)	半欠
A区		15	片鉢	m	4.9	5.9	35.6				47	片鉢	m	(2.7)	4.7	(16.2)	半欠
B区		16	片鉢?	m	7.2	4.9	(48.8)	底線不明瞭			48	円板?	m	(4.5)	(4.7)	(23.4)	一部線欠
		17	片鉢	m	4.2	4.8	23.8	下端欠			49	円板?	m	5.3	(3.9)	(38.0)	半欠
		18	片鉢	m	(7.0)	5.7	(49.0)	下端欠			50	円板?	m	5.7	5.5	27.9	
		19	片鉢	m	4.8	(3.8)	(24.4)	底線不明瞭	SI-006	56	85	片鉢	m	6.0	5.5	50.7	
		20	片鉢	m	5.9	(4.0)	(29.7)	一部欠			87	片鉢	m	(2.8)	4.9	17.5	半欠
		21	片鉢	m	(5.0)	5.7	(37.0)	下端欠			88	片鉢	m	5.3	5.7	31.6	
		22	片鉢	m	(4.6)	5.0	(31.5)	下端欠			89	片鉢?	m	(5.1)	4.4	(26.9)	切欠不明瞭
C区		23	片鉢	m	4.3	4.3	21.7				90	片鉢	r	7.0	5.1	44.0	下切欠不明瞭
G07-88	27	1	円板	m	(2.7)	(3.2)	(6.3)	半欠			91	片鉢	r	5.4	3.7	(34.6)	切欠不明瞭
		2	円板	m	(5.1)	(5.4)	(38.3)	1/3欠			92	片鉢?	r	(4.7)	5.1	(27.3)	切欠不明瞭
G07-97		4	円板	m	(4.4)	5.0	(22.2)	下1/3欠			93	片鉢	m	(3.9)	4.0	(21.3)	半欠
		5	円板	m	(3.8)	4.3	(17.5)	下半欠			94	片鉢	m	(5.0)	3.7	(24.6)	半欠
G08-04		6	円板	m	(3.1)	5.0	(11.5)	半欠			95	円板	m	5.5	3.0	19.4	一部欠
G08-16		7	円板	m	(3.1)	(5.5)	(19.2)	下半欠			96	円板	m	(3.6)	(3.2)	(17.1)	3/4欠
G08-26		8	円板	m	(5.0)	(6.7)	(43.1)	下半欠			97	円板	m	3.0	2.8	8.5	
G09-01		9	円板	m	(7.3)	(8.1)	(78.9)	3/4欠			98	円板	m	(5.9)	(4.3)	(27.2)	半欠
H12-13		10	円板	m	(3.7)	(3.4)	(18.8)	2/3欠			99	不明	-	4.2	3.4	9.4	性格不明
H12-23		11	円板	b	5.2	4.2	21.8		SI-011	65	14	円板	m	(4.7)	6.0	(35.7)	半欠
H12-29		12	円板	m	4.5	4.7	26.6		SI-012	67	15	片鉢	m	5.7	(3.8)	(24.4)	半欠
H12-33		13	円板	b	5.2	4.4	24.9		SI-014	69	18	円板	m	4.0	4.3	19.1	半欠
		14	円板	m	6.3	(4.8)	(30.6)	半欠	SI-016	72	11	片鉢	m	5.8	(4.3)	(24.6)	半欠
		15	円板	m	(2.6)	3.9	(19.1)		SI-019	76	17	円板	m	(4.9)	(5.8)	(38.3)	下半欠
		16	円板	m	5.9	(3.3)	(23.2)	半欠	SK-049	82	9	片鉢	m	5.4	(5.2)	(45.0)	半欠
		17	円板	b	5.6	5.3	(40.1)	一部欠	SK-063	93	28	片鉢	m	4.5	(3.6)	(16.5)	裏面線欠
		18	円板?	m	3.7	2.6	10.8		SK-069	94	57	円板	m	4.4	(5.6)	(25.1)	半欠
表層		19	円板	m	5.2	6.0	36.0				58	円板	m	6.8	(3.8)	(35.3)	半欠
		20	円板	m	5.0	3.6	30.7				59	円板	m	8.1	(6.5)	(58.2)	半欠
トレンチ		21	円板	m	(4.5)	(3.4)	(17.7)	2/3欠	SK-052	96	104	片鉢	m	5.9	5.0	(37.1)	一部欠
		22	円板	m	(2.7)	(3.3)	(12.4)				105	片鉢	m	5.3	5.5	(37.6)	
		23	円板	m	6.5	6.6	(75.8)	未製品	SK-001	100	18	片鉢	m	5.5	4.0	33.2	
SI-001	36	37	片鉢	m	7.6	6.5	82.5		SK-070	28	円板	m	4.0	4.5	18.5	一部欠	
		38	片鉢	m	(6.8)	6.5	(77.9)	1/3欠	SK-133	102	1	片鉢	m	7.6	6.8	(66.8)	半欠

第19表 遺物観察表④(縄文時代石器)

遺構番号	探区 Fig. No.	層位 No.	部材	石	寸法(mm)			重量 (g)	備考	遺構番号	探区 Fig. No.	層位 No.	部材	石	寸法(mm)			重量 (g)	備考
					長	幅	厚								長	幅	厚		
H12-14	28	1	AH	Cc	17.2	17.2	5.5	2.25	未製	H12-32	28	4	AH	AnV	18.2	20.5	4.0	1.16	
H12-13	2	AH	Ch	21.8	16.7	4.9	1.68		H12-33	5	AH	ShQ	(21.8)	(20.0)	4.0	(1.52)			

遺物番号	探洞	層位	石材	寸法(mm)			重量(g)	備考	遺物番号	探洞	層位	石材	寸法(mm)			重量(g)	備考	
				長	幅	厚							長	幅	厚			
表紙	28	3	AH	Ob	(22.2)	(19.8)	5.7	(1.69)	H12-69		6	AH	ShQ	(20.2)	19.4	3.7	(1.30)	
SI-002	38	5	CA	Ho	86.6	57.6	18.7	89.24	SI-001	37	52	RF	Ho	42.2	29.7	6.3	9.41	
SI-003	41	8	CA	Ho	98.3	50.0	21.2	91.23	53	RF	Ho	31.9	32.2	5.6	7.79			
SI-004	46	51	RF	Ho	40.7	31.2	9.0	11.66	54	SA	AshH	(68.5)	(26.2)	(35.5)	(61.3)	面石(2)		
H12-58	7	CA	An	94.6	68.4	17.8	139.50	SI-006	56	101	AH	ChR	(10.5)	17.9	2.9	(0.58)		
G07-78	6	CA	HQ	(53.0)	(46.9)	13.0	(42.22)	102	RF	Ob	15.4	11.7	2.6	0.33				
G08-90	29	10	CA	SI	47.0	36.0	7.7	17.47	103	FI	Ob	26.3	17.5	3.6	0.82			
F08-79	11	RF	Cc	52.3	27.3	11.4	14.00	104	FI	Ch	11.6	18.3	2.8	0.47				
G07-59	12	RF	Ob	8.7	20.4	9.3	1.11	105	FI	Ch	12.0	17.2	3.4	0.39				
G07-78	13	RF	Ob	17.9	24.3	7.3	3.44	106	RF	ShQ	37.5	42.0	11.3	16.88				
	14	RF	Ob	31.2	22.6	5.9	4.60	107	FI	Sh	31.6	45.7	10.8	13.05				
	15	RF	Ob	14.0	14.0	4.0	0.63	109	PO	QP	(81.4)	(75.0)	39.8	(242.5)				
G07-97	16	RF	Ch	22.4	16.2	8.3	2.66	110	PO	TuG	129.1	71.5	32.7	533.5				
H12-53	17	RF	Ho	(24.0)	25.8	6.1	(4.57)	111	PO?	QP	127.8	86.4	66.0	884.4				
表紙	18	RF	Ch	38.2	43.5	8.5	11.17	112	H	Rh	(48.0)	(20.8)	22.1	(19.5)				
F09-89	19	FI	Ob	36.8	36.7	10.2	10.65	113	SA	Se	(188.8)	(135.1)	66.8	(1,633.0)	片面			
G07-97	20	FI	Ch	35.5	37.4	10.9	14.82	SI-008	62	4	PO	Se	101.8	33.8	(39.6)	(133.6)		
G07-88	21	FI	Ob	18.7	25.9	7.2	2.86	5	H	AshH	(88.0)	73.3	43.4	(194.5)				
G08-04	22	FI	TuF	31.6	30.0	8.7	7.45	SI-011	65	15	CA	HQ	34.5	47.8	17.9	(74.38)		
H12-52	23	FI	Ch	37.5	23.8	9.0	7.63	SI-014	69	19	PO	Se	(66.6)	(50.9)	27.6	(112.7)		
J07-20	24	Ca?	Ob	26.7	18.2	11.6	5.26	SI-016	72	12	H	ShQ	60.6	40.1	(26.8)	(63.9)		
H12-41	25	FI	Cc	25.0	18.3	8.1	2.17	SI-018	75	8	RF	Cc	18.2	11.4	2.6	0.63		
G08-52	26	PO	Se	166.8	87.0	54.9	1,183.1	SK-006	78	12	CA	Se	51.9	37.9	16.2	26.95		
H12-33	27	PO	Rh	101.4	62.0	35.2	185.4	SK-008	80	21	RF	Ob	18.0	10.7	2.8	0.36		
G08-93	28	PO	QP	80.7	53.9	24.5	130.9	SK-015	81	1	AH	Ob	13.9	10.4	4.5	0.45	表製	
表紙	29	PO?	QP	(70.1)	63.5	(16.1)	(88.6)	SK-049	82	10	FI	Ob	14.2	25.1	9.9	2.36		
G13-03	30	PO	QP	(66.1)	(47.2)	(45.9)	(149.6)	SK-143	85	14	FI	ChH	27.2	28.3	4.9	3.00		
H-シテ	31	H	QP	140.9	76.0	46.8	659.3	SK-063	93	29	FI	Ch	21.3	13.0	3.7	0.64		
SD-001	32	HP?	An	(38.0)	(45.9)	(35.2)	(55.4)	RF	Ch	19.9	22.6	6.8	2.79					
G16-43	33	H	Se	90.3	63.9	81.8	248.1	SK-068	94	46	FI	Ch	35.2	31.1	6.9	8.24		
G13-15	34	H	Sh	65.6	51.1	20.4	83.4	SK-037	95	102	AW	Ob	20.9	15.4	4.1	0.88		
SI-001	37	42	RF	Ch	46.1	40.0	10.1	15.08	SK-002	96	122	CA	HQ	(58.5)	60.0	25.3	(94.37)	半欠
	43	FI	ChH	18.9	31.4	5.9	2.29	SK-072	100	20	AH	Ch	(20.5)	13.8	3.5	(0.73)		
	44	CA	Se	83.4	78.9	24.1	164.16	SK-159	22	FI	ShQ	10.5	23.9	3.6	0.90			
	45	PO	Sh	161.2	46.3	31.8	381.2	SK-148	25	SA	An	(136.4)	(103.6)	44.1	(604.6)	面石(2)		

第20表 遺物観察表⑤(縄文時代石製品)

遺物番号	探洞	層位	石材	寸法(mm)			重量(g)	備考	遺物番号	探洞	層位	石材	寸法(mm)			重量(g)	備考				
				長	幅	厚							長	幅	厚						
H12-33	31	1	FL	Pu	120.0	54.4	22.3	27.78	有孔	SI-006	59	137	Wh	Pu	29.8	31.3	31.0	7.67			
表紙		2	Wh	Pu	66.7	69.6	8.1	67.79				138	Wh	Pu	41.5	38.9	30.8	9.21			
H12-53		3	Wh	Pu	77.4	82.4	54.9	78.96				139	Wh	Pu	49.0	45.6	45.5	12.88			
表紙		4	Wh	Pu	56.4	71.8	45.3	50.70				60	140	Wh	Pu	51.3	30.7	30.4	5.31		
		5	Wh	Pu	45.9	50.2	27.4	14.51				141	Wh	Pu	52.2	39.8	26.7	11.67			
		6	Wh	Pu	41.3	42.6	30.2	17.73				142	Wh	Pu	38.3	50.1	25.5	5.10			
		7	Wh	Pu	53.0	55.7	35.9	14.89				143	Wh	Pu	31.2	39.2	38.8	10.46			
		8	Wh	Pu	63.5	72.7	33.7	34.88				144	Wh	Pu	53.7	35.2	29.2	7.33			
H12-53		9	Wh	Pu	23.2	40.1	26.9	4.56				145	Wh	Pu	51.9	32.1	23.9	13.11			
表紙		10	Wh	Pu	33.9	29.5	27.4	4.68				146	Wh	Pu	36.8	37.6	26.5	6.95			
SI-003	41	9	FL	Pu	72.7	90.8	18.2	19.03	扁平			147	FL?	Pu	38.8	40.7	24.8	7.30			
		10	FL	Pu	76.3	51.6	18.9	8.98	無孔			148	Wh	Pu	35.5	28.6	23.1	3.77			
SI-006	58	114	FL	Pu	58.3	49.8	28.2	14.26	槽円状			149	Wh	Pu	37.6	34.8	14.8	1.75			
		115	FL	Pu	(72.6)	(39.7)	25.6	9.43				150	Wh	Pu	37.7	45.0	20.2	6.48			
		116	Wh	Pu	94.8	67.6	40.5	38.89				151	Wh	Pu	30.0	45.8	30.1	12.58			
		117	Wh	Pu	124.9	89.2	35.0	85.97				152	Wh	Pu	47.6	44.1	15.9	9.67			
		118	Wh	Pu	62.0	82.4	46.0	54.58				153	Wh	Pu	30.6	29.2	20.8	3.59			
		119	Wh	Pu	77.9	102.9	72.4	139.20				154	Wh	Pu	24.6	26.1	21.7	4.17			
		120	Wh	Pu	45.3	50.9	39.2	16.97				155	Wh	Pu	32.5	42.2	13.9	3.80			
		121	Wh	Pu	44.7	66.3	34.9	13.70				156	Wh	Pu	33.8	35.9	28.2	7.58			
		122	Wh	Pu	58.3	44.3	28.3	14.76				157	Wh	Pu	26.8	33.6	18.7	2.88			
		123	Wh	Pu	45.5	35.1	33.2	10.52				158	Wh	Pu	23.4	34.1	17.5	2.90			
		124	Wh	Pu	47.8	27.2	25.1	4.03				159	Wh	Pu	34.5	36.1	29.8	7.81			
		125	Wh	Pu	33.4	34.1	22.7	2.36				160	Wh	Pu	27.4	29.9	19.7	4.68			
		59	126	Wh	31.8	44.5	37.0	13.81				161	Wh	Pu	24.4	39.7	22.2	3.13			
		127	Wh	Pu	44.1	54.9	35.9	20.51				162	Wh	Pu	29.0	42.3	30.0	8.47			
		128	Wh	Pu	33.0	37.8	30.4	11.00				SI-012	67	16	Wh?	Pu	38.3	26.9	13.0	1.44	
		129	Wh	Pu	36.5	49.5	37.9	18.28				SI-014	69	20	FL	Pu	33.1	27.8	15.5	1.53	
		130	Wh	Pu	46.5	39.9	32.8	16.27				SI-016	72	13	FL	Pu	69.0	36.3	13.3	4.45	有孔
		131	Wh	Pu	29.2	34.2	22.0	5.05				SK-049	82	11	Wh	Pu	62.2	37.1	17.4	6.47	
		132	Wh	Pu	37.2	40.9	36.3	12.32				SK-070	108	1	Wh	Pu	178.3	126.5	118.0	321.15	
		133	Wh	Pu	38.0	31.6	26.3	7.00				SK-069		2	Wh	Pu	106.6	113.4	75.4	100.74	
		134	Wh	Pu	48.4	49.4	36.6	9.37				SK-078		3	Wh	Pu	60.4	44.1	35.7	17.36	
		135	Wh	Pu	36.9	38.6	31.9	13.64				4	Wh	Pu	27.6	34.8	35.8	8.36			
		136	Wh	Pu	40.6	47.5	29.2	8.59				5	Wh	Pu	69.3	66.4	60.6	50.52			

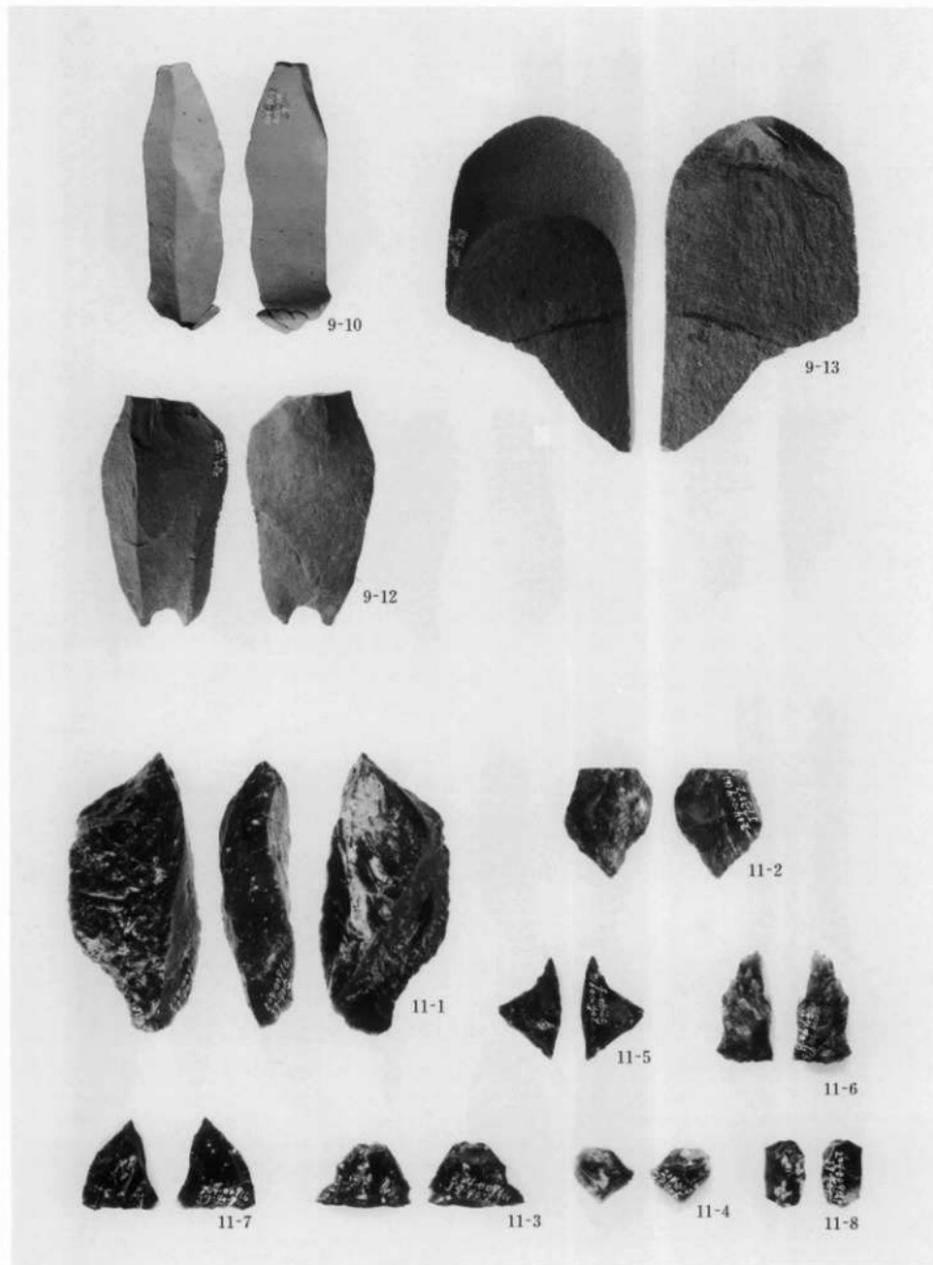
写 真 图 版

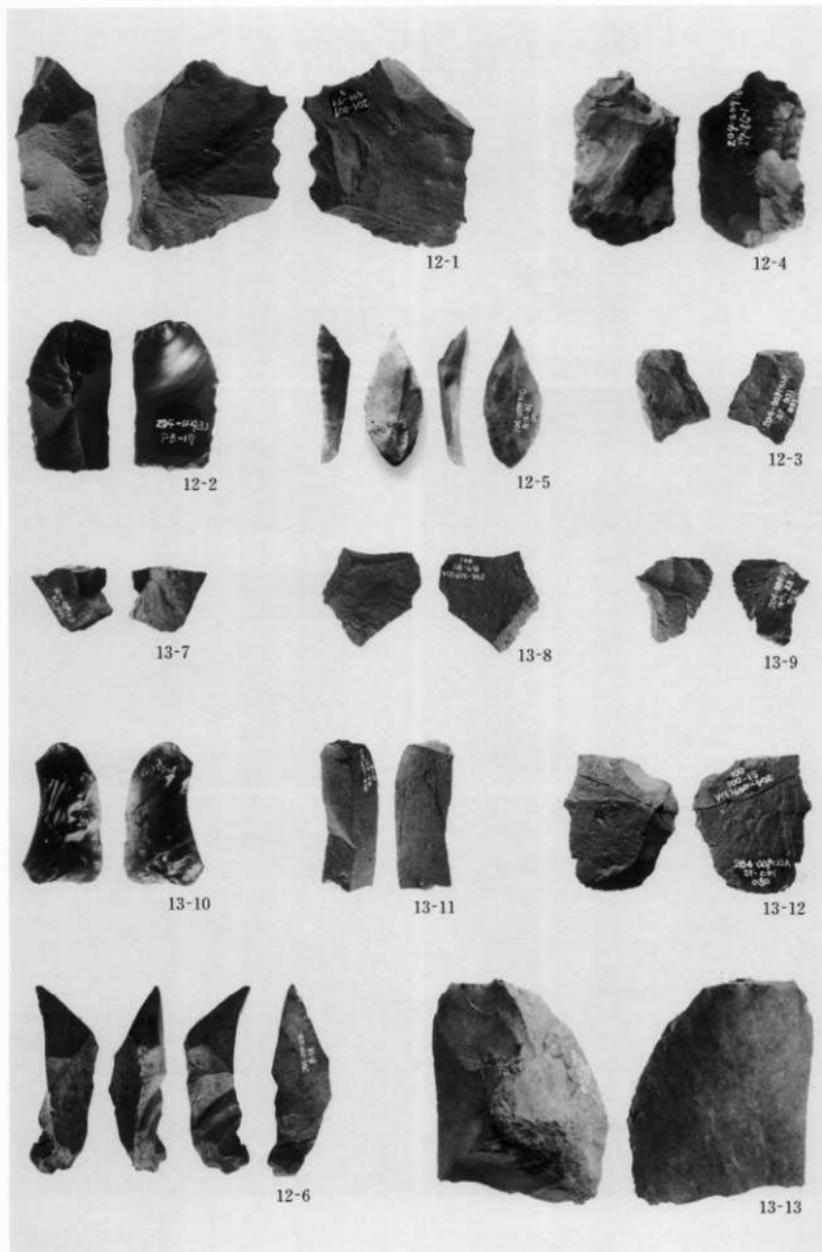


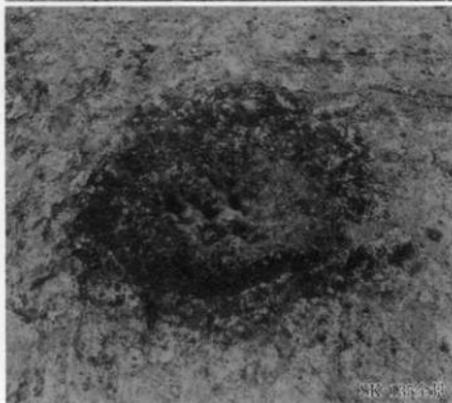
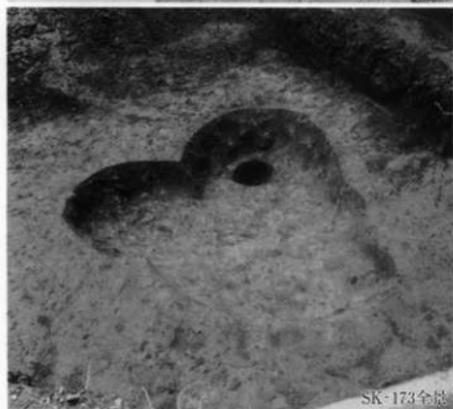
図版 2 旧石器時代第1地点・第2地点

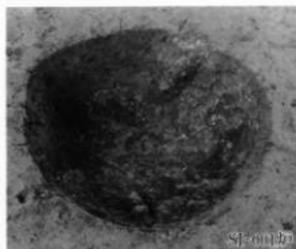


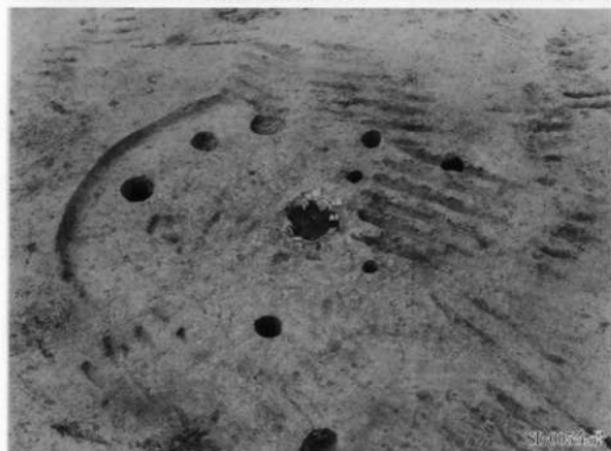
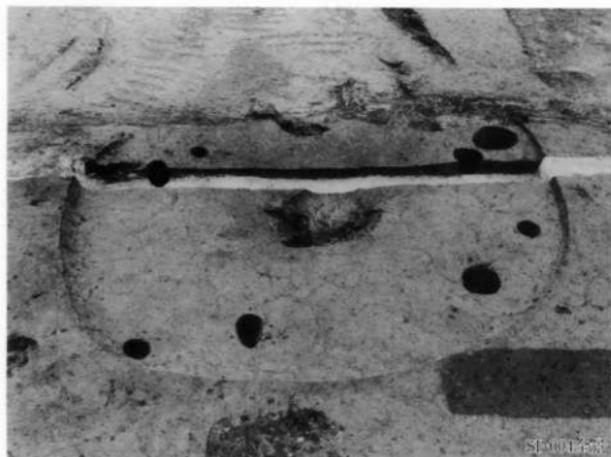








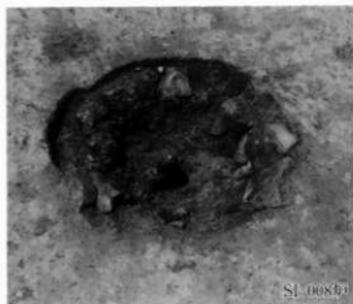


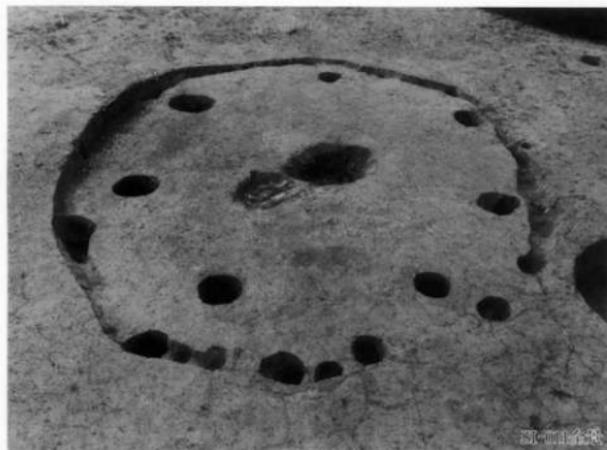


SI-005b



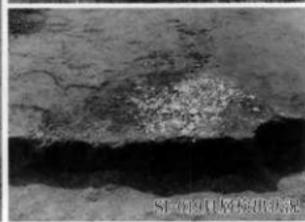
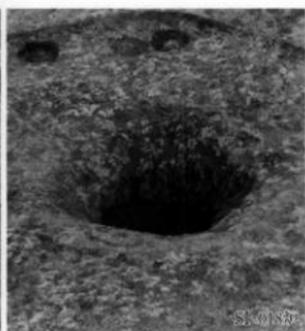
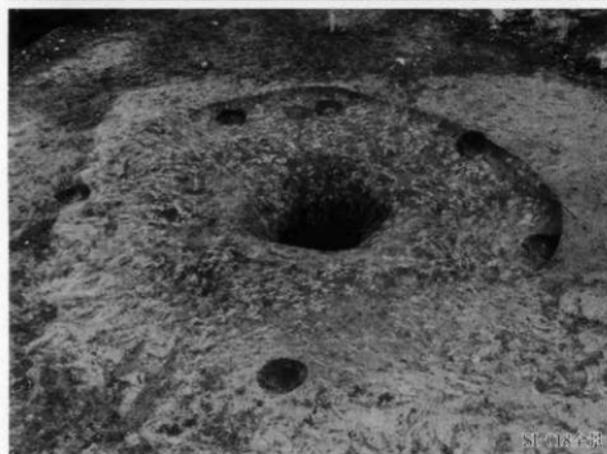
SI-006b





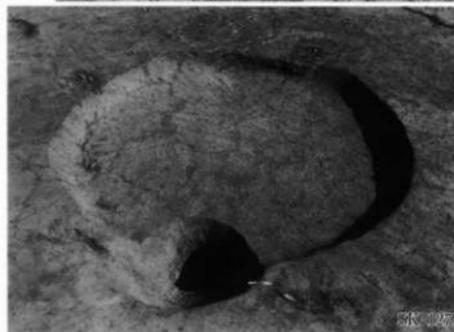
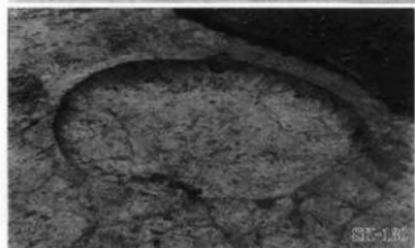
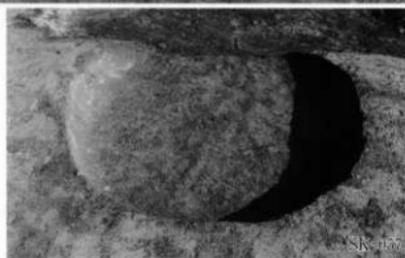
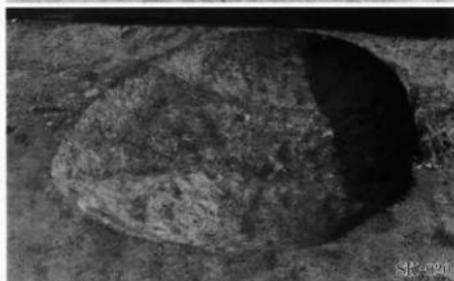


图版12 竖穴住居跡(6)

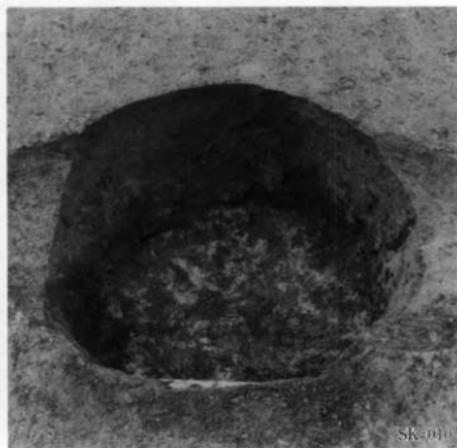
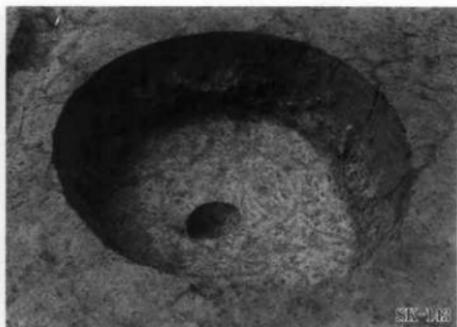
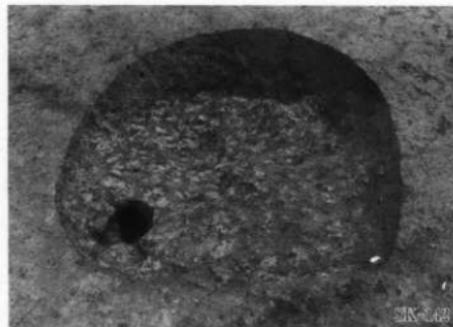


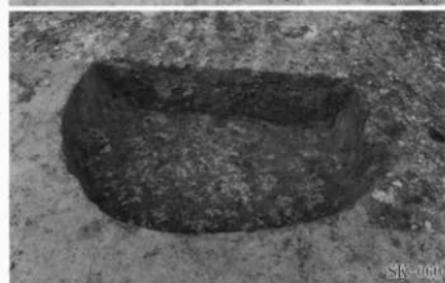
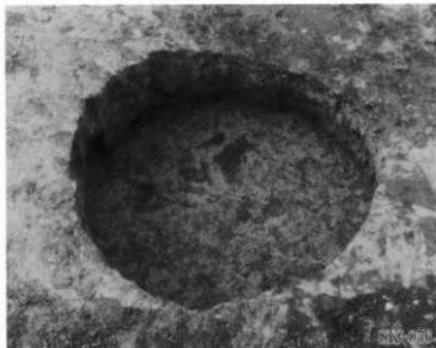
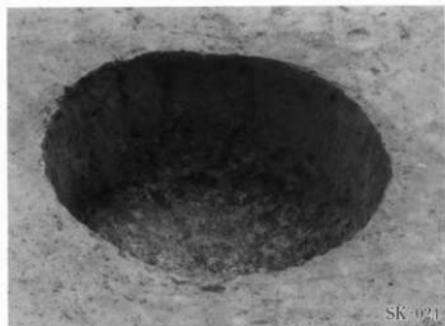


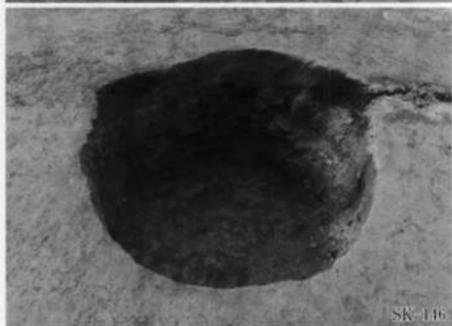
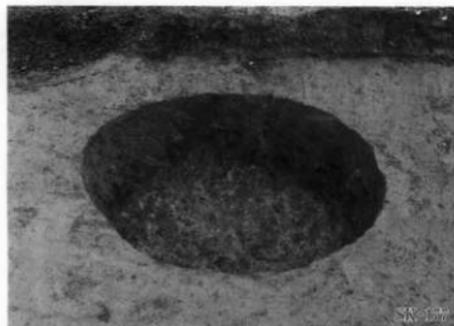


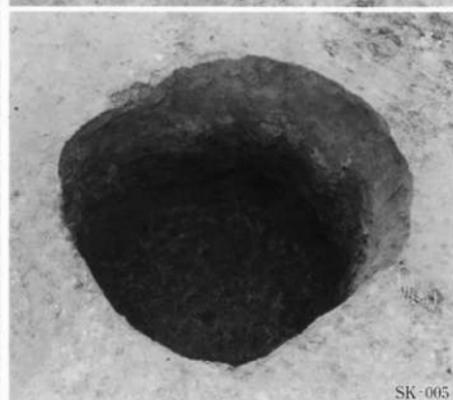
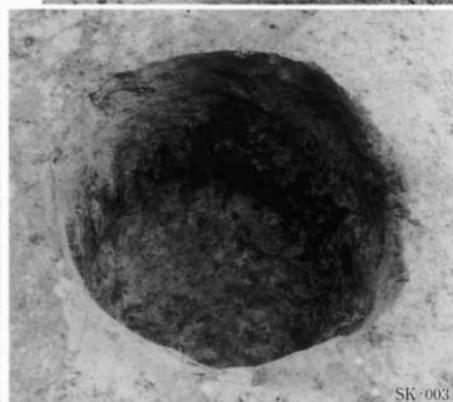
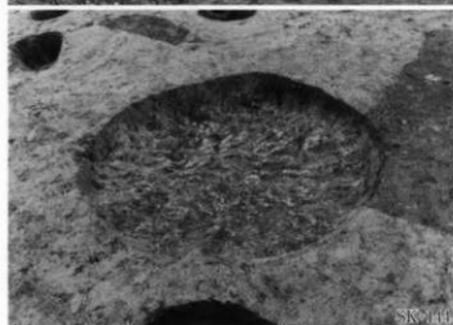
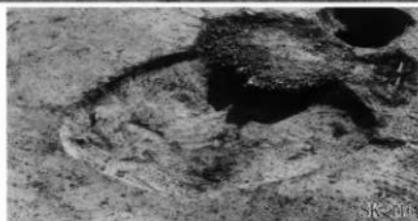
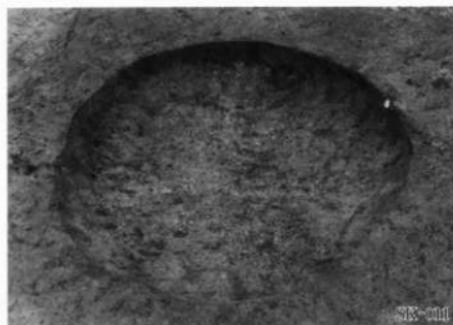


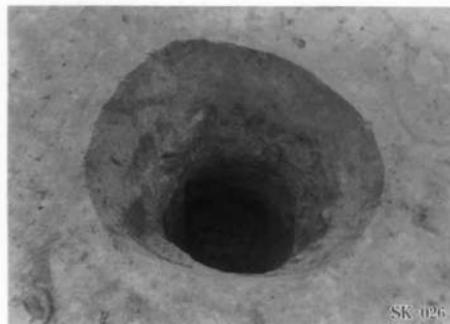
图版16 小竖穴(2), 凹形土坑(1)

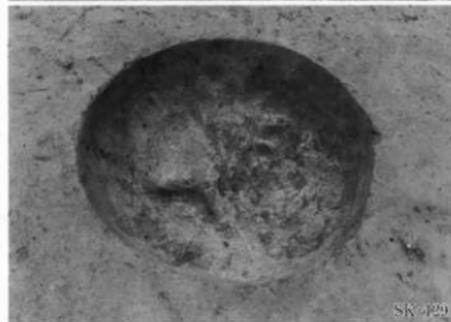


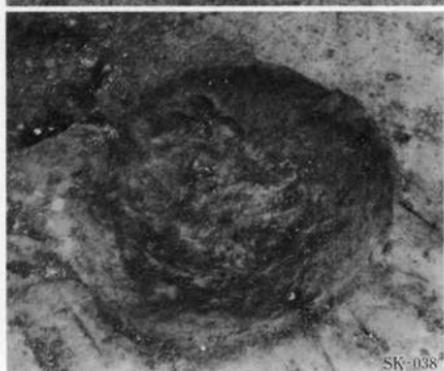


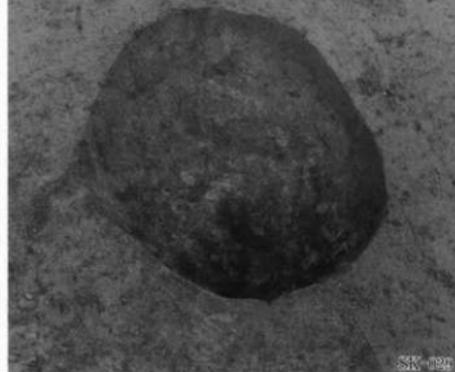
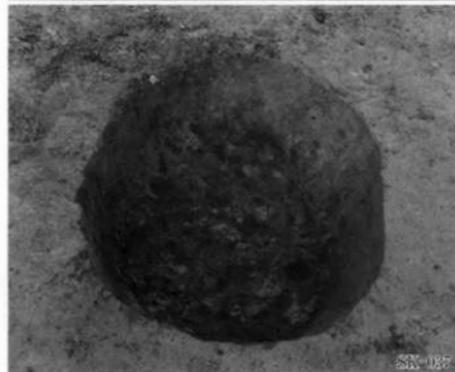
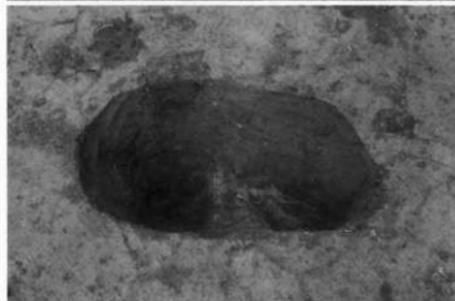




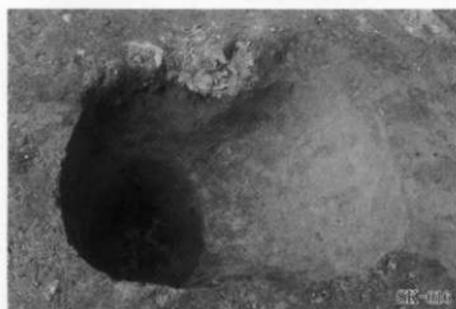
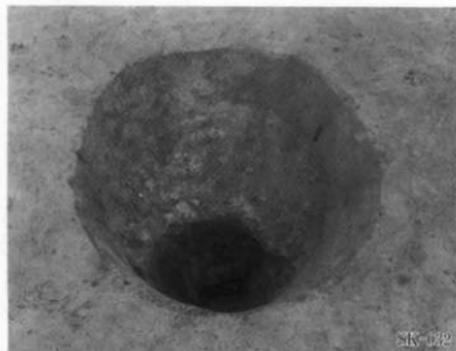


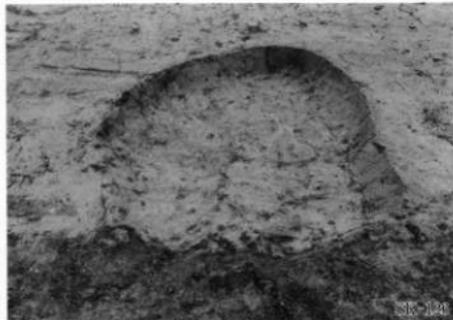
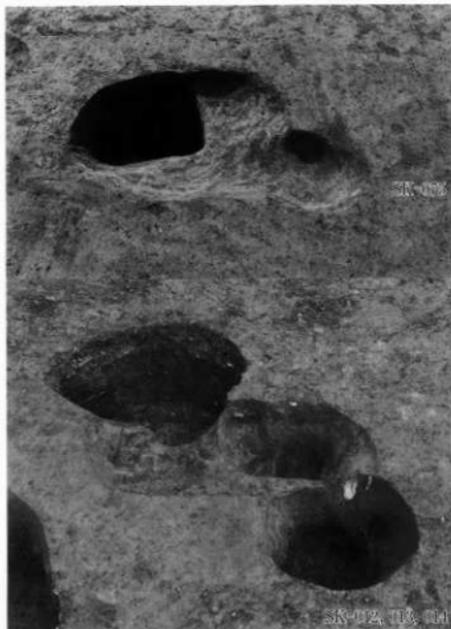




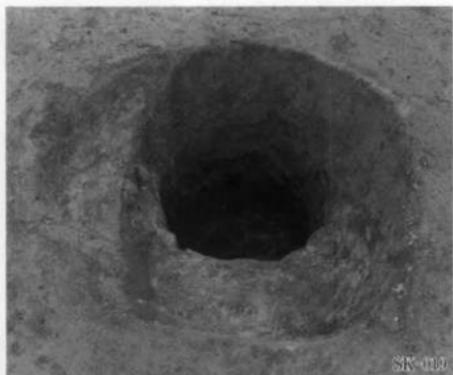


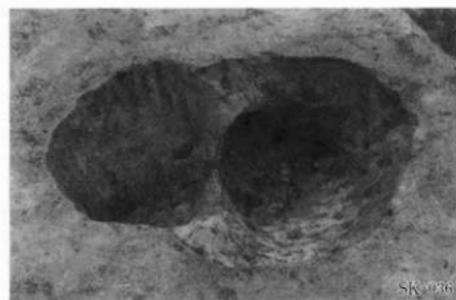
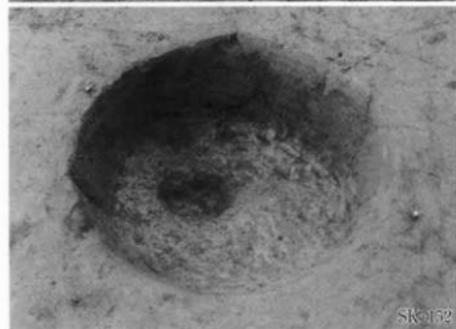
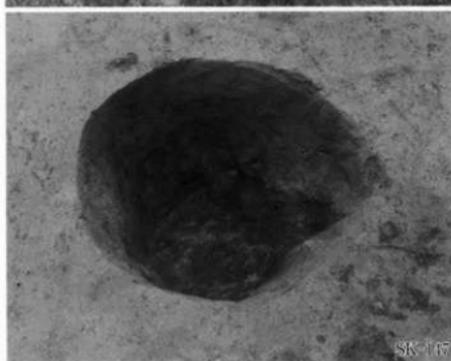
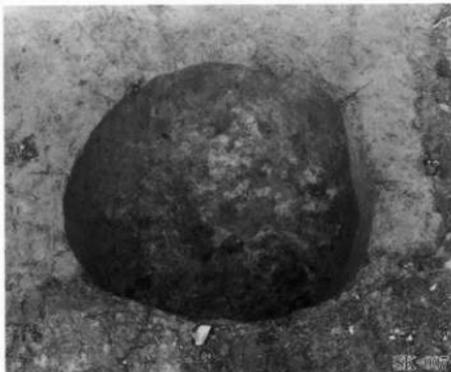
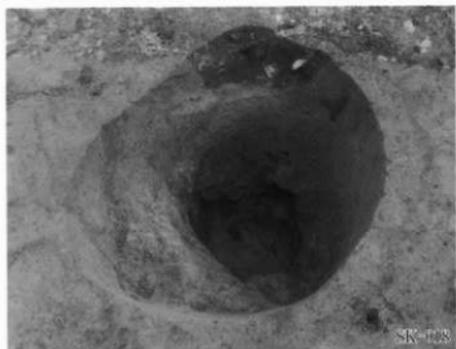
図版24 楕円形土坑(3), 方形土坑(1)

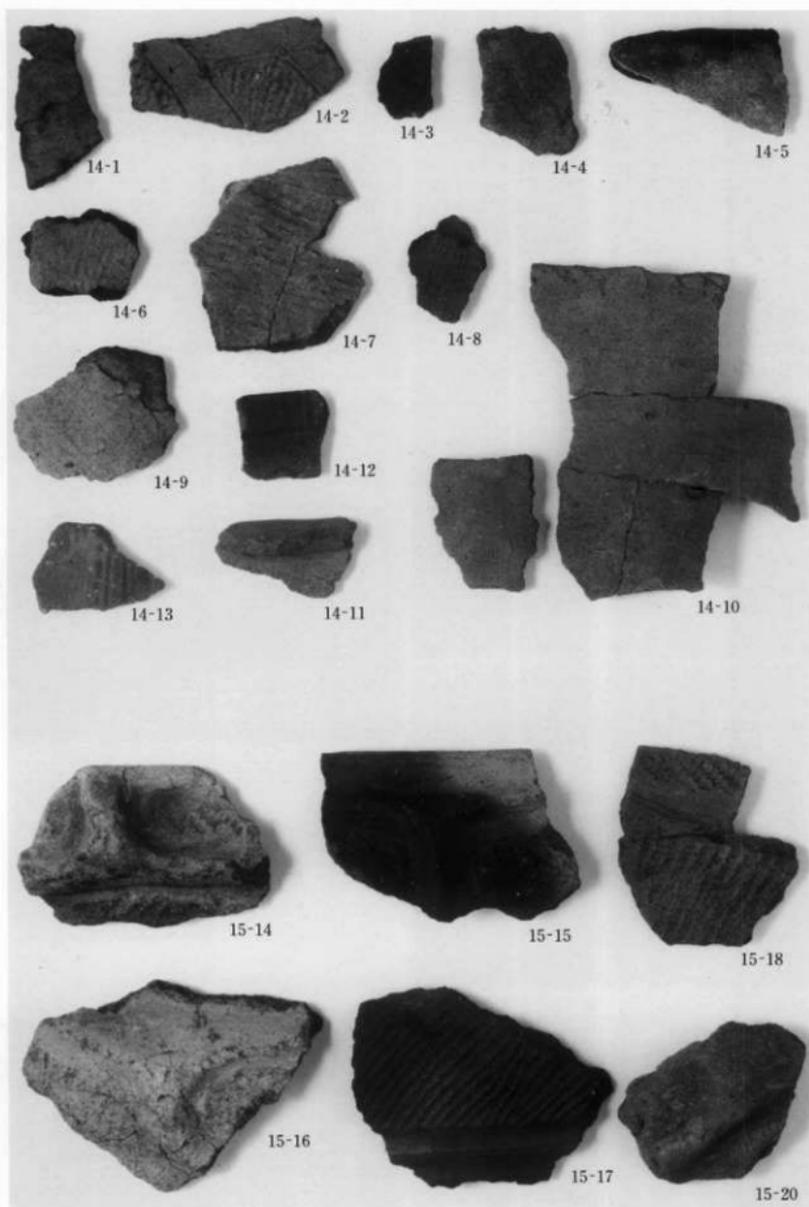


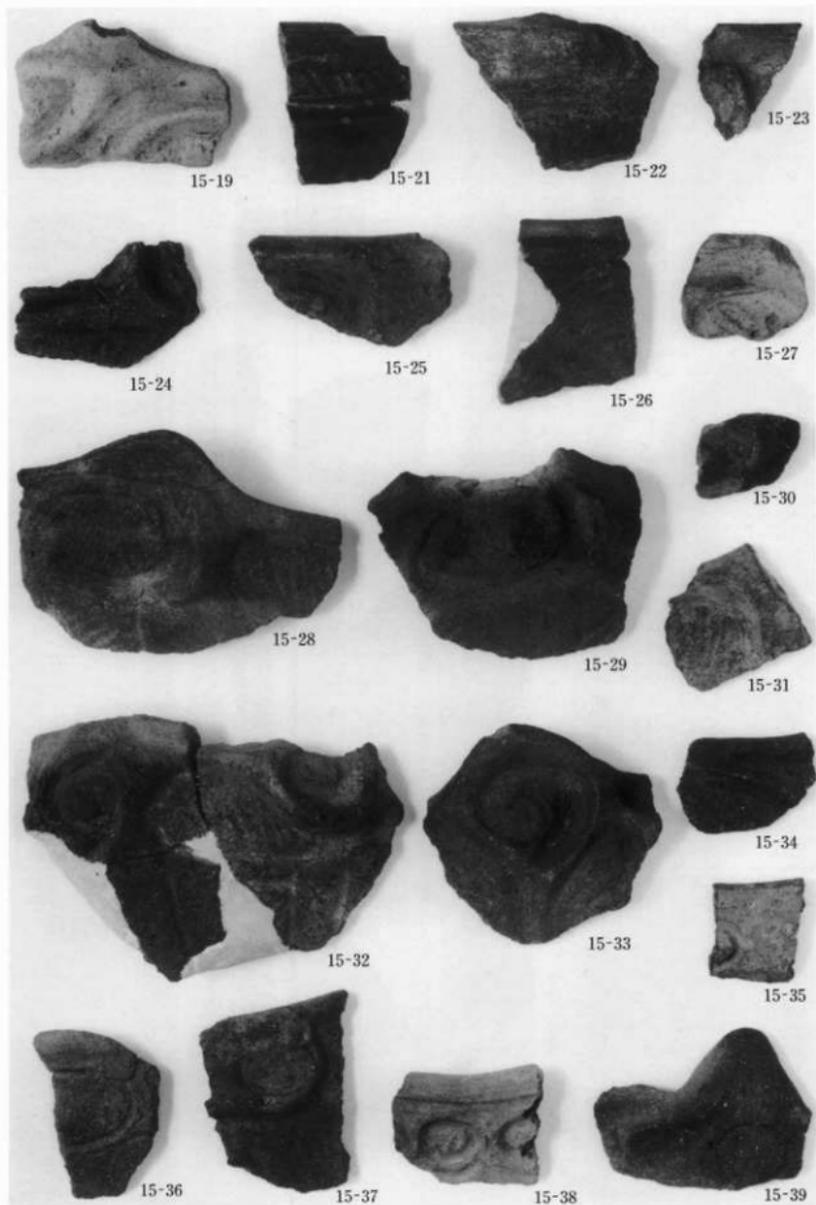


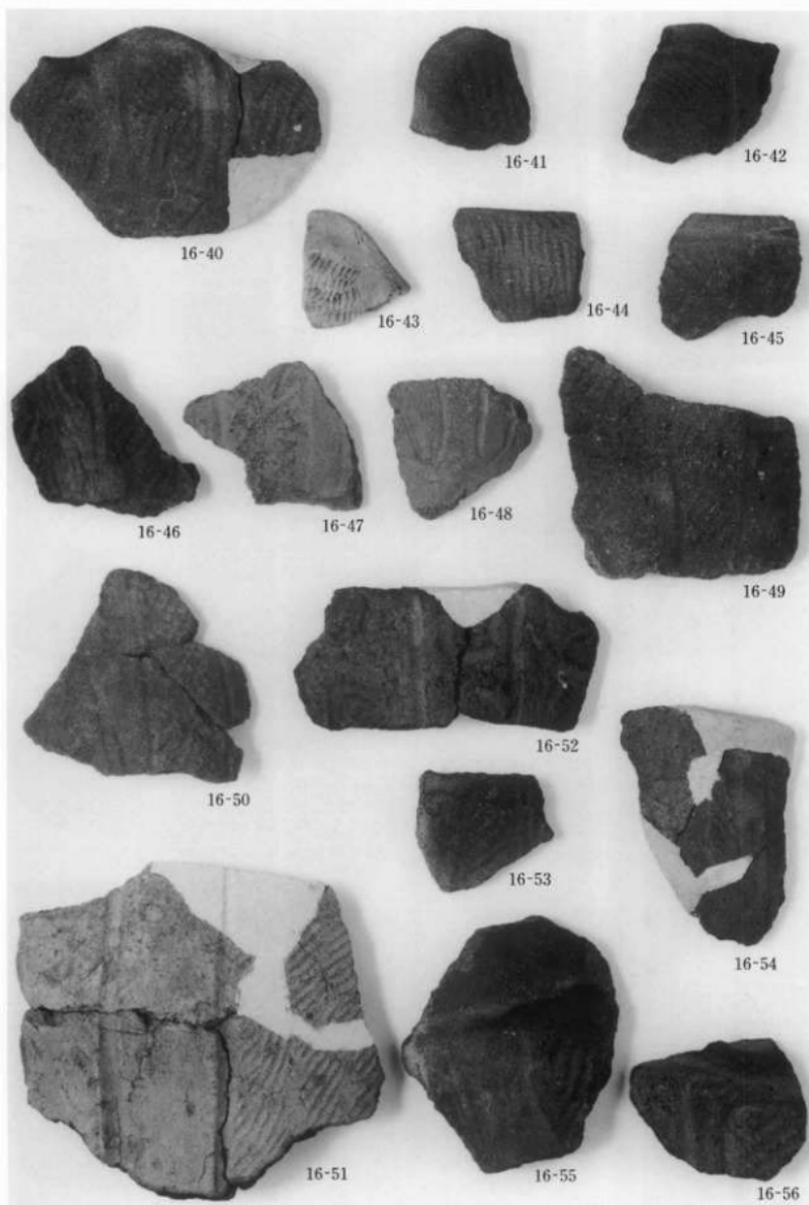
图版26 大型土坑(2), 小型圆形土坑(1)

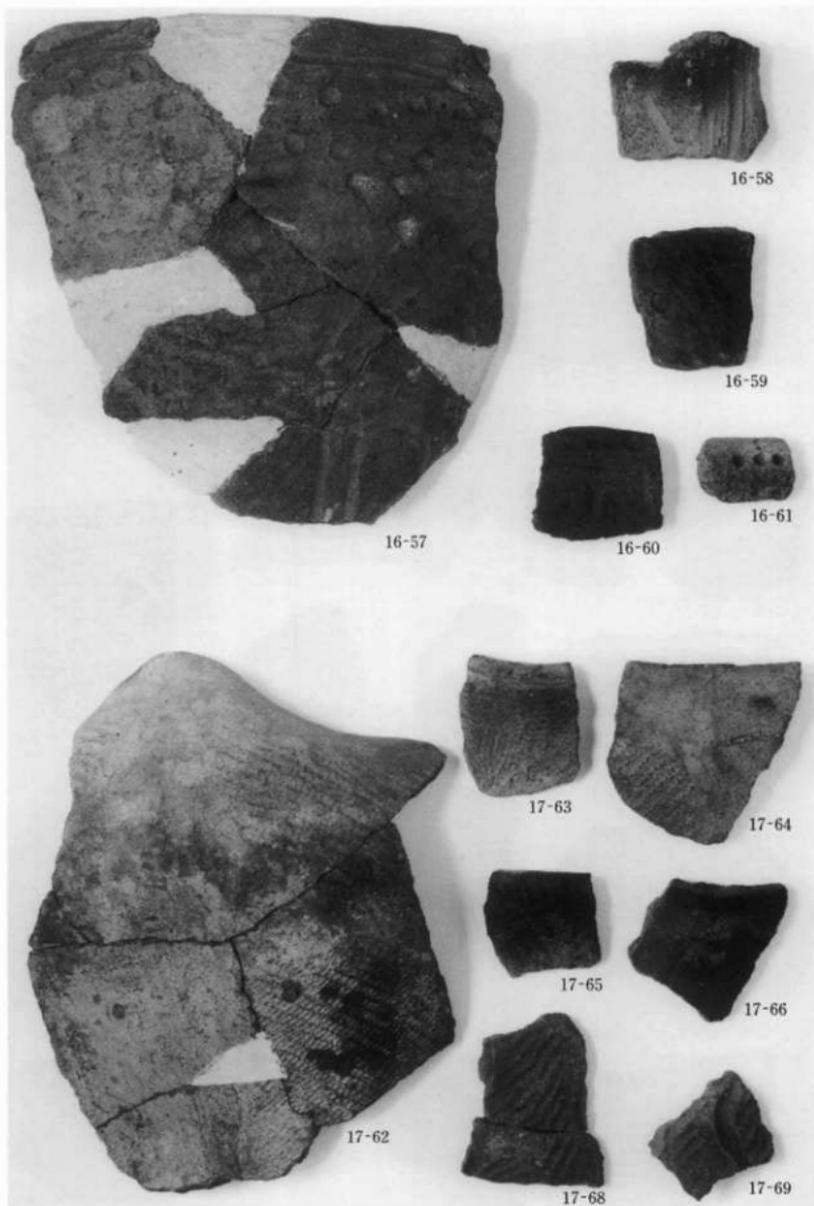


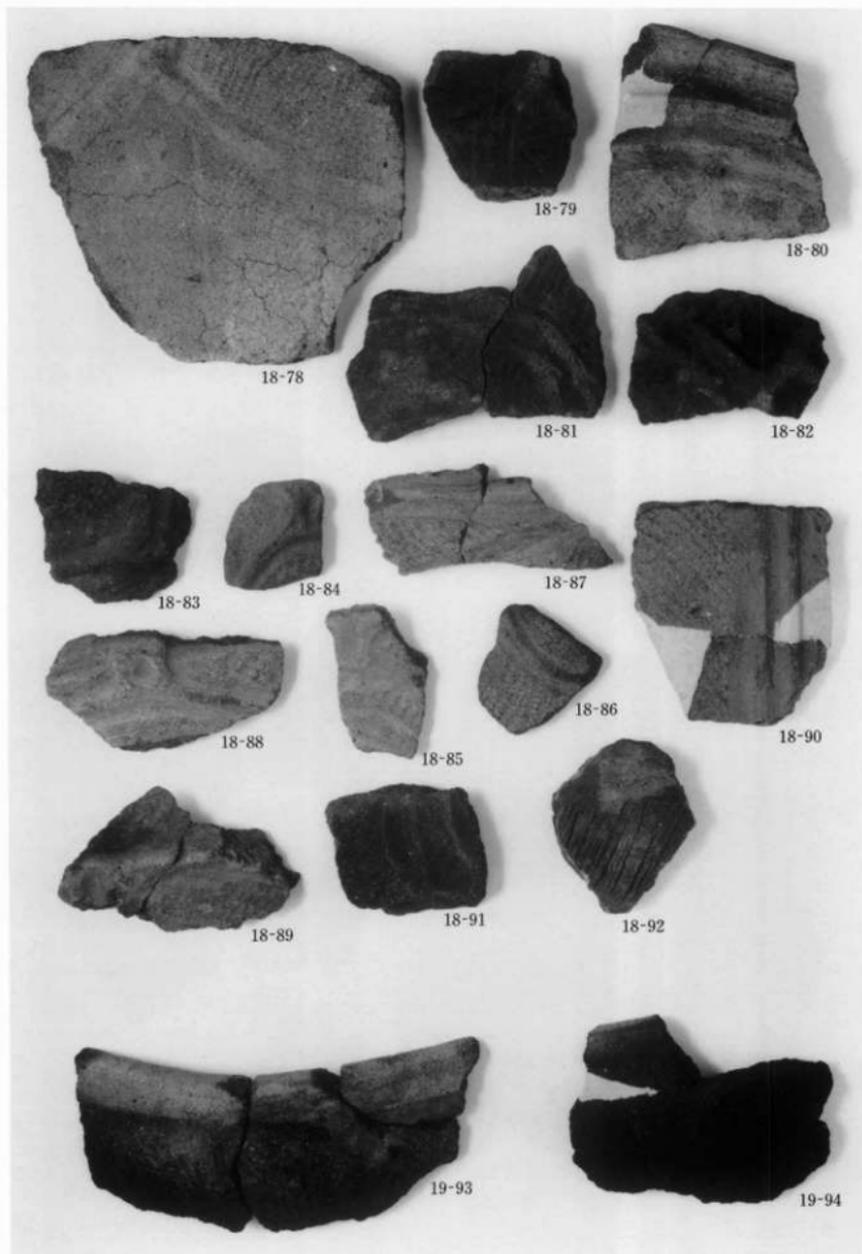


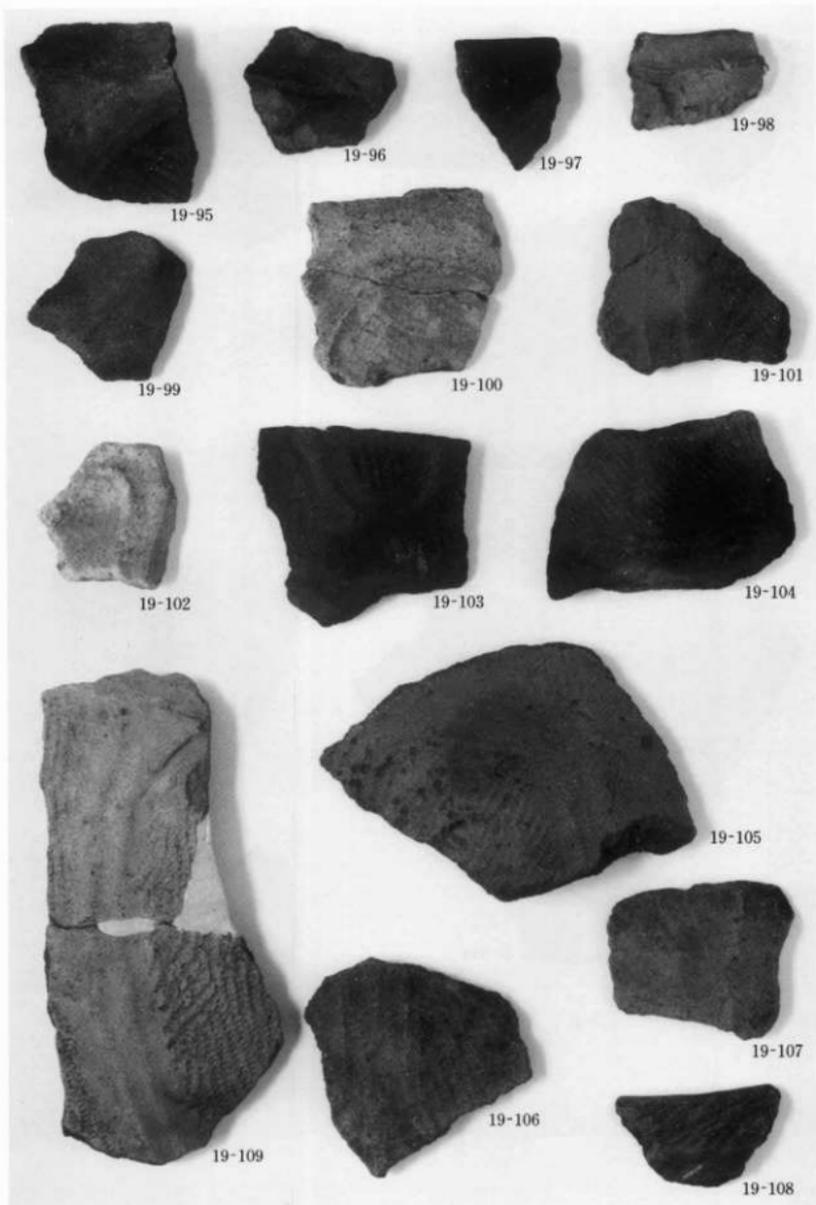


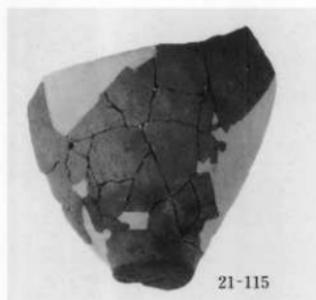
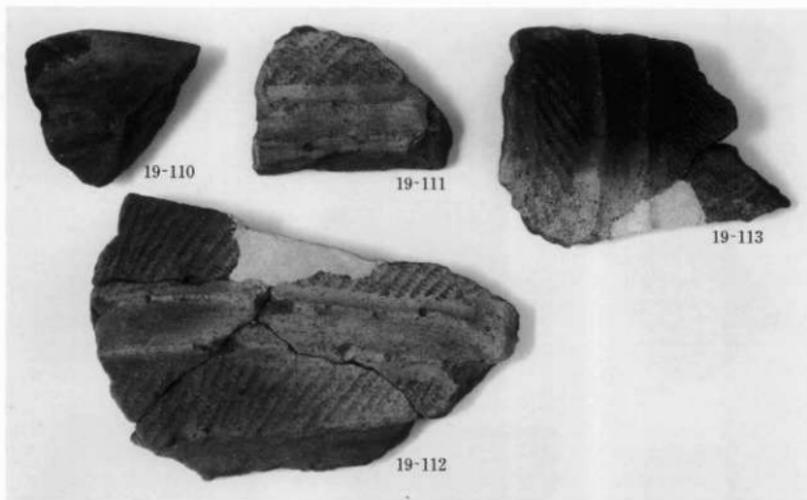


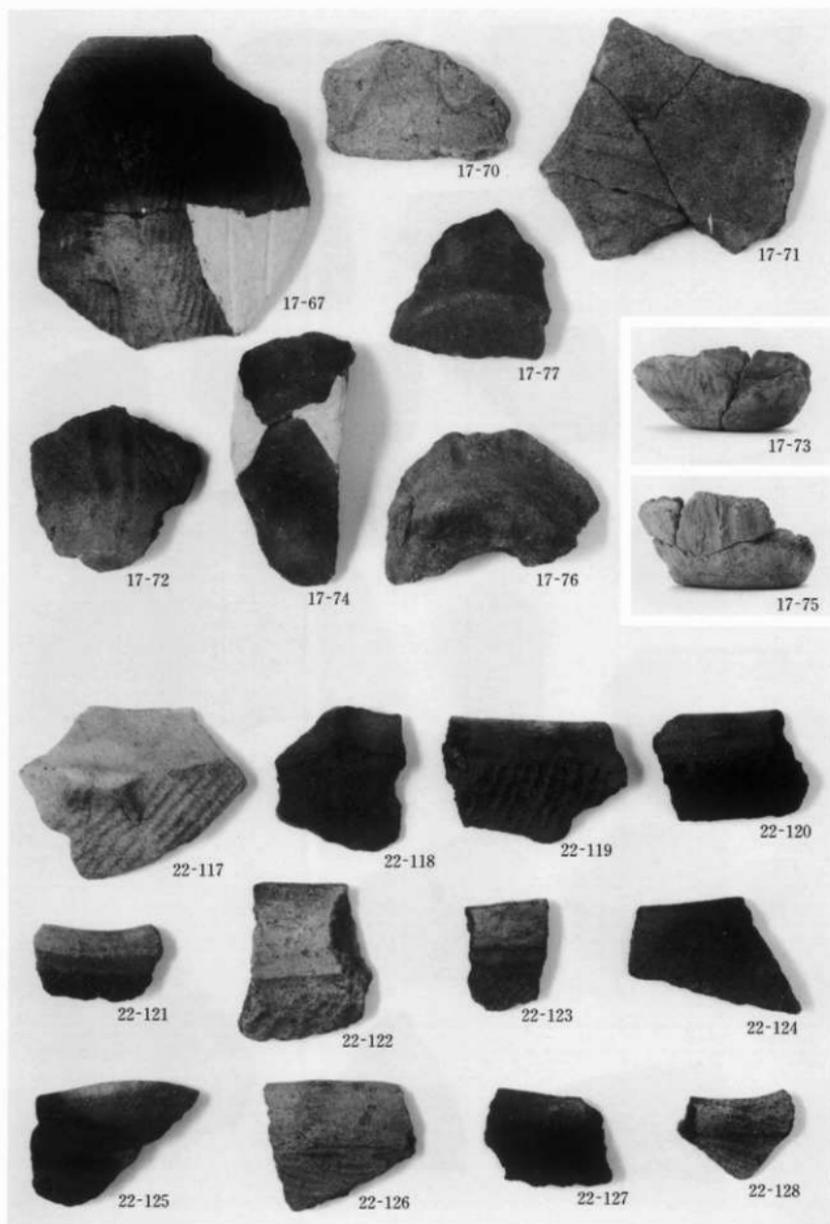


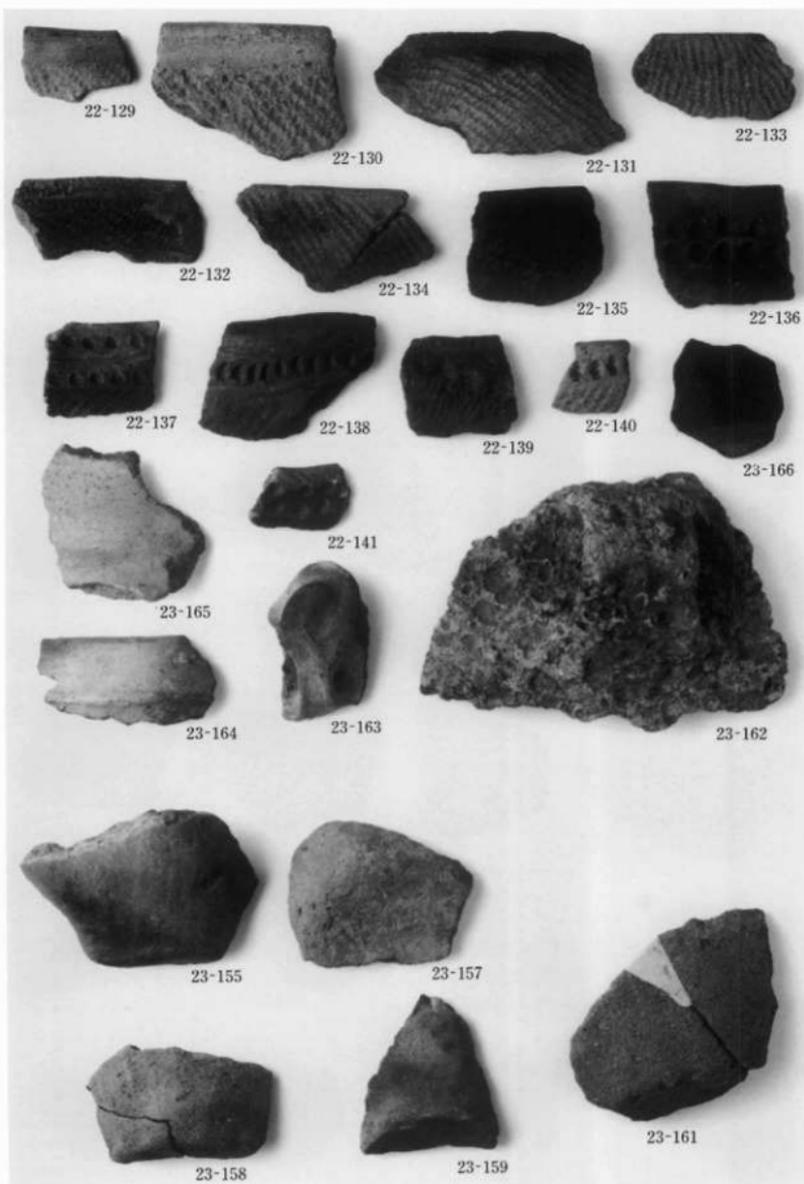


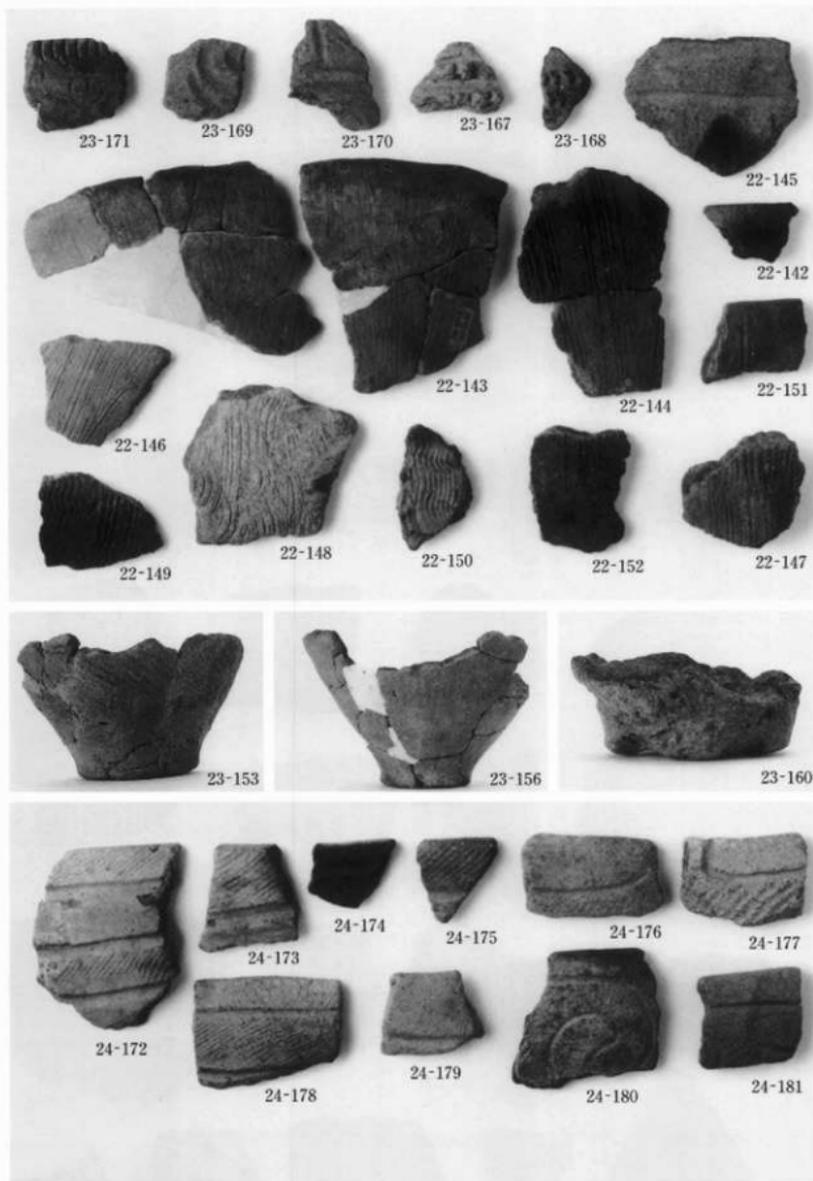


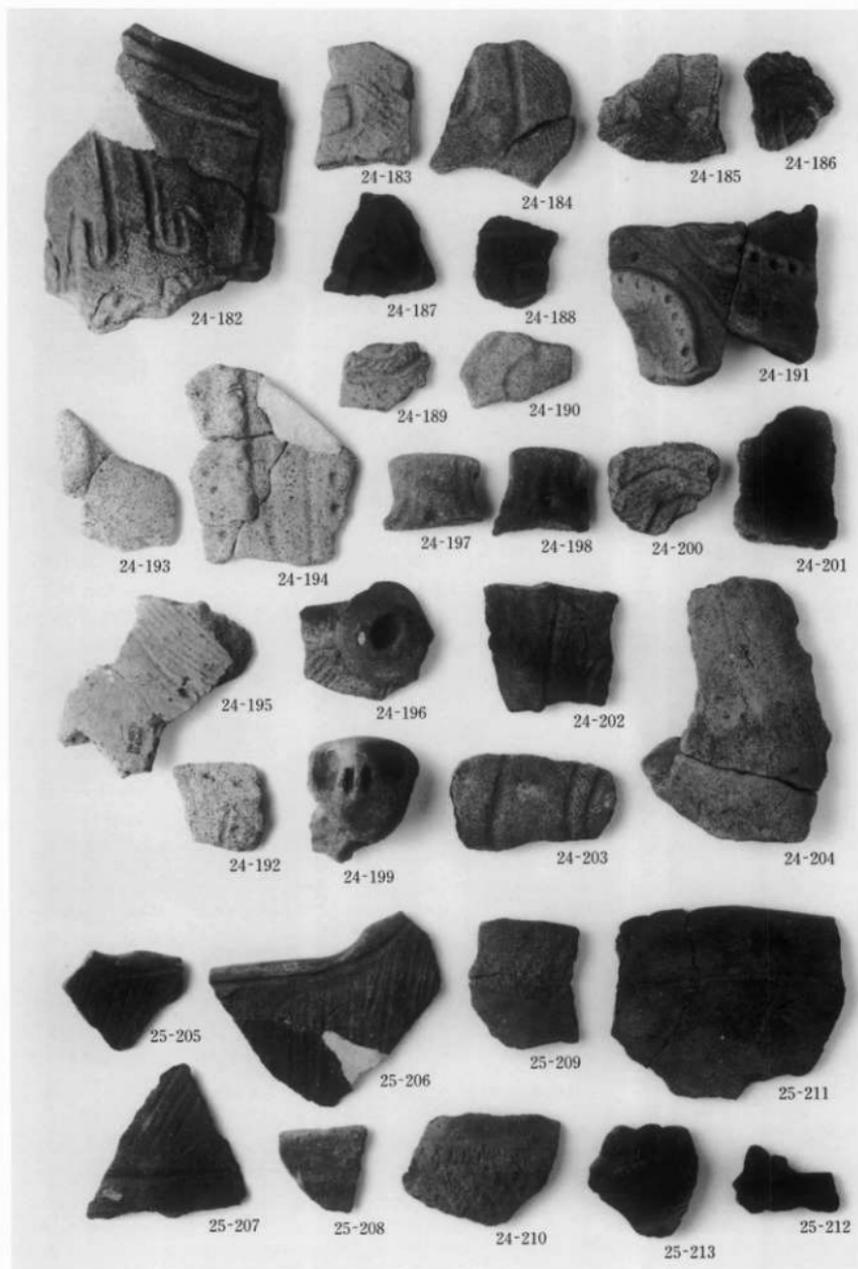


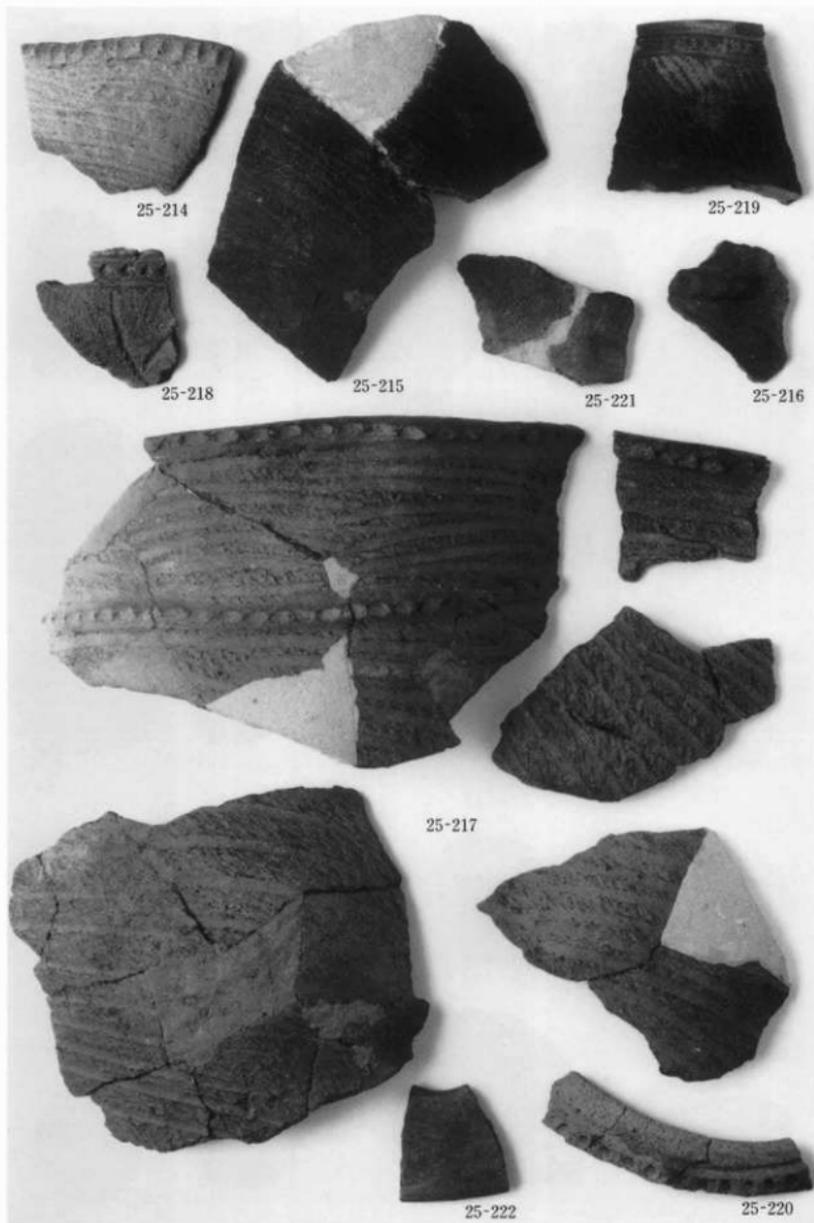


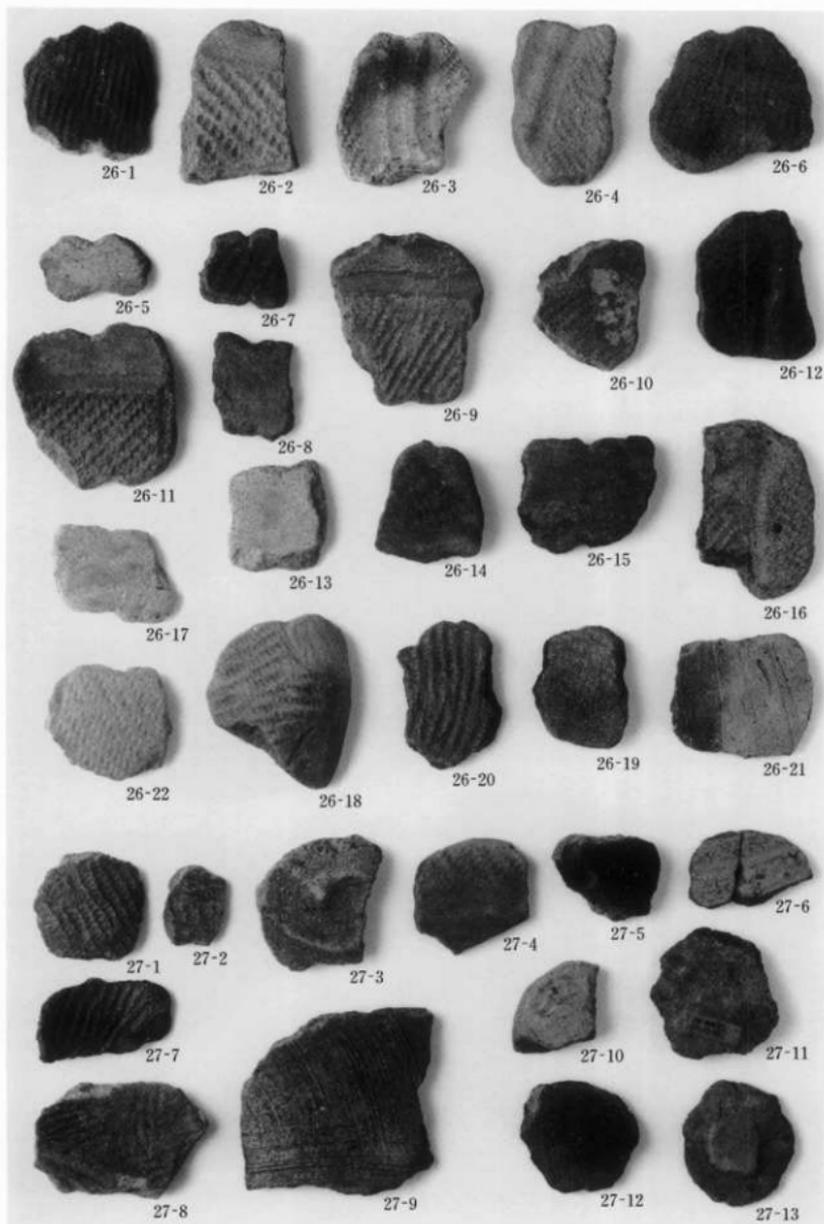


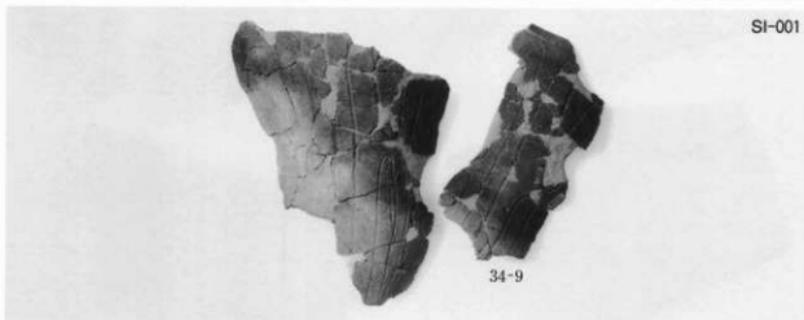
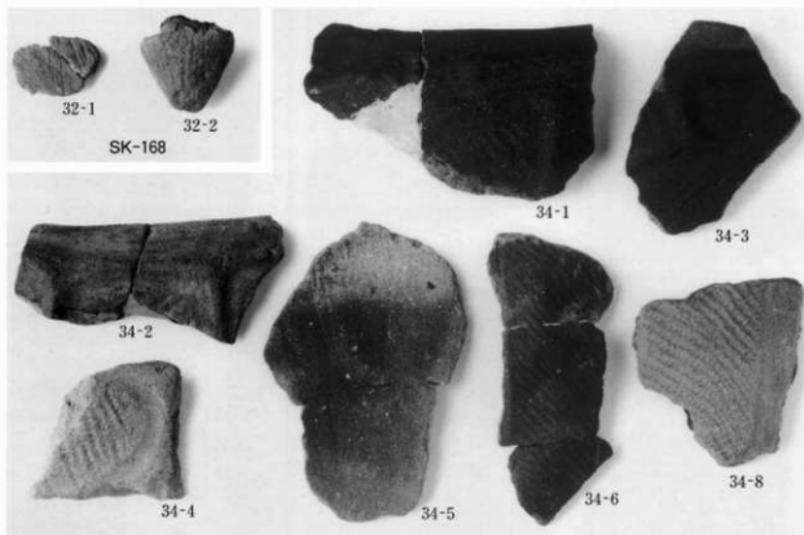
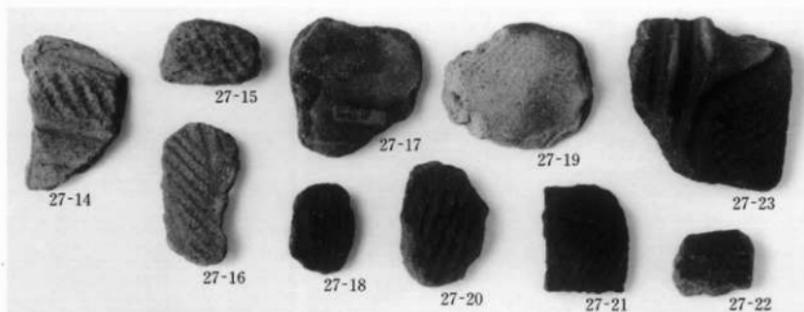


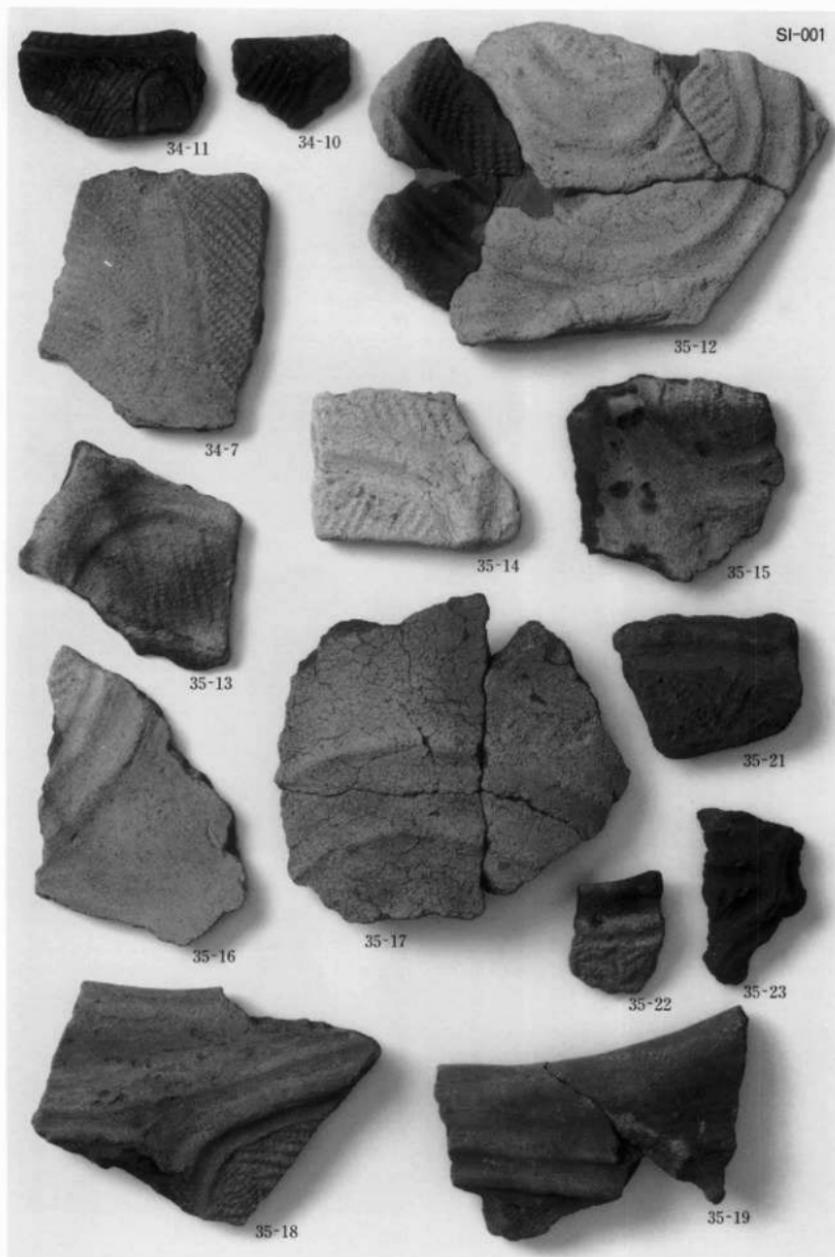


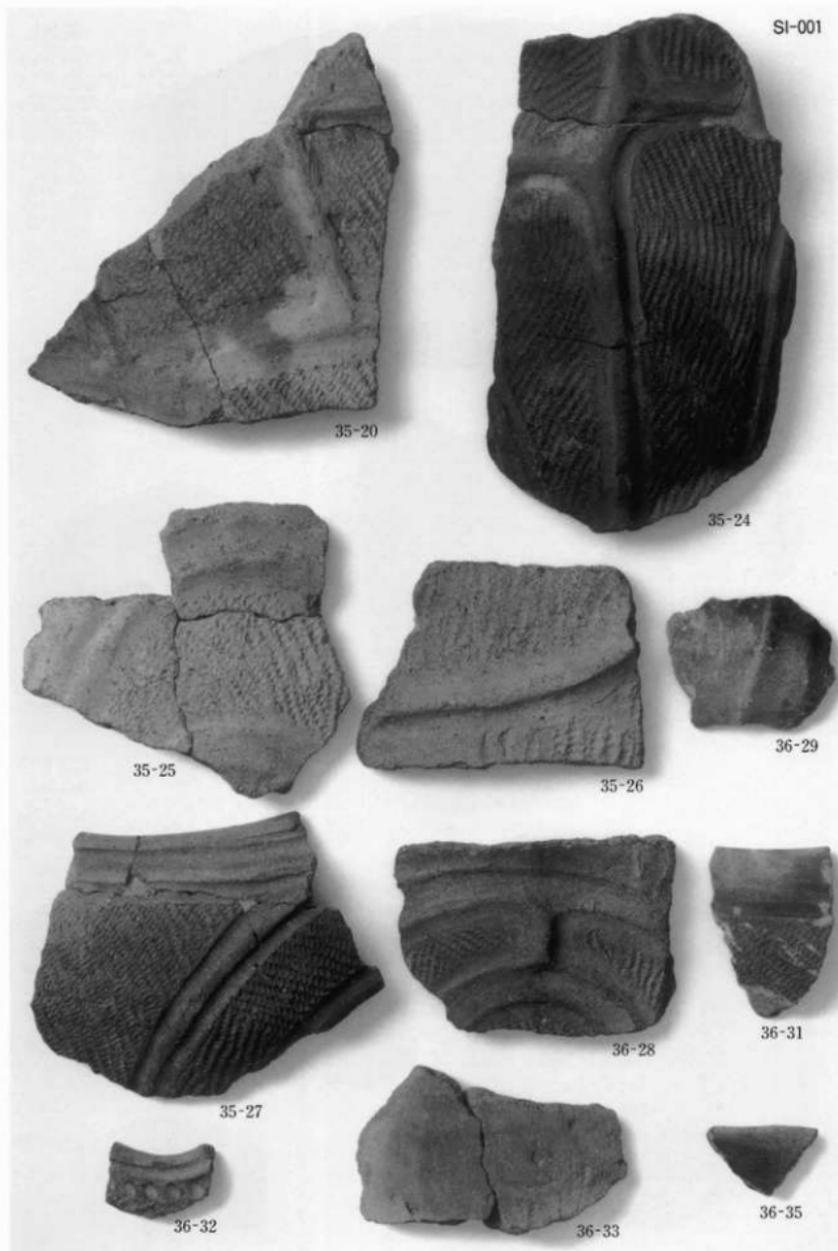


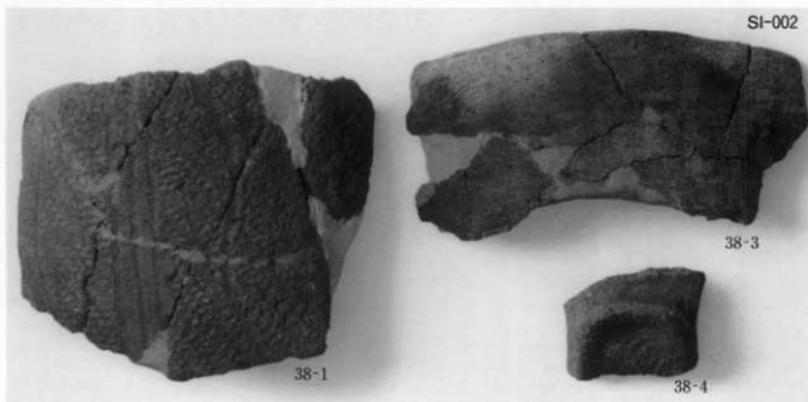
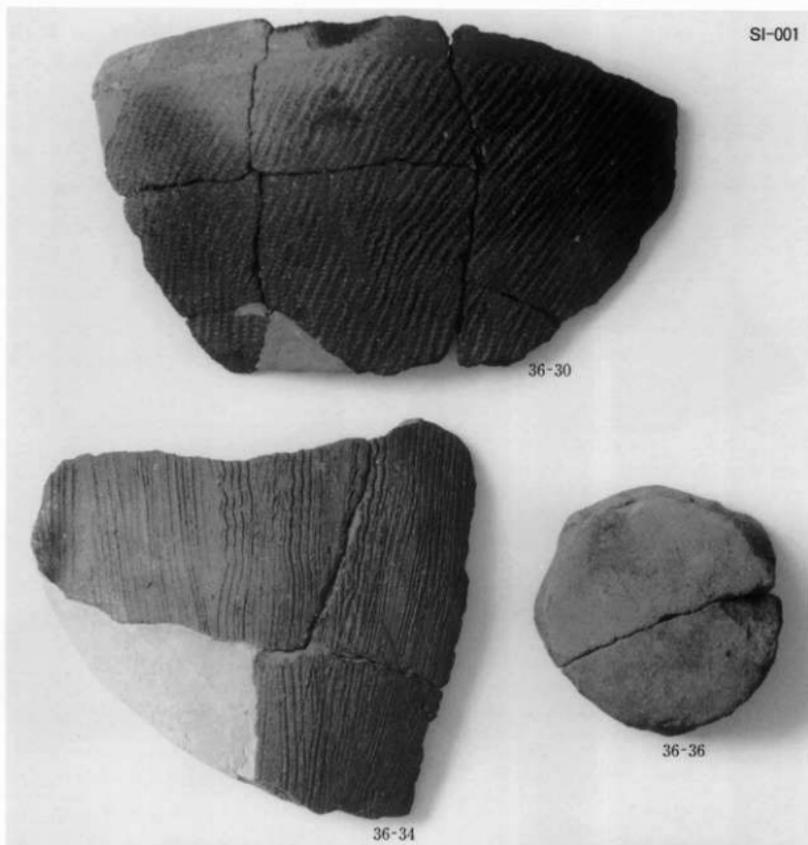


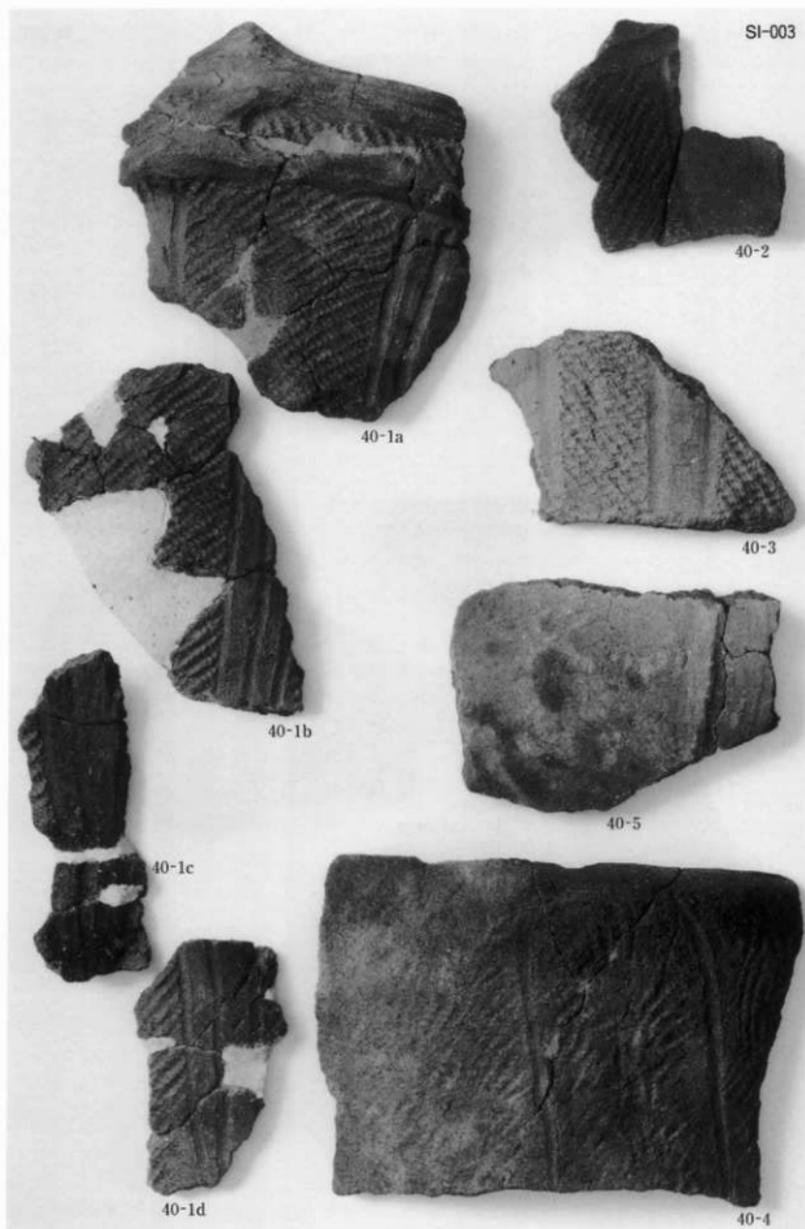




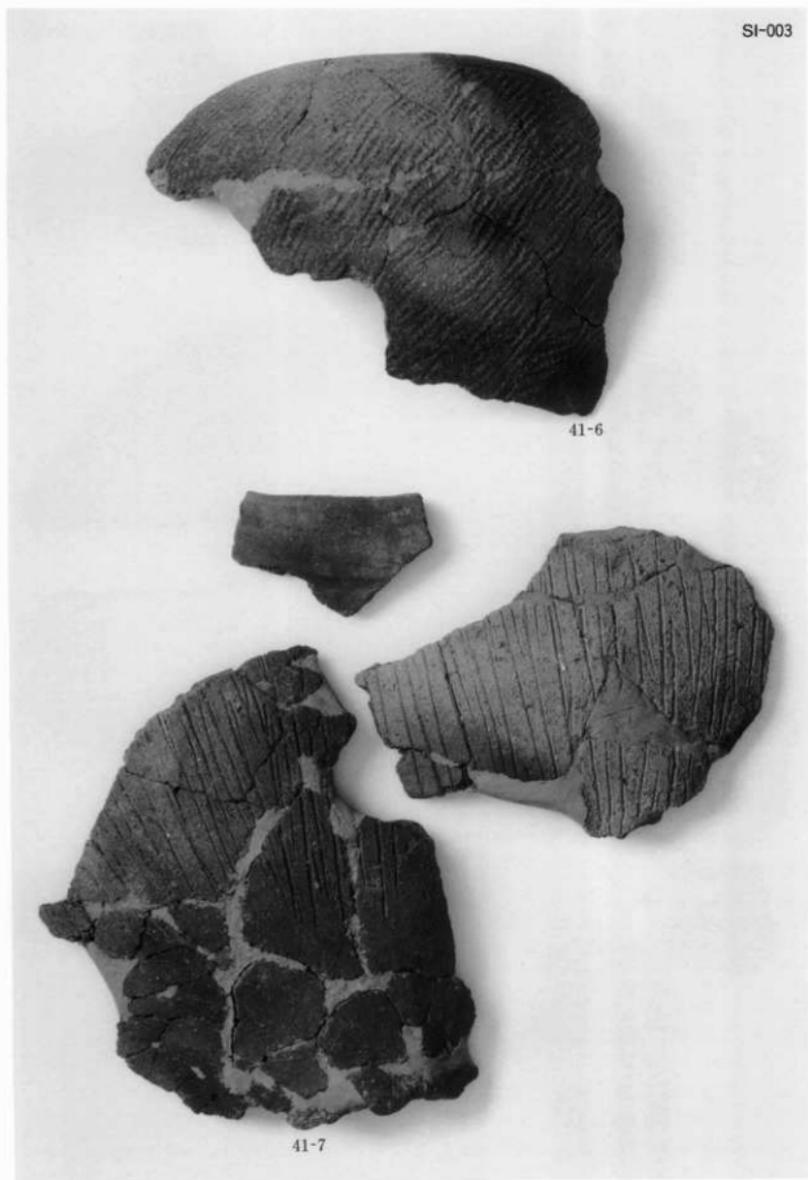


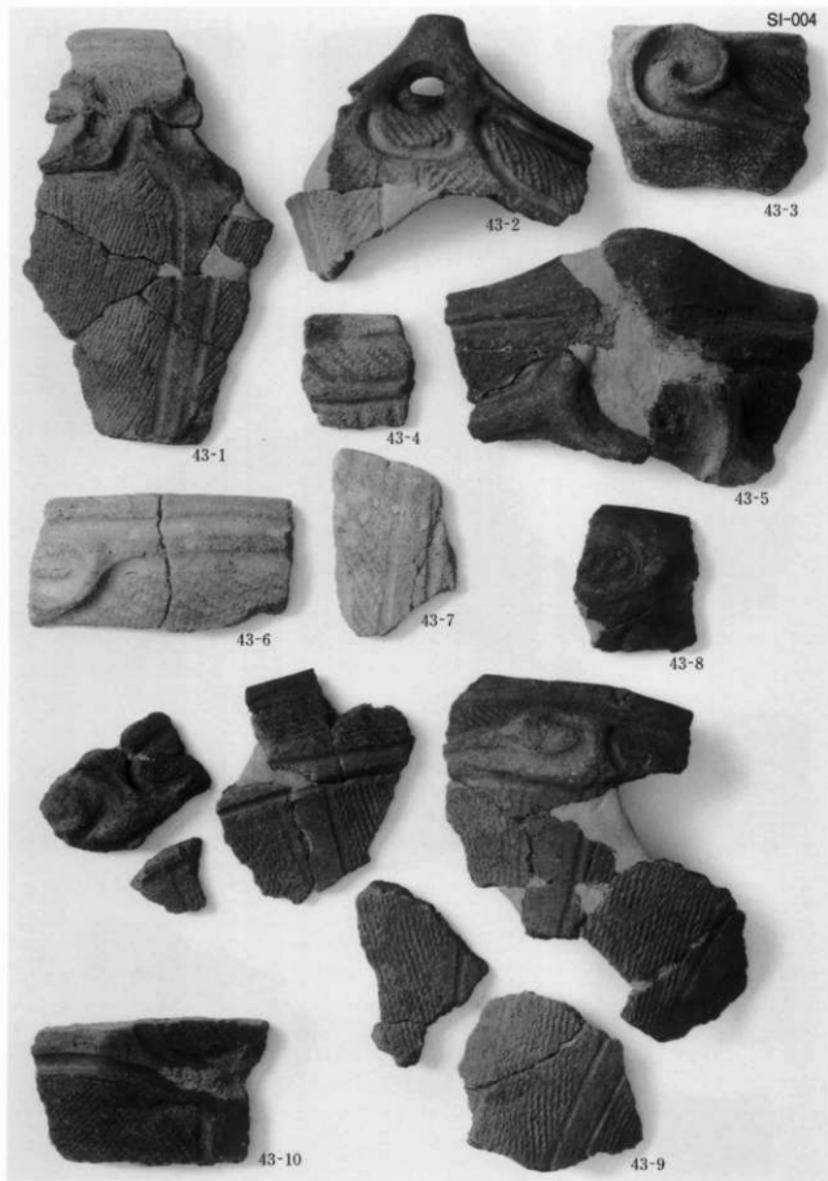


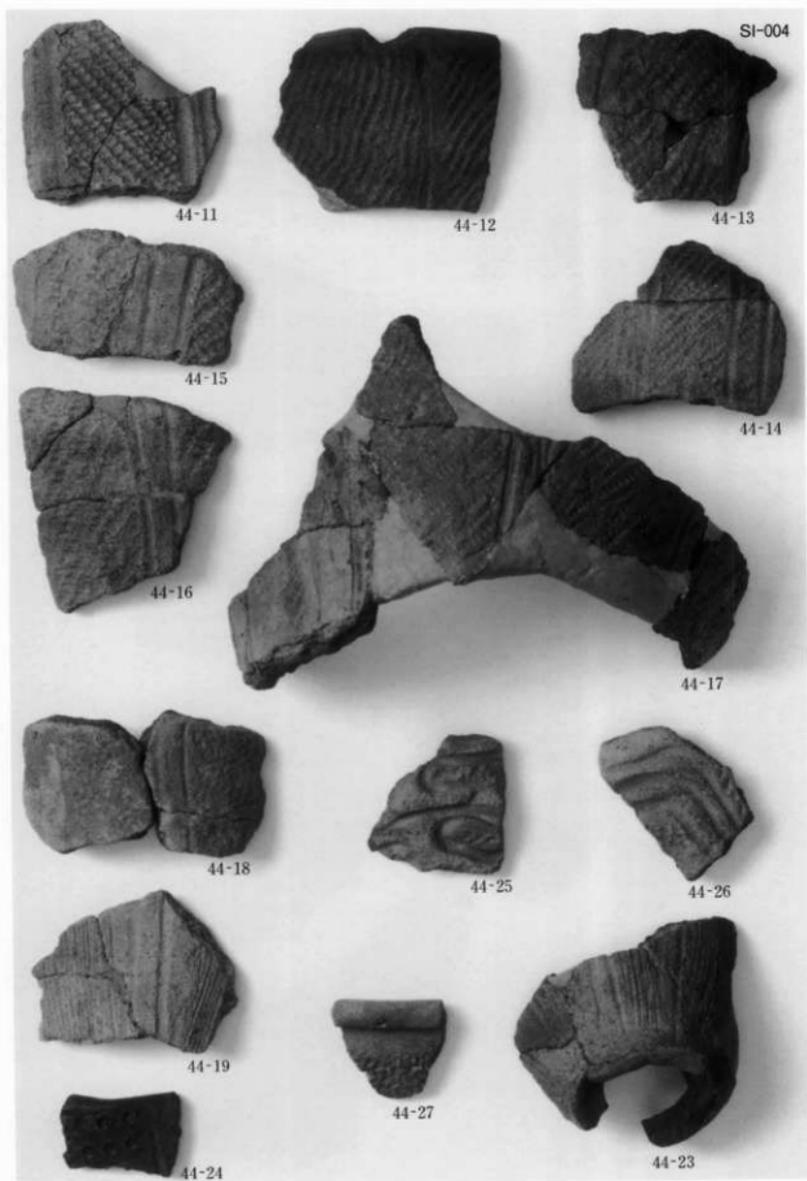


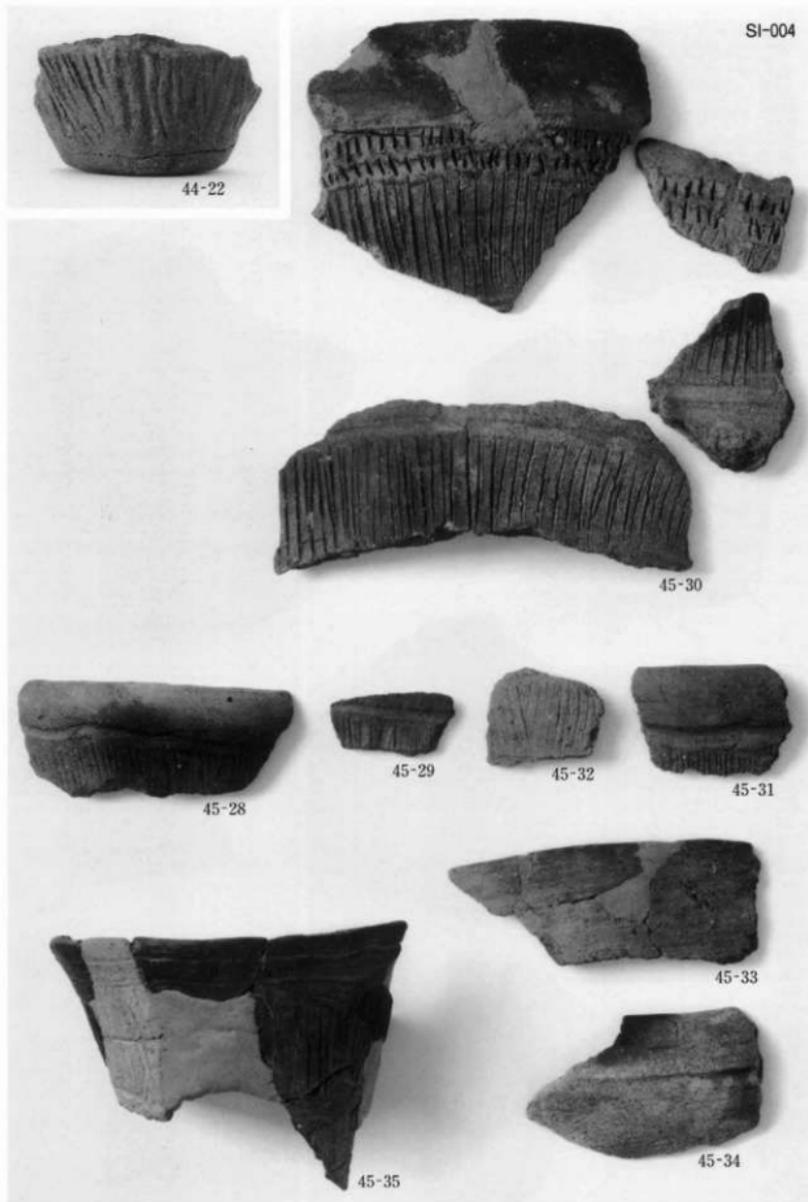


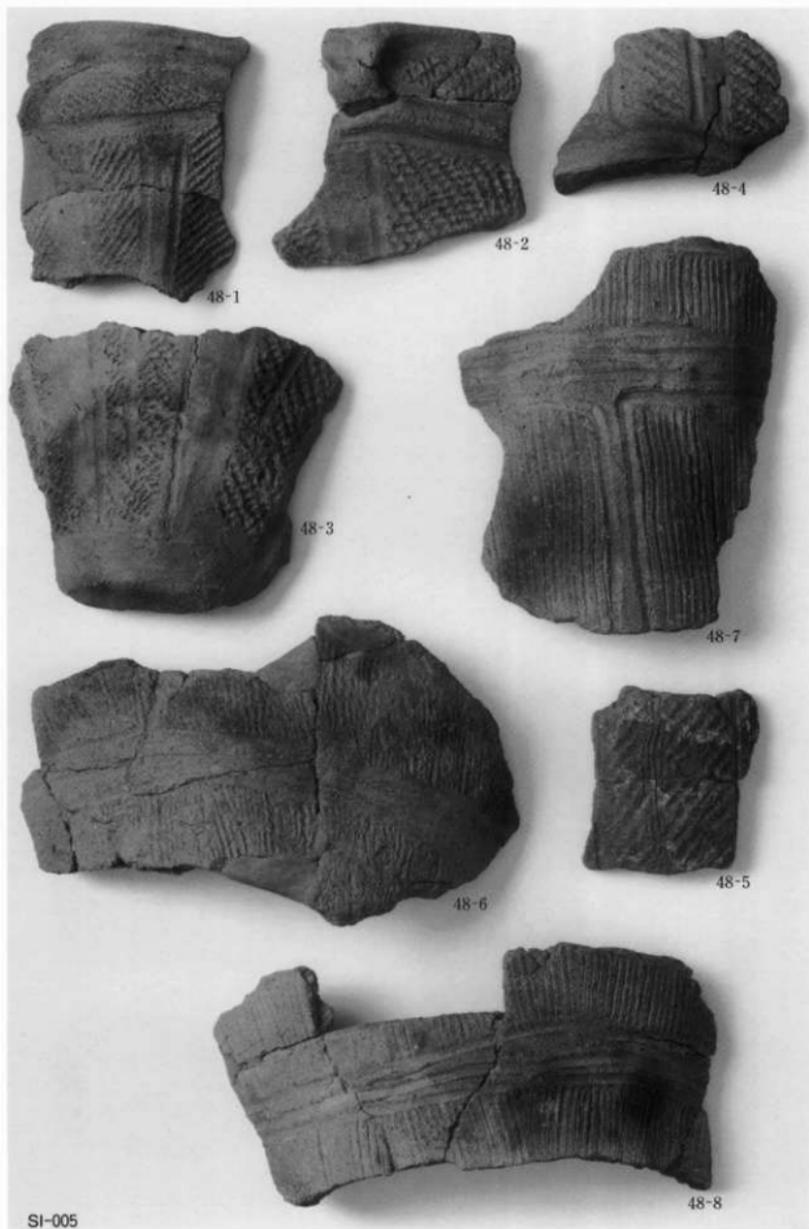
SI-003











SI-005



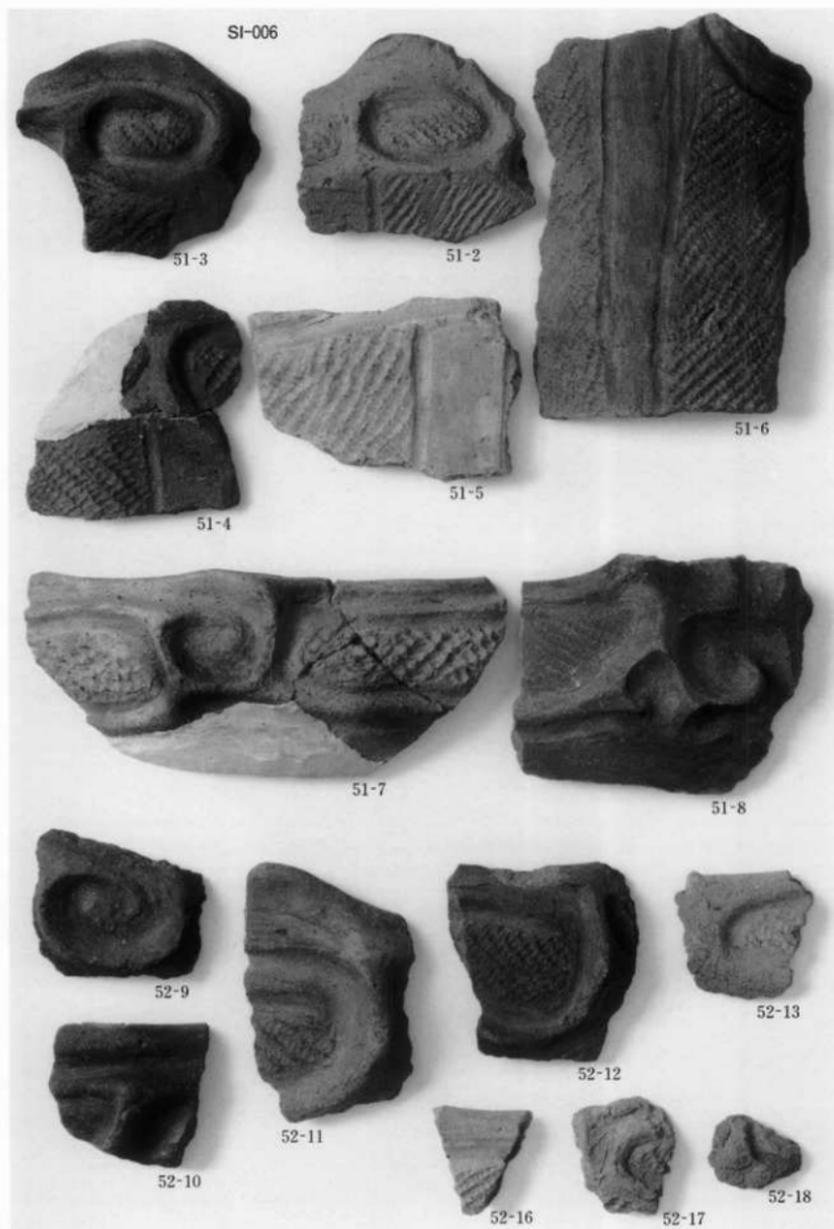
48-10

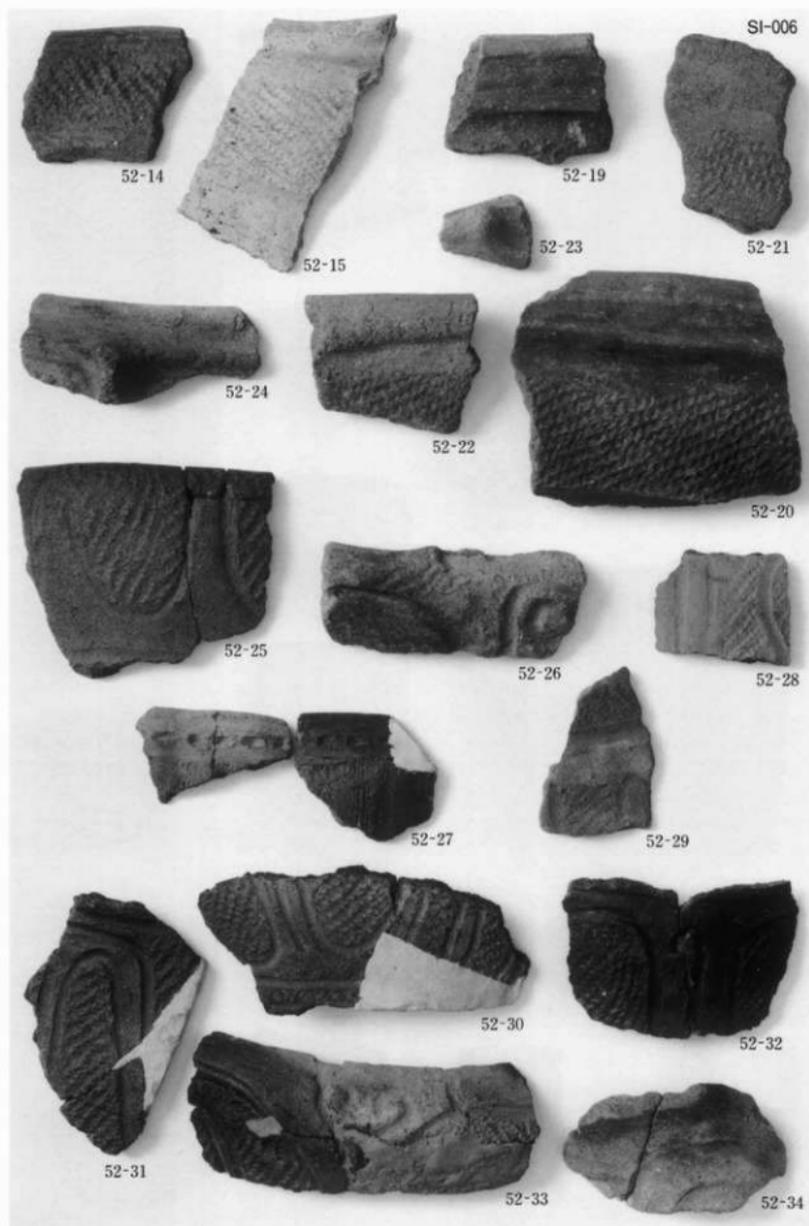
48-9

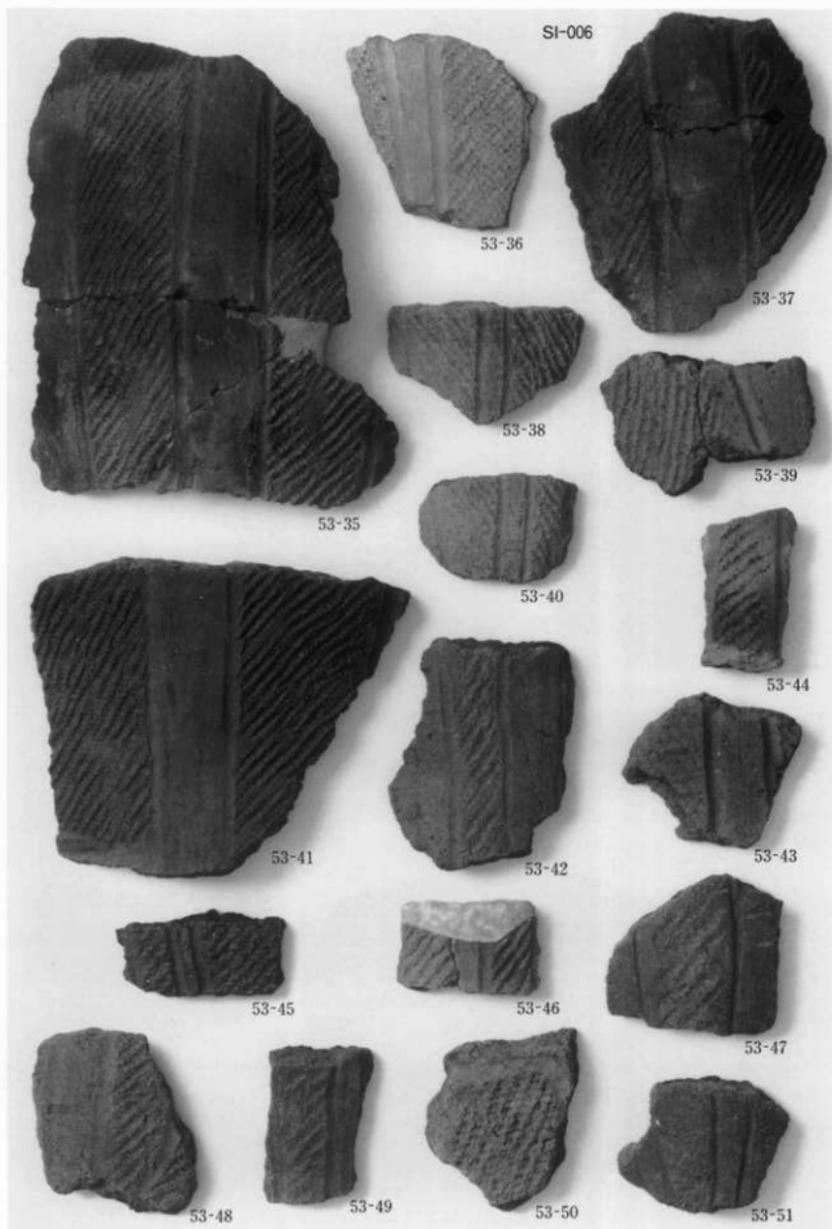
SI-006



51-1







SI-006



54-52



54-53



54-54



54-55



54-57



54-56



54-58



54-59



54-60



54-61



54-62



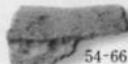
54-63



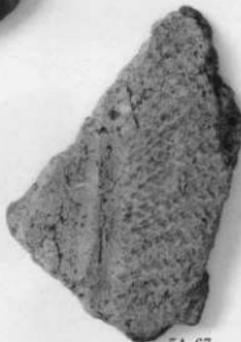
54-64



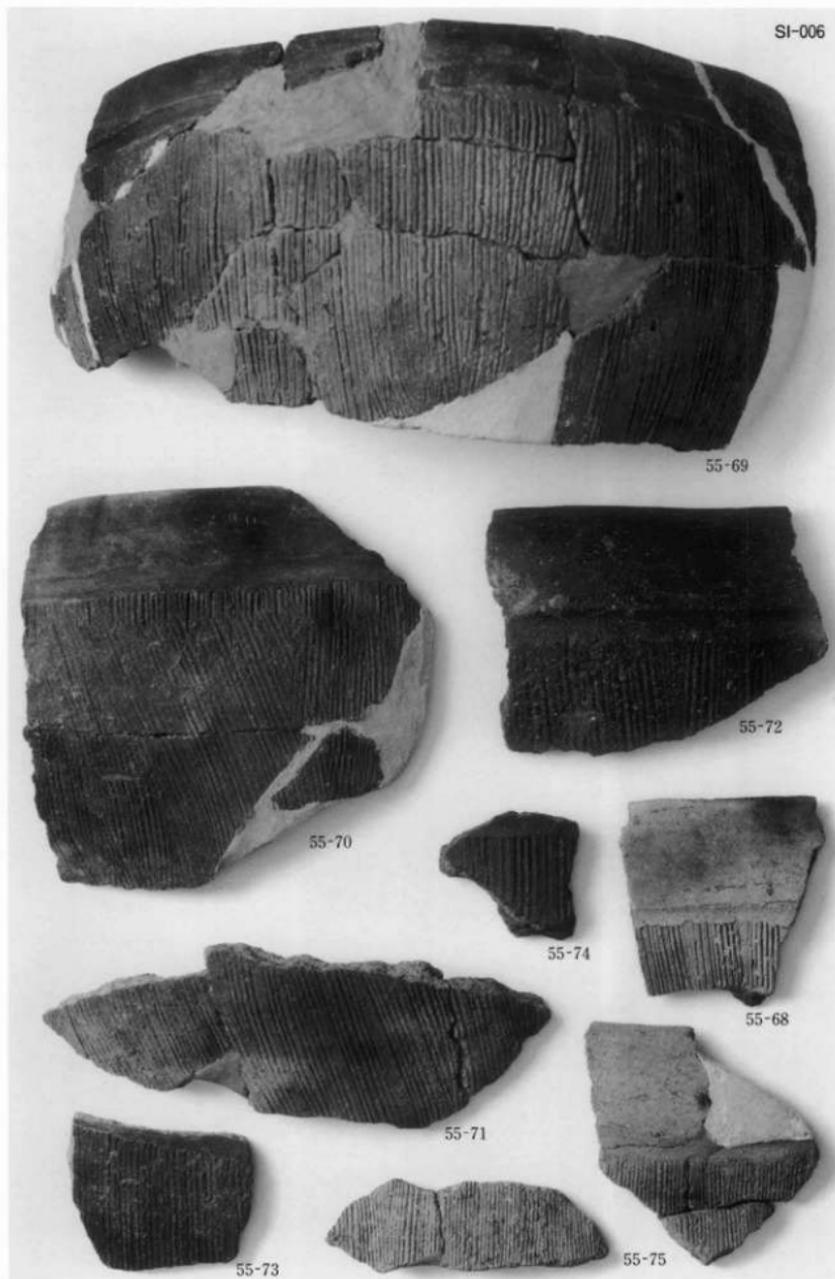
54-65

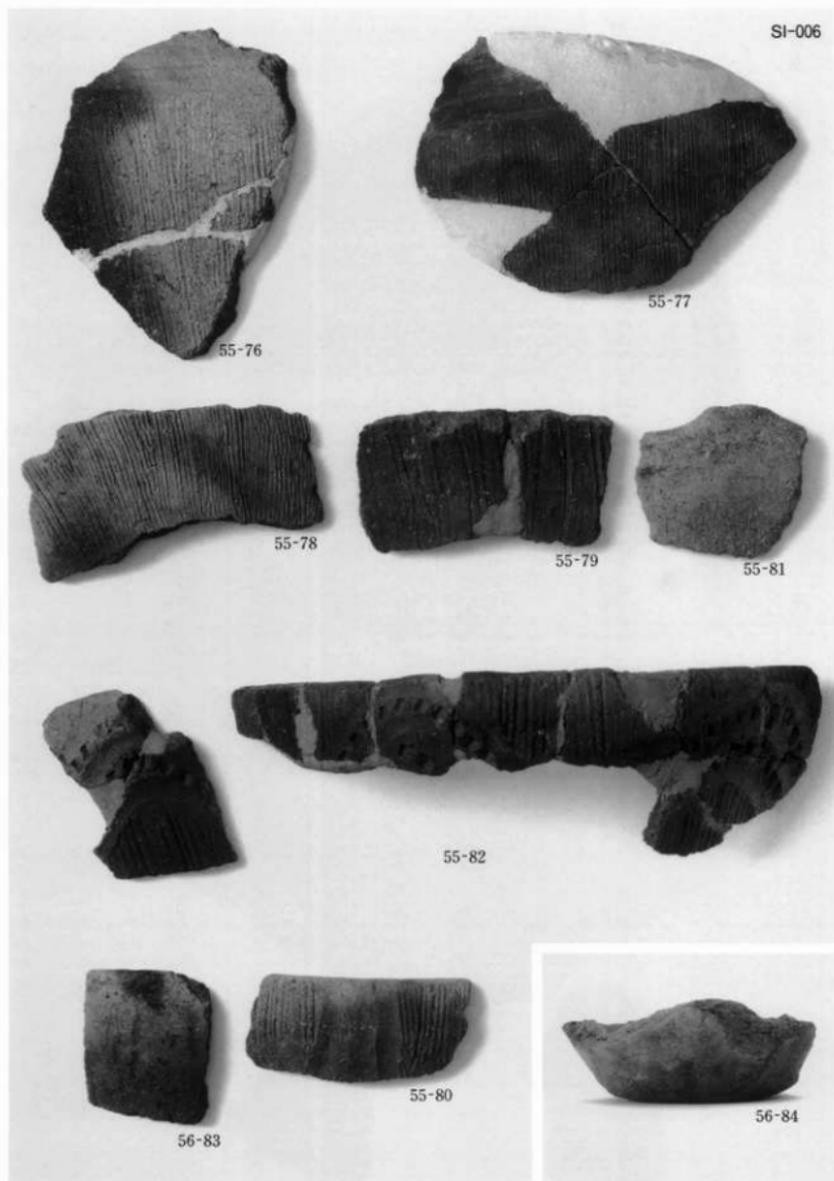


54-66



54-67







SI-011



65-1



65-2



65-4



65-5



65-3



65-6



65-7



65-9



65-12



65-11



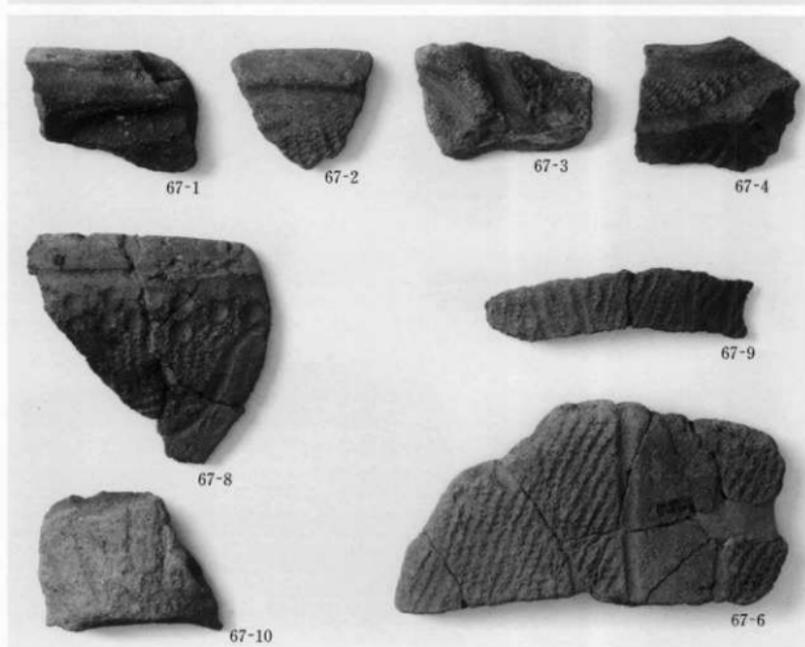
65-8

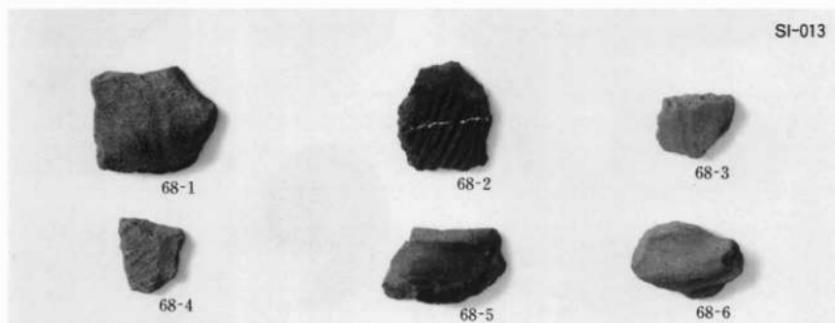
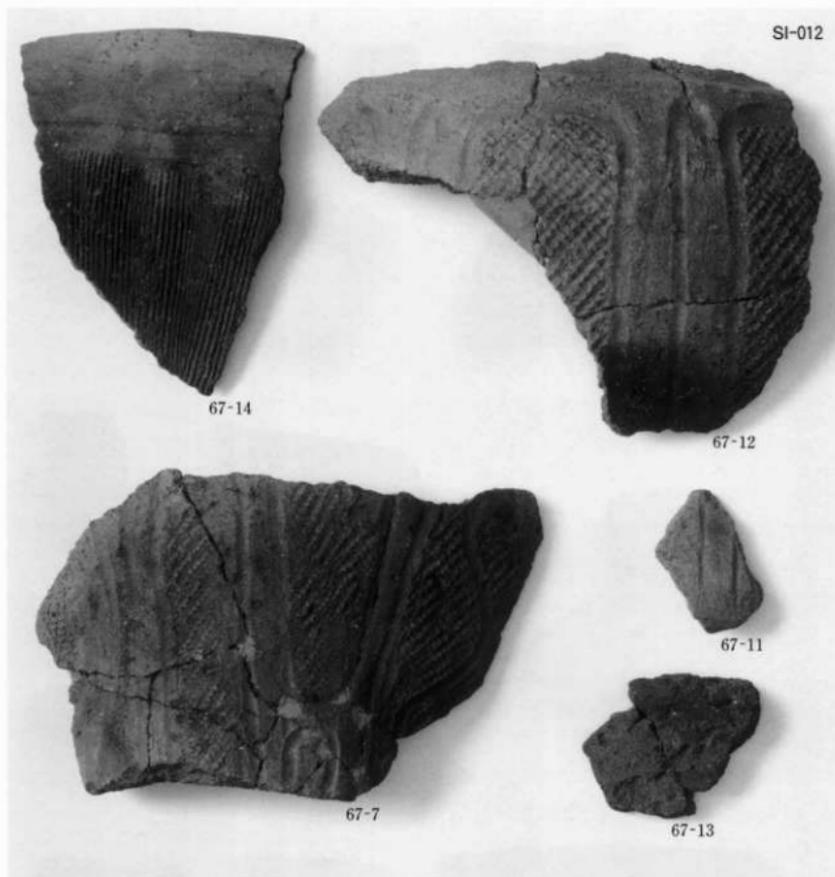


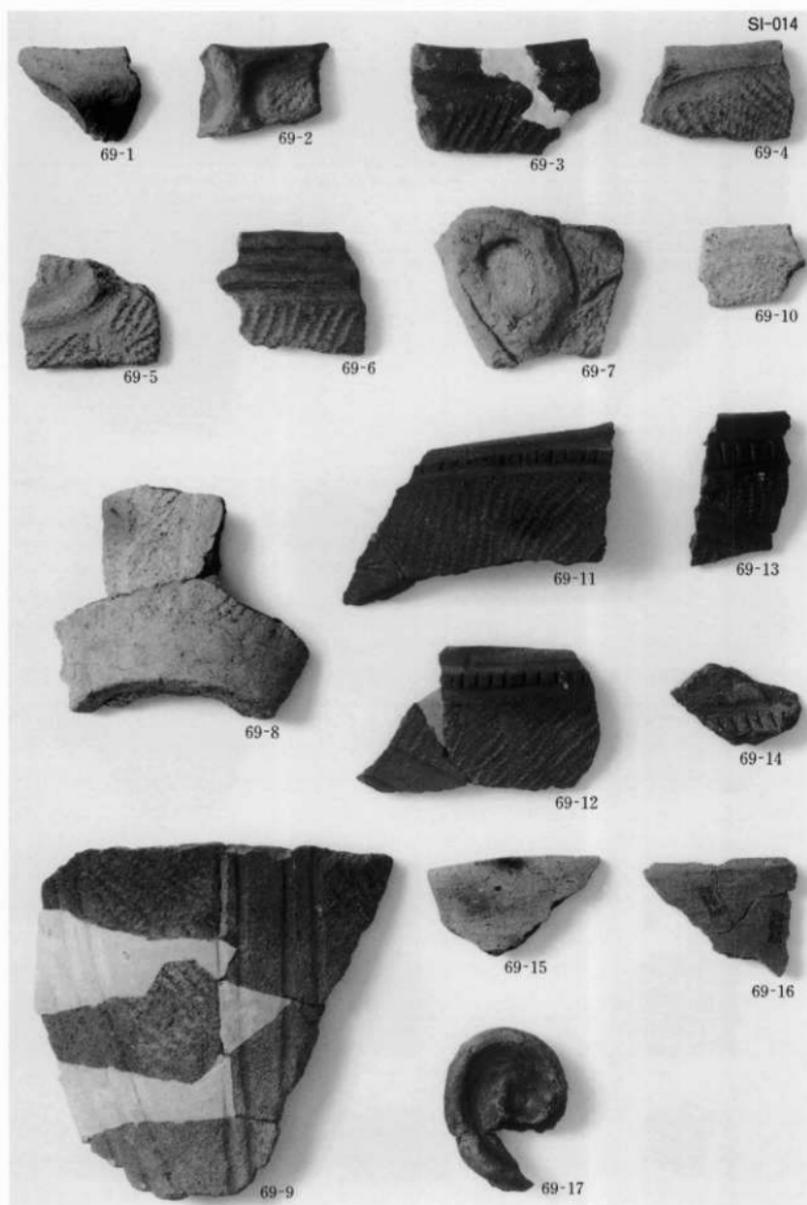
65-10

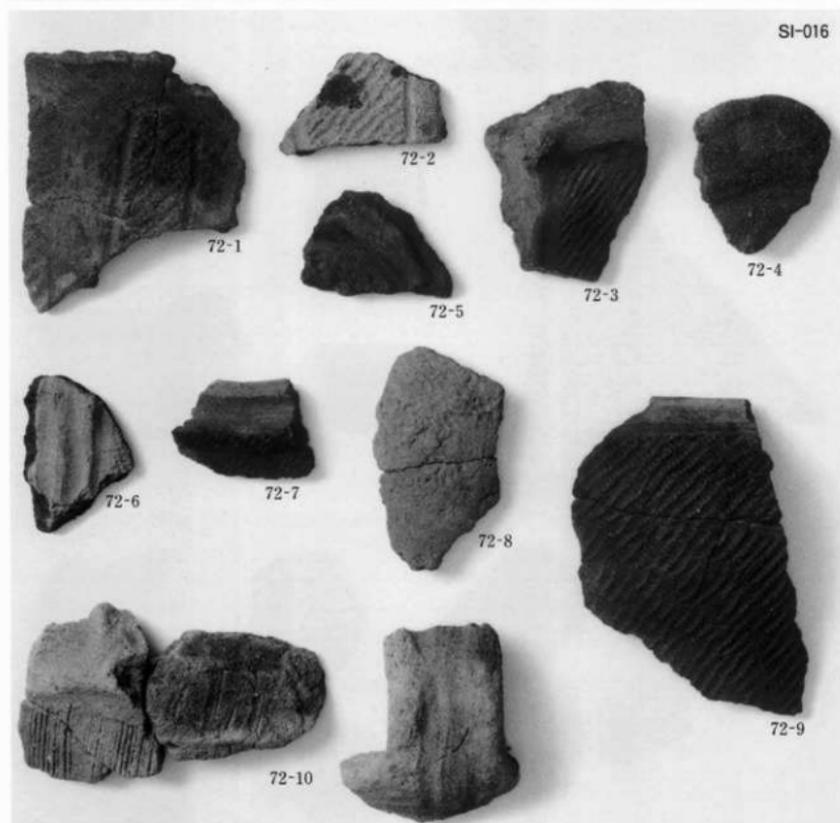
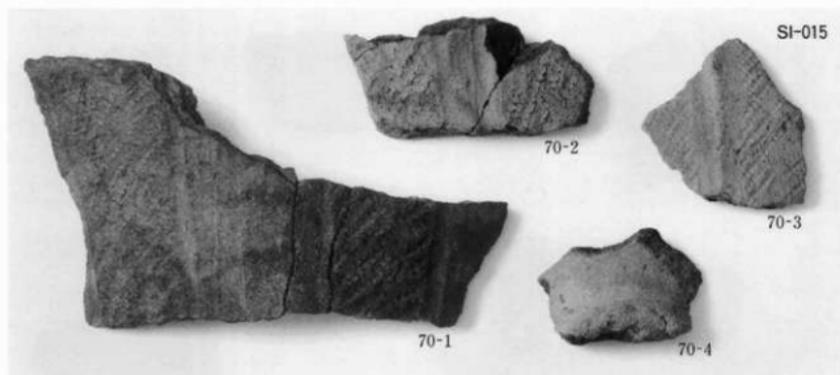


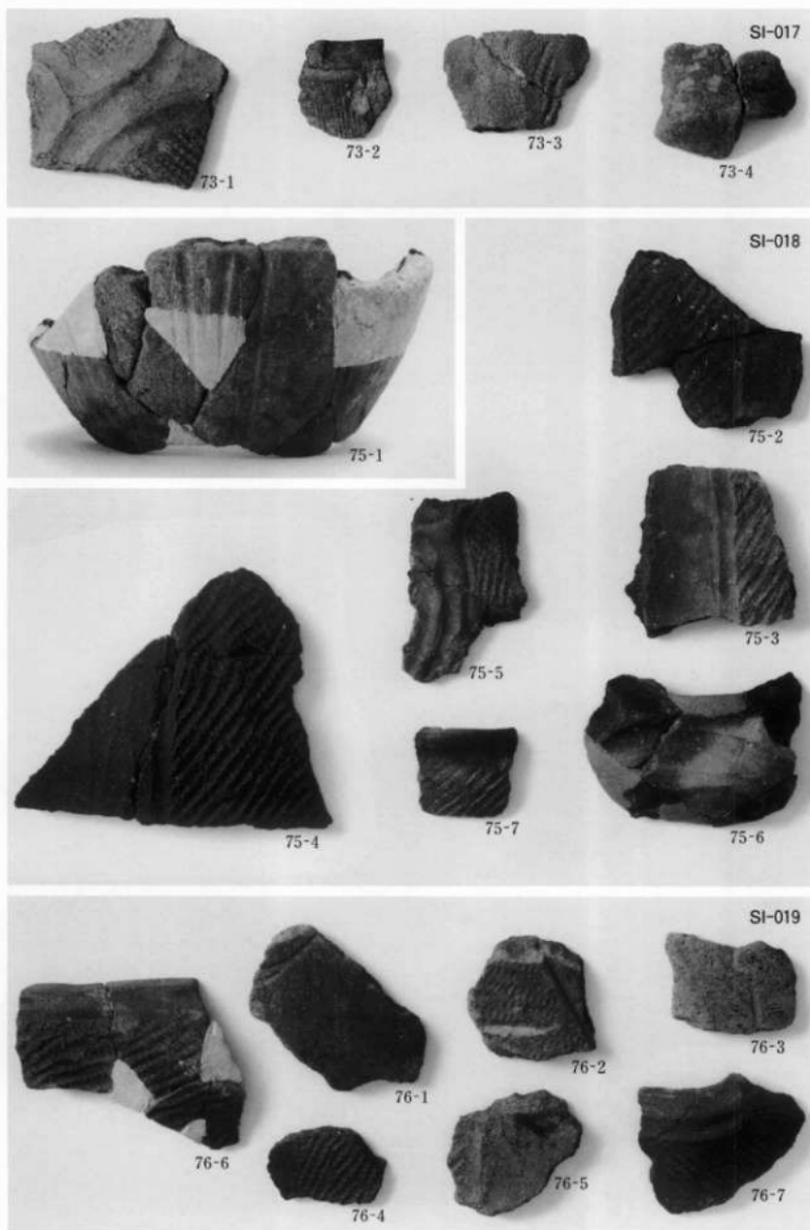
65-13

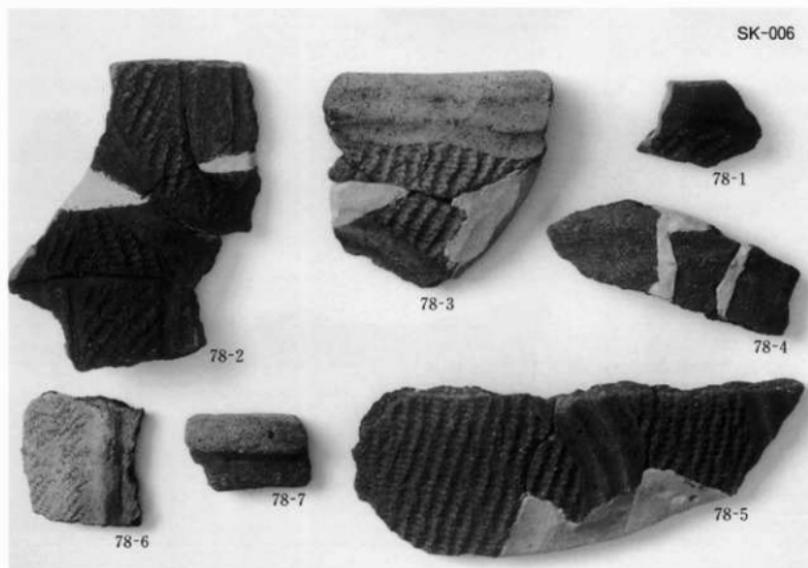
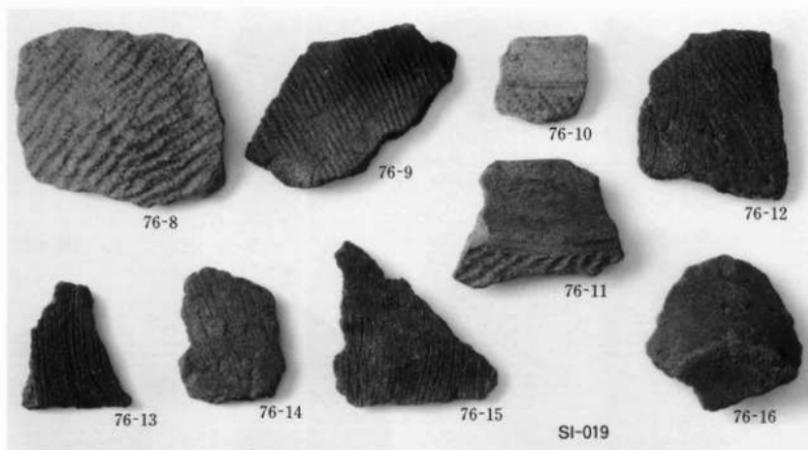


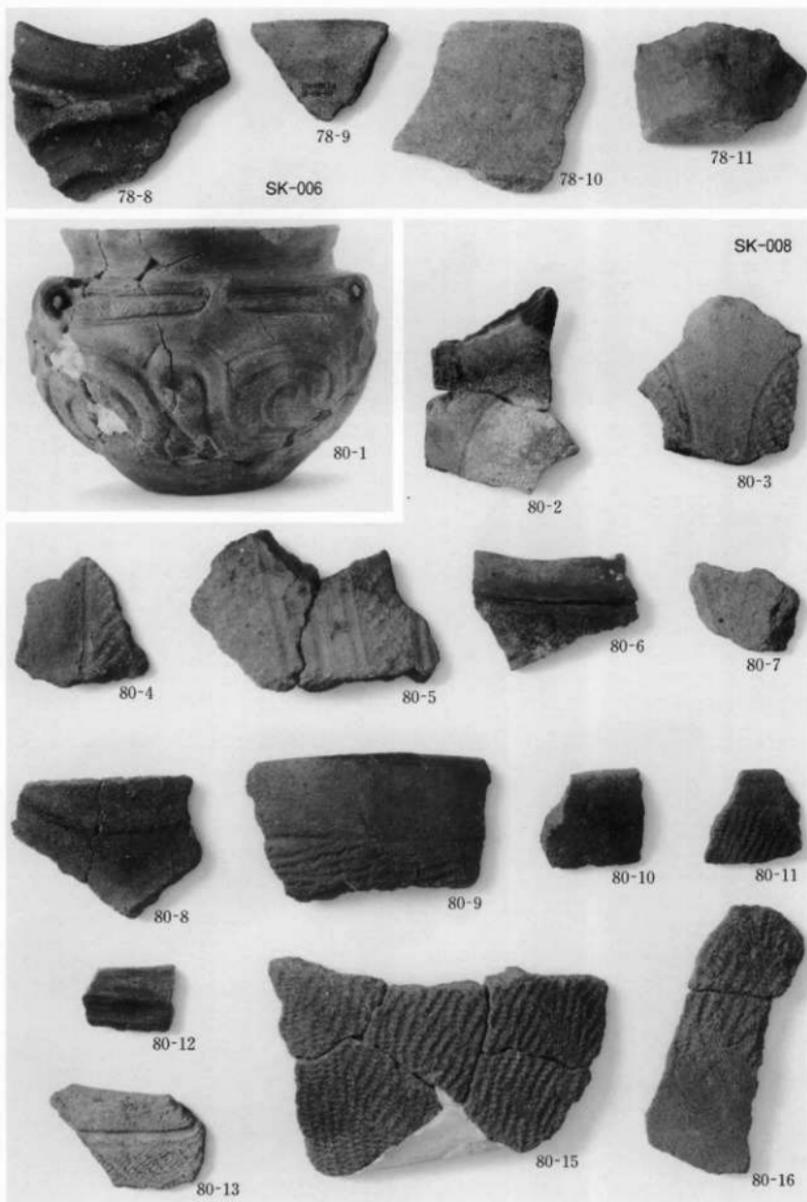


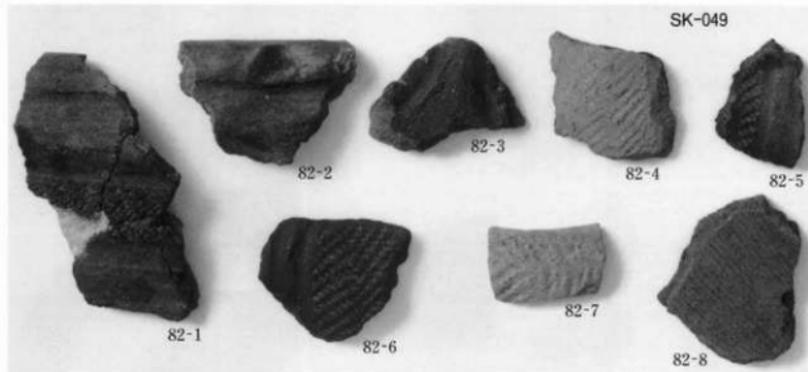
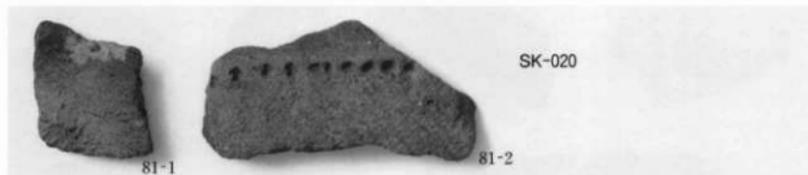
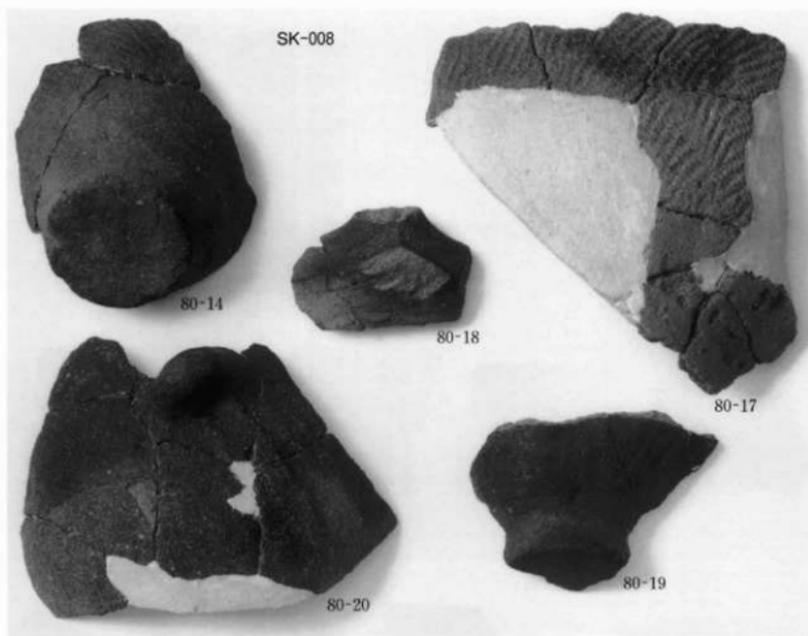


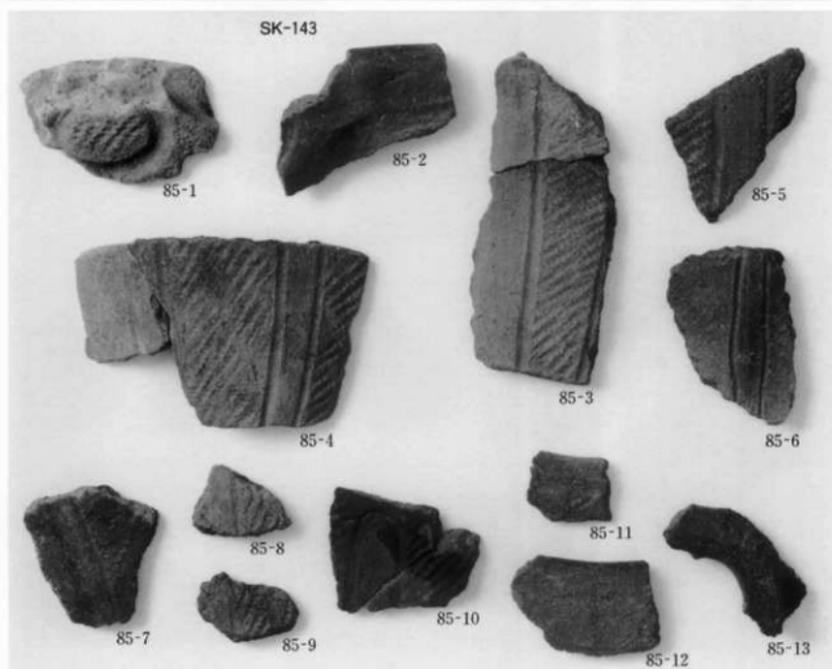
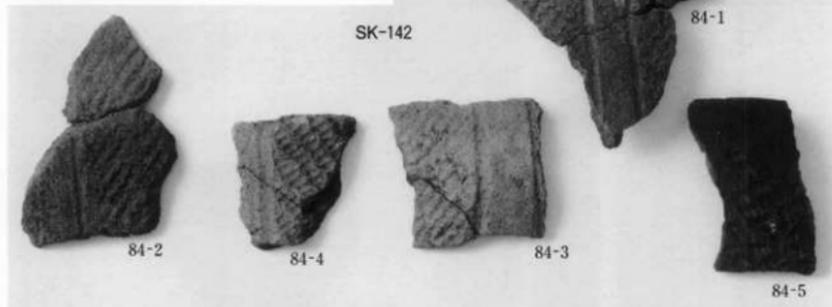
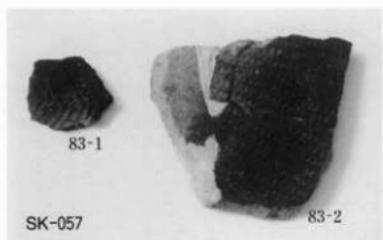


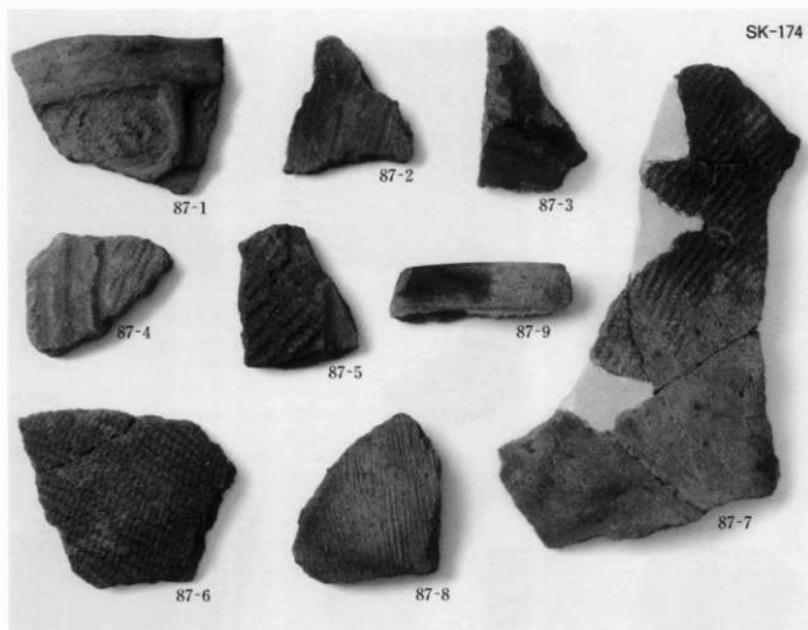


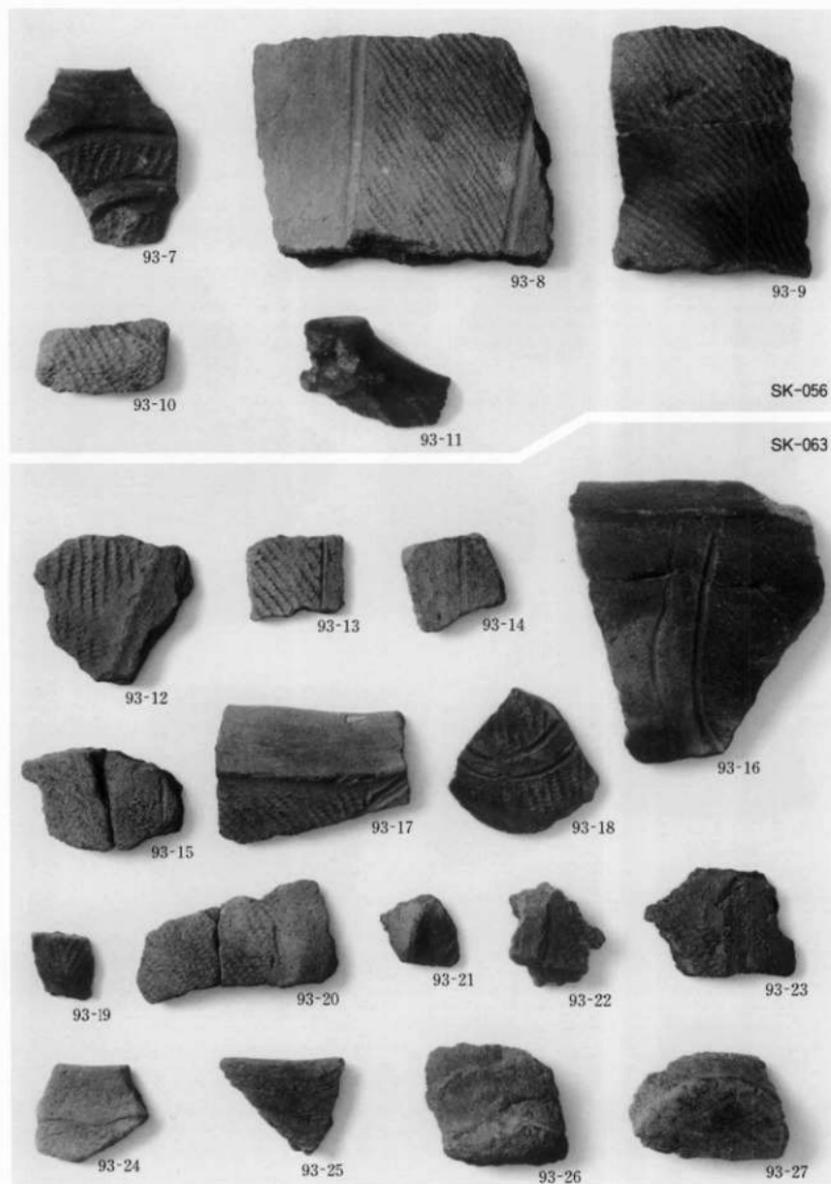


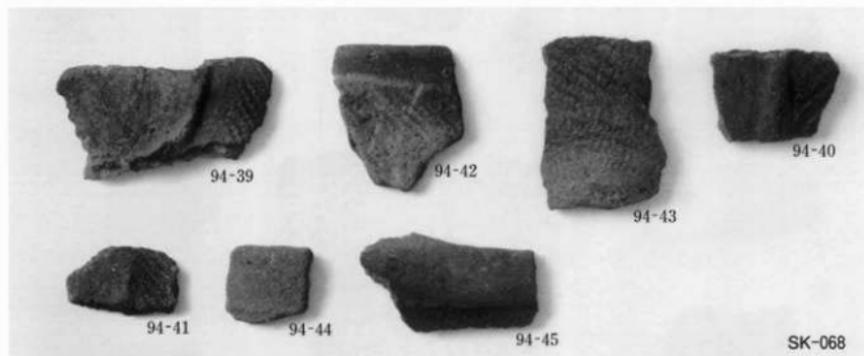
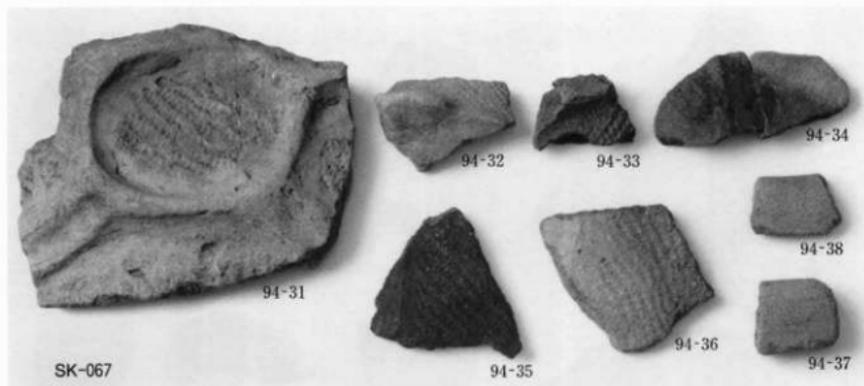


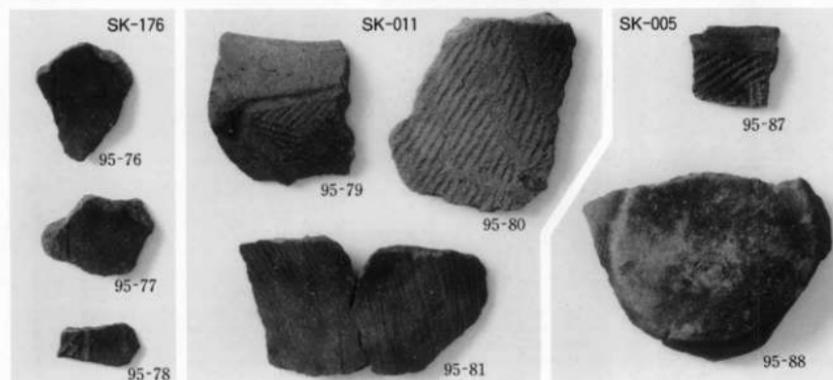
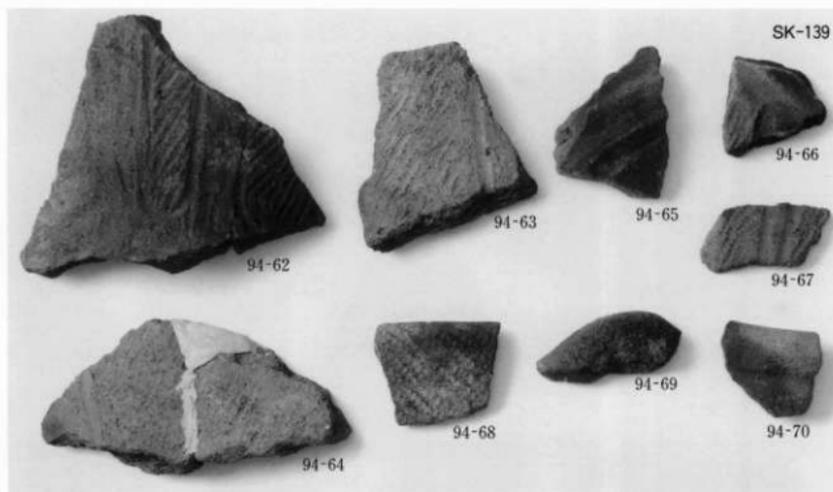


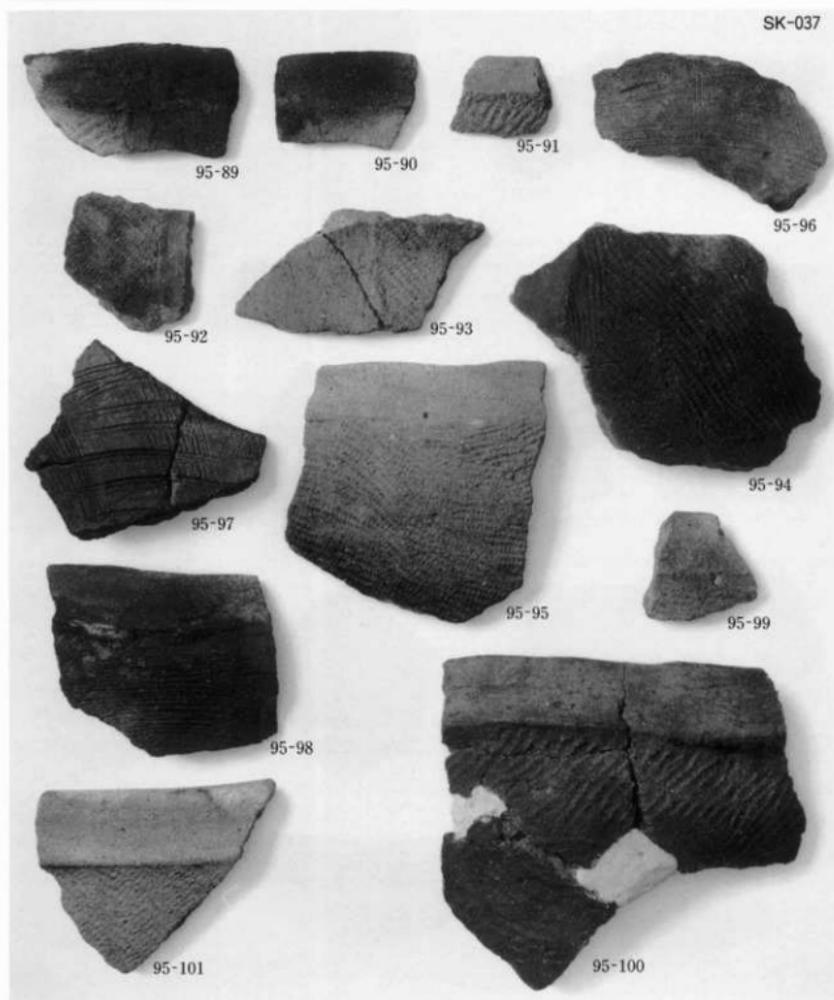
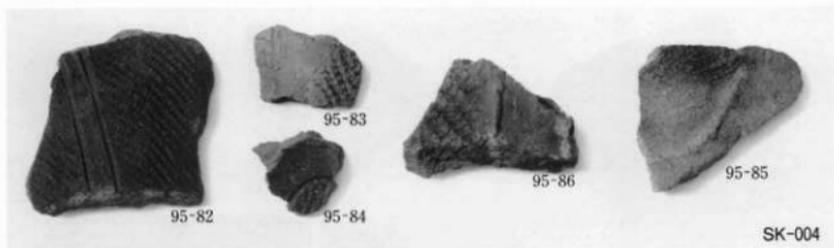


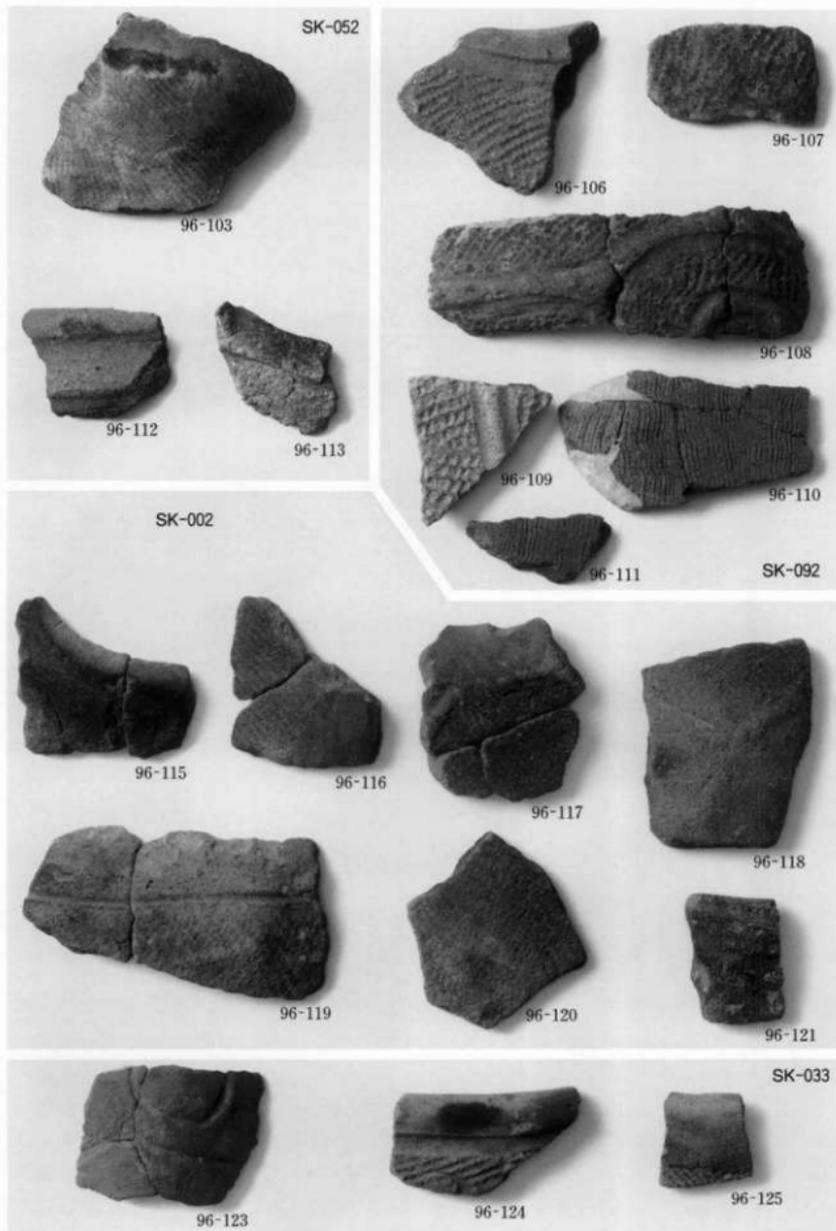


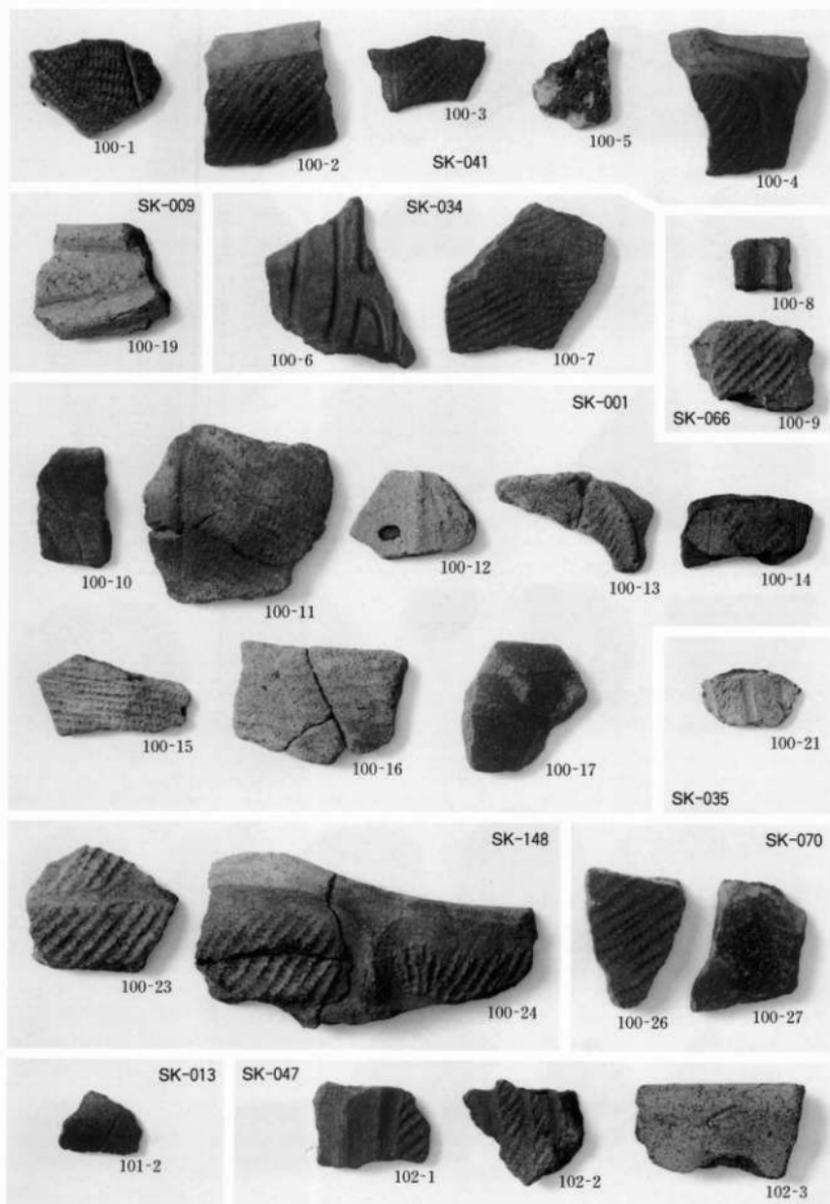


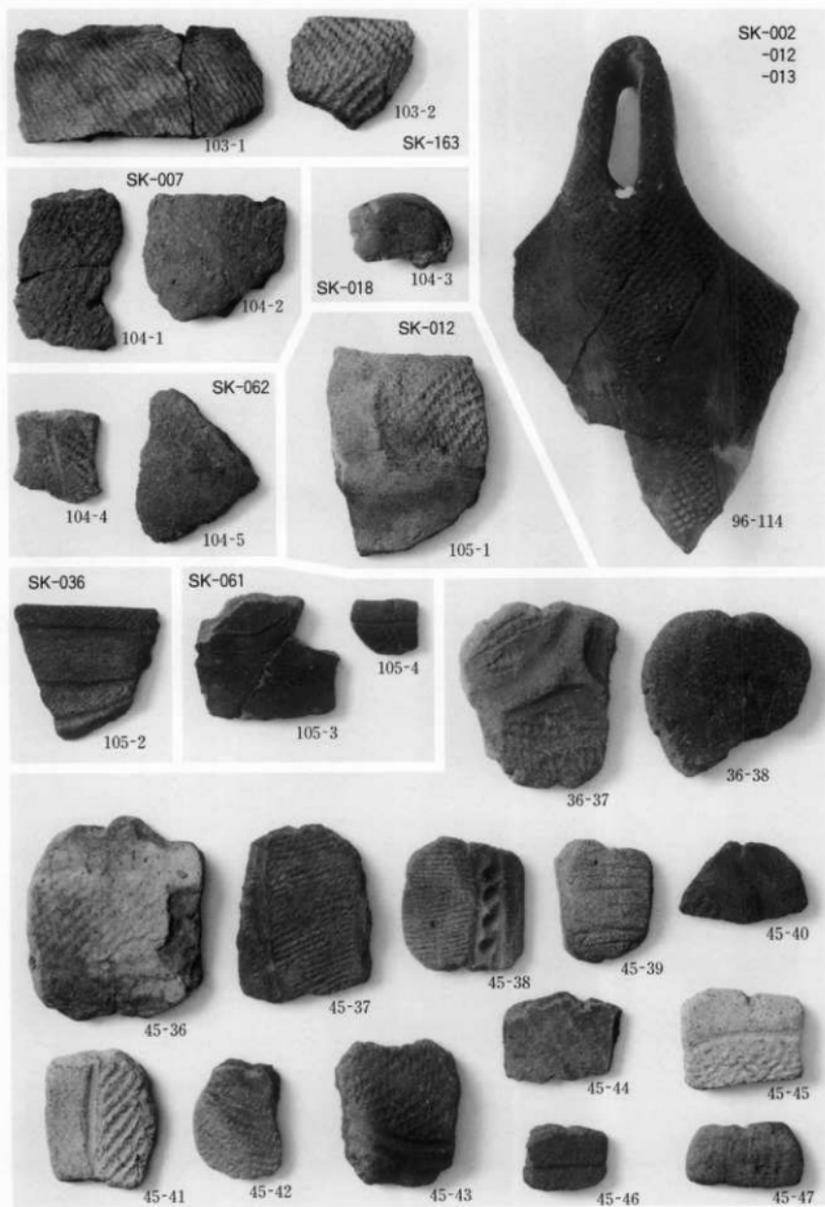


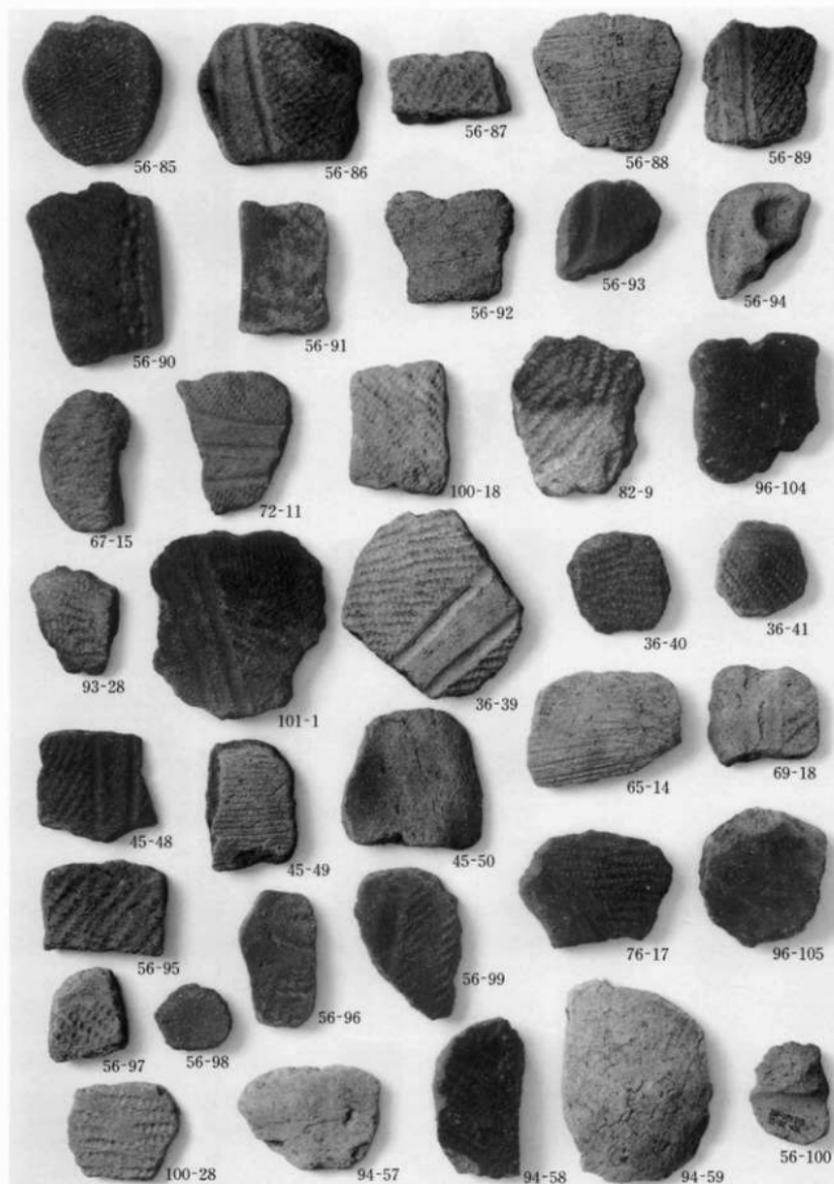


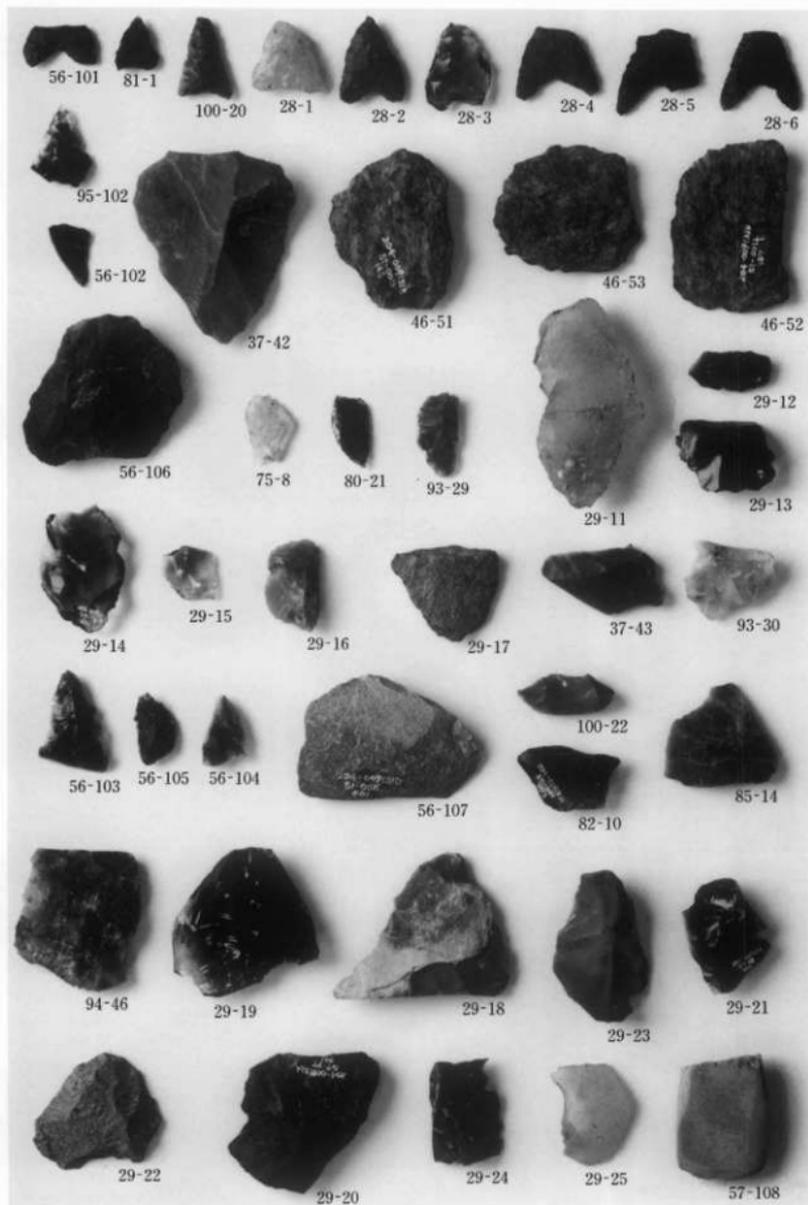


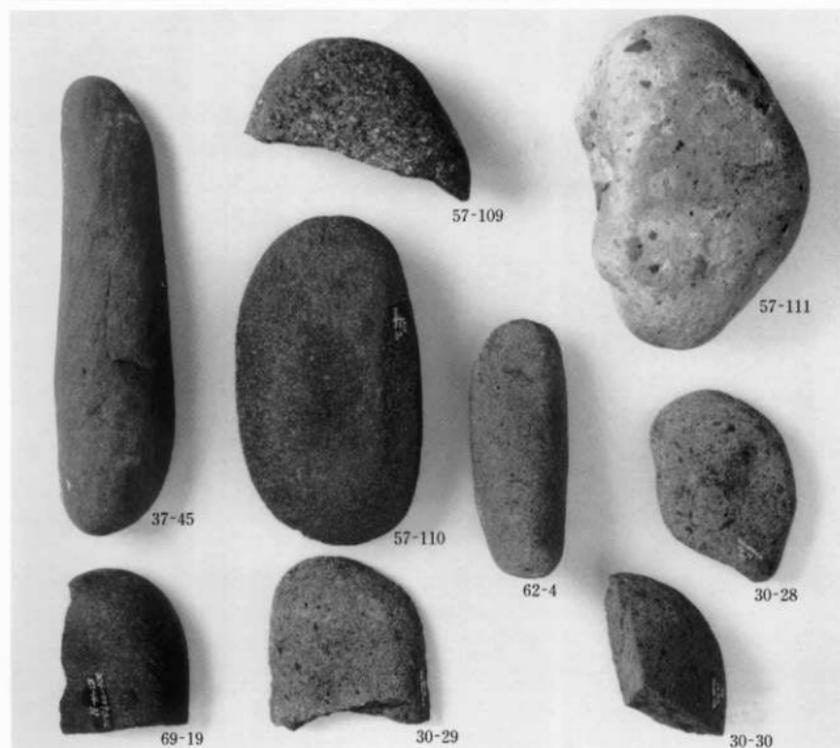


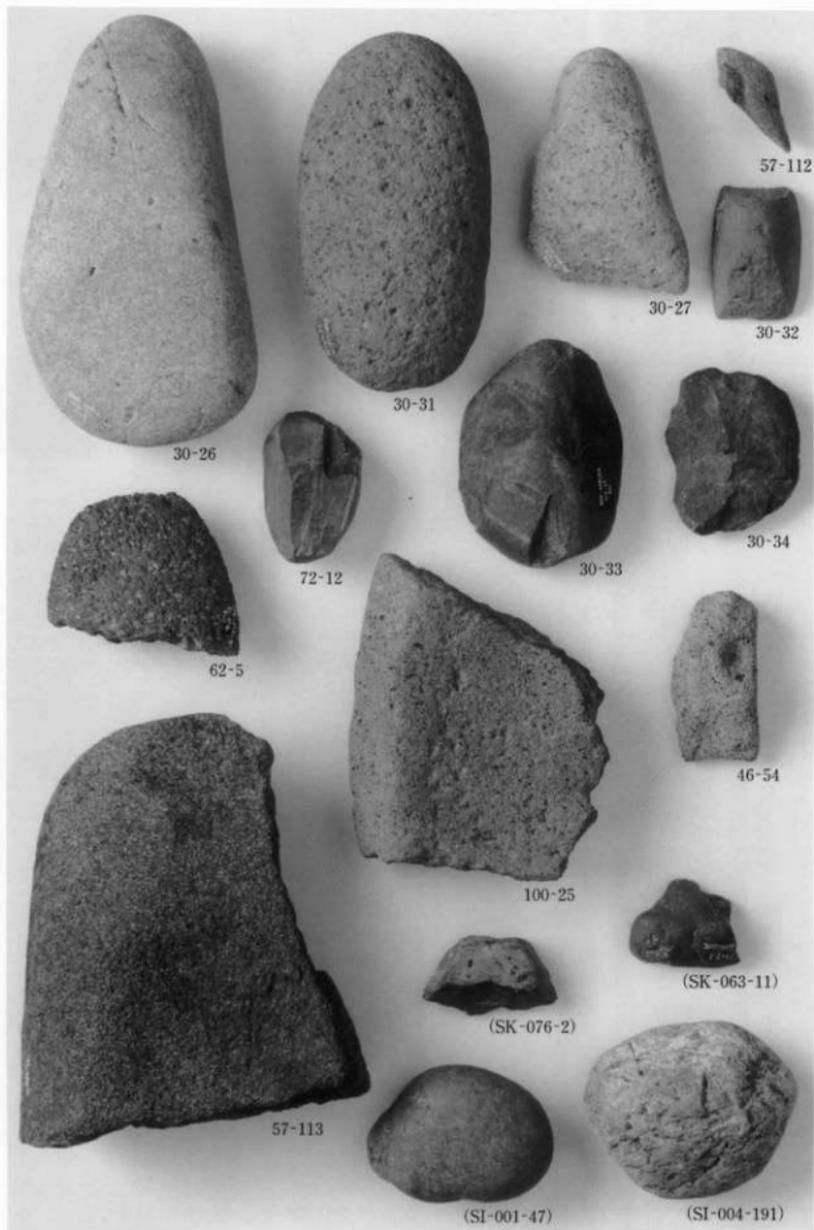


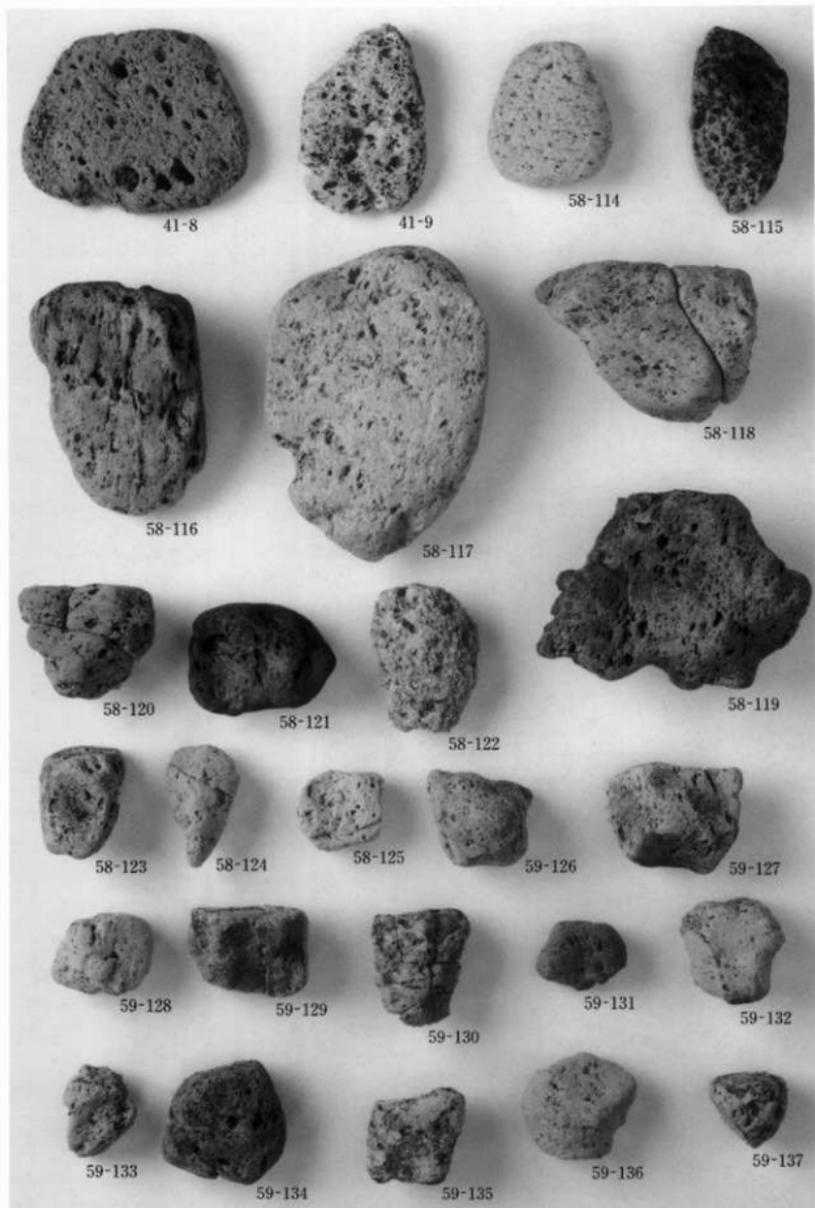


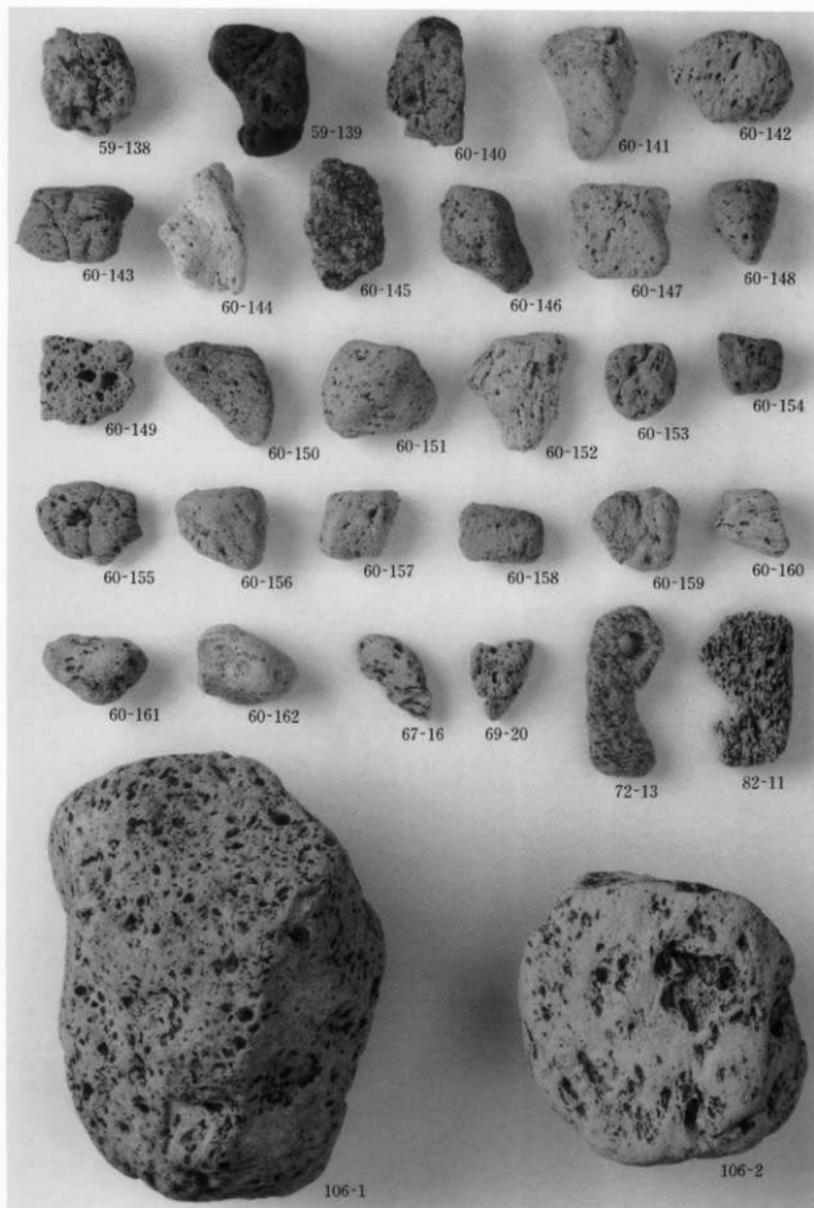


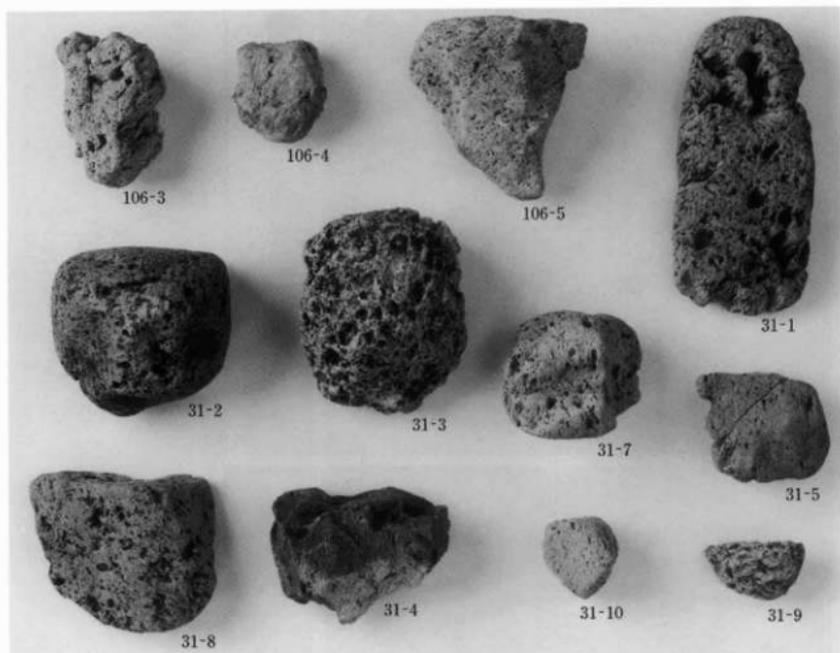














SB-001



SB-003~SB-005



SB-003・SB-005



SB-003~SB-005



SB-004



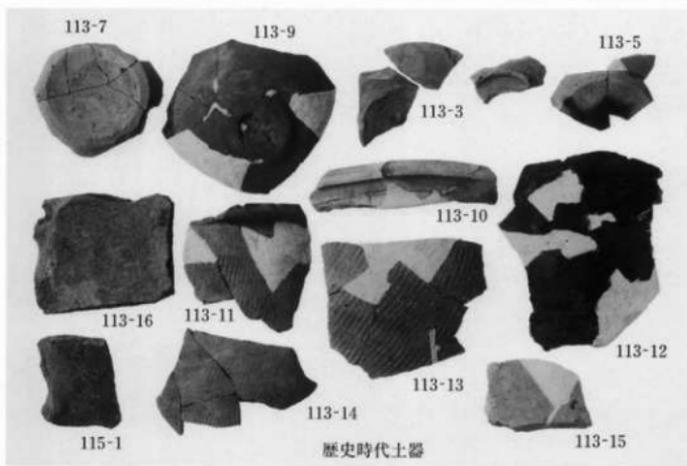
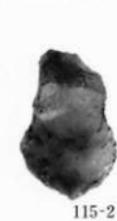
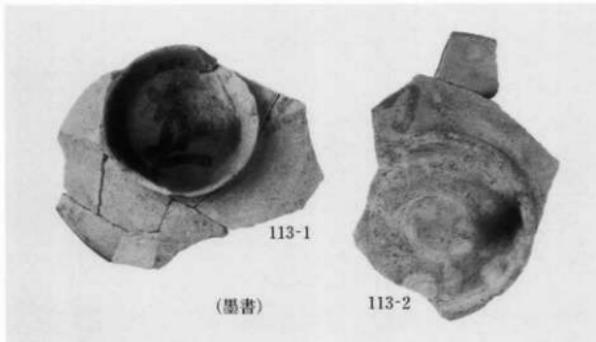
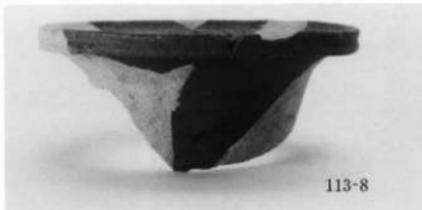
SD-001(D)西から



SD-001(D)北東から



SD-002 北から



報告書抄録

ふりがな	しんやまひがしいせき
書名	新山東遺跡Ⅱ
副書名	前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書
巻次	2
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第568集
編著者名	鳴田浩司・沖松信隆・城田義友
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-424-4848
発行年月日	西暦2007年3月23日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
新山東遺跡(3)	船橋市前原西6-678-11ほか	12204	009(3)	35°41'51"	140°1'27"	20000703～20010329	26,940㎡	団地建替事業に伴う調査
新山東遺跡(6)	船橋市前原西6-1-14	12204	009(6)	35°41'56"	140°1'29"	20040512～20040630	3,650㎡	
新山東遺跡(8)	船橋市前原西6-678-21ほか	12204	009(8)	35°41'56"	140°1'28"	20050601～20050630	1,365㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新山東遺跡(3)	包蔵地	旧石器	石器集中地点1か所	ナイフ形石器、削器、剥片	縄文時代中期後半の分散居住型集落跡
	集落跡	縄文	炉穴4基、竪穴住居跡17軒、小竪穴13基、土坑169基、ピット	縄文土器(早期～後期)、土製品(土器片錘、土製円板)、石器(石鏃、石斧、石皿、敲石、磨石、剥片)、石製品(浮子、砥石)	
	包蔵地	奈良・平安	掘立柱建物跡1棟、溝状遺構3条、ピット	土師器、須恵器	
新山東遺跡(6)	包蔵地	旧石器	石器集中地点1か所	削器、剥片	
	集落跡	縄文	炉穴1基、竪穴住居跡2軒、小竪穴1基、土坑1基	縄文土器(中期)、石器(剥片)	
	包蔵地	中世以降	掘立柱建物跡3棟	転用砥石	
新山東遺跡(8)	集落跡	縄文	炉穴1基、土坑5基	縄文土器(中期)	

千葉県教育振興財団調査報告第568集

船橋市新山東遺跡Ⅱ

—前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書2—

平成19年3月23日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 独立行政法人都市再生機構
千葉県地域支社
千葉県美浜区中瀬1-3

財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市粟波809番地の2

印 刷 株式会社 ラ イ フ
成田市東和田595
